英雄と呼ばれた復讐鬼

蒼い勾玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄と呼ばれた復讐鬼

【Ｎコード】
Ｎ３６８７Ｓ

【作者名】
蒼い勾玉

【あらすじ】
この土地に由来した町、海鳴市。その地に住む一人の少年、結城蒼詩は近年共学化された私立聖祥大付属中学校に入学した。賑やかな親友達と“いつものように”平穏に暮らしていたが、そこで出会った五人の少女たちによって彼の物語は大きく歪曲する・・・。

そんなプロローグで大丈夫か？（前書き）

初めまして、この作品を投稿した蒼い勾玉です！
なにぶん初心者な部分がありますが、投稿しながら頑張っていきたいと思います！

そんなプロローグで大丈夫か？

話をしよう。この世界と遠く離れた地に生まれた悲しき英雄の話を。

魔法という未知の力が認識された５０年以上も昔の話、人間は国と国が争い、人と人が命を奪い合い、死と混沌と恐怖、そして憎悪が屍のようにあちこちに転がり心を蝕んでいたこの時代。

人々はそれを『質量兵器戦争』と呼んでいた。

銃のように引き金をかけられている指を引けば、命を軽い花びらのように散らしてしまうだけに造られた質量兵器。

それを手にし、無差別に人間を殺して数々の戦場に数多の鮮血の華が咲き乱れる。

どちらかが死を、どちらかが生を手にするが故に勝ち負けなど存在しない。

その極地に立たされる者に決まりなどない。

あるものは両親を失い、少年兵として武器をとって殺戮という非情を見せつけられる者。

あるものは金目的として傭兵となり人殺しを生業とする者。

支離滅裂の人間が戦場を駆ける中、四人の英雄がこの汚れた戦争を終結させた。

命の奪い合いという定義を変えるために質量兵器を廃止。安全で比較的クリーンというのを理由に魔法で人々の安全と平和を守り抜くことが決定された。

四人のうち三人は後に『三提督』と呼ばれることになるが、

最後の英雄は人々の歴史に刻まれることはなかった。

その者はたった一人で戦場を駆け抜け、必ず与えられた任務を全うする。

軍人として、この地を愛する一人の人間としてその者は戦い続けた。

この手を血に染め上げようとしても戦いを止めることはなかった。

一度の敗走も勝利もない。戦場こそが生きる証。

質量兵器戦争終結後、その者は舞台を去るようにこの世から姿を消した。

彼の名はリュウ・サタリアース。

平和へと導いた『存在しない伝説の兵士』、そう呼ばれていた。

そんなプロローグで大丈夫か？（後書き）

この物語の基盤となる第一章、始動！

第一話　春、芽吹く（前書き）

ようやく投稿です。
まえがきにオープニングテーマを書いておきます。
Ｆｕｌｌｍｏｏｎ　Ｒｈａｐｓｏｄｙ／彩音

第一話　春、芽吹く

乱れ咲き　空へと舞い散る　八重桜

つい閃いた一句を頭の中で詠み上げると肌に感じる暖かい風に身を委ねる。

時は四月。冷たい冬を越え、今は春風が随分と気持ちいい。

思わず気分が緩んでしまうところが、我ながら爺くさい。

それでも、身を引き締めて咲き誇る桜並木を歩いていく。

この道を進んだ先にある私立聖祥大付属中学校。

前までは男女分かれて校舎が建っていたが、近年共学となったらしく校舎もひとくくりになった。

大学までエスカレーター式となるカリキュラムが組み込まれており、教育費などが他校に比べて一段と高いがそれに応えるようにそれなりに勉強の環境が良い。

そこに俺は入学することになった。というよりは進学か。

小学校の頃、一緒にいた連中も当然進学するかもしれないが、クラスが一緒になるという保証はない。

「クラス表、確認するしかないか」

一つ小さくため息をつくと新しい学校に向けて再び歩き出す。

しばらく歩くとようやく目的の建物が見えてきた。

ここに来るまでにも俺と同じ新入生らしき人たちが目に入る。

その集団はここの下駄箱前で溜まっている。恐らくそこにクラス分けの表があるのだろう。

下駄箱に近づくと、新入生に紛れて立てられてある掲示板を覗き込む。

一組・・・構造的な位置としては二階か。下手に遠いとちょっと損した気分になりそうだからな、悪くはないだろう。

「同じクラスだった子はいないかなぁ・・・・・・」

自分の名前が載ってあるクラス表を見ていると、変わった名前を見つける。

フェイト・T・ハラオウン？　アリサ・バニングス？　もしかして留学生？

参ったな。うちのクラスに留学生が二人もいるとは、これは異様なクラスになるかもな。

そんな風に思いつつ、自分のクラスへ。

「むっ、蒼詩も同じクラスか？」

俺が教室に入って最初に目が入ったのは、何故かドアを開けた途端、そいつが俺の目の前にいたことだ。まるで俺がこの時間帯に来ることを予測していたかのように。

仁王立ちして不敵に笑うそいつは茶髪で深紅の瞳をしている。名前は白神紅次、小学三年の頃からよく一緒にいた親友だ。

切れ目から窺えるその眼光はすべてを見通すと言っていいほど、情報収集に長けている。校内での噂、ゴッシプはもちろん、そんなものどこで手に入れたんだと言えるような情報までも仕入れてくる。

「これで五連続か。どうやら俺の読みは当たったようだな」

「いやいや、偶然にもほどがあるだろ。裏で何かやらかしたか？」

「フッ・・・否定はせんよ」

「おい」

顎に手を添えて決めている紅次に手首のスナップを利かせたツッコみを入れる。

さすが俺の親友、伊達じゃないぜ！

「ところで翠はどうした？」

「その点に関しては問題無い。奴も同じクラスだということも確認済みだ」

「なるほど。それも何もしてないよな？」

「・・・・・・大丈夫だ、問題無い」

今さっき流れた間はなんだ？

日に日にこのクラス分けって何か作為的なものを感じるようになった気がする。

二人でバカ話をしていると、すぐ後ろからもう一人の男子生徒が入ってきた。

その正体は噂をすればなんとやら、お目当てのあいつだった。

「おはよう蒼ちゃん、紅ちゃん。そして、クラスの全生徒諸君、御機嫌よう～」

「翠よ、彼らはお前の奇妙な挨拶が故に、冷たい目で見られているぞ」

「まじで！？　ああん、そんな突き刺さるような凍てつく視線にオレのダイナモはギュンギュンフル回転さ～！！」

後半辺りで何言ってるのかわからないこいつは、与那原翠。

黄色のかかった白髪で、その名にちなんだ翡翠色の瞳をしている彼は、自分を苦しめ、いたぶることに快楽と刺激を求める劣等生だ。

何事においても苦しみがないと満足しない、それは努力であれば結果だろうと関係無い。

「にしても、結局この面子でそろってしまったか・・・」

俺はこの二人を見て呟く。
俺たち三人は小学校の頃からこのメンバーでバカをやっていた。
教師すら手に負えない行為に周囲は敬意（？）を称えて「三バカカラス」と呼ばれていたものだ。
こいつら二人はともかく、何故俺も含まれているのだろう・・・？

「我ら「オレ達と同類だと見られてるから」」

「・・・ホントいい友を持ったものだなぁ」

心を読むどころか声までハモっていやがったよ。その言葉に嬉しくなって思わず友情の絆を断ち切りたくなるぜ。
三バカ寄れば、朝からカオス。うん、いい名台詞だ。今度このクラス全員にそう刻ませておこう。

「さて、俺の席はどこかな・・・」

席順が書かれてある紙を見ようと教卓まで向かう。
・・・ことはなく、何故か紅次が俺の肩をガッシリと掴み、ひとつの椅子に座らせた。

「お前の席はここだ」

そう言って、何やらニヤニヤと頬を吊り上げている。
俺の席の位置は後ろから二番目、廊下側から三番目という至って普通のところだ。
なのに何故こいつは笑っている？

「なんと驚くな。お前の席はな・・・」
紅次が俺の耳元で小さく囁く。
「あのフェイト・T・ハラオウンの真後ろだ」
・・・フェイト・T・ハラオウン。
それは確かクラス表を見た時、俺のクラスに入っていた一人の名前。
そして、それは外国人だと一瞬で判断した。
「・・・マジか？」
「・・・ああ、大マジだ」
それって、やばくね？
どうしよう。俺、こいった時の対応って考えていないだけど！？
「蒼ちゃんも運がいいよね。何てったって、あのハラオウンちゃんなんだから」
翠よ、何が運がいいだ！　こっちは相当ピンチだぞ、絶体絶命だぞ、２０１２だぞ！
「まずいな・・・相手がどこの出身すらわからないのに」
「そうだな、なんせ彼女は小学校の頃から人気が絶えない・・・はっ？」
紅次が何か奇妙な目でこっちを見ているが、そんなの気にしている場合じゃない。

名前から察するにヨーロッパ辺りの出身だと考えられるが、話す種類がバラバラだ。
スペイン人かもしれないし、イギリス人かもしれない。ドイツ人もありえるし、フランス人という可能性もある。
どっちにしても・・・。
「こいつは難しい・・・っ！！」

「まぁ、お前が何を考えているか大体察しがつくが、大丈夫だろう」
俺のことを気にかけず、紅次はその場を去る。

「何一つアイディアが浮かばず苦悩し続ける。ああっ、自分に向けると思うだけでオレのダイナモはスパークしそうだよ～～っ！！」
翠は翠で意味不明な言語を吐きながらその場を離れた。
色々考えてはみたが、やはり思いつくものは見当たらず、俺は途方に暮れるように机に伏す。
やれやれ、初日から災難だな。
全く、つくづくヨーロッパも面倒だよな。ＥＵって名乗ってユーロを統一するくらいなら言語も統一しろってんだ。
というかその留学生、このクラスに溶け込めるかどうか・・・。

「あ、あの～」

「ん？」

誰かに声を掛けられている気がする。
顔を上げてみると、視界に一人の女の子が映った。
綺麗に手入れされた絹糸のような艶やかな長い金髪。
彼女が町を歩いたなら、十人中十人の男を振り向かせるだろう、モ

デル並の端正な顔立ち。
そして真珠のような透き通る白い肌。
間違いない。
彼女が、フェイト・T・ハラオウン。

「大丈夫？　何だか気分が悪いように見えるけど？」

「いや、ちょっと今後の展開を想像してナイーブになっていた・・・って」

俺はふと、ある事に気づく。何か会話が成立してないか？

「日本語・・・」

「え？　ああ、ちゃんと勉強はしてきたんだ。ここに来て四年になるし」

なんだ、ちゃんと話せるじゃねえか、心配して損しちまった。
そういうことなら、遠慮する必要はないな。

「私、この前の席なんだ」

「知ってる。それを聞いてどう話を持ち出せばいいか一人混乱していた」

「そうなの？　ごめんね、無理に気を遣わせちゃって」

「今思いついたがＡＣの話をしよう。こんにちワン！」

「え、えっ？　あ、ありがとウサギ・・・？」

彼女がご丁寧にも乗ってくれる。
別にスルーしてもいいが、そんな些細なことでもノッてくれるなんて、いい奴だ。

「とまぁ、それはここまでにして。自己紹介でもするか。俺は結城蒼詩」

「そうし？　変わった名前だね」

まぁ、変わってるといえば変わってるな。あまり意識したことなかったからスルーしてたけど。

「私はフェイト・T・ハラオウン。フェイトでいいよ」

「わかった・・・と言いたいが、いきなりそう呼ぶのは気が引けるな。悪いがハラオウンでいいか？」

「うん、ちょっと残念だけど。よろしくね、蒼詩」

率直に名前で呼ぶか・・・。まぁ、相手の呼び方にどうこう言う気はないけど。

「はいはーい、みんな席についてー！」

ハキハキとした声で女の教師は教卓の側に立つ。

「今日からこのクラスの担任となりました、高宮時雨です。よろしくね♪」

明るい先生と言ったところか。まぁ、暗い先生に比べりゃまだましか。
先生はにっこりとした笑顔で生徒たちを見回す。
「それじゃあまずはみんなに自己紹介を始めたいなと思います」
自己紹介・・・。
その言葉に三人の目がキランッ☆と輝いたことに先生は気づかない。
「まず初めにアリサ・バニングスさん」
「はい」
先生の声に一人の少女が席を立つ。
ショートボブの少し色素の濃い金髪、いかにも意志の強そうな瞳をしている、これまた綺麗な少女。
「アリサ・バニングスです。この一年間よろしくお願いします」
はっきりとした声が活発な印象を与えるアリサ・バニングスは一度周囲を見回すと一礼して席につく。
本当に日本語ペラペラだな。
前に座ってるハラオウンが「言ったでしょ？」と思わせるような顔して振り向いてくる
俺は小さく笑いながら頷いて返した。
数人の自己紹介を終えると次は我ら三バカカラスが一人、紅次の番になった。
「我の名は白神　紅次。この学園に混沌をもたらすも者だ！」
高らかに声を上げる紅次に周囲のは唖然となる。

いいぞ、紅次。掴みは上々だ。

「かつて世界は一つだった。それがさまざまな偏見と秩序によって世界は、あちらこちらに散らばってしまった。だから俺は、この学園に混沌という名のカオスを満たし、この地に創造たる再生を・・・」

「はいはい、言いたい気持ちはわかるけどそこまで、ね？」

「うむむ、いささか物足りぬが致し方ない」

紅次は本当に不満そうな様子で渋々席についた。
あいつがこれ以上のアピールを続けていたら、一時間はくだらないだろう。
紅次曰く「試行錯誤を重ねた俺専用の自己アピールだ」
無駄に頑張っているところが何か微笑ましい。
ハラオウンもその奇妙な光景に乾いた笑いしか出ないようだ。
とりあえず、引き続き自己紹介を続けていたら、次はハラオウンの番だった。

「フェイト・T・ハラオウンです。運動するのが得意でスポーツに自信があります」

よろしくお願いします、と礼儀正しい様子でお辞儀をすると席につく。
可憐。そう思わせる姿に男子達から深いため息が出る。
まぁ、可愛いということは否定しないがな。
ハラオウンが終わったということは・・・。

「俺か」

ゆっくり立ち上がると前からハラオウンが「頑張って」と言ってくる。
いや、頑張ってって・・・そこまで気を負う必要はないと思うけど？
いかん、プレッシャーが背中にのしかかる！
・・・どうやらその期待に答えねばならないな。

「結城　蒼詩です、気軽に『ダーリン』と呼んでくれ♪」

『ダァァーーーリィィーーーーーン！！』

さっきまで大人しく他人の自己紹介を聞いていた生徒達（男子のみ）が大声を上げる。
その連携の良さは褒めたいが状況が状況な故、素直に喜べない。

「うん、ごめん。今のは無かったことにして。とにかくよろしくお願いします」

作り笑いを浮かべて席につくが、正直吐き気が止まらない。今年のクラスは只者ではなさそうだ。

そんな俺の気持ちなど知らず、自己紹介は続く。

「オレは与那原　翠。多くの苦痛を求め、オレのダイナモをギュンギュンさせてくれる皆の衆、よろしく！」

今回、三度目の意味不明な自己紹介にもうクラス全員茫然とするしかない。

ふむ、予想通りだ。

予想過ぎて・・・今後の学校生活が未知なる世界に変わりそうだ。

第一話　春、芽吹く（後書き）

エンディングテーマ
ＩＮＩＴＩＡＴＩＶＥ／川田まみ

不敵の笑み、Ｃｏｏｌに振る舞うその雄姿。
手に握る己の相棒を突き付け、こう口にする。

「まだまだ、だね！」と。

次回、「テニスの何様？」

作者はソフトテニスの経験あり。

登場人物紹介（前書き）

まず最初に現段階の三バカカラスの人物紹介をしておきます。
物語が進行するにつれて更新してきますのでお楽しみに！

登場人物紹介

結城　蒼詩

髪型：黒髪ショートミディアム
瞳の色：蒼空
趣味・特技：体を動かすこと、語学、家事
ＣＶ：森川智之
代表例：片倉小十郎（戦国ＢＡＳＡＲＡ２）
　　ダンテ（ＤｅｖｉｌＭａｙＣｒｙ）

白神　紅次

髪型：茶髪のショートレイアー
瞳の色：深紅
趣味・特技：情報収集、裏工作
ＣＶ：杉田智和
代表例：坂田銀時（銀魂）
　　カズヒラ・ミラー（ＭＧＳＰＷ）

与那原　翠

髪型：黄色のかかった白髪ミディアム
瞳の色：翡翠
趣味・特技：全ての痛みを悦びに変えられる
ＣＶ：岸尾だいすけ
代表例：破天荒　（ボボボーボ・ボーボボ）
　　杉並（Ｄ．Ｃ．～ダ・カーポ～）

登場人物紹介（後書き）

キャラ作りって結構難しい・・・。

第二話　テニスの何様？　前編（前書き）

真面目に書いているのに、どうしてこうも文章が長い！？
それ、なんてギャルゲー？

第二話　テニスの何様？　前編

一日の始まりは深夜の０時に非ず。全ては太陽の陽射し也。

陽射しを浴びると体に中にある目を覚まさせる成分が分泌され、より快適に起きることができる。

さらに寝る前に豆電球とかを点けず、真っ暗な状態にすると深い眠りにつけるらしい。

そこにカーテンを開けておけば、朝には陽射しが当たるからなおいい。

「・・・って、誰に話してんだ？」

眠りから目が覚めた俺はゆっくり背伸びをして時計を見る。

午前５時、日の出はまだらしく外は少し薄暗い。

それでも俺はベットから下りて、クローゼットからトレーニングウェアを取り出す。

毎日欠かすことのないトレーニング。

３０分の筋トレと１時間のランニングだけだが、それを毎日続けるのは生半可なものじゃない。

一日たりとも疎かにするべからず。

常にこの言葉を胸に刻み、時には口にしたりしながら準備運動を始める。

外の薄暗さは太陽がまるで影から見守っているようだった。

朝の空気ほどの清澄なものはない。

心は洗われるし、なにより一日の始まりに気合が入る。

肺一杯に空気を取り入れ、のんびりと桜並木を歩く光景はちゃっかり日頃の楽しみだったりする。

今なら鼻歌と一緒にスキップまで出来そうだ。

花びらが頬を掠め、風に流れるのをただ眺めたかったが・・・。

「よう、何をしておるのだ？」

「・・・どおりゃぁぁぁーーー！」

俺はどうしてこんな時間にも混沌に巻き込まれやすいのだろうか？

せっかく感傷に浸っている所を邪魔してくれたまがい物、もとい紅次に全力のハイキックをかます。

「ふっ、甘いな」

紅次は不敵に笑うと体を僅かに後退させる。

「てめぇがなっ！」

追い打ちをかけるように片足が地面に離れているにも関わらず、残りの片足を一気に蹴り上げ、空中二段蹴りを放った。

「それも計算済みだ」

並みのものはたいてい避けられないが、紅次は中々の判断力で俺の足蹴りを腕で受け止める。

残念だが、それもフェイクだ！！

紅次の腕で受け止められた足に力を込め、それを支点にして空中をさまよっているもう片方の足を奴の後頭部に向けて蹴りを入れた。

「ぐばぁぁ！？」

いまさら流行らないどこぞのやられ役の悲鳴を上げて前のめりに倒れる。

うん、なんか違う意味ですっきりした。

全く、人の数少ない安らぎを邪魔するなど、迷惑千万。

これだから紅次はデリカシーのない・・・・。

「ヤッホー、蒼ちゃ・・・」

「・・・おどりゃぁぁぁーーー！！」

「あうっ！　お、オレの鳩尾に蹴りという名の挨拶。あ、朝からオレのダイナモはスパークだ、よ・・・」

訂正、俺の周りはそんなやつらばっかだった。

えっ、労い？　なにそれおいしいの？

教室に入ると、俺の席の前にはすでにハラオウンがいた。

向こうも気づいたのか、目が合うとにっこりと笑ってきた。

「おはよう、蒼詩」

「オイッス」

鞄を机の横に提げると、ハラオウンがこちらを向いて話しかけてきた。

「蒼詩は部活に入るの？」

「いきなり唐突だな。どした？」

小学生と中学生、入学したばかりの俺たちにとっては大して違いは無いが進学するとその世界観は大きく変わる。

特に新入生はこの時期何かと忙しい。

その一つが、部活だ。

この学校は大学へも繋がるマンモス校だ。中学生から部活に熱を入れるのは珍しくない。

入部は強制ではないが、手芸は文芸も体育系も豊富だ。

「うん、その、みんな部活はどこに入ろうか色々と話し合っているみたいだったから」

「俺はどこに入るつもりなのだろう、かと」

「うん」

小さく頷くハラオウン。

「逆に聞くがお前はどこに入りたいんだ？」

「私？　私は入らないよ」

は？　入らない？

「私、用事で部活に出ることができないんだ」

「じゃあ、何で質問したんだ？　部活に入るために参考にしようとしたんじゃないのか？」

「なんとなく聞いてみようかなって」

なんとなくって・・・・・・。

「俺も入る気はないぞ」

「そうなの？」

ハラオウンが意外そうな表情を見せる。にしても驚き方も無駄に綺麗だな。

「特に興味がある部活がないからだけど、一番の理由は俺も用事があるんだよ」

「蒼詩も？」

「知人が経営している店の手伝い。早い話がバイトだな」

もちろん、本当のバイトなんかじゃない。その店のオーナーから特別に許可を得ているからだ。

「へぇー、偉いんだね」

温かい笑みを浮かべるハラオウン。お前は母親か。

「ちなみにハラオウンはやってみた部活とかはあるか？」

俺はそんな質問をしてみる。自己紹介でもしたように体を動かすのが得意と言っていた。

となれば考えられるのは体育系といったところか。

「う～ん、やったこと無いけど、テニスとかやってみたいな」

「ほう、テニスか。しかし何でまた？」

「ここテニス部の服ってかわいいな、と思って」

それは理由にならないと思うぞ。

我が校に志望した理由は何ですか？　ここの制服がかわいいからですってノリだな。というかそのまんま。

テニスウェアを着てテニスをするハラオウンの様子を思い浮かべる。

弾ける笑顔、飛び散る青春の汗、見えるチラリズム・・・。

「なにいやらしいこと考えてんのよーーーー！！」

突如目の前に迫る金色の煌めき。それと同時に俺の腹を襲う鋭い痛み。

それが何者かによる右ストレートだとわかったのは、あまりの速さに悲鳴すら上げれず床にうずくまった後だった。

「なして、俺の思考が読める・・・？」

「アンタが一人ニヤニヤしてたから決まってんでしょ！」

俺、そこまでだらしない顔してたか？

「ならば・・・＜キリッ＞」

「・・・アンタが顔を引き締めてもいまさらって感じよ」

ジト目で俺を見る一人の少女。

こいつは確か・・・。

「お前は、アリサ・バニングスだっけか？」

「そうよ。アンタ、結城っていうのよね？」

「おー、もう覚えたのか？」

「・・・そりゃあ、アンタ達みたいな自己紹介されたら嫌でも覚えるわ」

きっとそれは、前回紅次達もやった自己紹介のことか。結構、効果はあったみたいだ。

「びっくりしたね？　あんな自己紹介見たの初めて」

「人間、自己紹介ではインパクトが大事って言うからな！」

「第一印象の間違いでしょ！！」

バニングスからの鋭いツッコみ。うむっ、キレといい、タイミングといい、素晴らしいツッコみだ！！

「にしても、いきなり右ストレートはないんじゃないか？　未だに腹がジンジンするんだけど」

「フンッ！　アンタがフェイトをいやらしい目で見てたからでしょ！！」

「・・・蒼詩、そうなの」

ハラオウンが悲しい目で俺を見つめてくる。あれっ？　普通そこは翠に向ける軽蔑のような視線を送るんじゃないの？

「んなわけないだろ。部活の話をしてここのテニス部の服が本当にハラオウンに似合うかどうかを思っていただけだ」

「大して変わらないわよ！」

「それで、私似合ってた？」

「残念なことに、服のデザインって見たことないから判断しようがなかった」

「そうか・・・残念だね」

「フェイトもそこは気にする所じゃない！！」

よくよく考えればバニングスも運動神経は良さそうなんだよな。さっきの右ストレートも見事なもんだし。

ハラオウンとバニングスのテニスウェア・・・・・・。

「次は意識を刈り取るわ」

「ごめんなさい」

バニングスがフットワークをとってくるもんだから、蹴り技が来ると思い、思い、即座に記憶から抹消した。

まぁ、なんだ。妄想はほどほどにってことだ。

部活の話はここまでにして、俺達は他愛のない話をＳＨＲまで続けるのであった。

授業の内容を説明してもつまらないので、すっとばしてアッという間に放課後。

「今日は確かバイトだったな」

時刻を確認すると、４時ジャスト。

バイト時間は６時だからまだ余裕はある。

家に帰って荷物を置いてから行くとするか。

「蒼ちゃーーん、帰ろー！」

翠がこちらに手を振ってくる。側には紅次も一緒だ。

「りょーかーーい！」

筆記用具等を鞄に詰めると、翠達の元へと向かい、廊下を歩く。

「最近は部活がどうのが流行っているらしいが、蒼詩は入る気はないのか？」

「まるで巷で大ブームみたいな言い方すんな。俺は外せない用事があるからな」

「それって、マスターの所でのバイトかい？」

「そうだ」

「お前ならそれなりに戦力になれると思うがな」

そう言われても部活には興味ないんだよな。

青春の汗を流すよりは、校内でバカやる方が俺らしい。

「お前らは部活に・・・・・・入るわけないか」

「俺はこう見えて忙しいのだよ」

「部活の中じゃ、お目当ての痛みを味わえるような所はなさそうだしね」

紅次はともかく、翠みたいな答えをする人はまずいないと考えてもいいんじゃないかな？

「・・・ん？」

階段を下りる際に窓から見える光景に足を止める。

その先にはテニスコートは見え、部活に来ている生徒がちらほらといるが、その中には・・・。

「むっ、あれはハラオウン嬢とバニングス嬢ではないか？」

俺の視線の先が気になったのか紅次が窓から外の景色を覗き込んでいる。

てかハラオウン嬢って、なぜ敬語？

「クラブの見学じゃないかな。ほら、傍に先生もいるし」

翠の言うとおり、二人共先生らしき人と何やら話をしている。

話というよりは先生の方から一方的に喋っているみたいだけど。

バニングスは知らんがハラオウンは部活に出れないんじゃないのか？

「まぁ、行けばわかるか」

「行くとは、テニスコートへか？」

「それ以外に何があるってんだ。面白い事が起こりそうな気がしてな」

俺がニヤリッと口元を歪ませると、二人とも揃って俺と同じ表情になる。

さすが三バカカラス。考えることは一緒か。

階段を下り、靴を履きかえるとすぐさまテニスコートへと向かう。

三つ並んであるコートの側にベンチにハラオウンとバニングスがいるのが見えた。

その近くに一人の男が何やら話しかけている。

「ぜひ入ってごらんよ。僕と青春の汗を流そうじゃないか！」

「いえ、私は用事がありますので・・・」

「そんなに難しくはないよ。ちょっとでもいいから体験したらどうだい？」

「え、え～と」

うわっ、どこぞのセールスマンみたいな押し売りだな。二人共表情には出ていないが、明らかに嫌そうだぞ。

「よぅ、お二人さん」

「・・・あっ、蒼詩」

「なんでアンタが・・・」

「我らもいるぞ」

「ハロー♪」

向こうも気づいたようでそれぞれの返事をする。

俺達が現れたのを見ると先生は嫌そうな表情を隠そうともせず、気に食わない様子で語りかけてくる。

「誰だい君たちは。ここは部外者は立ち入り禁止だよ？」

おそらくテニスの顧問なのだろう男はハラオウン達とは明らかに違う態度をとってくる。

しかも、こいつ無駄にイケメンで爽やかさがウリなんだろうけど、なんか三枚目な気がする。

「すみません、とっとこ出ていきますんで」

「ハムスターな太郎か！」

紅次、今はツッコむべきじゃないけどサンキュ。

「行くぞ、二人共」

「う、うん」

「あっ、ちょっと待ちなさいよ！」

とっとここの場から退散しよう。ああいう教師を相手にするとロクなことが・・・・・・・

「君達、待ちたまえ」

・・・・・・無いんですよコンチクショー。

「彼女達は関係者だ。帰るなら君達三人だけで帰りなさい」

いやいや、関係者って。この二人ただの見学者ですよ？

「こいつらはここの部員じゃないですけど？」

「ここに来たということはテニスに興味を持ったということだ。十分に関係している」

駄目だ。こういう奴みたいな自分に都合のいいように解釈する人間は何を言っても無駄だ。

仕方ないからハラオウン達に聞くか。

「何でハラオウン達はここにいるんだ？　部活は入らないんじゃないのか？」

「入るつもりは最初から無かったわよ。でも、フェイトが部活の様

子を見てみたいからって言い出して・・・」

「ちらっと見たらなのは・・・友達と合流するつもりだったんだ。けど・・・」

そこでこいつらに捕まったということか。

「聞きました？　先生。彼女達たちはこの部に入るつもりはないんみたいなんで帰ります」

「勝手に決めつけないでくれ。君がそう促したんじゃないか。入るか入らないかは彼女達が決めることだ。君が決めることじゃない」

「教師が決めるわけでもないけどな」

おっと、つい粗相になっちまった。まぁ、別にいっか。

「教師に対して態度がなっていないね。二人とも、こんな連中とあまり関わらない方が身のためだよ？　友達は選ぶべきだ」

「むっ、いつの間にか我々も含まれているとは心外だ」

「そうだよ、オレ達は単に女子のテニスウェアを見に来ただけなのに！！」

翠、それは初耳だ。しかも俺達って勝手に一緒にされとるし。類は友を呼ぶってか。

まぁ、確かに翠の言うとおり眼福だわな。

「ちょっと何よあいつ、気持ち悪い」

「なんかこっちジロジロ見て、気持ち悪い」

「ニヤニヤしてるし、気持ち悪い」

「あぁーん、皆の蔑む視線が気持ちいいいいいーーー！！！」

教師の傍にいたテニス部の女子による三連続気持ち悪いコンボに翠は身体を抱きしめるように腕を組んで悶える。

ちょっと距離を置こう。間近で見ると相当気持ち悪い。

黙っていれば美少年なのにな。

「全く、どうやら君達と居てもロクなことがないね。これ以上事を荒立てるようなら、この僕が許さないよ？」

「「「キャー、先生カッコイイーーー！！！」」」

先公の臭い台詞に周りにいた女子生徒が騒ぎ出す。

どうやら何を言ってもハラオウン達を返す気はないらしい。

なら、こちらにも考えはあるぜ。

「いやですねぇ～。俺はこの部活の見学で、この二人はその付添いなんすよ～」

そう言って紅次達の方へ振り向くと、二人はしばらく顔を合わせる

と清々しい笑みを浮かべて頷いた。

「いや、君はさっき帰ろうと・・・」

「最初はそう思ったんスけど、興味が湧いちゃって。だから・・・・・・」

「俺とテニスで勝負しないか？」

俺の言葉に先公や女子部員はもちろんのこと、ハラオウン達までも目が点になっている。

中には「こいつ何言ってんの？」的な視線も送られてくる。

「フンッ、ずいぶんと命知らずな物言いだが、生憎そんなくだらないことに付き合ってる暇はないんでね」

先公は断ると言わんばかりに俺の言葉を一蹴する。

「体験入部ってことでちょっとぐらいいいじゃないですか。生徒の期待に応えるのが教師ってもんでしょ？　それに・・・」

そう言いながら先公の傍によって誰にも聞かれないように呟いた。

「ここでいいところを見せたら、あの二人も入部を考えるかもしれませんよ？」

視線をハラオウン達に向けて先公を促す。

そのハラオウン達はというと、一方は困惑、もう一方は呆れた表情をしている。

どっちがどういう表情なのかは説明するまでもないな。

「うっ、う～む、しかし・・・」

俺の内容に魅力を感じたか、それともそこまで俺みたいな野郎とテニスするのがそんなに嫌なのか先公は悩んでいる。

やれ、仕方ない、もう少し揺さぶりますか。

「みんなも先生のテニスプレイを見てみたいよな～～？」

周囲を見渡してそう口にした。結果は一目瞭然。

「そうよねー、やっぱり見てみたいなー」

「うんうん、神崎先生のカッコイイ所みてみたい！」

「神崎せんせー、そんな奴サクッと倒しちゃってーー！！」

女子部員からの黄色い声援。これで断るようじゃただのヘタレだ。

というか、そいつの名前って神崎なのか。名前全っ然聞いて無かっ

た。

そして、最後の女子、そんな奴なんて言うんじゃありません。

「う～ん、それじゃあ仕方ない、特別に僕が相手してあげよう。今は忙しいけど生徒の期待に応えるのが僕の役目だからね」

そして無駄にキラッと見せる白い歯。

「「「キャー、神崎先生優しいぃーー！！」」」

再度飛び交う黄色い声援。勝手に解釈して自分を持ち上げているな。

そういう奴の出鼻をくじくのって好きなんだよなぁ。

実に単純・・・・・・＜ニヤリッ

第二話　テニスの何様？　前編（後書き）

この展開どっかで見たことあった気がしたが大丈夫だろう・・・。

第三話　テニスの何様？　後編（前書き）

時間がかかってしまった。それにしも一話一話が長い・・・。

第三話　テニスの何様？　後編

「そんなわけでテニスをすることに」

「蒼詩、誰と話してるの？」

ハラオウンよ、そこはツッコんでくれるな。暗黙の了解ってやつだ。

ちなみに今俺は体操服に着替えて準備体操をしている。

「そんなことより、あんなこと言って大丈夫なの？　その様子だと勝つ自信はあるのよね？」

その様子を見ながらバニングスは疑惑の視線を向けてきた

「何言ってんだハラオウン」

準備運動を終え、軽く背伸びをするとその反動に乗せて勢いよくサムズアップした。

「俺はテニスの経験なんぞ、微塵もない！！」

「威張るな！！」

バニングスのこうげき！　バニングスはハイキックをはなった！

「翠ガード！！」

「ぎゃらんどぅー！！？」

蒼詩は翠をたてにした！　蒼詩にダメージはない！

「おおー、翠の美顔が原型を留めないほど歪んでおるぞ」

「翠、大丈夫かな？」

そんなの決まってるだろ？

「あぁ～、女の子に蹴られるなんて堪んないよ～！！」

見ろよ、あの満足した表情。女子に蹴られて罵られるなんて翠にとっては快楽でも何でもないからな。

そんな翠をスルーして話を続ける。

「まぁそう焦るな。俺だって考えはある」

「考え？」

俺の言葉に興味を持ったのか、バニングスがオウム返しをする。

「俺は別に実力で勝とうなんて思ってないからな」

何の考えも無しに勝負を挑むなんて馬鹿だけだ。

だが、俺は馬鹿ではなく三バカカラスの一人。

甘く見てもらっちゃ困るぜ！

「でもごめんね、別に蒼詩が悪いわけじゃないのに・・・」

いきなり謝ってくるハラオウン。面倒事に巻き込んでしまったこと

を気にしているのだろう。

「気にするな。望んでもないのに入部されるのは拷問でも何でもないからな」

入部するかしないかは本人の意志次第だ。

「バニングスも嫌なら嫌って言えばいいのに」

「先生相手にそんな乱暴な口聞けないわよ・・・」

ため息をつくバニングス。真面目だねぇ。俺には容赦無く右ストレートを放ってくるのに。

「・・・・・っよし。んじゃ、行ってくるか！」

「蒼詩、頑張って！」

「アンタが言い出したことだから、結果なんてどうでもいいけど・・・応援はしてあげるわ！」

笑顔で応援してくるハラオウンと恥ずかしいのか顔を逸らして励ましの言葉をくれるバニングス。

「蒼詩よ、我々の力を見せてやれ」

「一発かましてやれーい！」

応援とは少し違うが、それぞれの言葉をくれる紅次と翠。というか、翠はいつの間に復活したんだ？

コートに向かうと先公はネット越しに立って、爽やかな笑みを浮かべてきた。

「サーブは君でいいよ。初心者には優しくしてあげるから」

サーブ一つ譲るなら、世界中は優しさにあふれていると思う。
試合はセブンポイントマッチ。どちらかが先に7点取った方が勝ちだ。
これは偶数ポイント目の決着後にサーブ選手交代になるわけだから、ぶっちゃけ譲ったところであんま差はない。

「優しさのかけらもないな」

そう呟きながら、ボールを地面に数回叩き付ける。
そして、ゆっくりとボールを頭上高く投げ上げた。
空へと向かうボールは徐々に勢いを無くし、重力に沿って地面へと落下する。
その動きから目を離さず、手にしているラケットでボールを捉えた。
ボールはそれなりのスピードを出して、相手のコートに入るが・・・、

「ファール！」

審判の声が上がる。打った先は先公が立っている位置よりも後ろだった。

「サーブの時はこの枠にちゃんと入れないと意味がないよ？」

先公はニヤニヤしながらラケットで白い枠をなぞるように動かす。
どう見たって相手を小馬鹿にしているようにしか見えない。
サーブを打つ際、コートより外側、（ベースライン中央にある）センターマークとサイドラインの仮想延長線の間から、ネットより向こう側、相手コートの対角線上のサービスエリアに入れないといけない。
できなければ、セカンドサーブで必ず入れなければ相手の得点になってしまう。
気を取り直してセカンドサーブ。
今度は下からすくい上げるように打ってボールを確実に入れる。
入ったのはいいが・・・、

「それっ！！」

先公はボールの軌道を予測して回り込み、打ち返した。それはもうラリーなんぞやってらんないというほどの勢いで。
ボールは俺がサーブした位置より反対側のサイドラインの角に鋭く入った。

「０－１！」

ポイントが出されると、観客の方から歓声が上がる。もちろんのこと、声を上げているのはテニスの女子部員だ。
というか、初心者に優しくするという話は？
そのあとのプレーも先公の容赦無い攻撃（もはやただのイジメ）は続いた。

「０－２！」

さっきの同じ戦法で遠慮なく打ち返してくる。

「０－３！」

相手のサーブでもいきなり全力。

「０－４！」

こっちは打ち返すのに苦労してるのに、先公はさっきまでの言葉はどこに行ってのやらすぐに点を取ってきた。

「０－５！」

そんな一方的な展開が続き・・・。

「０－６！」

気付けばマッチポイントになっていた。

「ち、ちょっと！　もうマッチポイントじゃない！　蒼詩の奴何やってんのよ！」

「まぁ、落ち着きたまえ。まだマッチポイントだぞ？」

「それがマズイって言ってんのよ！」

「だ～いじょうぶだって。蒼ちゃんはまだ負けていないよ？」

「だからそんなこと言ってる場合じゃ・・・・・・」

「確かにあと一点でも取られたらあいつの負けだが、まだ万策尽きたわけではあるまい？」

「そういえば蒼詩、全然焦っている様子じゃないね？」

「その様子だと、何か考えでもあるかもしれんな」

試合開始してまだ5分。お互いの体力は全然余裕がある。
それでも相手があと一点取れば試合終了、先公の勝ちになる。

「もう終わりかい？　まだまだこれからだというのに」

心底つまらなそうに先公は呟く。それはこの試合のことなのか、それとも俺を相手にすることなのかは分からない。
どちらにしても、好ましくないと思っているのは確かなようだ。
続ける気なんぞさらさら無いくせに。

「そうだな。まだまだこれからだ」

「ふん、強がりはよしたまえ。もう決着は見えてるよ」

サーブは相手側。経験者だけあってフォームに無駄はない。
先公はボールを高く上げ、

「はぁっ！」

力強くラケットで打った。
軌道はもちろん、俺が立っている位置よりも離れた位置に向かっている。
無駄のないコントロールでボールはコートに入る。

「ふっ！」

それを見逃さず、すぐさま回り込んで打ち返した。
狙いはサーブの位置より反対側のサイドライン。決まればリターン

エースとなるはずだ。

「甘いよっ！」

先公はその動きを読んでいたいたのか、素早くその位置へ回り込んで打ち返す。
対角線上にボールはコートを駆ける、たいていのテニス選手も反対側に回るのも一苦労だろう。
だが、俺にとっては問題無い。

「そぉーい！」

一瞬で反対側に回ると、俺も先公に倣って相手の立っている位置より反対側のコートへ打ち返した。

「くっ、このくらい！」

全力疾走でボールに追いつき、なんとか打ち返してくる。

「んのっく！」

とりあえずなんか掛け声をかけてまた相手の反対側のコートのサイドラインへ打ち返す。
そんなラリーが・・・・・・一時間半くらい続いた。

日は傾き、夕暮れがコートで打ち合う俺達を照らし出す。
さっきから得点は０－６に固定されたまま変化していない。
先公のサーブから始まって、途切れることなく打ち合い続けているからだ。

コートの端から端へと走り回るもんだから体力の消耗は半端ではない。現に・・・、

「ハァ、ハァハァ、ハァ・・・・・・」

先公がものすごい汗かいて荒い呼吸をしている。まるで全力疾走でフルマラソンをされたような状態だ。
台詞だけだと何かに興奮している変質者にしか聞こえない。
ちなみに俺は、

「アゥ！」

軽くテンションが上がって、逆にこっちが興奮していた。しかもこれといって疲れてはいない。
バニングスに言った作戦、それはただの体力勝負だった。
さっきなではラケットの打ち方を練習して、慣れたらあとは体力がある限り打ち続ければいい。
そのおかげで先公の動きはさっきまでよりも弱弱しく、なんとか最小限の動きだけで体力を温存させるのに精一杯だ。
打ち返してくる球もすっかり老いたかのようになんの迫力もない。
その球を俺は・・・容赦なく打ち返す！

「イアッフゥゥゥーーー！！」

・・・・・もはやハイテンションどころか頭イカレてるだけじゃないか？
狙いはもちろん、先公から遠く離れた位置。全力で走らないと届かない距離だ。

「ヒィ、ヒィ、・・・・・・！？」

よっぽど辛いのか、酷い表情をしながら必死に走り出す先公。足はまるで生まれたての小鹿のようにガクガクと震えている。
やべぇ、ちょっと面白い。
先公はやっとの思いで打ち返す。その球はゆっくりと緩やかな山なりに飛んでいく。
そろそろ決着をつけるか。
なんか向こうも意識が朦朧としてるのか、目が虚ろになってキモ・・・じゃなかった可哀相だしな。
向かってくる球を見据えて、ラケットを構える。
そして思いっきり振る・・・！！

「ポポポ・・・ポ～ン！」

・・・・・・ことなく、ボールを柔らかく打って、ネット際を狙った。いわゆるドロップってやつだ。
先公はその手段に目を剥き出しにして即座にネットへ詰め寄ろうとしたが、

「うっ、うわぁ！」

足に限界がきたのか、もつれてしまい派手に転んだしまった。
しかし、ボールは非情にも止まることはなく相手のコートに入り、数回バウンドすると跳ね返る力が無くなり地面に静止した。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

流れる沈黙。
誰がこのような展開を予期できただろうか。
端から見れば圧倒的だった。

結果は見えていたはずだ。
それでも審判の声は冷静に下される。

「1－6！」

そう、試合はまだ始まったばかりだった。

「いや～、大・勝・利ってやつかな？」

「アンタ、存外鬼畜ね。あんな勝ち方初めてみたわよ」

「言っただろ？　俺は実力で勝とうなんて思っちゃいないって」

校門へと向かう俺達。
試合の結果は微妙な形となって終わった。一点を取ると先公が、

「き、今日はここまでに、しよう！　部活、が、出来ないからね、つ、次の機会、に・・・・・・」

と、息絶え絶えながらそんなことを言ってきたのでハラオウン達の勧誘は諦めるということを条件に試合中止となった。
ああいうタイプはあんなことを言ったわりには実行しないだろうからな、放っておいて大丈夫だろう。

「まぁ、ハラオウン達がまたあいつに勧誘されそうになったら言いに来いよ。また、追い込んでやるから」

「うん、ありがとう、蒼詩」

「あ、ありがとう・・・・・・」
お礼を述べる二人。本来なら自分でなんとかしろと、普段の俺ならそう言ったかもしれないがたまにはいいかもな。
「それにしてもすっかり遅くなっちゃったね」
「そうね、なのは達を待たせちゃってるし」
なんだ、二人共友達を待たせているのか。そういえばハラオウンがそう言っていたな。
どう考えても俺が原因としか言えないんだが、そこにツッコまないところだと二人なりに気を遣ってくれてるのだろう。
ちなみに紅次と翠は早めに帰って、俺達三人で下校している。
・・・・・・ん？　遅くなった？
ふと腕時計を見ると、時刻は5時５０分を指していた。ていうか6時からバイトじゃねぇか！
「悪い、二人共。今日用事があるから俺すぐに帰るわ」
「用事って・・・・・・もしかしてバイト？」
「バイトって、中学生がやっちゃっていいの！？」
「ん～、バイトというよりは知人の手伝いみたいなもんだな。もちろん、働いた分の給料は貰えるけど俺の自己満足でやってるもんだからな」
別に嫌じゃないというか、手伝わないと申し訳ないって気分なんだよな。

「んじゃ、またな二人共」

「またね、蒼詩」

「また明日」

ちゃんと返事をくれる二人、いい奴だ。
とりあえず全力で校門へと走る。走ってもいないと間に合わないからな。
だが、バイトの時間に気を取られていたせいか、校門に誰かが待っていることに気が付かなった。
校門を出て右に回ろうとした途端、人影が目に入った。

「うおっと！？」

「きゃっ！？」

正面に軽い衝撃。
咄嗟に身を引いたのが幸いしたが、ぶつかった子はその衝撃にすら耐えられず後ろへ倒れようとする。

「・・・・・・っ！！」

無意識というべきか、瞬時にその手を掴んでいた。
そして一気に引っ張り、転倒を避ける。

「わわわっ」

危なかった～。

俺は助け出した（？）子を見る。
栗色の長髪をサイドアップで纏めた変わった髪型。
というか今に気づいたがこいつ女の子だ。

「悪い、大丈夫か？」

「あっ、いえ・・・・・・」

ついついそんな台詞を言ってみるが、なんか気まずいな。
・・・・・・ん？　なんか片手が塞がれているような・・・・・・。

「いつまで握ってるの？」

いつの間にか後ろにいた紫色の長髪に白いヘアバンドを付けた女の子がそんなことを言ってくる。
そして、握ったままの手を見て互いに、あっ、と声を上げた。

「ご、ごごごめんなさい！！」

「あ、いや、謝るほどじゃ・・・」

「ついつい急いでで、前を見ていなくて、本当にごめんなさい！！」

「いや、俺も急いでたから悪いのはお互い様だけど・・・話聞いてる？」

一方的に謝ってくる女の子。
なんか逆にこっちが冷静になってくる、というかこの子おもしろいな。
とりあえずこのままでは埒が明かないので、どうどう、と言ってみ

る。

「あの・・・私は猛獣とかじゃないんですが・・・」

おお、なんとか収まったみたいだ。

「じゃ、俺は急いでるんで」

「えっ？　あっ、ちょっと・・・」

「ぶつかって悪かった、それじゃ！」

軽く片手を上げると、すぐさま校門へと走りだした。

「大丈夫？　なのはちゃん」

「う、うん、平気だよ」

「なのはちゃんはそそっかしいからなぁ」

と、いつの間にか三人になって会話をしている内容に、内心苦笑するのだった。

走りに走ってようやくたどり着いた先は一軒のバー。

『胡蝶の夢』という一見神秘溢れる看板が立てられたその店は、特に通りすがりの人に興味を示すものはない。

雑誌とかで取り上げられることもないが、知る人ぞ知るお通な店という扱いといったところだ。

その店の前に俺は突っ立っている。

時刻は5時58分、ギリギリ間に合った。

「そのかわり汗まみれだけどな」

そんな独り言を呟き、乱れた制服を整えると、入り口の扉に手をかけた。

「いらっしゃ～～い、でも今は準備中・・・ってあらん？　蒼詩ちゃんじゃな～いん♪」

甘く蕩けるような口調だが、何故かとてつもないく低い声が店内に響く。

その声の正体は、バーカウンターでしきりにグラスを磨いている人物。

腰を優雅にくねらせ、思わず目を奪われてしまうほどの・・・・・・・

巨体。

服越しからでも伝わる豊満な・・・・・・大胸筋。

グラスを曇り一つ無く磨き上げる、しなやかでその印象が強く伝わる・・・・・・上腕二頭筋。

艶やかで、吸い込まれてしまうほどの柔らかさが伝わる・・・・・・・

厚化粧の唇。

一本一本が絹糸のように丁寧に三つ編みされた・・・・・・・もみあげ。他の部分はすべてスキンヘッド。

これらを全て挙げた上で、

誰がこの人をマスターと呼べるのだろうか。

「相変わらず、時間ピッタリねぇ。もう少し遅れてもだいじょ～ぶなのに」

「働く身だからな。これくらいは守っておかないと話にならない」

本音は遅れた時、

『あぁ～ん、蒼詩ちゃんちこく～、漢女(おとめ)を待たせる子には・・・オ・シ・オ・キ♪』

などと言って、キスを迫るオッサンの顔という人生最大のトラウマを受けたくないからだ。
あれはキツイぞ。下手なホラーや殺人鬼よりもよっぽど怖い、というかキモい。常人なら軽く失神する。
それだけ言うと、奥にある休憩室に向かい、ウェイターの服に着替える。
本来、ここがバーなだけであって、お酒を飲めない俺のような子供は基本仕事なんて出来ないのだが、マスターは特別に許可してくれた。
理由はいろいろとあるが、一番の理由はただの手伝いみたいなもんだ。
生活費とかそういのには困っていなし、正直、わざわざこんなことをする必要は無いが、マスターとは何かと世話になっているので、何かできるこは無いか探したらこのバイトだったってことだ。
ちなみにこの店はバーだから夕方に開店するので、学校以外の時間帯で行うこの仕事は何かと都合がいい。
そう・・・・・何かとね。

「マスター、テーブル拭き終ったぞ」

「はいは～い。後は商品の下見をするだけねん」

俺はカウンターの方に行ってグラスを並べたり、色んなカクテルの材料をし始める。

「・・・・・・そういえば、学校の方はどうなのん？」

不意に聞こえたマスターの声。

それは不思議と優しさが含まれているような口調だった。

「・・・・・・いつものバカ二人と同じクラスになった」

「うんうん、それで？」

「あと、二人変わった子と知り合った」

「変わった子？　それはどんな子？　乙女？」

「それは・・・・・・」

ポツリポツリと俺の口から明かされる学校風景。

退屈しない、愛しい日常。

そんな生活がいつまでも続いてほしいと願うかのように。

学校の話はお店に第一客が来るまで続くのであった。

第三話　テニスの何様？　後編（後書き）

マスターの人物像、勘のいい人はもうおわかりですね？　ですが、あの人ではありません。ただ、姿が似ているだけです。

第四話　五大聖祥女神　前編（前書き）

ようやく更新です！　ＡＸＬが制作する「愛しい対象の護り方」に夢中ですっかり遅れてしまいました・・・。
あのＯＰは励まされるようで好きですねー。みなさんも是非プレイしてみてください。
良い子は見ちゃだめだぞ☆

第四話　五大聖祥女神　前編

あれから一週間が過ぎた。
新入生である俺達も学校生活に慣れ始め、それぞれが充実した日々を過ごしている。
充実かどうかは個人差があるが・・・。

俺・・・いや、俺達の場合、充実を越えて毎日が大騒ぎだ。
この前なんか、紅次と翠と一緒に校庭に机に巨大な落書きを書いてやって、生活指導をみっちりさせられてたっけ。

そんな前代未聞の行為に早くも俺達の噂は広がりつつあり、カオスだけれども平和に過ごしている。
そんなある日のこと、ハラオウンと他愛のない会話をしているとき、ある話を切り出した。

「ところでハラオウン」

「何？」

「お前ってさ、昼休みになると何処へ行ってるんだ？」

それは些細な疑問だった。
昼休みになると弁当箱を持って教室を出ていく彼女、その後の行動が気になっただけ。

深い意味は無い、これといってな。
ただの小さな好奇心。
それを悟られないように何気ない風を装って聞く俺に、ハラオウン

は至って普通に答える。

「屋上だよ」

「屋上？　何かあるのか？」

屋上。

それは文字通り、建物の最上階に位置する場所。

陽の光を浴びるには絶好のポイントだが、コイツには日向ぼっこの趣味でもあるんだろうか？

「他のクラスに居る友達と一緒にお昼を食べてるんだよ」

「他のクラスとか、なるほど」

ハラオウンの答えを聞いて納得。確かに他のクラスじゃ教室に入りにくい。

だったら教室とは別の場所で食事をするのも、一つの選択だろう。

そうか、昼飯を食いに屋上に行ってたのか。

「それがどうかしたの？」

「いや、別に」

まぁ、当然他人から『昼休みは何してる？』なんて聞かれれば、気になるだろうな。

彼女の返しも最もだろう。

それは突然のラブストーリー・・・じゃなかった、ラブストーリーは突然に・・・でもなかった、突然の出来事だった。
いつものように昼飯を食おうと、自分の弁当箱を取り出した瞬間、

「行くぞ、蒼詩」

ガシッと紅次に肩を掴まれた。
いきなりの展開に嬉しくて、嬉しくて言葉に出来ない・・・ことも
ない。
とりあえず、首だけ動かして、後ろに立つ奴を見る。

「どういうつもりだ？」

「なに、お前と屋上に行こうと思ってな」

ハァ？
どうしたんだ急に。
屋上に行ったって何もないと思うが・・・。
・・・っ！！　こいつまさか！？

「そうか、お前の言いたい事はよくわかった」

寧ろ、こんなことに気づいてやれなかった俺を許してほしい。

「うむ、お前にしては話が早いな。では早速・・・」

わかった、と俺は机から一枚の白紙と一本のペンを取り出した。

「ほら、この紙に遺言でも書きな」

「ちょっと待て」

「で、最後の行に『すべての財産は、結城蒼詩に渡します』と書くこと」

「済まないが、印鑑は持ってきていない」

「指でも大丈夫だ」

「何をだ・・・・・・というか俺は自殺志願者ではない」

そうなのか？　屋上に行く＝自殺するなんて常識だと思ったんだが。

「というか、お前はまだ生命保険に入っていないから遺言書いても意味ないか」

「発想が狡いぞ蒼詩。そういう意味での屋上に行こうってわけではない」

「これまた唐突になんでだ？」

「行けばわかる」

教えてすらくれないのかよ、たかが屋上へ向かう目的を。

俺は少し考える。

何か新しい悪戯でも考えついたのかと思ったその瞬間、

「頂くぞ」

紅次は俺の弁当を引ったくると、一目散に教室を出て行った。

ガッテンム！　よりによって弁当とは・・・・・・！
人の命を握る、まさに外道の極み！　なんとしても取り戻さないと！
俺も紅次に続いて教室を出る。

・・・そういえば翠を置いてきてしまったが大丈夫だろうか？

「あれ？　これはなんだか新手の放置プレイ！？　なんだかここまで完全な放置は今までにないほどの痛みが来そうだよっ！」

「・・・あれはあれで幸せだろうからまぁいいや」

「どうした蒼詩、貴様の速さはその程度か！」

現在、俺は紅次と全力の鬼ごっこをしています。
途中で生徒と出くわすから避けるのに必死で中々距離が縮まない。
というか他の生徒は俺達の行為に何一つツッコんでくれない。
そんなに俺達の行いって日常茶飯事なのか？

「紅次、その弁当を今すぐ返せ。さもないと・・・・・・」

俺は走りながら紅次に話しかける。

「お前が書いたと思わせるラブレターを作ってマスターに届ける！」

「ある意味、究極の選択！」

それでも弁当を渡さないお前の根性は褒めるもんだが。

意外と余裕な会話をしているが、奴は一向に距離を縮めようともしない。

廊下の角を曲がり、上の階へ。その階の廊下を駆け、角を曲がり、上の階へ。

さっきからこれの繰り返しだ。

途中で先生に注意を受けるがそんなもん気にしちゃおれない。

「何がしたいんだ紅次は」

思わず口に出る。

俺の数メートル先に行く奴は、ＨＡＨＡＨＡと意味不明な高笑いをかましている。

追いかける俺をあざ笑うかのように聞こえたので、一瞬さっき紅次に行った事を本当に実行してやろうかと思った。

だが、この時気づかなかった。

これが奴の策略であり、俺はすでに嵌まっていた事を・・・。

さらに上の階に上がった俺の先にあるのは、鉄製のドアだった。

言うまでもなく、この先は屋上である。

出入り口はこのドアのみ、他に通る場所など何一つ無い。

「アイツはこの先か」

ここまで来て、これといったハプニングもアクシデントも無かった。

最初は何かの遊びか悪戯かと思ったが、考え込んでみればアイツが俺を被害者として巻き込むなんて無かったはずだ。

加害者だと認めてしまうのもどうかとおもうが。
今回のケースは珍しいことこの上ない。
いったい何がしたいんだ？

「さっさとアイツを捕まえて、昼飯を食わないと」

紅次を追って、既に5分は過ぎている。
時間的に余裕だが、早めに終わらせる事に越したことはない。
俺は目の前のドアノブを手に、回しながら押し出す。
軋む音と同時にドアが開かれると、最初に視界に入ったのは、強い陽光と腹が立つくらいに澄み切った青い空。

次に映るのは無機質な白いコンクリートの床。
学校と外界が接している場所。
見間違える筈のない、屋上。

そこはとても広く、すでに何人かの生徒が昼食をとっていた。
まぁ、教室と違って五月蠅くないから重宝してるんだろう。
そんな事を考えつつ、この場所に来た目的であるターゲットを探す。
さて、どこにいる？

「・・・ん？」

辺りを見渡して奴を探していた時、視界の隅に、ふと見覚えのあるものを見つけた。
それは自分の位置から少し離れた場所に居た2人。
1人は腰まで伸ばしたサラサラな金髪。
もう1人は、襟元までの少し色素の濃い金髪。
それを見て、あることを思い出した。

「そういえば、屋上で昼飯食ってるって言ってたな」

この前聞いた事なのに、すっかり忘れてた。
いや、覚えていたからといって、どうこうするわけじゃないけど。

他にも3人の女子が、彼女達と昼食を共にしている。そこには笑顔の絶えない暖かな雰囲気があった。
あの3人、・・・どっかで見覚えがあるような、ないような・・・。
はて・・・・・・どこだったか？

「って、今はそれどころじゃない」

忘れてた、俺がここにいるのはあの紅次を捕まえるためだ。
ちょっと眺めてただけで、少女たちのほんわかエリアの空気がうつってしまったようだ。

よし、さっさとアイツを見つけるぞ。
待っていろ、ドキッ、好物だらけの彩色弁当！↑命名・俺

いくら広いとは言え、空間には限界というものがある。
隅から隅まで探せば、いつかは必ず見つかる。

と、思って出入口を警戒しながらそれを行っているのだが、一向に見つかる気配が無い。
本当にアイツ、何処に行きやがったんだ？
まさか本当にこの屋上から飛び降りたというのか？

だとしたら、俺の昼飯（ドキッ、好物だらけの彩色弁当）が木っ端

みじんじゃないか！

するといつの間にか、あの5人の近くまでやってきた。
依然として彼女達の周囲は、ほんわかとした優しい空気に満ちている。

女3人寄れば姦しいとはよく言うが、彼女達のそれは五月蝿い訳ではない。
穏やかさの中に明るさがあり、決して無口という訳でもない。
強いて言うならば、『喧騒と静寂の間』だろうか？

……って、何で俺はあっちに目が行くんだ？

別に羨ましいなんて思ってないぞ。本当だぞ？
今は紅次を捕まえて昼飯にありつきたいところだが……。

蒼詩「なんで見つからないんじゃぁぁぁーーーー！！！」

思わず口に出た心の叫び。

その慟哭は屋上全体に響き渡り、青い空へと掻き消えていった。
むしゃくしゃしたら大声を出すのって結構気持ちいいな。

ただ、叫んだ後に漂う重い沈黙と共に向けられる周囲の視線が痛いこと。

なにより……。

「そ、蒼詩？」

彼女達にまで気付かれてしまったことは盲点だった。
いや、あんだけ大声出せば気付かれるのは当然だけど。
5対の瞳が、その方向に半ば反射的に振り向いた俺に突き刺さる。
何だろう、非常に居心地が悪い。
俺、何かした？
「ハラオウン」
俺の名を呼んだのは、鮮やかなロングの金髪少女。
フェイト・T・ハラオウン。
俺の前の席に座っている、意志の強い優しい少女。
もうちょっと声を張れるようにした方が、性格的な明るさが出ると思うのだが、それも彼女の個性の1つ。
相手をしている俺は苦にはならないし、どちらかと言うとその方がハラオウンらしいと思う。
「……」
……
……
互いに見つめ合う事、正味5秒間。
その間はただ無言のみ。
思う事と言えば、「ハラオウンって綺麗な目してるな～」とかそん

なもんだけ。
口にはしないが。
というか、この状況をいつまで続ければいいんだ？
目を開け続けるって、結構目が渇くんだけど。
「って、アンタ達はいつまで見つめ合ってんのよ！！」
「「あっ……」」
半ば不可侵の領域になりつつあったそこは、もう1人の少女の声によって霧散していった。
アリサ・バニングス。
我がクラスの出席番号1番にして、強気で勝ち気な少女。
しかし、意外にも優しい一面を持っている。
『暴走機関車』というあだ名は、俺の胸の内に留めておく。
だって、言ったら翠みたいに蹴り飛ばされそうだし……。
まぁ、この場はバニングスのお陰で何とかなった。
目もすっかりドライになってシバシバしている。
俺は少し目を瞬きした後、ハラオウンに声をかけた。
「よう、昼飯中か」
「う、うん」
返事をするハラオウンは少し頬に赤みがかかっているように見える。

どうした？　太陽の浴びすぎか？

「アンタさっきの大声は何なのよ」

アリサがさっきの様子に首を突っ込んできた。

全く、突っ込む時はボケた時だけでいいのに。

「イライラしたんで、世界の中心で愛を叫んでみた」

「そんな理由であちこち愛を叫んででも迷惑なだけよ！　とゆうか愛とは思えない台詞だったし！」

「……あの台詞は愛する人を探しても探しても見つからない自分の非力さを嘆き、愛する人が帰ってきて欲しいことを暗に意味している」

「今、絶対に考えた事でしょ！」

今日もアリサのツッコミはキレがいいな。

そんな事を思いながら、俺はハラオウンに一つあることを尋ねた。

「ハラオウン、紅次見なかったか？」

「見てないけど、どうかしたの？」

彼女達は昼休みの時間から居るから、ついさっき此処に来た紅次を見たと踏んでいた。

だが意外にも、ハラオウンも奴を見ていないらしい。

此処で彼女が嘘を吐く利点はない。間違いなく事実だろう。

ふむ、コイツが見てないとすれば、紅次は奴は何処に行ったんだ？
今の所、屋上から出て行った姿は確認されていない。
ならこの屋上の何処かに居るのが当然だが、未だ奴の姿は見えない。

そんな奇怪な出来事に俺は腕を組んで考える。
そんな姿が気になったのか、ハラオウンは俺に声をかけてきた。

「紅次がどうかしたの？」

「あの野郎、俺の弁当、生命線を盗んでいきやがった」

俺の答えに、あははっ、と渇いた笑いを浮かべる。
コイツもそろそろ、紅次の思考の意味不明さが分かってきたようだ。

えっ？　人の事言えないって？　それについてはノーコメントだ。

「大丈夫？」

「それは俺を心配してんのか？　それとも明日の無い紅次の事を心配してんのか？」

とにかく、俺の生命線が奪われた以上、アイツにはそれ相当の報いが必要だ。

なんとしても見つけなければならない。

筈なんだが……。

（　。Д　゜）・・・

（ ⊃Д⊂）　ゴシゴシ

（　；゜Д　゜）・・・！？

唐突に、ゴシゴシと両目を擦ってみる。
何だろうか、俺は蜃気楼でも見ているのか？

いや、さっきまでは誰も居なかった筈だよな。
俺の視線は、この位置から見てちょうど対角線の場所。
襟元までの長さの茶髪、左の髪に１つだけ付いてる髪留めが特徴的な少女が１人。
何処かで見たような気がするウェーブのかかった艶のある紫の髪、白いヘアバンドが良く似合う少女が１人。

そしてその間に立つのが……

「遅かったな蒼詩」

彼女達を色とりどりの美しい花と形容するなら、コイツはそれを邪魔する雑草。

ソレはあたかも最初から此処に居たと思わせる素振りと、不敵な笑みを俺に向ける。

俺のターゲットであり、三バカの一人である野郎が居た。

第四話　五大聖祥女神　前編（後書き）

ＢＬとホモの違いって、女子の視点でＢＬ，男子の視点でホモって言うかもしれないと真剣に考えた俺は末期かもしれない・・・・・・。

第五話　五大聖祥女神　後編（前書き）

続けて投稿です。

第五話　五大聖祥女神　後編

い、今起こったことをありのままに話すぜ。
紅次を探していたら、実はハラオウン達の傍にいたんだぜ！
奴の手には、俺の命の源泉でもある食料が持たれている。
というか、コイツいつの間に……。
今まで至って普通に食事をしていた5人も、奴の突然の登場に目を丸くしている。
「紅次、いつからそこに居たんだ？」
「呼ばれれば、形を成して現れる、それが俺だ」
呼ばれる前はどんな姿をしてるんだろう、すごい気になる。
というかお前の身体は粒子か何かか。
「えぇっと、どちら様？」
「よくぞ聞いてくれた！」
栗色のサイドポニー少女の質問に、待ってましたと言わんばかりの表情で立ち上がる。
その異様な程の張り切りぶりに、少し引いてるが……。
「俺の名は白神　紅次。そこに居る蒼詩と同じクラスであり、この

学校に混沌を巻き込む三バカカラスの一人です」

声高らかに自己紹介を始める阿呆。
何で毎回スタイルが演説染みているのか、未だ謎であり、それがより視聴者の記憶に深く刻まれる。

ちなみに紅次が言った『三バカカラス』とは、『三羽烏』をアレンジしたもので、略して三バカ。
ある分野で特に優れた三人、という意味らしいが、何に優れているかはご想像にお任せします。

というか、なぜ語尾が敬語？

「そして何より、世界に存在する謎に挑む冒険者と憶えて頂きたい！！」

まさにポカ～ン。
初めてこの生物を見る3人は勿論、ハラオウンとバニングスも呆気に取られている。
まさか、これを2度も見るとは思わなかったのだろう。

甘いぞ2人共、コイツは翠に続いて予想の遥か斜め上を行く奴だからな。

「以後、お見知りおきを。聖祥の五大女神」

「えっ、何でそれを！？」

右手を前に綺麗に一礼をする紅次。

ところで、『五大女神』って何だ？
5人全員が過激に反応してたが……。
そして何故、それをハラオウン達に言うのだろう？
まぁそんな事より、さっさと目的の物を取り戻さないとな。
誇らしげにチンタラ説明している紅次に近付く為、気配を消しながら背後に回る。
「聖祥の五大女神を知らぬ者など、この地域にはいません。他学校であっても、その噂はいくらでも流れてくるのですよ」
「その呼び方は、あまり好きやないんやけど……」
無駄に力を入れる紅次に、困りながら茶髪少女が答える。
この地域にしては珍しいな、関西弁って。
ついに真後ろにたどり着いた俺は、奴の隙をついて拘束する。
今気付いた紅次は驚くような声を上げたが、そんなことを気にせず、奴が手にしている弁当が離れた瞬間……。
「でゃぁぁぁぁ！！」
拘束状態から身体を半回転させ、遠心力で紅次を叩き落とした。
「ブホヘッ！」
それは悲鳴なのかわからない声を上げ、紅次は倒れ伏す。だが、これだけでは終わらない。

「おどれは……」

素早い動きで仰向けから俯せに入れ替え、紅次の腰にのしかかると奴の両足をつかみ……

「なに人の飯を奪っとんじゃぁぁぁーー！！」

海老反りになるようにスリーパーホールドをかます。

背後では紅次はギブサインを示すように床を叩いているがそれだけでは満足しない。

技を解くと、今度は紅次の両足に足を入れて組んだまま中腰になる。

「元祖サソリ！！」

偶然、プロレス番組で覚えた技を試しに使ってみた。

すると、先程から床を叩いていた音も無くなり、いつの間にか紅次の呻く声も消えている。

どうやらノックアウトのようだ。

「全く、人の生命線を奪うとは、正に鬼畜の所業」

などと呟いて地面に落ちている弁当を拾うと、軽く土を払う。

中身は大丈夫だな。

と、何やら視線を感じるなと思いながらその方向に向くと、さっきの5人が奇妙な目で見ていた。

そういえばこいつらの事忘れたな。

「なんだ？　そんな目で見ても俺の生命線はやらんぞ」
「いや、別に欲しいわけじゃないけど……」
違うのか。いつになく苦笑をしている5人を見て首を傾げる。
「おっと、こんな事してる場合じゃねーな」
紅次を追ってから既に１０分経過している。
さすがにこれ以上は、昼飯の時間に影響が出るだろう。
弁当箱を取り戻した俺に、この場所に留まる必要は無い。
急いで教室に戻ろうと思い、出入口に行こうとした時……
「おい待て」
スラックスの裾を引っ張られ、進行を妨げられた。
止めた犯人は言わずもがな、いつの間にか復活していた紅次。
「なんだ、また弁当を奪いにきたのか？」
「今更教室に戻るのも、時間の無駄だろう？」
「どうやら理解不能な頭をベリートゥーベリーで直した方がいいな……」
まぁ聞け、と紅次は手で制して言葉を続ける。
「折角だ、彼女達と昼食をご一緒していこうではないか」

「何言ってやがる。邪魔にも程があるだろ」
奴の提案をそれだけで却下する。
突然何を言うんだコイツは。
幾らなんでも、俺達のような奴は彼女達からすれば異質でしかない。
そんなのが入ってしまえば、折角の親友同士の空気が壊れてしまう。
散々バカことをやらかしている俺も、それ位は弁えている。
のだが……。
「私は構わないよ。良いよね？」
ハラオウンはあっさりと了承してしまい、更に親友にまで確認を取る。
その彼女達にしても、ハラオウンと同意のようで答えを返す。
「うん、私も良いよ」
「私も構わへんよ」
「私も」
「まぁ、仕方ないわね」
最後のバニングスだけ微妙な答えだが、俺の予想を超えて全員が承諾してしまった。

というか、バニングスも嫌ならハッキリ言えばいいのに。
しかし、これで俺は此処に居ざるを得なくなった。
事の発端である紅次は、この状況に甚く満足しているようだ。
「……なら、同席させてもらうか」
「うん、どうぞ」
こうなってはどうしようもない。
俺は諦めて、横にズレたハラオウンの隣に腰を下ろす。
ふぅ、いささかドタキャンがあったが、漸く昼飯が食えるな。
「それじゃ、自己紹介。私は2組の高町なのはです、宜しくね」
と、弁当箱を開けようとした時、ハラオウンとは逆側から声をかけられた。
そこには栗色の髪、左側に纏められた珍しい髪型の少女。
元気という言葉が当て嵌まる印象。
何故だろう、何処かで見た覚えがある気がした。
「じゃあ次は私やね。同じく2組の八神はやて、宜しゅうな」
次は髪留めを1つ着けた、ショートカットの茶髪少女。
流暢な関西弁がとても新鮮で、のほほんとした雰囲気がある。
「最後は私だね。同じく2組の月村すずか、宜しくね」

鮮やかで艶のある紫、ウェーブが掛かったロングヘアー。
親しみの中にも上品さが見える、いかにもお嬢様みたいな少女。
コイツもおぼろげながら、見覚えがある。
「俺は1組の結城蒼詩、宜しくな」
差し障りの無い自己紹介、第一印象は良くも悪くも無いだろう。
さぁ、自己紹介も済んだ。
どこぞのバカのせいで長くなったが、遂に空腹を満たす時間がやってきた。
止めていた手を再び動かして、弁当箱の蓋を開ける。
「綺麗……」
おい、何故中身を見るハラオウン。
今日の弁当は小型のハンバーグにキャベツと人参のこしょう炒め、肉じゃがとロールキャベツだ。
とは言っても、これ全部昨日のおかずなんだけどな。
あれだけのレースを繰り広げておきながら、中に全く被害が及んでいないのが不思議だ。
取り敢えず、それを幸運と思い1つ目に手を付ける。
「頂きます、と……んぐんぐ」
まずは野菜炒め。

先程までの激走で腹が減っても、野菜→肉→米という順で食べることで、胃の消化に良いとテレビで見た。

ハラオウン達は、談笑を交えながら各々の弁当に手を付けている。
続いては、ロールキャベツを……

「そういえば蒼詩君」

「ん？」

するとロールキャベツを分けようと格闘している俺に、隣に居た高町から話を振られた。
会話に混じろうとしない俺に、気を遣っているのだろうか？
あまり気にしなくても良いんだが……。

「少し前に、校門でぶつかったのを助けてくれたよね？」

「……」

意外としつこいロールキャベツを俺は口にまるごと入れながら思い起こす。
確か、ハラオウン達が気障先公（名前忘れた）に勧誘されてそいつをヒーヒー言わせた後だったかな。

どうどう、と言うと収まったという……

「俺が助けたのは高速で謝ってきて、どうどうと言ったら落ち着いた珍獣だけだが？」

「ち、珍獣！？　確かにあれはちょっとビックリしたからだけど、

その言い方は酷いよ〜！」

「今時気弱なサラリーマンでもあそこまではやらないって」

「へぇ〜、そんなことあったんだ」

それを聞いて、面白そうにハラオウンは相槌を打つ。

バニングスもそれを聞きたそうだったので、正直に事の詳細を俺の口から話す。

校門でぶつかった瞬間から、彼女を宥める所まで事細かに。

自分でも思ってる以上にそれを憶えていた為、終わりまで口は止まらなかった。

軽い冗談で脚色を加える度に高町に突っ込まれたが……

自分でも意外だと思った。

ハラオウンとバニングスは知り合いだったが、この3人とは殆ど初めてだ。

それでも普通に会話が成り立っている。

話し易い相手、ってのはこういうのを意味してるんだろうな。

「そういえば蒼詩君ってテニスの顧問と試合をしたんだよね？」

「フェイトちゃんとアリサちゃんから聞いたよ。ずっと打ち続けてたとか？」

「なんやえらい体力があるなぁ」
話の話題はいつの間にか昨日の試合になっていた。
ハラオウンとバニングスがどんな風に話したはわかんないけど、注目するとこ違くね？
掛け声がおかしいとか勝ち方がおかしいとツッコミよりも純粋な賞賛を送られても返答に困るんですけど。
「まぁ、俺はあの先公の無理矢理な勧誘にイラッとしただけだし」
「蒼詩君は部活に入らないの？」
「俺だってやる事の一つや二つあるんだ、部活は退屈だし」
「そういえば、知り合いの手伝いしてるんやったね」
俺の呟きに、八神が思い出したように続ける。
というか、何故知ってるんだコイツは……。
恐らく犯人であろう隣の奴をジト目で見遣る。
対する彼女は「アハハ」と渇いた笑いを発するだけ。
やれやれ、人のプライベートを何だと思ってんだ？
さすがにそこまでは言い過ぎだと思うけど。……まぁいいっか。
どうせ言っても意味は無さそうだ。
まだ食べかけの弁当に箸を進める。

「ふむ、さすが蒼詩、順応してるな。相手が聖祥五大女神でありながら、こうも堂々としているとは」

今まで全く、存在すら忘れていた紅次が俺に向けて嫌な笑みを浮かべる。

というか、さっきから思ったんだが……。

「何だその、五大女神とか言う厨二病くさい名前は……」

「厨二病くさいとは何だっ！？　貴様、それを知らんとはモグリか？」

さりげない疑問を投げると、なんかいきなり紅次が愕然とした表情になった。

モグリって、死語のような気が……。

依然として、この世のものとは思えないものを見るような目で、俺に視線を向ける。

「仕方あるまい。この俺が、貴様に『聖祥五大女神』について説明しよう！！」

「ちょ、ちょっとそれは……」

声高らかにそう宣言する紅次に、先程までずっと微笑んでいた月村が困った表情になった。

他の奴も似たような反応だが、どうかしたのか？

「聖祥五大女神とは、今から2年前、此処の付属小学校に在籍していた5人の美少女！！　に与えられた称号なのだ」

「……もぐもぐ、おっ、このミニハンバーグうめ～」

「……って、聞いているのか！？」

「あ～、聞いてる聞いてる。松田聖子が何だって？」

「そうだ、『赤いスィートピー』といった曲が俺は好きでな……って、違うっ！　『聖祥五大女神』についてだ！」

完全にノリツッコみです。本当にありがとうございました。

取り敢えず、コイツが美少女という部分だけ無駄に力強く伝えたということは分かった。

そのほかにもコイツから、いくつかの詳細を聞かされる。

曰く、非公式のファンクラブが存在する。

曰く、しかもそれには１００人以上が入会している。

そして何より……

「そしてその五大女神こそ、此処に居る5人の美少女！！　なのだ」

「ふ～ん」

その正体がハラオウン達だった。

だからか、コイツがこの5人に向けて何度かそのワードを口にしていたのは。
で、その五大女神はというと、紅次の説明を聞いて顔を真っ赤にしている。

まぁ、あそこまで神的存在のように言われれば、恥ずかしくもなるわな。

「どうだ？　これで聖祥五大女神について、理解出来ただろう？」

「いちいちご説明どうもありがとう。……女神ねぇ……」

説明を終えた紅次は、何故か誇らしげに俺に言い張る。
一方、俺が5人を適当に見渡すと、隣の高町が困ったような声を上げた。

「あはははは、困っちゃうよね」

「遠くから見てくる男子も居るし、ホント参っちゃうわよ」

彼女とバニングスの呟きを聞いて、心の底からそう思っているのが分かる。
確かにこの称号は、自分達の与り知らぬ所で付けられたものだ。
……他人から、勝手に、神格化、されて、も、本人から、すれ、ば、いい迷惑、、、かもしれ、ない。
けれど……。

「ブッ、あはははははっ！」

俺はたまらず大笑いをした。

青空に響きそうなほど、大きく、鮮やかに。

それを耳にした5人は不思議そうな目で見てくる。

一瞬、悪い気がしたが、一度笑い出した以上中々止まらない。

「五大女神って……四天王みたいなゲームじゃあるまいし、ククク
ッ、流石にネーミングセンスに問題ありまくりだろｗｗｗ、ゴホッ、
ゴホッ！」

「蒼詩君、笑いすぎやで」

リアルな関西人のツッコミにようやく落ち着いてくる。

あー、腹筋が崩壊しそうだ。笑い死ぬってこういうことなのか。

「誰がそんな胡散臭い総称名付けたが知らないが、そんな気にする
ほどでもないだろ」

そのファンクラブの奴らがこいつこいつらを女神と崇めようが、そ
んなもの気にする必要はない。

こいつらの気分を害してる時点で、ファンとしては失格だろうし。

「まぁ要するに、そこまで気に病むほどでもないし、普段通りにす
れば良いって話だ」

だって、三バカカラスの俺達も先生から説教受けてもやめる気はな

かったし。

聞き手側になっている5人は、珍獣を見るような目で俺を見据えている。

おいおい、俺はパンダか何かか？

「何だ、まるで今までにないものを見るような目は」

5対の瞳は、未だ俺から離れる事はない。

うわー、すっげーボケにくい。

この無言の空間をどうしろと？

「……」

こう改めて見てみると、女神とは言えないこど、確かに美少女っていう点では間違いでは無いな。

いや、それを今知ってどうしろと？

「蒼詩って……」

暫く無言の間、漸く此処側に戻ってきたハラオウンが口を開いた。

その表情には、フワッとした柔らかな笑みが浮かんでいる。

そこらの野郎共なら一撃でノックアウトだろう。

それは文字通りの女神のような表情で……。

「やっぱり、優しいんだね」

その言葉に一瞬、思考が止まる。

今、心を巡らすこの感覚は一種の動揺なのかはわからない。

でも、そんな台詞を言われるのは正直思わなかった。

「ハラオウン……」

俺は彼女をしばし見つめ、

「精神科に行ってこい」

フェイト「え、……えっ？」

軽く仕返ししてやった。

「一体お前はどんな目してんだ？　ついでに眼科にも行ってこい。保険はおりないけどな！」

「ちょっ、それ酷いよっ！　私変な事言った！？」

ハラオウンがオロオロとしている姿を楽しみながら、俺達は談笑した。

優しい？　俺が？

先程ハラオウンが言った言葉が何気なく頭に残る。

その言葉は本当に優しい奴に向けて言うべきだ。

優しいとか、俺には似合わないさ。

こんな俺にはな……。

第五話　五大聖祥女神　後編（後書き）

一人称って難しい。井上堅二さんのバカテスのようなコメディーを書きたいけど中々できない。

第六話　望む日常（前書き）

今回は早めに投稿することができました。

明日は中間テストなんですけどね・・・（涙）

第六話　望む日常

地球の反対側にいる人間を、日本にいる俺達は見る事は出来ない。
しかし、互いに離れているわけじゃない。
どんなに遠くても、どんな逆境の地にいようとも。
空が世界を覆っているように、俺達は無意識に繋がっている。

今は3時間目の授業中。
教科は、我等が担任の先生が担当する数学。

黒板には正の数と負の数による、足し引きの計算の羅列が並べられている。
それを眺めながらノートに写していると、視界の隅で金色の何かが動いているのが分かった。

何か、というとハラオウンの頭なんだが……。

まぁ普通に見れば、別段変わった所は無い。
なんだけど、どうも違和感を感じなくも無いんだよなぁ。

キ〜ンコ〜ンカ〜ンコ〜ン

「はい、じゃあ今日はここまで」

チャイムの音で先生は手を止めて、授業を締める。
授業が終わった開放感か、突如教室内がざわつき始めた。
まぁ俺にはそんな事どうでもいいので、机に置いてある教科書やらノートやらを中に仕舞う。

「よしっ」

その唐突な声に反応すると、ハラオウンが鞄を持って立ち上がりだした。

「急用があるから、私帰るね」

帰り支度を整えた彼女は、こっちに挨拶するとそのまま出口に向かっていく。
教室から出ていく際、バニングスに何か告げていたのを、俺は黙って見送っていた。

なんだ、早退か？

急用とかなんとか言ってたから気分が悪いってわけじゃないな。
にしても、早退するほどの急用って何だ？

しかも、中学生で。

そんなこと考えるがやっぱり気にする事でもないと、思考を止めた。

４時間目も終わり、昼休みに突入する。
ある者は教室内で弁当を広げ、ある者は購買や食堂に走っていく。
さて俺も、と鞄から『とある俺の手作り弁当』を取り出した時、どこぞの誰かが俺に近付いてきた。
そちらに向くと、最近はもう見慣れてしまった奴が立っている。

「バニングスか、どうした？」

「お昼でもどう？　って思ったんだけど……」

昼飯の誘いか。
しかし何だろうか、バニングスの表情が硬い。
頬も微かだが赤いし、恥ずかしいなら無理しなきゃいいのに。

「で、どうするの蒼詩？」

「あぁ、行かせてもらう」

目の前の少女は、急かすように聞いてくる。
俺としても別に断る必要もないので、その提案を受けた。
にしても珍しいな、バニングスが誘ってくるなんて。

いつもはハラオウンから誘ってくるので、何だか新鮮味がある。
まぁそのハラオウンが居ないから、コイツが誘ってきたのだろう。
彼女の後を追うように、俺も弁当箱を持って立ち上がった。

「あっ、アリサちゃん」

屋上には月村が待っていた。
バニングスを見つけた彼女は、小さく手を振って答える。
それにしても、今日は月村1人か……。
高町と八神はどうしたのだろうか？
まぁ、俺には関係無いか。
先に座っている彼女の許に近づき、俺も挨拶する。

「よう、月村」

「蒼詩君、こんにちは」

ニコッと笑顔で返してくる月村。
その仕種一つ一つにも、気品とかそういうのが感じられる。
生粋のお嬢様なだけはあるな、隣のバニングスも同じ筈だが……。

「紅次君は一緒じゃないの？」

「本人は別にいいらしい。『毎度毎度、五大女神と一緒に昼飯なんて……』とかほざいていたが……」

「いちいちそんなこと気にしなくても……」

月村の疑問とバニングスの言葉には尤もだ。
一回昼飯をしたってのに、それ以降、ハラオウン達に昼飯を誘われても行こうとはしない。
しかも、一緒にいた翠でさえ紅次に止められる始末。

何故、俺だけあいつらと昼飯をしないといけないんだ？
新手の嫌がらせ……とは言いにくいな。
普通なら俺と紅次の立場が逆になるはずだ。
俺は気にしていないとはいえ、全校に轟かす『五大女神』と一緒に昼飯をとるのは嬉しいものだろう。

となると、何か紅次は企んでいるな。

俺が一人であいつらと昼飯をとるここで何かが起こる　かもしれない。
……考え過ぎか？

「じゃあ、お昼にしよっか？」

「そうね」

「良し、食うか」

ってな訳で、早速昼飯タイムが始まった。

今日の弁当はポテトサラダに、卵焼き、ひじきの煮物、ソーセージに唐揚げだ。
ちょっと落ち着いた感じに仕上がった。
まず始めに、鮮やかに焼けている卵焼きに手をつける。
ふむ、是非もなし。

それにしても、月村とバニングスの弁当は良い物だな。
月村の方は和食に近いけど、栄養面を考えており、一部洋食を取り入れている。
バニングスの方はサンドイッチだが、三角のサンドイッチやロールパンもあり、しかも具を挟んだだけの簡素なものではない。
きちんと食べる人の事を、つまり2人の事を考えて作られたものだと良く分かる。

……で、何が言いたいかって？

ようするに、食べる物の貧富差が激しいってことだよ！
別に羨ましいわけじゃないからな！

……完全な嫉妬です。本当にありがとうございました。

「どうかしたの？」

いつの間にか月村がこっちを見ていた。
しまった、と思った頃にはもう遅い。
バニングスまでこっちを不審な目で見てくる。

その視線には「何か変な事考えてるんじゃないでしょうね～」みたいなものが込められていた。
まずい、返答次第で俺の顔が陥没しかねない。
どうにか話を変えようと、別の話題を引っ張る。

「いや……高町と八神はどうしたのかと思ってな」

今に気付いたが、高町と八神がここに来る様子は全くない。

早退したハラオウンも気になる所だが。
俺の言葉に2人は顔を見合わせている。
表情にも、微妙な焦りを感じるが、どうしたのだろうか？
「ちょっとした家の事情らしいよ」
「そ、そうそう、だから偶にすぐ帰っちゃうのよ」
「ハラオウンもか？」
「うん、そうだよ」
ふぅん、家の事情ね……。
偶に、って事は何度かあるって事だよな。
どんな用事なのか気にならない訳ではないが、他者の事情に首を突っ込むつもりは無い。
相手は巻き込めども、相手の素性は語るな、と三バカカラスのモットーを思い出す。
まぁそんなだから、2人共落ち着け。
そこまで態度がおかしいと、嫌でも勘繰ってしまう。
「それじゃ、その用事とやらで部活とかに入らないのか。あの3人は」
「うん。行く日が不確定らしいから、そういうのには所属出来ないし」

なるほど、そういう事か。
高町と八神はわからないが、ハラオウンは自己紹介の時に運動が得意と言ってたんだから運動系の部活に入れば、かなり良い成績を残せるかもな。

それでも入らないのは、そういった事情があるから。
そっちを優先させるって事は、それだけ自分にとってそれが重要なのだろう。

「なら、2人はどうして部活に入らないんだ？」

俺のふとした疑問。
あの3人が入らないならコイツら2人はどうなのだろう。
少なくともバニングスはテニス勧誘を断ったことになってるのだからそれなりの理由があるのだろう。

「私達は、習い事とかあるから」

「習い事？」

「ヴァイオリンよ」

はぁ……なんかお嬢様ってなると、そういった教養も必要なんだな。
これは俺の偏見かもしれないが、一般的な令嬢が受ける稽古事には必ずといって良いほどヴァイオリンが思い浮かぶ。
そして目の前の2人もその例に漏れていないようだ。
しかしそういった高貴な家柄が、ヴァイオリン等の楽器を嗜むのも分かる気がする。
楽器ってのは、それを扱う奏者の人となりを表すものだ。

ヴァイオリンも、それを弾く人の心を音で表現する。
心が綺麗な人なら美しい音色を、その逆も然り。
特に大衆に見せるものとなると、その部分だけで自分を判断される事だってある。

つまり奏者としての腕が良ければ良いほど、周囲からの評価は高くなるのだ。
実際は分からないが、社長令嬢である2人も社交場に顔を出すこともあるだろう。
その時、ヴァイオリンの実力を評価されるようなら、自分にとって何よりもプラスされる。
何か上辺だけの探り合いに見えて、習わされてる子供が不憫に思う。
そういった事を含めて、この2人はどうなのだろうか？

「それって、親から言われてやってるのか？」

「う～ん……最初はそうだったと思う」

俺の質問に、月村は多少逡巡するも、すぐに答えた。
やっぱりどの金持ちの家でも、そういった習い事を強制するもんなんだな。
でも最初は、って言うんなら今は違うって事か。

「アタシも最初はそうだったわ。でも、今は楽しいって思えるし」

「そうだよね。私も同じ」

顔を見合わせながら笑う2人を見て、納得が行った。
バニングスも月村も、今の自分が良いと思える事を精一杯している

のだろう。
ヴァイオリンの稽古も、強制されたからと言って投げ出したりせず、
自分にとって良い方向に持っていこうとしてる。
しかも稽古を好きになれるってのは、そうは無い。

「すげぇな……」

「「えっ？」」

ふと、口から零れた一言。
2人からすれば意外な一言のようで、目が点になっている。

「いや、そうやって自分なりに物事を良い方向に持っていけるってのは、簡単には出来ないからな」

本当に同年代なのかと疑いたくなるほど、2人は大人だった。
俺には到底出来ない領域。

「それが出来てる2人は、やっぱスゲーなと思って……」

俺は無意識に空を仰ぐ。
今過ごしているこの生活に何の不満もない。
これ以上変わる事もないし、する必要もない。
どこぞの老人達のように何らかの趣味を見つけたりして、余命を過ごすが、俺にはそんなものすら目に向かない

それでもさらに高みを目指す2人が眩しく見えた。
そんな言葉をいった途端、さっきから2人の反応がない。
不思議に思って視線を戻すと、2人共何だか顔が赤い。

「べっ、別に、煽てたって何もでないからね！！」

「あはは、アリサちゃん顔真っ赤だよ」

「ぐっ、……すずかだって同じようなもんじゃない」

「流石に、こうもハッキリ言われると恥ずかしいよ」

……あぁ、そういう事。

此処まで大きな反応されれば、嫌でもどうしたのか分かってしまう。

まぁ、威張らないだけでもたいしたもんだ。

「全く、アンタも変な事言わないでよね」

「別に率直な事を言っただけでしょうに」

「でもあれは不意打ちだよ」

「あ～、はいはい、俺が悪かったよ、悪ぅございました」

バニングスと月村が冷静になるのに、1分程の時間を要した。

どうでもいいけど、何で最終的に俺が謝らないといけないんだ？

理不尽だろ、明らかに……。

既に本調子に戻りつつある2人に、俺は妥協して謝罪を述べる。
俺って、女難の相でも出てるのか？

「でも、私達がこうしているのも、なのはちゃん達のお陰なんだよ」

「そうよね、アタシ達も3人に負けられない！　って気持ちがあったし」

「あの3人も……もしかして、家の事情ってやつか？」

2人の突然の告白に、自然と俺は聞き返していた。

「そうだよ。3人共、私達以上に頑張っているから」

「何をやっているのかは言えないけど、それでも人に誇れるものだって事は間違い無いわ」

「ふ～ん」

2人の言葉からは、この場に居ない3人をどれだけ想っているか分かるものだった。
親友同士で尊敬し合い、互いに高めていく。
どんだけ凄い奴らなんだ、こいつらは……。
4年来の付き合いだって言うけど、その分の絆の深さを垣間見た気がした。

第六話　望む日常（後書き）

執筆用ＢＧＭを探してるんだけど、なかなか見つからない・・・。

第七話　紡いだ繋がり　前編（前書き）

なのはＭｏｖｉｅをＴＳＵＴＡＹＡで借りて見てみました。アニメでは一期だけ見ていないので詳しい内容はよく知らないけど、感動したよ、しましたよ！
映画で見ても感動してしまう。これだからなのははやめられない！

第七話　紡いだ繋がり　前編

日曜日、それは世間一般では休日と決められている。
１週間の疲れを、その日を使って癒す為の時間。
ある者は何処かへ出掛けたり、ある者は家で静かに過ごしてたりと、休日の過ごし方は千差万別。

そして俺、結城蒼詩はというと、海鳴市のとある土手にまでやってきていた。
何故かと言うと……。

「翔太！！　１人で突っ走るな！！」

翠屋ＪＦＣの試合の応援に来ていたからだったりする。
このチームには小学生である翔太と、更に一つ下の竜也がお世話になっている。

ちなみにこの２人は俺のご近所さんのガキンチョ達だ。
だから俺は、暇な休日はこうして応援に来たり、雑務と手伝ったりしているのだ。
今は選手用のベンチの横に立ちながら、フィールドで展開されているプレーに叱咤激励している最中。
まぁ、ぶっちゃけて言うと、遊び相手の紅次と翠がいないからなんだけど。

あぁ翔太の奴、挟まれてるぞ。
もっとパスを回していけよ。

「やはり、翔太は突っ走ってしまうね」

「お恥ずかしい限りです」

ベンチで腕組みしながら試合展開を見ている男性が、俺の方に話し掛けてきた。
言ってる事が分かるだけに、何も言い返せず、そんな言葉を言った。

その答えに渇いた笑いを浮かべる男性
短く切られた黒髪、マスターほどではないがガッシリとした身体に青いジャージを着ている。
キリッとした表情には、大人としての渋さを感じる。

この人は高町士郎さん。
翠屋ＪＦＣのコーチ兼オーナーをやっている人である。
……高町って、最近聞いた事があるような無いような？

「今日の桜台ＪＦＣはプレーに気合いが入ってるね」

「えぇ、去年までのレギュラー勢は卒業してしまいましたからね。今回が初めての出場って子も居るんでしょう」

隣の士郎さんの呟きに、自分の思っていた事を述べる。
選手にとって試合ってのは、かなり重要な舞台だ。
練習試合といっても、普段の努力が目に見えて現れる所。
気合いが入るのも、無理は無いだろう。

「まぁそれはこっちも同じなんですけどね」

「ウチの方は色々と出していて、試合慣れしてる子が多いからね」

翠屋ＪＦＣでは、練習試合では色々な選手を使っている。
レギュラーに限らず、補欠の選手も試合に出るチャンスが結構あるのだ。
選手にとって、とても良いチームなのは言うまでも無い。

「これも、蒼詩君の助言のお陰だ」

「いえ、紅次も同じ事考えていましたし……」

士郎さんの言う通り、その方針を進言したのは、チームに所属すらしていない俺だった。
試合の度にレギュラーしか出場出来ないのは、あまりに不憫だと思ったから。
士郎さんに相談したのが、去年の話。

選手でもない俺の意見を、士郎さんは真摯に答えてくれた。
理由は他にもあるだろうけど。
それからの練習試合に限っては、色んな選手を起用するようになったのだ。

そのお陰で、今の試合は『１（翠屋）－０（桜台）』とこちらの優位で進んでいる。
やっぱり試合慣れしてるのとしていないでは、選手の動きに大きく影響してるな。
タイマーを見たら、前半が終わろうとしていた。

「そろそろハーフタイムも近付いてきましたね」

「そうだね、飲み物は？」

士郎さんがベンチに居るマネージャーっ子に聞く。
それを聞いて、彼女は選手達用の大きな水筒の中身を確認しだした。
「ハーフタイムは大丈夫ですけど、試合後は残らないと思います」
「そうか。どうしようかな」
どうやら、選手達の飲み物が少ないようだ。
誰か、試合前からガバガバ飲んでいたんじゃないだろうな？
サッカーのような長時間動きっぱなしのスポーツで、水分を補給出来ないのは結構きつい。
今日は天気も良いから、下手すりゃ水分不足で倒れる奴も出るかもしれない。
士郎さんはそれを危惧してるのだろう。
……やっぱり、こういう時の為の俺だよな。
「俺が買ってきますよ」
「良いのかい？　蒼詩君」
「えぇ、それくらいお安い御用です」
俺が出来るのはこれくらいだからな。
少しだけ考えてると、士郎さんは財布をそのまま俺に差し出してきた。
「それじゃ頼むよ」
「分かりました。適当に見繕ってきます」

「それと、何か好きな物を買ってきて良いよ」
「わぁーい、じゃあ俺、ポッキーにするー……って、俺はガキか！？」
などと、ノリツッコミをした後、クーラーボックスを掴んでその場から立ち去る。
近くにあるコンビニでも、片道およそ１５分。
今は空のクーラーボックスは軽いので、帰りを考えると急いだほうがいいな。
いつものように軽い足取りで目的地に向かって走った。

ア〇エリアスを３本を買った。以外と重いな。
とっとと急ぎたいところだが、走っても重たい荷物のせいで走りにくいし、無駄に疲れる。
それを危惧してからは、自然と足並みがゆっくりになっている。
買い出しに出てから、既に３０分は過ぎていた。
ハーフタイムも終わり、後半も始まっているだろう。
もう少しゆっくりしても問題無いだろうけど、出来るだけ早めに着く事に越した事は無い。
「もう着いちゃったけどな」
土手を見下ろせば、試合を肉眼で視認出来る場所にまで来ていた。
ふむ、流石に後半になると、選手の動きに疲れが見えるな。

今後の課題は、基礎的な体力の底上げってところか。

此処から離れた時と同じく、士郎さんはベンチに座っていた。
その目は真剣に試合を見ていて、声をかけ辛い。
だが、俺は気にすることなく彼の元へ……。

足音で気付くのが難しい距離で士郎は俺の存在に気付いたようだ。

「ありがとう」

「一応氷も買ってきました」

肩にかけていた物を見せると、「お疲れ様」と労いの言葉を掛けてくれた。
とりあえず、中の物をいつでも飲めるように準備しておこう。
選手用の水筒の蓋を開けて、クーラーボックスに入ってる飲料水と氷を移していく。

「良し、こんなもんか」

満杯になったのを確認すると、蓋をする。
これで飲み物の準備は大丈夫だな。
士郎さんの許に戻ってそれを伝えると、やっぱりお礼を言われた。
わざわざをお礼を言う必要はないと思うけどな……。

と思いながら、グラウンドで走り回る選手達に改めて視線を向ける。

「おっ、翔太の奴、ナイスポジションじゃないか」

仲間が中央を突破していくのを見ながら、翔太が右サイドからゴー

ル前へ走っている。
しかも相手チームは中央ばかりに気を取られていて、翔太にはマークが付いていない
彼もノーマークの翔太に気付いたのか、自分に意識を引き付けつつ、マークの隙間を狙ってパスを出す。

その先に居たのは、相手に気付かれぬままゴール前まで来ていた翔太だった。
足でトラップすると、ゴール目掛けて一気に駆け抜ける。
キーパーはシュートを撃たせない為に前に出てきた。

「近付かれるとまずいぞ」

キーパーに近付かれれば、シュートの軌道が限定されてしまう。
最悪、密着されればボールを奪われかねない。
お互いの距離はたったの5メートルだ。

どうする？　翔太。

そしてキーパーが翔太のボールに飛び掛かった。

ふむ、万事休すか……。

「おっ？」

しかし翔太は、キーパーが飛び掛かってきた時、それに合わせてボールの下部を蹴り上げた。
瞬間、ボールはフワッと浮き上がり、飛び掛かったキーパーの頭上を越える。
その動きに倣って翔太も跳び上がり、そのまま一気にボールを蹴り

飛ばした。
キーパーという守護者の居ないゴールに、そのボールの前に立ちはだかるモノは何も無い。
翔太の鋭いシュートは、ゴールネットに突き刺さった。
「よしっ」
その光景に、俺は知らぬ間に握り拳を作っていた。
声は張らずに、それでも内心の喜びは計り知れない。
他人の手柄であっても、知り合いの子が試合でゴールを決めたんだ。
喜ばない筈は無い。
ピーーー！！
同時に、試合終了のホイッスルがグラウンド上に鳴り響いた。
「試合終了！！　２－０で、翠屋ＪＦＣの勝利！！」
『やったーーー！！』
我等が翠屋ＪＦＣの面々は、弾けるような笑顔で勝利の喜びを噛み締める。
そこかしこから「やったー！！　やったー！！」と声が上がっている。
うん、今日も良い試合だったな。
今年度の翠屋ＪＦＣの初試合は、見事な勝利で締め括られた。

「おーし皆、今日も良く頑張ったな。練習以上の良い出来だった」

『はい！！』

選手を整列させた士郎さんは、皆の目の前に立って労いの言葉を掛けている。
勝利が嬉しかったのか、声の調子も右肩上がりだ。
見てるこっちも思わず笑みを浮かべてしまう。
すると士郎さんが、俺に目配せをしてきた。

……まぁ、良いか。

肩を竦めながらもそれに促され、俺も皆の前に立つ。

「士郎さんも言ったが、皆良く頑張った。試合全体を通して良い動きもしていたし、今までの練習の成果がしっかりと表れていたと思う」

『はい！！』

一応顔見知りではあるけど、ＯＢでもない俺の言葉にきちんと答えてくれる皆。

本当に、良い子達だ。

「よーし、勝ったお祝いに、飯でも食いに行くか！！」

『やったー！！』

選手の皆も士郎さんも、テンション最高潮だ。
もし、ここに紅次と翠がいたらとんでもないことになりそうだな。
そのまま皆で、士郎さんが店長を勤める喫茶店『翠屋』に向かう事になった。

「えぇっと、翠屋はと……」

翠屋を目指して、通い慣れた道を通る。
この海鳴の町は、別段入り組んだ造りにはなっていない。
数回通れば、普通に憶えられる町だ。

まぁ、どうして俺が1人で翠屋を目指しているのかというと、きちんとした理由がある。
試合の後、ＪＦＣの皆が翠屋に向かう中、俺と士郎さんは聖祥の付属小学校の方に行って、道具を片付けていたのだ。
翠屋ＪＦＣは、この学校の中に必要な道具を保管している。

しかし、翠屋の店長であり、ＪＦＣのコーチ兼オーナーである士郎さんを、いつまでも引き止める訳にはいかない。
そこで俺がこの場に残り、士郎さんを先に行かせたのだ。
あの人が居ないと、いつまで経っても昼飯は始まらないからな。
運動後の子供達にそれはキツイだろう。

最後まで渋っていた士郎さんだが、そう言うと何とか納得してくれて、倉庫の鍵を俺に渡して先に翠屋に向かった。
という経緯で、俺は1人なのだ。

「なんか、虚しいな……」

ボケを向けるべき相手もいないし、心がうさぎのように寂しさで死んじゃいそうだ。
翠なら喜びそうだが……

とか何とか考えている内に、いつの間にか翠屋が目の前に迫っていた。
派手さの無い落ち着いた外観、胡蝶の夢とは違う何かを引き付ける魅力がある。
さて早速入ろうかと思い、『貸切中』と書かれた札が掛かったドアの取っ手を握ろうとした。

……ふと、何かを感じて、手を止める。

その行為は何か危険を察知したかような、警告音が頭に響き知らせるものだった。
無意識にそれを行ってしまい、疑問に思ってしまう。

「……？　おかしいな、気のせいだと思うが」

流石にここ翠屋に限ってそれはないと思いたい。
とりあえずこのまま考えても埒があかん。
先程の事を気にすることなく、ドアに手を掛ける。

「士郎さん、ただいま到着しました」

翠屋、喫茶店でありながら洋菓子にも力を注いでいる、海鳴では人気のお店。
内装は表と変わらない、シンプルなデザイン。
しかし店に入った瞬間に分かる、穏やかな空間
居ると落ち着く、安らぎの場所。

そこのカウンター席の所に、店長である士郎さんが黒いエプロンを着けた姿で居た。
俺の声に反応してこちらを見ると、「お疲れ様」と労って手招きする。
5人程座っているカウンター席に。

「……」

何だろうか。
最近、5人という人数で何かあったよ。
しかも、紫、金、茶、金、栗という色合いを見て、デジャヴを感じずにはいられない。
後ろ姿から予想すると女性、しかも少女だ。

……うん、気のせいだ。
そう、気にしちゃいけないんだな、きっと……。
そう自分で思い込んで、士郎さんが勧めるカウンター席に向かう。

栗色の髪、サイドポニーの髪型。
何処かで見た事があったのは気のせいだろう、という少女の横に。
大丈夫、それは俺の気のせいだ。

俺には日本語で『新型』な能力は備えてないから。

「ちょっと横、失礼」

「あっ、はい」

そうその声が何処かで聞いた事がある筈がない。
きっと横を見れば、見た事も無い人が座っているに違いない。
そう、新たな出会いが生まれる筈だ。
切実にそう願って、俺は声の方向へ向く。

「「あっ……」」

重なる声、シンクロする心、ぶつかる視線。

「蒼詩君？」

此処に来て漸く、先程の予感が的中した。
……ジーザス。
神よ、俺は　何かしましたか？
目の前に居る見知った少女を見て、そう思わずにはいられなかった。
とりあえず……。

「いえいえ、人違いですよお嬢さん。決して、聖祥中学校一年一組、三バカカラスの一人世界を混沌に満たす国民的人気マスコット男、結城蒼詩ではありませんよ」

「蒼詩君でしょ！？　いろいろと脚色入ってるけど！？」

適当にごまかそうとしたら、即効でばれた、なってこったい。

第七話　紡いだ繋がり　前編（後書き）

後編へ続きます。

第八話　紡いだ繋がり　後編（前書き）

後編、始まります。

第八話　紡いだ繋がり　後編

士郎さん、性は『高町』
どこかで聞いた事はあったんだ、『高町』って聞いて何かを感じたのも確かだ。
しかし失念していた。
俺の横に居る少女もまた、『高町』という性の持ち主だと言う事に……。

「ははははっ、まさかなのはと知り合っていたなんてね」

はい、と8等分されたピザをテーブルに置いてくれる士郎さん。
俺が来てすぐに食べられるように、既に作っていてくれたらしい。
士郎さんの心遣いが、とても身に染みる。
やっぱり、此処の料理はいつ見ても美味そうだな。

事実、美味いんだけど。

「私も驚いたよ。まさか蒼詩君がお父さんと知り合いだったなんて」

先程の士郎さんの言葉に、隣の少女はそう答えた。
高町なのは、ハラオウンを経由して知り合った少女。
いつも元気で笑顔の絶えない、まるで一面に咲き誇る菜の花のように。
駄洒落じゃないよ？

「本当だよね、私もビックリしちゃった」

「俺はお前達が居る事自体にビックリだけど」

更にその横には、クラスメートで高町達と知り合うきっかけになった少女、フェイト・T・ハラオウン。
高町とは対照的で大人しい性格、だが不思議と釣り合っている感じだ。
とりあえず、彼女の言葉に皮肉で返すが、笑って誤魔化された。なんか悔しい。

「そういえば蒼詩君、聖祥に通うって言ってたからなぁ……」

「えぇ、面と向かって言いましたよ。3月辺りに……」

カウンターに居る店長は、1ヶ月前の事を思い出している。
そういえば、その時何か言われた覚えがあった。

何だったけ？

「確かその時、『娘に会ったら宜しく』と言った覚えがあったな」

「そ、そんな事言ってたの？　お父さん」

「すいません、すっかり忘れてました」

「ひ、酷いよー」

そうそう、そんな事を言われてたのを今思い出した。
本心を呟いた、何故か高町に非難されたが。

「しかし、仲良くしてくれているようだね」

「ただの知り合いですよ」

「それはちょう酷くあらへん？」

正直に答えたら、今度は八神に。
いやいや、俺達の関係を知り合い以外でどう表せってんだよ？
他の奴らも納得いかなそうな顔してるし。
お前達は俺は何を期待してるんだ？

「そこで友達って言わないのが、いかにも蒼詩君らしいな」

「知り合って1週間程度で友達って、そこまで友情って軽いものでしたっけ？」

少なくとも俺は思わない。
友達ってのは、互いに絆が生まれて初めてなるものだ。
ちょくちょく会ってるからって友達じゃ、簡単に『全人類友達の輪』が完成しそうだ。
まぁ世界の在り方としては一番の理想なのかもしれないが、実現は限りなく不可能だろう。
人間は争う生き物なのだから。

……フッ、つい哲学になっちまったぜ。

「それより蒼詩君、それは早めに食べた方が良いよ」

「話し掛けてきたあんたらが言うことか？　言わずもがな頂くけど」

「アンタねぇ……」

綺麗に切り分けられたピザを1つ手に取ると、バニングスの表情に怒りが滲み出していた。
いや、事実でしょ？
まぁ言っても賛同してくれないだろう、コイツの性格じゃ。
ん？　まてよ、バニングスって……。
「デビットの娘さんにここまで言えるなんて、やっぱり君は面白いな」
「デビットさんの娘って、マジっすか？」
「あぁ、マジもマジ。大マジだよ」
道理で、名前を知った時に聞き覚えがあった訳だ。
長い間気になっていた疑問が、漸く晴れた。
「何アンタ、パパの事知ってるの？」
「あの人がＪＦＣの練習見に来る時は、色々話したりしてるぞ」
デビット・バニングスさん。
士郎さんの親友で、翠屋ＪＦＣに時々顔を出してくる人だ。
練習とか試合に限らず、色々と見ながら楽しんでくれている。
しかもたまに、メンバーに混じって練習する事もある。
俺も暇な時は大体来てるから、知らぬ間に顔見知りになった。
「蒼詩君はデビットに気に入られてるからね」

「あの人、面白いからな」
特に練習で試合にやる時は、よく張り合ったもんだ。
互いに本気になり過ぎて、実質1対1みたいになる時も多々あった。
思い出すと、自然に笑みが零れてくる。
「その時聞かなかったかい？　君と同い年の娘さんが居るって」
「綺麗さっぱり忘れてました」
「アンタねぇ～～っ！！」
文字に起こすと同じなのに、それに含まれる感情は格段にレベルアップ。
いやいや、俺は正直に言ったのに何故怒る？
他の4人はそのバニングスを見て、少々顔が引き攣っていた。
止めようぜ、友達だろう？
とりあえず俺は、食いかけだったピザの2つ目を口に放り込んだ。
ピザを食べ終えた俺に、今度はシュークリームが差し出された。
「さすがにこれ以上は悪いと思うんだけど」
「何、いつも頑張ってくれているお礼さ。遠慮しなくていいよ」
丁重にお断りする俺に、士郎さんは優しい顔で有無をいわさないようにそれを差し出してくる。

ぶっちゃけ、かなり欲しい。
此処のシュークリームは、翠屋の洋菓子の中でも特に人気のあるメニューだ。
フワッとした生地に上品な甘さを持つソレは、まさに菓子界の宝石箱や～。

作ったのは士郎さんの奥さんである、高町桃子さん。
１５歳の時からパティシエとして、フランスやイタリア等で修行を積んだその腕前は、まさしく超一流。
そんな人が作るシュークリームだ。
初めて食べたい俺は、すぐさま桃子さんのファンになった。

「もしかして、あまり好きじゃないの？　シュークリーム」

いつまでも手を出さない俺に、高町が心配するように尋ねてきた。
突然何を言うか、この小娘は。

「いつ俺が嫌いだと言った？　桃子さんの作るシュークリームなら朝昼晩食べても飽きないぜ！」

「あらあら、お褒めの言葉ありがとう。でも、ご飯はちゃんと食べてね」

と、店の厨房から、１人の女性が現れた。
士郎さんと同じ黒いエプロンを身につけるその姿は若々しく、二十代の女性と言われても全く違和感が無い。

しかしこの人は、なんと既婚の女性。
士郎さんの奥さんである、高町桃子さんだ。

穏やかな笑み湛えた桃子さんは、俺の席の前までやってくる。

「久しぶりね、蒼詩君」

「ご無沙汰しています」

桃子さんの挨拶に、礼儀正しく返す。
うん、本当に綺麗な人だ。
この姿で子供が居るとは、とてもじゃないが思えない。
恐るべし、不老一家。

「主人も言ったけど、本当に遠慮しなくて良いのよ」

「……そこまで言うなら、お言葉に甘えて」

断る理由がこれといってなかったので、早速シュークリームを一つ頂く。
いぃやぁは、うまぁい！
今まで何度か食べた事はあるが、それでもこう思わずにはいられない。
今なら口から光を放つことさえ出来そうだ。
そう表現するほど、俺は祝福に満ちている。

「どうかしら？」

「色々と感想を考えても、美味い以外何も出ません」

「うふふ、ありがとう」

この瞬間を慈しむように一口一口味わっていく。

毎日食えるわけじゃないから、目の前のシュークリームはとても高級品のように貴重に見えてくる。
食べるのは勿体ないというのはこういう事か。
そんな幸せに浸っていると、なんだか視線を感じる……。

「何だ？　いちいちお前等は人が食べている姿を見るのが趣味なのか？」

「いや、そういうわけじゃないけど、本当に美味しそうに食べてるなぁって」

何だそりゃ？

まるで面白い物を見るような目で俺を射抜く5対の瞳。
何だろう、デジャヴを感じる……。

「現に美味いからだろ？　それ以外何があるんだ？」

料理の内容をくどくど言うのはめんどくさい。
美味いなら美味いと飾ることなく言う方が嬉しいものだ。

「本当に、良いお客様ね」

「何も無い俺を褒めても、何も出て来ませんよ」

俺の下らない冗談に「あらまぁ」と、表情を変える事無く応える。

「それじゃ、1つ聞いても良いかしら？」

「ん？　別に……」

指に付いたクリームを舐め上げると、さらにもう一つシュークリームを口に運ぶ。
桃子さんの未だ絶えない笑顔を見て、また『何か』を感じとった。
店に入る前に感じたあの感覚。

「彼女は出来たの？」

「……」

桃子さんの言葉につい食を止めてしまう。
彼女って、あれですか、Ｇｉｒｌ　Ｆｒｉｅｎｄってやつですか？
……この俺に？

「何故いきなり薮から棒に？」

「だって、気になるじゃない」

いやいや、貴女が気にして何になるんすか？
未だ理解出来ないという顔をしている俺は肩を竦めながら答える。

「そんなおめでたい存在、居る訳ないだろ。ていうか、分かってて聞いてません？」

「あらあら、そんな事無いわよ」

嘘だっ！！

この屈託の無い笑みの裏側には、小悪魔が微笑んでるに違いない。
士郎さん、貴方の奥さんを止めてくれ。

視線で助けを求めると、気付かれないように小さく頷いてくれた。
流石、わかる大人は違う……
「居ないなら、なのはとかどうだい？」
「てめぇらグルかっ！？」
まさかの裏切り、俺を見捨てやがった！
いや、この人は“昔から”こうだったな。
つまり、期待した俺が馬鹿だったってことだ。
全く何の脈絡も無く会話に巻き込まれた高町は、慌てた様子で両親に詰め寄る。
「お、お父さん！？　お母さん！？」
「安心して、なのは。蒼詩君はとても良い子だから」
あれ？　俺ってこの二人に良い子扱いされてるよ？
俺、学校ではバカやってるのに。
というか、娘の意見は無視なんだな、この親。
絶対将来、強制お見合いとかされそうだな。
「蒼詩君、ウチのなのはでは不満なのかい？」
「こんなに可愛い娘は、貴方は欲しいと思わないの？」
「しかも俺の意見まで無視してるし」
親馬鹿が子供の話をされるとうざいこの上ない。

まぁ、この二人が娘を自慢したくなるのもわからないでもない。
確かに高町は可愛い、それは認めよう。
普通の男子なら一目惚れを超えて、キューピッドの矢がハートに突き刺さるどころか砕けてハートブレイクショットしてしまうだろう。
……意味がわからん。

「……はぁ、俺個人に対する質問に、高町を巻き込まないでくれ」
隣で真っ赤になってる高町が不憫だ。
無理矢理差し出されるのも嫌ってもんだ。
この答えは愚問的な台詞だったのだが……

「ふふふっ、嫌がりながらもなのはだけは守ってるのね。やっぱり蒼詩君は優しいわね」

「ユーノ君も同じだが、彼は少し強引さに欠けているしなぁ。その点、蒼詩君なら問題無いだろうね」

「ダメだこいつら、早く何とかしないと……」

一向に話が続くなぁ。
ていうかユーノって誰よ？
高町といいユーノといいお前らこの二人の話のネタにされて哀れだな。

「お前も苦労してんな。よしっ、高町、今日はとことん付き合うぞ！！　さぁ、どんどん食え！」

「なにその酒場みたいなノリ！？　ちょ、ちょっとそんなにシュークリームは食えないだけど！？」

なんだよ、人が食い物差し出して慰めてやってるのに。人のだけど。

「もしかして、なのはじゃなくて他の子が……」

「フェイトちゃん？　はやてちゃん？　アリサちゃん？　すずかちゃん？」

『！？』

「いつまでその話を引っ張るのだろうか？」

何故かこの二人の頭の中には『好きな人がいる』ということで決定しているらしい。

ていうか、推測範囲狭いな。

もろ店内にいる奴ら。

おまけに五大女神ていう全員だし。

まさにより取り見取り、これがハーレムか！！

数多の寵愛、渦巻く嫉妬、刃傷沙汰、誠氏ね。

……うん、調子に乗っちゃいけないよね。自重しよう。

それからも、いつまでも終わりの見えない闘いとなったのは言うまでもない。

あの人達は何で人を利用して色恋話をしたがるのだろうか？

女子高生じゃあるまいし。

「まぁ、俺を心配してくれてるのはバレバレなんだけどな」

人一倍お人よしの二人だ、そういった遺伝子をあの高町にも受け継いでいるのだろう。

ちなみに帰り際、高町が申し訳なさそうに謝ってきたが、一番哀れなのはお前だと思いたい。

『もし偶然知り合ったなら……』

ふと、記憶に蘇るあの日の言葉。

高町の両親に聖祥小学校に入学すると伝えた時、娘をよろしく頼むよ、言われたが。

『自分から干渉するつもりはないが、もし偶然知り合ったなら……』

考えてもいい、と。俺はそう言った。

「実際知り合っちまったけどな」

自嘲した笑みを浮かべて、小さいため息をつく。

いつもより騒がしくなりそうだなと思うながら、

ただ、平穏が続くようにと心でそう唱え続けていた。

第八話　紡いだ繋がり　後編（後書き）

友達の家で水樹奈々のライブＤＶＤを見てみたけど、ライブってこんなに盛り上がるものだったのか！？　いや、違う、水樹奈々だからこそ盛り上がるのだ。２０１０年夏に行ったライブＤＶＤを見たけど、実は昨日その友達達とオールナイトカラオケをした帰りだったから最後まで見る体力が無かった（涙）
次は体力ＭＡＸで水樹奈々を見る！

なのは以外にも真・恋姫†無双も書きたいなぁとは思うのですが、文才のない自分にはちょっと厳しいとです（涙）

とりあえず、感想（慰め）を下さい！

第九話　女神の報復　前編（前書き）

投稿です！　まだ超展開にはなりません、もうちょっとがほのぼのが続くと思います。

第九話　女神の報復　前編

聖祥五大女神。

この聖祥中学校で最も美しいと称される客観的かつ身勝手な名誉。

むしろ、名前が名前だけに人としてではなく、神として崇高しているように見えてくる。

俺は別にその名に興味があったわけじゃないが……

実はちょっとそれに因んだ事件に巻き込まれたのだ。

それはある日の出来事。特に用事の無かった俺は、さっさと帰路に向かう。

紅次や翠、ハラオウンやバニングスといったクラスメート達に挨拶を告げて教室を出ていくのが、最近の俺の日課みたいなものだ。

廊下に出ると2人を待っているであろう高町、八神、月村の3人に出会うのも、ここ最近はいつもの事。

彼女達に別れの挨拶を告げると、そのまま昇降口の下駄箱まで進んでいく。

軽快な足取りは、今の俺の心情を表しているようだ。

「今日は胡蝶の夢のシフトは無いから、自宅の畑でも耕すか……」
後、今後の対策として支柱も立てとかないと。
そんな何気ない下校風景。
変わらない、平穏な日常。

「……ん？」
のはずが、１階に続く階段を下りきる寸前で呆気なく崩される。
視界にいるソレ、いやソレ等によって。

「貴様、結城蒼詩だな？」
視線の先、１組の下駄箱の前に、十数人の男共が群れていた。
それぞれが向けてくる視線は、はっきり言って心地いいもんじゃない。
その中の先頭に立っている男が、今俺に問い掛けてきた。

「そうだけど、何か用か？」
この光景、明らかに異様だ。
何で下駄箱に複数の男子が居て、俺を呼び止めてんだ？
まさか、告白！？　おいおいおいおい、俺はそんな趣味はないぜ！？　まして複数なんて嫌なモテ方だな！？
……って、さすがにそれはないか。
少し間抜けな声で聞く俺に先頭の男はニヤリと嫌な笑みを浮かべて答えた。

「あぁ、あるぞ。お前だけは……」

背後に立つ男達の視線が、殺気を孕み始めた。
先程、楽観的な思考は消え失せ、無意識に警戒を強める。
嫌でもわかる。こいつらが抱き、俺に向けられる感情が。

『絶対に許せない！！』

そこに居た全員が声を揃えて言い放つ。
それは、俺に対する純粋な怒り。
全く以って理由が分からんが……。

「俺、何かしたか？」

「貴様、よくも抜け抜けとそのような事を言えたものだな」

「いや、お前ほどじゃねぇよ」

やけに芝居がかかっているが、何、ドッキリなのこれは？
こんな奴に恨みを買われるような事なんて……。
……候補は無数に挙げられるな、これは。
ノリのいい連中を集めて、仮面をつけたまま校内を走り回ったりとか。
ダンボールを用いて、どのくらい先生に気付かれずにやり過ごせるかとか。
その後、即座に先生に怒られたけど、それだけで恨みを買うのは逆恨みってやつだと思うけど。

「なんか心当たりがありすぎて、どれなのか、見当がつかん」

「まだわからんのか、自身が犯した大罪に……」

それはどのことを指しているんだ？
自覚はしているが、正直他人にそんなことを言われるのは初めてだったりする。
身振り手振りを交じる男の姿に、紅次の影がたぶる。

「まぁ良い。知らぬ事もまた罪であり、貴様にそれを教える謂われは無い」

心底呆れたような表情を浮かべて奴は答える。
何これ、ナゾナゾ？
怒られる理由もわからずそんなこと言われるのは理不尽極まりない。

そうしている間に、リーダーらしき男の周りの連中が動きを見せた。
全員がいつでも動ける態勢に変わっている。
マタドールに突撃をかます寸前の闘牛のように、荒い鼻息は離れたこっちにまで届く位だ。
あれ？　嫌な予感……。

「諸君等、行くのだ！！　五大女神達と昼食を共にし、あまつさえあんなフレンドリーに話す男に、お前達の手で制裁を加えるのだ！」

『おぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！』

御覧下さい、ヌーが移動を……なんてボケてる場合じゃなかった。
さっき先頭の男の言葉で漸く納得した。

ー聖祥五大女神ー

紅次から非公式ファンクラブがあるとは聞いていたが、実物を見る

のは初めてだ。
俺は一般的なファンクラブというものは知らないが、こいつらはその中でも信仰心が厚いといえる。

『うおぉぉぉぉぉぉぉ！！』

おっと、のんびりしている場合じゃなかった。
今もなお、向こうの集団は無駄に凄まじい気迫を携えてこっちに突進してくる。
俺は直ぐさま回れ右をして走りだした。

「ていうかそれ、ただの嫉妬じゃぁぁぁぁぁん！！」

追われる最大の理由ってそれなんじゃないのかと思いながら、俺VSファンクラブとのリアル鬼ごっこが始まった。

「待てーー！！」

「我等が敵ーー！！」

只今、廊下を疾走中。
理由は明確、俺があの5人と接しているから。
本当にただの嫉妬だよな。
別に五大女神だから仲良くしてるわけじゃないし、紅次が弁当を盗んだ事から始まったわけで。

まさかあいつ、これを知っててやったってのか！？
ありえる、十分ありえる。
流石は、三バカカラスの一人白神紅次だなぁwww。

……後でブッ潰す。

現在、俺を追跡している人数は十人弱、……少しだが数が減っている。
恐らくだが、他数人は途中で別れたのだろう。
挟み撃ちでもしようって寸法か？

「全く、今日はいつもより騒がしいな」

背後の群れを一瞥して、呆れたように悪態を吐く。
そりゃあ、俺達の日常は他の生徒よりちょっっっと歪んでるかもしれないけどさ。
生徒が複数の生徒に追われるのって、もはやイジメの類じゃね？

幸いなのは、相手の足が思ったよりも遅かった事だ。
始めの時から、俺と奴らの間隔は一定を保っている。
フッ、伊達に先生に追い掛けられてるわけじゃないぜ。

「まずは、この危険フェイズを回避しないとな」

よりによってダンボールが無いのは残念だ。
あれがあれば、逃げ切る自信あるのに……。
取り敢えず、この状況を打開する方法を考えるとしよう。

まず、後ろの奴らが本気で俺を追っているならば、真っ先に校門は押さえるだろう。
蹴散らせば終わりだが、下手に喧嘩沙汰になって教師達とハートフルコミュニケーションをとるのは勘弁したい。
となると、この面倒事を済ますには、俺が次に起こす行動で決まりそうだな。

逃げ出してから既に１０分、少しずつだが後ろの奴らのスピードが落ちてきた。

「今だっ……！」

頃合いを見て、一気に加速して階段を上る。
日常的に紅次達と校内を走り回ってんだ。
この程度で捕まっちゃあ、三バカカラスの名が泣くぜ。
階段を駆け上がったここは1年生の教室。
廊下を走りながら1組の教室に目を向けると……。

「って、お前等まだ居たのか？」

教室の前には今回の騒動の発端である5人が居た。
まぁ、5人自身には直接的に関係は無いけど。
帰り際に、用事があると言っていた気がしたが、まだ残っていたのか。
走ってきた事に少々驚いていた彼女達だが、俺の顔を見て何かを悟ったようだ。

「どうしたの？　何かあったみたいだけど」

「何かあったというより、現在進行形であっています」

「あんた、また何かやらかしたの？」

ハラオウンに向けた俺の応酬にバニングスは怪訝な顔で睨んでくる。
今回は俺が企てたわけじゃないけど、原因の一部は俺にあるんだよなぁ。

「なんというか、今回はちょっと物騒でな」

「はっ？」

バニングスが首を傾げているを無視して、教室内を見る。
アイツらが居てくれれば、この事態も早めに終わりそうだが……。
一種の望みを抱いて、我がクラス内を一瞥する。
だがそこには、数人の男女が残っているだけだった。

「まさかの居ないか……」

「何かあったんか？」

目的の奴らがいないとなると、この状況を自分でどうにかしないといけないということか……。
どうする、俺？
対処法を脳内で巡らせる俺を見て、八神が心配したように声をかけてきた。

「実はな……」

『居たぞーー！！』

仕方なく教えようとした口を開いた瞬間、少し離れた場所から複数人の叫びが聞こえた。
声の主は間違いなくあいつ等だ。
やっべっ、もう来たのか！？
ダダダッ、と地面をかみ砕く勢いで走ってくる男衆の登場に、目を丸くする5人。

どうやら待ってくれる時間は無いようだ。

「あばよっ！！」

「あっ、蒼詩君」

迫り来る敵を一瞥もせず、一言だけ言って背を向ける。
背中に月村が呼び掛けるが、それに応える余裕なんてありはしないのだ。
後ろから迫る嫉妬の渦に飲み込まれぬよう、改めて走りだした。
こうなりゃ、目指すは一つだ！！

―Ｏｕｔｓｉｄｅ―

「どうしたのかな？　蒼詩君」

「何か焦ってたけど」

蒼詩の突然の逃亡、少女は何が何やらといった感じだ。
そして彼の逃げた逆方向からは、男子が１０人弱こちらに向かって走ってくる。
彼等の目には、今さっき逃げ出した少年しか見ていない。
５人の横をそのまま走り去るだろうと思われたが、彼等は突然上履きの底でブレーキを掛けると、少女達の前で立ち止まった。
床から白い煙らしきものが発生しているが、それは気にしてはいけないだろう。

『えっ！？』

予想と反するその出来事に、彼女達は目を丸くするしかない。
全員が驚きの声を上げるが、彼等が次の行った行動で、更に驚く事となる。

『皆様、今日も一日お疲れ様です！！』

『ええっ！？』

まるで軍隊のような言葉の合唱に、完全に停止してしまう5人の思考回路。
しかし男共はそれを気に掛ける事も無く、再び少年を追い掛け始めた。
煙でも出るんじゃないかと思う程、彼等の足音は五月蝿い。
まるで機関銃を撃ち鳴らしているかのように……。

『……』

それを呆然と見守る5人の少女。
その視線は、自分達の友人と同じ方向に走っていく団体に向けられている。
まるで閑静な空間に置き去りにされた彼女達のその姿は、虚しいの一言につきるものだった。

「えぇっと……」

困ったような顔をして、1人の少女、高町なのはは声を発する。
しかし、今の状況に思考が追い付かないのか、二の次が告げない。

と言うよりも、あんな状況の後で何を言えというのだろうか。
あまりに衝撃的過ぎた光景、誰も何も言えない状態である事は明白だ。
するとそこに、2人の少年の声が聞こえた。
「おや、一体どうしたのだ？」
「何だがオレ達がいない間に随分騒がしかったね」
「えっ……」
振り返ると、そこには茶髪に“深紅の目”と少し黄色がかかった白髪に“翡翠の目”をもつ二人の少年がいた。
その正体は先程挙げた特徴に違わぬ名を持つ人物。
この学校に嵐を巻き起こす三バカカラスのこと、白神紅次と与那原翠だった。
未だに動揺気味な彼女達を見て、紅次は理解したかのように口元を歪める。
「なるほど、もしかすると非公式ファンクラブが蒼詩を潰しにきたか……」
「蒼ちゃんも運が悪いね～、よりによってファンクラブの過激派に目を付けられるなんて……ああぁっ！　でも、捕まったその先の展開を想像するとゾクゾクしてるよ！」
「それってどういう事！？」
それに反応したなのはは、紅次に詰め寄る。

先程の男達、そして非公式ファンクラブというキーワードが、彼女達にある予想を導き出した。
そして何より「潰す」等と言う不穏な単語が出てしまえば、声を発さずにはいられない。
紅次はふぅ、と一呼吸おくと、彼女達にこの騒動の詳細を語る。

「先程の男達、あれは聖祥五大女神の非公式ファンクラブ『異問審査会』人の不幸を蜜の味とするメンバーなんですよ」

思わず、5人は驚愕した。
そのネーミングセンスの悪さに。
名前からしてどこの宗教団体だとか。
人の不幸が蜜の味なんて人としてどうだろうか。
ツッコミどころなんて、いくらでも探せる。

そんなのが、自分達のファンクラブをやっていた事に、衝撃を隠せないでいる。
……というのは冗談だが、それでも彼女達が衝撃を受けているのは事実である。
自分達の知らぬ場所でファンクラブが設立されていた事は知っていたが、それが人に対して、このような武力行使を行うとは思っても見なかったのだから。

「そ、それで、それが蒼詩君を潰しに掛かった言うてたけど、どうしてそんな事するんや！？」

「おおよそ、アイツが貴女達と昼食を共にしたり、フレンドリーに話したりしてる事が原因だろう」

「た、たったそれだけの事でアイツが狙われるって言うの！？」

はやての質問の答えを返す紅次。
だがその答えは、理不尽極まりないものだった。
昼食を一緒にしたり、楽しく話したりするのは、彼女達にとっては至って普通の事。
それを追われる原因として認める事など、当然だが出来る筈が無い。

その答えを聞いたアリサは、半ば反射的に紅次に掴みかかる。
隣では翠が羨ましそうにしていたが、そんなの気にしてはいられない。
自分でもそんな事をしても意味が無いと知っている。
しかし、そうしなければならない程、彼女は憤りを感じていたのだ。
４人が彼女を止めようとするが、それでもアリサは掴む手を緩めない。

「確かにアイツはいつもふざけてるし、自分勝手だけど、それでも悪い奴じゃないのよ！！」

彼と出会って１ヶ月が過ぎた。
その中でアリサは、結城蒼詩という少年の良い所や悪い所を何度も見てきた。
最初はあまり好かなかったが、それでも今では少なからず好感が持てる少年だった。

そんな彼が自分達のファンクラブというよく分からない連中に狙われている。
一緒に昼食を食べて、一緒に話していた、それだけの理由で。
いつも真っ直ぐな彼女に、そんな馬鹿げた事を納得出来る筈が無かった。

「その気持ちは分からなくもない。しかし、既に奴らは動いているのだ」

掴み掛かられながらも、紅次はアリサを真っ直ぐに見返している。
その事実を、目の前の少女に認識させるために。
今更どうこう言おうと、もう奴らは動いてしまったのだ。
聡明な彼女が、それを理解出来てない筈が無い。
それを認めたアリサは、腕の力を抜いて紅次を解放する。

「もう止められん。奴らは蒼詩を潰す為に、全力を注いでいるのだから」

「どうすれば良いの？」

確かに先程の様子を見れば、紅次の言う事も間違い無いだろう。
しかしだからといって、それを見過ごす事は彼女達には出来なかった。
蒼詩は、彼女達にとっては友達なのだ。

友達のピンチに、何か出来る事は無いのか？
彼女達にとって、そう考えるのは当然だった。
紅次と翠は互いに見合わすと、呟くように紅次は口にした。

「来たまえ」

某大佐の台詞を吐きながら紅次は踵を返すと、廊下を歩きだした。
もちろん、翠も少女達に手招きをすると、彼の後に続く。
何かあるのだろう、そう悟った彼女達は数秒遅れて彼等の後に続いていった。

第九話　女神の報復　前編（後書き）

後編もいきますよー。

第十話　女神の報復　後編（前書き）

連続で投稿です！

第十話　女神の報復　後編

着いたのは、とある教室。

クラス教室とは違い、何の為にあるのかすら分からない場所。
翠はおもむろにポケットに手を入れると、中から1つの鍵を取り出した。
それを鍵穴に差し込み、捻る。
ガチャ、と開錠音が鳴り、翠に続いて紅次が中に入っていく。
後ろで待機していた5人も、それに倣って入室する。

「うわぁ……」

先頭に居たなのはは、その光景に感嘆の声を漏らしていた。
それは後ろの4人も同様で、皆室内を物珍しそうに見回している。

そこにあったのは、十数台に及ぶディスプレイ。
そしてそれらを繋ぐコードが、まるで蛇のように床を這っていた。
異様、その単語が紅次と翠以外の全員の脳裏を過ぎった。

紅次は複数あるディスプレイの中から、1つの電源スイッチを入れる。
反転する画面、そこに映されたのは……

「屋上？」

彼女達がいつも昼食を取る場所である屋上だった。
しかも画面には、屋上全体が映っている。
まるで、屋上の端にある金網から見ているかのように。

「此処は我等三バカカラスの作戦室。学校にある監視カメラ＋αを統括するスペースだ」

「これ全部、監視カメラなの！？」

なのはの驚きに「如何にも……」と答える紅次。

「聖祥に何が起きても対処できるように、オレ達三人が作り上げたんだ」

「これ、３人でやったんかい」

この全てが、目の前の２人ともう１人の少年が作り上げた異景。
それをサラっと述べてしまう辺り、三バカカラスというのは伊達じゃない。

「数多の作戦が成功したのも、この監視カメラによる状況把握のおかげだ」

「ちなみに機材を運んだのはオレだけどね」

あの苦行はいい思い出だよー、という翠を見て、若干彼女達は引くのだった。

「まぁそんなことはどうでもいいが、それよりも画面を見るといい、そろそろ来るぞ」

「来ますって誰が……」

映し出された屋上、それに視線を向けるように促す紅次。
しかし、この状況に呆気に取られている彼女達は、もう何をすれば良いのやら状態。
アリサが言葉を続けようとするが、ディスプレイに視線を向けた瞬間、二の句は続かなかった。
乱暴に開けられた屋上のドア、そしてそれを行った張本人は……

「蒼詩！！」

現在進行形で追われている身の少年だった。
フェイトが呼びかけるように声を発するが、画面越しでは声は伝わらない。
蒼詩はそのまま、屋上の最奥であるカメラの手前までやってきていた。
その行動とカメラに映る表情は既に逃げる事を諦めた様子。
追跡者への降伏を表していた。

「屋上に来たら、もう逃げられないんじゃ……」

「そ、そうよ。何で屋上に来ちゃうのよ！！」

すずかとアリサが、彼の行動の意図を図りかねていた。
自分達が見た限り、相手はかなりの人数だ。
それが閉鎖された空間に集まれば、あっという間に完全包囲されてしまう。
絶体絶命、５人の頭にはそれだけが浮かんだ。
居てもたってもいられなくなった彼女達は、急いでこの場を離れよ

うと走りだそうとした。

「何処へ行くのだ？」

しかし、この部屋の製作者の１人である少年の声により、それは阻まれる事となる。
それでも、此処で止まっている訳にはいかない。

「蒼詩君を助けに行くんや！」

「このままじゃ、大変な事になっちゃうんだよ？」

友達を助けたい、その想いが彼女達を動かしている。
それは、５人の目を見ればすぐに分かった。

その瞳に映る、願いが……。

しかし、ディスプレイから目を離さない二人の少年は何一つ動こうとしない。

「あまりオススメはしないね。オレとしてはここで見とく方がいいよ」

「どう言う事よ？　アイツはアンタ達にとっても友達じゃないの！？」

翠の台詞はまるで自分は巻き込まれたくないと言うように聞こえた。
そのあまりの冷たさに、アリサの心に怒りが灯る。
彼等は友人を見捨てようとしてるのだろうか？
そう思わずにはいられず、そしてそれを許す訳にもいかなかった。

アリサの凍てつく視線を感じたのか、翠が頬を上気させて悶えていると、もう1人の少年、紅次は彼女達に告げる。

「今回、巻き込まれたのは蒼詩だけ。つまり、それを対処する権利を持つのも蒼詩だけ。アイツはたった1人で、彼等を処さなければならない」

「そんな……。いくらなんでも、それは酷すぎやで！！」

「そうなることを予測出来なかった。それは全てアイツの責任だ」

紅次の言葉に5人ははっとする。
それは蒼詩と昼食をとっていた頃。

『何故か紅次と翠を誘っても、恐れ多いとかなんとか言って遠慮するんだよな。あの2人なら喜んで来る筈なのに……』

彼が度々口にしていたあの言葉。
最初に話した時は3人全員でないとはいえ、あの三バカカラスと知り合ったのだ。
しかも堂々と五大女神について熱く語った紅次がいきなり誘いを断った。
つまり、この2人は最初からこうなることを分かっていて、蒼詩だけ彼女達の元に行かせたのだ。
そうなれば、常に昼食を共にしフレンドリーに接しているのは蒼詩だけだと、ファンクラブの人間はそう認識する。
となれば、ファンクラブが蒼詩を追いかけるのは必然だ。
さらに、紅次は蒼詩に一度非公式ファンクラブについて話しているので、悪いのは最後まで警戒しなかった蒼詩に原因がある。

「たとえ貴女達があの場に行っても、アイツは出て行けと言うだけだろう」

「それでも、１人であんな大人数は無理だよ」

フェイトの言う事も最もだった。
相手は１０人はくだらない生徒に対して、蒼詩はたったの独りなのだ。
どちらに分があるかなど、目に見えている。
見えているからこそ、少女達は動かなければならない。
自分達で止められずとも、この学校に居る教師達ならば止められる筈だ。
職員室に急いで行って事情を説明すれば、この騒動もすぐさま治まるだろう。

だが三バカカラスの考えは、彼女達とは別の方向に向いていた。

「ふむ……、どうやら貴女達は根本的な誤解をしている」

「どういう意味よ？」

突然の指摘、誤解と言われアリサが問い返した。
そこで漸く、紅次はディスプレイから視線を外し、彼女達に目を向けた。
その表情に焦りは微塵も感じられず、逆に余裕そのもの。
まるで、何も心配するものは無い、と言ってるようだ。

「アイツならこの状況を回避するためなら、どこかに隠れたり、教師にこの危険さを教える筈。……しかしそれを良しとせず、あえて

屋上に行くという無謀な考えに出た」

蒼詩は三バカカラスの1人というだけあって突飛な行動に出たり、ふざける所はあるが、決して馬鹿ではない。いざとなれば思慮深くなる、そう言う場面をテニス部勧誘の時で見てきた。

現にディスプレイに映る彼の表情には一切の絶望に満ちた様子はない。むしろゆったりとした至って変わらない姿で佇んでいる。

「おそらくもとよりあのファンクラブに立ち向かうつもりなのだろう、普段は目にしないが、アイツがその気になれば何人かかってこようと負ける心配はまず無いに等しい」

「というより、オレ達が蒼ちゃんを心配するなんて有り得ないよ。……だって、最初から信じてるからね」

思わず5人は目を見開いて、目の前にいる2人を見つめる。彼等が蒼詩を助けないのは彼を見捨てるのではなく、手を貸すまでもないほど彼を信用しているからだ。それは長年付き合いのある彼等だからこそのこと。4年という知り合った期間が彼女達と変わらないとはいえ、それ以上の信頼関係が強いと思えた。

「まぁアイツもこのくらいの騒動、どうってことないと思っているでしょう。何故なら……」

紅次と翠は同時に口の端を吊り上げる。それは悪戯っ子のような嫌味を含む笑み。

そして自信たっぷりに2人揃って言い放った。

「我等「オレ達と同じ三バカカラスだから！！」」

―Ｉｎｓｉｄｅ―

対峙するのは、両手では足りない人数。
全員が同じ目的の下、行動を起こしている。
俺をぶっ潰すという、あまりに超迷惑な目的。
それを嫉妬だけを動力源として動いているときた。

こいつら学校に何しに来てんだよ……。

俺のようにあちこちで悪戯を働かす方が余程健全だぞ？

「漸く追い詰めたぞ、結城蒼詩！！」

「フハハハッ、それで我をやり込めたつもりか！」

取り敢えず、目の前にいる欝陶しいリーダー格にノリで応えてみる。
なんか名探偵に追い詰められた怪盗の気分だ。
次は脱出するために屋上から飛び降りるグライダーが欲しい所だが、

残念ながらそんなもの準備していない。
となれば、怪盗ごっこは諦めて、数多の敵から逃げるエージェントの役でもしますか。

ブレザーのボタンを外し、ネクタイを解いてワイシャツの第一ボタンを外す。

「今までの行いを振り返り、後悔するがいい」

まるで判決を下す神にでもなったような口振りで、先頭の奴は俺に指を突き付ける。
こういう場面なら「異議あり！！」って叫びたいけど、神に異論って認められるのか？
俺はどっちかというと『勝訴』と書かれた紙を持って走りたいな……。

「悔い改めろ。そして、彼女達に2度と近付……」

「だが断る」

なんか1人でぺらぺらと喋っているリーダー格をちょいと黙らせる。
全くさっきから後悔とか悔い改めろとか中二臭いことを吐きやがって。

「悪いが、いちいちお前達の嫉妬に巻き込まれるのは御免だ」

そりゃあ、かわいい女の子と一緒にいれば嫉妬狂うわ、怒り狂うわ、こいつぶっ殺してぇとは思うがな。
だからといってそいつらと関わるな、なんて言い方はあんまりだと思うぞ。

俺は成り行きで知り合ったけど、他の奴らは自分では釣り合わないと思っていても勇気を振り絞って距離を縮めたかもしれない。

一体どこぞの純愛小説かって思いたくなるかもしれないが、その勇気ある行動に俺は賞賛に値すると思っている。

会話程度なんてどうってことないだろう。

だからいくら関係が浅かろうとも、それを無かったことにしようなんて少なくとも俺は思わない。

だが、そんなことをこんな嫉妬で我を忘れてる奴らに言っても無駄だ。なら……

「御託はいい。死にてぇ奴だけかかって来い！」

ちょっと声を低くしてヤクザ風に言ってみる。一瞬、髪をかきあげようという衝動に駆られたがそこは踏み止まる。

俺、竜の右目じゃないし。

「こ、後悔しても遅い！　総員かかれ！」

リーダーの声と共に一人の男子が雄叫びを上げながら突進してきた。

右手の拳を振り上げて向かってくるそいつを俺は動くことなく捉える。

「せいっ！」

眼前まで迫ると最小限の動きで相手の打撃を避け、片足で相手の足を引っかけると同時にラリアットの要領で相手を押し倒した。

「ぎゃっ！」

背中から地面を強く打ったらしく軽い悲鳴を上げる。しかし、頭は打っていないので、痛みでのたうちまわるだけだ。

「こんのぉぉぉ！」

続いて男子がもう一人こちらに突進してさっきと同じように拳を振り上げてくる。

「はいっ！　どりゃぁぁ！」

相手の拳を左手で反らし、直ぐさま相手と並ぶように身体を反転させる。
攻撃を反らしたことでバランスを崩した相手の動きを見逃さず、左手で顎を捉えると真下に押すように相手の身体を地面に叩きつけた。

「ぐうっ！」

ぐぐもった声をあげる男子。これで二人は無力化した。
しかし、まだ人数はどう考えたって向こうが多い。数で押し切ろうと思えばできただろう。
だが、向こうは意地なのか訳のわからないクラブとしてのプライドなのか、二人だけで俺に向かってきた。

「「うおぉぉぉーー！！」」

両脇から挟むように迫る生徒のうち一人に向かって走る。

その行動が予想外だったのか生徒の動きがぎこちなくなる。俺はそのまま生徒に突進し、身体が触れ合う寸前に相手の腕を掴み、背負い投げを見舞った。

技が決まると、直ぐさまもう一人の生徒へ走って、懐に潜り込みコブラツイストをくれてやった。

さて、次はどの技をかけようか？

開始から5分。俺の回りには俺を追いかけてきた生徒達の屍……ではなく、うずくまる姿があった。

途中からどこぞのヒーローショーみたいに一人一人律儀にかかってきて俺が倒すという構図が出来上がった。

「おい、おまえら」

俺の声だけですくみ上がる生徒達。そんなに恐いか？

「おまえらは言ったよな？　五大女神とかなんとかに近付くなと」

よりによってこの俺に。

「そう言われて、はいそうですかと大人しくするとでも思ったか？　甘いわぁぁぁ！！」

叫び声に生徒達は軽く悲鳴を上げる。ファンクラブ？　知ったこっちゃない。

「そもそも、フレンドリーにしているだけで何故追いかけられにぁならん？　それは嫉妬、大罪の一つ、即ち裁きを下されるのはお前

達だ！」

バーン！とでも出そうな勢いで指を突き付けると、生徒は雷にでもうたれたような衝撃を受けた表情になった。

中には「お、俺達はなんということを……」などと呟きながらｏｒｚのような態勢になっている奴もいた。

「お前達にとってあいつらは恐れ多いだと？　それは単にお前達がヘタレなだけじゃボケぇ！」

なんか口調がどんどん酷くなっていくが気にしちゃいけない。

「一歩踏み出す勇気が欲しいか、未知なる混沌が欲しいか？」

『いや、そこまで言ってない』

綺麗に声を揃える生徒達。どうでもいい時にチームワーク発揮するなよ。

「オーケー、まずその幻想（にちじょう）をぶち壊す！」

『ダメだ、こいつ早くなんとかしないと……』

五大女神だろうがなんだろうが混沌は敵味方を巻き込むもんだ。

何が起こるかわからない、だからワクワクして楽しくなってくる。

えっ？　理解の範疇を超えてる？　ならお前もこっちに来るがいい。

ようこそ、カオスの世界へ！

「俺にとっては五大女神とかそんな名前なんぞどうでもいい。あいつらがどんな風に呼ばれようとも普通の女の子であることに変わり

はない」
ちらっとフェンスに設置されている黒い物体を見て、再び視線を生徒へ戻す。
「仲間であることもな……」
そう呟くと俺はうずくまっている生徒達の合間を歩く。
「ファンクラブごときで俺達三バカカラスは止められない。カオスは全てを巻き込む、それはファンクラブも五大女神も例外ではない！」
俺達は学園を混沌と化すことが目的だ。この程度で暴動起こそうなんぞ笑止千万ってな。
目の前で握りこぶしを作り、そう語る。
「その先もわからない刺激的なバカ騒ぎに……お前達もやってみないか？」
人生は一度きり、今のうちふざけて賑やかに過ごした方が後悔はしない。
楽しくこの生活を満喫しないとな！
「これが三バカカオス……噂に聞いていたがなんとスケールのでかいことだ……！」
「人が異端……？　いや違うな、この人生こそが異端なのだ！」
「神は言っている……全てを巻き込めと！」

なんか向こうはとんでもない方向へ話が進んでるんだが……。さすが非公式ファンクラブ、伊達に嫉妬で暴動を起こすだけのことはある。

「お前達にとってカオスとはなんだ？」

『Ｎｏ　Ｃｈａｏｓ　Ｎｏ　Ｌｉｆｅ！』

「ありたっけのテンションをこの学園にぶち込んでやれ！」

『ガンホー、ガンホー！』

「よろしい、諸君宴会だ！」

『ＹＥＡＲーーーー！！』

ｏｕｔｓｉｄｅ

事の全てを見終えた7人は、何も発せずに居た。
いや、発せなかったのは5人で、2人はただ黙っているだけだった。
やがて紅次がゆっくりと椅子から立ち上がると振り向きなのは達に告げる。

「なにやらカメラの向こうが賑やかなので、我等は加勢しに行くと

する」

「急がないと蒼ちゃんが一人で楽しんじゃうから、それじゃ！」

紅次と翠はなのは達を通り過ぎてそのまま部屋から出ていく。

残されたなのは達は今だカメラ先の光景を見ていた。

「なんか、すごい事になったね……」

「うん、追いかけてきた生徒を追い払うどころか、取り込んじゃったね」

苦笑しながらなのはとフェイトは呟く。さっきまでは蒼詩を心配していたというのに、結果は意外な形で丸く収まってしまったのだから。

「蒼詩君が私達のこと『仲間』だって……」

「うん、言ってたね」

嬉しさが見え隠れるような微笑みを浮かべる二人。彼は彼女達のことを『知り合い』ではなく『仲間』だと言ってくれた。

「でもその言い方だと、まるでアタシ達もアイツらと一緒にされそうだわ」

「そんなことを言いつつも嬉しいアリサちゃんなのでした」

「な、ちょ、ちょっとはやて！？」

「ふふ、本当に不意打ちだよね」

恥ずかしがりながらも、喜びを見せる5人。その中に嫌悪な雰囲気は無かった。

少女達が微笑むカメラの向こうには新たに紅次と翠が加わってよりに賑やかになる光景が広がっていた。

第十話　女神の報復　後編（後書き）

一つのタイトルで終わらせるのにめっちゃ文字を使う。
ネタを思いつくのはいいが、使いどころが・・・。

第十一話　平穏をかみしめて（前書き）

ようやく投稿ですわ！

試験とかで書く余裕がなかったですから少々時間がかかってしまいましたが、夏休みを利用して話をどんどん進めたいなーと思います。

第十一話　平穏をかみしめて

『そうしく～ん、こっちこっち～♪』
声が聞こえる。
俺の名を呼ぶ声が。
ソプラノのような高い声が耳に、頭に響きわたる。
『みてみて、このはなかざり、わたしがつくったんだよ』
視界がゆっくりと鮮明になってくる。
・・・目の前で屈託無く笑っているこの幼女はだれだ？
そんな純粋な目でおっさんをみないでくれ・・・、逸らしちまうだろ？
ここは花畑？　両手じゃ抱えきれないほどの白い花が花弁をまき散らし、羽毛のように柔らかく空に舞い上がる。
ああ、なるほど・・・。
これは、昔の夢なのか・・・・・・。

あの嫉妬による襲撃事件が起きて一週間が過ぎた。
あのファンクラブとやらを知っていた紅次に（翠はおまけで）延髄蹴りかました後、ファンクラブという新たな戦力を加えて、少しずつカオスな学園に変貌する一歩を踏み出している。
話は変わって、今日は日曜日。
バイトのシフトもないし、翠屋ＪＦＣの手伝いもない。
今の俺はなにも縛られていないフリー状態なのだ！

「だからと言って、なんで散歩という選択肢を取ったんだろうな、俺は」

家は特にすることもないから、こうして年寄りのようにブラブラと散歩を満喫している。

・・・いや、満喫しているというほど楽しみなわけじゃないんだが。

普段なら紅次や翠を誘って何か面白いことを考えるのが日課となっている。

だが、今日は何故か無性に散歩に出かけてみたくなったのだ。

ついに俺も老化で日和ボケが始まったか？

海鳴臨界公園で一息つこうと、海を眺めながら思考に耽る。

たまにはこういったのんびりとした感じも悪くないな。

学校へ行けば紅次達と騒いだり、ネタをかましたりしていつも賑やかだった。

「こんな風に静かに過ごすのも悪くないな」

別に俺は落ち着きがないわけじゃない。

ただ日常を過ごすなら目立つことなく普通に暮らすだろう。

「俺にとってはどっちでもいい・・・」

そう・・・どんな生活を送ろうとも俺は今この日常に満足している。

贅沢に暮らしたいとか夢があるから努力するとか今の俺はそんな気にはなれない。

「夢、か・・・・・・」

その言葉は俺にとっては他人事。無縁であり、必要のないもの。

「違うな、そんなもの俺には存在しない・・・」

見るとか叶えるとか、どうこうする問題じゃない。
俺はそれすらできないのだから――――

「そんな所で考えに耽っていると、柵から落ちてしまうぞ」

「えっ・・・」

後ろからかかる声。思考をやめ、振り返ってみる。
そこには黒髪というよりは紺色に近い短髪をした男性が立っていた。
身長は俺より頭一つ高く、年上だということが容易に理解できる。
高校生だろうと思うが、そんな一言で片付けるには困ると思えるくらい大人びている感じがした。

「気付いたかい」

男性は落ち着いた感じで話しかけてくるが、俺はこの展開に唖然としていた。

「突然声を掛けてすまない。ただ、ずいぶん君は黄昏ている雰囲気だったから・・・」

なにやら彼は弁解とやらを述べているが、俺にとってはそんなのどうでもいい。
俺は別の部分に注目していた。

「え・・・」

「え？」

「えええええええええーーー！！！」

腹からというか心の底から響く俺の絶叫。その叫びは海の彼方まで届くかのようだった。

さすがの俺でも叫ばざるを得ない。だって・・・・・・

この人の声、紅次にそっくりなんだもん。

「へぇ～、僕の声ってそんなに君の友達に似てるのかい？」

「ええ、声をかけられた時はきのせいだとは思ったんですけどね」

クロノと名乗るお兄さんは苦笑しながら話す。

さっきの絶叫の理由を話して軽く自己紹介をすませるとあっという間に親しくなった。

しかし、まさかこの人も外人とはな。

髪は俺と同じ黒だし、雰囲気はどちらかというと日本人寄りだ。

「なんでクロノさんはここに……って、聞く必要もないですね」

「はははっ」

渇いた笑いを浮かべるクロノさんの足元に視線を向ける。

そこには両手いっぱいの買い物袋があった。

たぶん、買い物帰りなんだろうな。
中身を見てみる。
「今日の晩飯は焼きそばですか？」
「えっ？　よくわかったね」
「主婦の経験と勘だ！」
「君、刑事じゃないんだから……」
普通、そこは主夫でしょってツッコむところなんだが、まあいい。
それよりも……。
「……この角砂糖の袋は何なんですか？」
しかも三つ。
クロノさんのお宅は毎度毎度アフタヌーンティーでもやるのか？
それでも三つはないだろ。
「ちょっとね。うちの家族がかなり使うんでね……」
ああっ、めっちゃ遠い目をしてる！　もしかして触れちゃいけなかった！？　この人見た目によらず苦労人かもしれない。
しかもそれが紅次の声に似てるとなると、紅次がやっているみたいでシュールだ。
「クロノ～♪」

とそこへ、クロノさんの後ろから彼を呼ぶ声が聞こえた。
クロノさんが振り向くのに続いて、俺は覗き込むようにその方を見てみる。
その先に居たのは、ポニーテールにしたライトグリーン色の髪が映える女性。
その女性は、そこら辺の屋台で買ってきたのであろうクレープを、両手に持ちながらこちらに歩み寄ってくる。

こいつは、もしかして……

「どうやらお邪魔女ドレミでしたね」

「えっ？　何言ってーー」

「んじゃ、俺はこれで……」

クロノさんが驚いて何か言おうとしてるが、それを言わせないようにさらに俺が紡ぐ。

……別に今言った台詞がすべったわけじゃないぞ？

俺が居たら、せっかくの時間が台なしだからな。
老婆心として、ちょっと言っておくか。

「あぁいうのは彼氏が行ってくるもんですよ？」

視線を女性へ向ける。
荷物持ちをやるのはいい心掛けだが、あれも男がやるもんじゃないのか？（マスター談）

「彼氏？　何を言ってるんだ？」

だが一方のクロノさんは、おれの発言に対して怪訝な表情を見せてくる。
まるで『コイツ何勘違いしてんの？』みたいな。

「あれっ、違うんですか？」

俺の思考を読み取ったのか、片手で頭を押さえながら答える。
なんだ、違うのか。
ふむ、つまり……二人は恋人同士じゃないのか。
十分、どこからどう見てもそのようにしか見えないんだけどな。

改めて、こちらにやってくる女性を見てみる。
すでにこちらまでやってきているから鮮明に顔立ちがはっきりしてきた。
髪と同色の瞳、そこには母性溢れる包容力を湛えた、優しくも強い光が灯っている。
外見とは比べ物にならない位、大人としての魅力に包まれた人。

刹那だか、我ながら見惚れてしまった。

雰囲気もどこか桃子に似ている気がする。
この人もまた、そういった部類に入る女性なのだろう。

「ごめんなさい。色々ありすぎて、選ぶのに時間掛かっちゃって……」

少々困ったような顔をしながらクロノさんの許に着く。
選ぶとは両手にあるクレープのことだろう。
そう言えば、公園の屋台にクレープがあったな。
豊富なメニュー、お手頃な値段、文句なしの美味さ。

俺もごくたまに食べるが、やっぱり一番は桃子さんのシュークリームだな。

どうやらそのクレープ屋に女性は行ってたらしい。
対するクロノさんは、その姿を見ながら呆れた顔をしている。

「はい、クロノは甘すぎるのは苦手だから、シンプルなチョコバナナね……それと」

片方のクレープをクロノさんに渡し、自分の分を口に運ぼうとして、俺の方へ振り返った。
何故か、妙な笑顔を浮かべて。

「貴方、もしかして蒼詩君？」

いきなり俺の名前を当ててきやがりましたよ。あれですか、エスパー伊東ですか？
違った、エスパー違いだった。

「なして俺の名前を？」

はて、俺はこの人と知り合ったことってあったっけ？
もしそうなら桃子さんみたいな美人さんをこの俺が忘れるはずがない！←ここ重要
だとすると、改めて疑問に思う。

そんな中でも、謎の美女は笑顔のまま話を進めていく。

「娘から話は聞いてるわ。とても優しい子だって……」

あっ、娘さんからですか。それなら納得———

……え？

「む、娘？」

「えぇ、フェイトからね」

まるでドッキリに成功したような悪戯っぽい表情に目を奪われる。

やっぱりこの人、桃子さん似だな。

へー、フェイトね……。どっかで聞いたような名前だな。

そういえば、内のクラスにそんな子がいたな。

そうそう、確かフェイト・T・ハラオウン……

「……って、ひょっとこしてハラオウンの！？」

思わず変な言葉出てきたが、そんなの気にしちゃいられない。

女性は満足したような、ご名答と言わんばかりね表情で返す。

「私はリンディ・ハラオウン。フェイトの母親よ♪」

「……」

開いた口が塞がらないとはまさにこのこと。信じられないような目で、ハラオウンの母、リンディさんを見つめる。

どう見たって２０代にしか見えない。
桃子さんに似ていると思ってたけど、そこまで似る！？

「え……」

「え？」

「エエエェ（ °Д° ）ェェェェェー！！？」

本日二度目の絶叫。……まぁ、いいんじゃないかな。彼（ネタ的に）もよくやってくれてるしね。

今日はホント驚きの連続だ。

何気なく散歩した先にクロノさんに会うわ、ハラオウンの母親であるリンディさんに会うわ、出会い運が絶好調だな。
しかも、クロノさんさえリンディさんの息子さんときたもんだ。
もうとんでもない日だな今日は。意味無く散歩に出た甲斐があったもんだよ。
そんな展開をネタにしながら、ハラオウン親子と談笑していたら、不意にリンディさんは口を開いた。

「学校でのフェイトはどうかしら？」

その質問は一人の母親としての質問。娘の学校での事を知りたいと思うのは、親として当然の反応だ。

「具体的な事はよく分かんないですけど……」

あいつの学校生活の態度は一言で言えば『品行方正』に限る。
授業態度も真面目、落ち着いた性格で堅物という印象を受けない。
何事も一生懸命な姿は、クラスメートにも好印象だ。
本人は謙遜するだろうけどな。
それはハラオウンだけでなく、あいつも含めた五人娘にも言える事だろう。

「確かに、彼女達は基本的に真面目だからね」

「そうねぇ、昔から大人びた子だったし」

どうやらこの二人の証言によると、あいつらのああいった性格は昔からしい。
しかも四年ほどの付き合いらしいから計算すると……長くて小三からってことか。

「ところで話は逸れますが」

「何かしら？」

「リンディさん、俺にこう言いましたよね？　とても優しい子だって……」

「えぇ、フェイトからそう聞いたわ」
「そこがよく分かんないんですが……」
あのハラオウンはまだ俺を優しい奴だと思っているらしい。
どこをどう捉えたらそんな風に見えるんだ？
「蒼詩君は学校で色々と騒動を起こしているみたいだけど、それが時々気遣いになっているからじゃないかしら？」
「気遣い？」
「貴方にとっては自分が満足するためだって見せ付けているようで、何気なく相手を助けている。そうフェイトは見えているかもしれないわね」
リンディさんは柔らかい笑みを俺に向けてくる。
学校でバカやっているのは俺の自己満足に過ぎない。
俺は単に後悔したくないだけだ。今この生活を送っていることを。
この日常の中で暮らすことを。
「俺はこの生活をエンジョイしているだけですよ」
俺は視線を海の水平線へと向ける。
「周囲がどんな評価をしようが知ったこっちゃない」
今の俺はそこらの悪ガキとたいして変わらないかもしれない。
「退屈な生活に飽きたんじゃない。ただ忘れてゆくだけのつまらな

い生活を送りたくないだけ」

それでも俺が過ごしてきた時間は無意味じゃなかったって、そう言いたい。

「俺はあいつらみたいに立派な奴じゃないけど……」

口の端を吊り上げ、を両手を広げてながらおどけて言う。

「それが俺、三バカカラスが一人、結城蒼詩ですから！」

ハラオウン達は将来を見据えて今も切磋琢磨してるかもしれない。
俺とあいつらは天と地と呼べるような立ち位置かもしれない。
それでも、これが俺なのだからどうしようもない。

「……やっぱり、フェイトの言う通りの子ね」

「確かに、揺らがない真っ直ぐな意志だ」

さっきまで黙っていた二人がなんか納得したような笑みをしていた。

何、どゆこと？

ハラオウンの言ってた通りって、あいつ何て話したんだ？
ハラオウンといい、高町達といい、人を美化するの好きだなぁ。

「どうかその気持ちを忘れず、娘と仲良くやってちょうだいね」

こんなことにまで気をかけてくれる彼女はまさに聖母と呼べるほど優しく言葉をかけてくれた。

ホント、母親って敵わないな。

第十一話　平穏をかみしめて（後書き）

そういえば、青年クロノの声優って紅次と同じじゃね？　というのをつい最近思い出したので、書いてみました。

にしてもこの長くなる文章をなんとかしたい・・・

ＪＯＹＳＯＵＮＤで曲をリクエストできるというので以下の曲をリクエストしてみた。

・カンデコ／茶太
・恋をしよーよ／茶太／Ｒｉｔａ／Ｄｕｃａ
・深海少女／初音ミク
・恋のストーリー
・ＩＮＩＴＩＡＴＩＶＥ／川田まみ
・幻想の城／榊原ゆい
・Ｄｅａｒ／Ｄｕｃａ
・グルッポ／茶太

まぁ、リクエストしてもいつ投票できるかはわかりませんが、以上の曲に共感できる人は是非投票お願いします。

第十二話　勉学は学生生活の極々一部（前書き）

ようやく投稿です。

第十二話　勉学は学生生活の極々一部

「勉強会？」

「うん、そう」

あの謎の襲撃からしばらく経った五月末。朝、教室に入ったらいきなりハラオウンに呼び止められた。

その内容はみんなでこの一週間先にある中間テストに向けて勉強するために、月村の家で勉強会を開こうということだった。

俺としては断る理由はないのだが、三バカカラスと呼ばれる者の一人である俺を誘って大丈夫なのか？

「俺は別に構わないけど、いいのか？」

「うん、全然問題ないよ。あと、紅次と翠も誘おうかと思って……」

そう言っていると、教室のドアから入ってくる二人組。

「やぁ、皆の衆。今日はどんな蔑む目をしてくれるんだい？」

「一度蔑むのではなく、信頼の目で見られたらどうだ？」

「紅ちゃん、それはオレに対するいじめだよ～、思わずゾクゾクしちゃう……あれ？　え～と、信頼の視線ということはオレ的には嬉しくないけれど、でもそれってつまりオレへのいじめなわけだから、実際は悦びなわけで……オ、オレはどうすればいいんだ！」

「前から思ってたけど、翠って……その……色々と難儀だよね」
そこで言葉を選ぶか、いい奴だな、でもはっきり言っていいんだぜ、変態だって。
「朝からテンション上がってるとこ悪いけど紅次と翠は放課後空いているか？」
そこでハラオウンの言っていた勉強会について話す。
それを聞くと二人は顔を見合わせたが、紅次は肩をすくめ、翠は心底残念な表情を浮かべた。
「すまないが、俺には用事があるのでな。参加できそうにない」
「右に同じ。あいにく今日はオレも用事があるから、ごめんな～」
どうやら二人共用事があるようだ。タイミングがいいのか悪いのかよくわからないな。
ということはいつもの五人組＋俺となるから実質男一人になるのか。
……昼飯にいつもこの組み合わせだから別に問題無い気がする。
「そっか、残念だね」
ハラオウンは本当に残念そうな顔をする。相変わらず素直というべきか、わかりやすいというべきか。

そういったわけで俺を含めた六人で勉強会を開こうということになったのだが……

「……」

何故いきなり無言なのかって、そりゃあいくら俺でも無言になりたい時ぐらいだってある。

学校が終わって放課後、そのまま月村の家へ真っ直ぐ向かい、今その月村の家……いや、屋敷を見上げている。

いやまぁ、月村がお嬢様だってことは薄々どころか纏っている雰囲気で気付いていたけど、こうも環境がガラリと変わると呆然としないわけにはいかない。

「なんだか、すずかちゃんの家に来るのって久しぶりだね」

「そやな、猫ちゃん達元気にしとるかな？」

「ほら、立ってないで早く入るわよ？」

高町達は全然気にした様子じゃないし、慣れって怖いね。そして、バニングス。他人の家をさも自分んちみたいにあがるなって。

「ふふふっ、蒼詩君驚いた？」

俺がずっと屋敷を見上げていたことが面白いのか、月村は優雅に微笑みながら声をかけてきた。

「これが月村の家か。いや、もしかしたらここは庭で、あっちの山からあっちの山までがうちの領地って言うんだろ？」

「そこまで大富豪じゃないんだけど……」

もしお金持ちになったら、誰だってそんな台詞を吐きたいもんなのさ。

「お帰りなさいませ、すずかお嬢様」

と、月村とそんなジョークをかわしていると、玄関と思わしき所から一人の女性が現れた。

透き通る青髪と、その身には紫色の衣服の上に、フリルのあしらわれた白いエプロンを着飾った美女。

あれが世間で知られるメイド服ってやつなのだろう。となるとこの人はここのメイドかな？

「皆様も、ようこそいらっしゃいました」

メイドさんは高町達にも視線を向けると無駄ない綺麗な一礼をする。

「お久しぶりです、ノエルさん」

「はい。お久しぶりです、なのはお嬢様」

顔なじみである高町達は、至って普通に挨拶を交わす。
気心知れた間柄なのか、その様子は穏やかさに包まれている。
にしても俺空気じゃね？
「結城蒼詩様ですね？」
「えっ……あっ、はい」
先程まで高町達に挨拶していた女性は、視線を俺に移す。
「初めまして。私はこの月村家にお仕えしているノエル・K・エーアリヒカイトと申します」
「どうもご丁寧に。結城蒼詩です。本日はお招き頂き、ありがとうございます」
両手を前に組み、正しい姿勢で一礼するメイドさん、ノエルさんに俺も倣って一礼する。
こういった礼儀はバイト先でちゃんと身につけているから正直助かった。
まぁ、その美麗さはしっかりと出来ている彼女と比べると天と地の差があるけど。
「お話は、すずかお嬢様から聞き及んでおります」
「月村から？」

はて、一体何を話したんだ？
月村のことだから悪口なんて言うことはないだろうな。
その元凶を見てみると相変わらず上品な笑みを浮かべていた。
くっ、なんか悔しい！
「それじゃあ、ノエル。みんなにお茶とお菓子を用意しといてね」
「かしこまりました。皆様、どうぞお入り下さい」
入場を促され、早速入っていく高町達に続いて、俺も月村家へ入っていった。

連れて来られた部屋は、硝子で覆われた一室だった。
窓を覗けば辺り一面に芝生が青々と茂っているのが見える。
中央には大きな円形のテーブルが鎮座しており、恐らくここで勉強するのだろう。
……いやいや、分析していないで冷静に考えてみろ。こんな別世界のような空間で勉強？　そんな雰囲気が全っ然感じられないんだが。
そんな俺の気持ちを余所に他の奴らはまるでそこが定位置であるか

のように迷いなく各椅子に座っていた。

「なぁ、月村」

「なに、蒼詩君？」

「いつもお前らはお前ん家で勉強会とかする時って、こんな場所なのか？」

「うん、そうだよ？」

「……」

もう考えるのはやめよう。こいつらはそれが当たり前、それでいいじゃないか。

そんなわけで空いてる椅子に座ると俺達は各々の勉強道具を取り出した。

まぁ、分かっていた事だが……

「簡単過ぎるよなぁ～」

目の前でスラスラ問題を解いていく5人を見て、そう思わずにはいられない。

俺も似たようなもんで、特に詰まるような問題は無いのが現状。

何てったって、中一の最初のテストだしな。

ぶっちゃけ此処に来てまでやる必要ってあったのか？

「まっ、アタシに掛かれば、この程度の問題なんて朝飯前よ」

「アリサは頭良いからね」

俺と同じような考えなのか、バニングスが余裕な表情でそんな事を言い放つ。

ハラオウンの言葉を聞いて、「お前も同じだろ」と言いたいが突っ込んだら負けかなと思った。

「でも、ハラオウンとバニングスは特に凄いんじゃないか？」

『えっ！？』

「だって、外人なのに国語もできるんだろ？」

日本語ではなく国語を学ぶのは語学とは違う。しかも日本語は他の異国語に比べて難しい部類に入る。

ましてや国語が出来るとなるとそれ以上に凄いと思える。

俺の言葉に目が点になっている二人は、それを見事に体現しているのだ。

「私はまだまだだよ。アリサと比べると、文系の成績良くないし…

…」

「まぁそうね。聖祥のパーフェクトバイリンガルとは、アタシの事だしね」

ハラオウンは謙遜、ハラオウンは尊大と見事に対照的な態度を見せる。

こうもはっきり異なると見ている側としては面白いな。

「Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｔｏｄａｙ？」

「なん……だと……？」

何か悪戯を思い付いたのか、薄ら笑みを浮かべながら英語で話しかけてきやがった。

ほう……俺が慌てている様子を楽しむという魂胆か！

内容は至って簡単だが、こいつのことだ、その後に追撃を繰り出してもおかしくはない。

「Ｈｏｗ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｄｏ？」

ニヤリ、と肉食動物のように獲物（俺）を追い詰めていく。

日頃の鬱憤でも晴らすつもりだろうが、甘い、甘いぞ、アリサ・バニングス！　お前がそう来るならこっちにも考えがあるぞ。

まずは軽くジャブだ。

「Ｊａ，ｉｃｈ ｂｉｎ ｈｅｉｔｅｒ．Ｗｉｅ ?ｂｅｒｄｉｒ？（はい、元気です。あなたはどうですか？）」

『……えっ？』

俺の口から発せられた言葉に五人は目を丸くしている。

それもそうだ、俺が口にしているのは英語なんかじゃない、ドイツ語だ。

もちろん、英語も言えるけど、それじゃあ面白くなんかない。

「Ｑｕ'ｅｓｔ－ｃｅ ｑｕｅ ｔｕ ｆａｉｓ？（どうかしましたか？）」

「えっ！？　え、えっと……」

また聞き慣れない言葉が出てきて、自称パーフェクトバイリンガルも混乱している。ちなみにさっきのはフランス語だ。

まだだ、まだ俺のターンは終わっていない！

「Ｐｏｒ ｆａｖｏｒ ｄｉｇａ ｏ ｑｕｅ ?（何か言ってください）」

「うっ……」

今度はポルトガル語、どうやら完膚無きまで叩きのめしたようだ。

こういうのＮＤＫって言うんだよな。

えっ、少し違う？　こまけぇこたぁいいんだよ。

「なんでアンタがあんなにも異国語が喋れるのよ！？」

テスト勉強も一段落着いて、休憩がてらお茶とお菓子に舌鼓をうっていると、話題は自然と俺のことになってしまった。

そんな俺が異国語喋れるのが以外か？

他の奴らも興味があるのか、真剣に聞こうという態勢をとっている。

そうだなぁ……

「小さい頃から親の都合で各国を飛び回ってたんだよ、そこで身につけたってことだ」

「へぇ～、蒼詩君って帰国子女だったんだ～」

高町は感嘆に似た声を上げた。他も似たような反応だ。

「ちなみに、どのくらい話せるんや？」

八神の質問に、俺は記憶を掘り起こしながら指を折っていく。

「英語に中国語、ドイツ語にフランス語、あとはスペイン語にポルトガル語にロシア語にチェコ語、ベトナム語。この九ヶ国は日常会話は問題ないな」

他はあやふやだからな、あまり自信はないかな。

『そんなに！？』

五人は驚愕の事実に遭遇したかのように目を見開いている。

まぁ、ここまでくるどドン引きの域だよな。

確か九歳から海外に飛んで、語学を頭に叩き込んだからな。

その歳でこれくらい出来たのは俺の数少ない才能の一つかもしれないな。

といっても、もしそこに移住しても生活に困らない程度だが。

「お父さんやお母さんは海外でお仕事をやっているの？」

「ん？　あぁ、まぁ、そんなもん……」

月村の言葉に、濁すように俺は答える。

「じゃあ、今は両親は海外にいるってこと？」

「まぁな。中一からは自分で生活すると決めたから、今は一人暮らしだぞ」

「そうなん！？　……それって寂しゅうない？」

ハラオウンに曖昧な感じで返すと、何か思い入れでもあるのか、八神が随分心配そうな声で聞いてきた。

「そうでもないぞ？　近所のお付き合いは完璧、知り合いに色々世話になっているから寂しいとは、思ったことはないな」

一人暮らしは自分で決めたことだからな、心配無いと見せるために。いつまでも世話になってるわけにもいかなかったからし。

「ふ～ん、アンタって一人暮らしだったんだ。そんなこと一度も言ってなかったし」

「聞かれなかったからな」

「ってことは、蒼詩君はいつも昼ご飯に持っていっている綺麗な弁当って、ひょっとして手作り！？」

八神から始まった弁当の会話から一人暮らしの風景について、色々と話のネタは尽きない。

少し話し過ぎたかもしれないが、まぁこのくらいは大丈夫だろう。

こういった会話は悪くない。

不思議と紅次達とは違った穏やかさを感じる。

それはこの部屋のせいなのか、こいつらが原因なのかは分からないけど……

機会があればまた……会話の中でそんなことを思っていた。

おまけ

授業は終わり、傾いた夕暮れが教室を照らし憂いを生み出す。

その教室に佇む三人の男達。

「今日こそ勝たせてもらうよ」

「ずいぶんと強気だな、翠よ。結果は見えているようなもんだがな」

「いやいや、今回のオレは一味違うのさ、今の今まではあまり結果は得られなかったけど、今度こそこの手で勝利を掴みとってみせるさ」

机を挟むように向かい、対峙するする俺と翠。

紅次はその間に立ち、まるで立会人の役を演じているように佇む。

いつもは飄々している翠だが、今回ばかりはいつもと違う。

そのエメラルドの瞳には嘘偽りなど存在していないようだ。

「どうやら、本気みたいだな」

「ぜひ、お試し下さい」

俺の呟きに、さっきまで緩んでいた翠の笑みは消え、真剣な表情になる。

どうやら相当自信があるみたいだ。

「二人共、準備はいいか？」

その様子に固唾を飲んで見つめていた紅次は俺と翠に視線を交互に移す。

翠が頷くのを確認すると、俺も続くように首を縦に振る。

それぞれの武器を手にし、辺りに緊張が走る。

俺も翠も、相手の視線から逸らすことなく見据え続ける。

「……では」

紅次からそんな呟きが聞こえると、一呼吸おいて鋭い声が響いた。

「双方、開示！！」

それと同時に俺と翠は机の上に裏返しておいた紙をめくって相手に突き付けた。

「数学、９５点！」←蒼詩

「数学、３点！」←翠

『……』

「さぁ、いかに！」

「いや、いかにって言われても……」

ほんの、ほんの一瞬の沈黙を破った翠にこういった言葉しか投げることができない。

翠が手にしている紙には赤字はくっきりはっきりてかでかと3の数字が書かれている。

「えーと……その、どこぞのゲーム雑誌のレビューですら取るのが困難な数字は一体なんですか、与那原さん？」

流石にこの展開は想定外だったのかあの紅次でさえ口調が変わっていた。

「このオレが全身全霊を込めた渾身の会心の全力の痛恨の点数！これでもかというばかりの、オレの実力が発揮されているでしょう！」

「いや、胸張って痛恨言われても」

というかこいつ本気でこの点数で勝とうとしてたのか？

「まさか翠よ、本気でその点で挑むつもりだったのか？」

どうやら紅次も同じ考えみたいだな。こんな思考を持つのは範疇の内かもしれないが、流石に翠みたいな発想は誰も持てん。

「考えてみてよ。3点ってことはまだ下に2点と1点と0点がある可能性だってあるんだよ？」

「それ以前にその点数まではまず取らないことに気付け」

「いやー、バカってホントすごいよな」

どうしてこいつの頭は諦めないという言葉がこの時に限って出てくるんだ？

「オリンピックにだって参加賞がある！　まずは参加しないことには何も始まらないのさ！」

「「ねーよ！」」

参加できるレベルじゃねーよ！！

「人間にはさ、奇跡っていう神様から与えられた最大の力があるんだよ。オレは神様信じてないけどね」

「鬼籍にでも入ってるといいよ」

「起きないから鬼籍と言うのだぞ」

ポジティブ思考の翠には何を言っても無駄だな。高町達が簡単だとか言っていたが、残念なことに例外は存在するんだよ。

「それに、勝ったら誰もけなしてくれないだろ」

あ、それが本音ですね。さすがだよ翠。

第十二話　勉学は学生生活の極々一部（後書き）

感想、お待ちしてまーす！

第十三話　繋いだ縁は固結び（前書き）

ようやく投稿だぜ、ヒーハー！！

えっ？　遅れた理由？　け、決してニコニコ動画でゆっくり実況動画見るのにはまってたわけじゃないよ！？

それと、突然ですがＯＰを変えます。

絆

唄：真里歌　作詞・作曲：真里歌　編曲：井ノ原智

歌詞があまりにもこの小説にマッチしているのでこれに決定しました。

第十三話　繋いだ縁は固結び

本日の休日はいろいろと海鳴市を回る日になった。
その理由はすぐに説明するが……
休日はマスターの所でバイトということもなく、今日は翠屋でまったりしようという魂胆だった。
そのはずだったんだが……
「蒼詩君、ちょっといいかい？」
翠屋に入って、早速お気に入りのシュークリームと士郎さんが入れたコーヒーを飲んでいると、その本人である士郎さんから声をかけられた。
ちなみに、今日は翠屋にあの五人娘は集まっていない。
高町すらここにいないのだ。別の所で遊んでいるか、それとも今日は都合が合わないかのどちらかだろう。
「何ですか？」
俺はコーヒーを皿に置いて士郎さんを見遣る。
「実は頼みたいことがあるんだが、この豆を柏木さんというおじいさんの所に持っていってほしいんだ」
士郎さんの話によると、その柏木さんはこの翠屋の常連さんで士郎

さんのいれたコーヒーが気にいっているそうだ。

それでよく、そのコーヒー豆の袋を持ち帰っているそうだが、どうやら今日ここに持ち帰るはずがゲートボールの予定が入ったらしく、今日は無理だという。

そこで親切な士郎さんは、そのコーヒー豆の袋を柏木さんの所まで届けようと思ったのだが、あいにく、店にいるのは桃子さんと二人だけらしく手が空かないらしい。

そこで目をつけたのが俺、ていうことだ。

「構いませんけど、俺、その柏木さんという人の家、知りませんよ？」

「大丈夫、地図を書いて渡すから」

そう言って、士郎さんはサラサラッと一枚のメモ用紙に簡単な地図を書いて俺に渡す。

そこのメモには柏木さんの家ではなく、ゲートボール場の場所が描かれていた。

なるほど、ゲートボールの予定が入っているから、そこに行けば確実に会えるな。

「じゃ、とっとと行ってきますね」

「よろしく頼むよ。お詫びと言っては何だけど、代金はなしでいいからね」

何と言う太っ腹なサービス。士郎さんから柏木さんに渡すコーヒー豆の袋を受け取ると、翠屋を出ていった。

「えーと、確か、この道を真っすぐに行けばいいな……」

歩いて数十分で、目的地はすぐ近くにまで迫っていた。

ゲートボール場があるのは知っていたけど、ここの住宅街までは行ったことがないから勝手がわからない。

ここまで行く理由がないからなぁ。

「っと、ここみたいだな」

住宅街の一画に公園よりも広めに作られた砂地だけの広場。周囲が木々に囲まれているからか、殺風景には見えない。

そこには老人達がゲートボールを行っていた。

「さて、柏木さんとやらはどこかな……」

今思ったが、俺その人の顔知らんがな。

けど、大声で名前を呼んでも迷惑だしな。

誰かに聞いてみるか……。

「……って、お？」

周囲を見渡すと、老人達の中に一人だけ異彩を放っている子を見つけた。

真っ赤な髪を長くして二つに分けて三つ編みにしており、何といっても目つきが鋭い。

背丈は俺の胸ぐらいの少女で、そんなのがゲートボールで使うハンマーみたいなのを肩に担いで俺を見ていた……というか睨んでいた。

でもなんだろう。その視線がやけに生意気というか愛らしいというか、ぶっちゃけ恐くない。

とりあえず、あの子に聞いてみるか。

「ちょっといいか？」

「……何だよ？」

近くにいてもやっぱりこの子は鋭い睨みを利かせて俺を見ている。

しかし、そんなことされても俺のぼうぎょりょくは下がらないぞ？

「ここに柏木さんって人、居ない？」

「柏木のじーちゃん？」

すると、赤毛の子からの視線は突然緩くなり、逆に、疑問に満ちた視線を向けてくる。

「その人がよく行っている常連の店からお届けもんがあってな」

そう言って、手に提げている袋を見せる。翠屋で使われているデザインの袋を見て、赤毛の子は納得した表情になった。

「ああ、翠屋のか……」

「知ってるの？」

「あったりまえだ、あそこのケーキはギガうまだからな」

結構可愛いげがあるじゃんこの子。ギガうまか……中々面白い言葉だな。

「特にシュークリームはテラうますだよな」

「おっ、けっこうわかってんじゃん！」

明らかに年上に対する会話じゃないが、そこは気にしない。年下に敬語がどうこうとか、そこまで器は小さくないぞ？

「ちょっと待ってろよ……おーい、柏木のじーちゃん！！」

赤毛の子が一人の白髪老人に声をかける。

するとその老人は年寄りとは思えない軽い足取りでこちらにやってきた。

「何じゃ、ヴィータちゃん、儂に用かの？」

「いや、あたしじゃなくて、こいつがじーちゃんに用があるんだってよ」

ヴィータと言う赤毛の子がこちらに視線を向けると、つられて柏木さんと思われる老人も俺を見た。

「何じゃ、若いの？　この老いぼれに何か用かの？」

喋り方は完全に老いたそれだが、まだまだ介護は必要ないと思えるくらい立ち方もしっかりしている。

とりあえず俺はその柏木さんに一礼して要件を伝えることにした。

「ども、翠屋の高町士郎さんからお届け物です」

そう言って袋を渡すと、柏木さんはおおっ、と声を上げてそれを受け取った。

「そう言えば今日のゲートボールで断ったんじゃが、わざわざ届けてくれるとは、すまんのぅ」

柏木さんは柔和な笑みを浮かべる。よしっ、これで俺の役目は終わったな。

「んじゃ、俺はこれで……」

そう言い残して、去ろうとしたのだが……

「待ちなさい、若いの」
突然柏木さんに声をかけられ、足を止める。
どした？　何か問題でもあったか？
「お主……ゲートボールに興味はないかのぅ？」
「……はっ？」
いきなりのゲートボール勧誘？
隣にいるヴィータもポカンとしている。
「じっ、じーちゃん！　何でいきなり！」
「なに、これも何かの縁かと思うてのぅ、ただ帰るのも名残おしいじゃろ？」
そこで、俺に振るか。確かにゲートボールなんて人生の中でやったことなんてない。
というか、あると答える人が小数だと思う。
だがまぁ、単に帰るというのも面白くないな。
「いいだろう、じいさん。この俺とやり合うっていうんだったら、相手してやんよ！」

「いや、じーちゃんそんな事一言も言ってねぇし！」

「がっはっはっは！　若いのはそうでなくてはのぅ！」

「じーちゃんも乗ってないで、やめさせろよっ！？」

本気で焦っているヴィータと豪快に笑い飛ばしている柏木のじいさん。

ゲートボールのルールなどはヴィータに教えてもらえばいいさ。

問題なのは、ゲートボールの技術じゃない、いかに相手と楽しめるかだ。

中々ノリノリな柏木のじいさんだからな。こりゃあ、手を抜くわけにはいかないな！　俺、初心者だけど！

ノリと勢いで始まったゲートボール。内容は省略するが、簡潔にまとめると、

『相手のゴールにシューート！！！』

『超エキサイティング！！！』

『ヴィタえもん、バトルドームも出たぁ！！』

といったところだ。

えっ？　伝わらない？　馬鹿だなぁ、よく見て考えろ。

そんなわけで数時間ゲートボールで盛り上がって、途中でおいたますることにした。

じーさんばーさん達には皆仲良くなったがヴィータだけは何故か敵視された。

そんなにヴィタえもんが気に入らなかったか？

思わずやり込んでしまったので、空はすっかり夕暮れに朱く染まってしまっていた。

本来なら目的も果たしたことだから、まっすぐ家に帰ろうと思ったが……

「そういや、今日は剣道の稽古だったな」

近所のガキ達がこの近くの剣道場で練習してたっけな。ついでだから様子でも見に行くか。

足を向きをある方角へ向け、進めた。

辿りついた剣道場には今でも声を張り上げて、練習している風景が見てとれた。

確かこの時間帯だとそろそろ終わるはずだが、もう少し待つとするか。

そう思い出入り口付近で子供たちの練習風景を見ながら待っていると、ある一点に釘点けになった。

それは防具を被って竹刀を振っている子供たちの中に唯一防具を付けていない一人の人物。
この世には存在しないような艶やかな桃色の長髪をポニーテールにし、一心不乱に竹刀を振る子供たちを腕を組みながらただ見つめている。

腕を組む際、胸元に強調された双山から見て女性だとわかる。
横顔から見ているだけでも、顔のパーツ一つ一つが整っており、遠くから見ても凛としたイメージが漂っていた。

「……」

ふと、その女性と目が合う。
それは偶々というよりは、俺の視線に気づいていたに近い。
刃のような鋭い視線が、俺に突き刺さる。まるで敵味方を見定めるかのように。

そんな視線を俺はに意に介せず、子供たちの練習風景を眺めた。
鍛錬を踏ん切りがつくまで彼女の視線は外れることはなかった。

「あっ！　蒼詩兄ちゃん！」

練習が終わり、帰宅準備をしている一人の子供の声をきっかけに顔見知りの子供たちが集まってきた。

「よお、練習おつかれさん」

「練習見に来てくれたの？」
「まぁな、近くに用事があったからついでに来てみた」
「用事？」
「簡単に話すと、じーさんばーさんの日常に参加してきた」
「蒼詩兄ちゃんが加わると、そこは日常じゃないよ」
大きなお世話だ。だが否定はしない。
「すまないが、いいか？」
ふと、声をかけてきた方を辿ると、先ほどからこっちを見ていたあの女性がこちらにやってきていた。
「あっ！　シグナム先生！」
子供たちは嬉し顔で彼女を見る。なるほど、シグナムさんと言うのか。
シグナムさんは子供たちに軽い返事をすると、視線を俺に向けてきた。
「彼とは知り合いか？」
「近所に住んでいる人ですよ、先生」
「面白くて変なんですよ、蒼詩兄ちゃんは」

おいそこ、なんだその紹介の仕方は。俺をなんだと思ってやがる、もっとやれ！

「蒼詩……？」

「ども、結城蒼詩です。近所の子たちがお世話になってます」

とりあえず、自己紹介をしてみるがシグナムさんはずっとを俺を凝視していた。

先ほどのような警戒心はないが、いささか疑惑の目をしている。

「お前は……」

シグナムさんが何か呟いた次の瞬間、彼女のズボンのポケットから携帯の呼出音が鳴る。

失礼、と一言断りを入れると、こちらに背を向け携帯に出る。

「はい、もしもし。はい……ちょうど終わったところですから、これから道場を出ます。はい……はい……わかりました。ところで、結城蒼詩をご存知ですか？」

ん？　なしてそこで俺の名前が出る？

「……そうです、おそらくその結城蒼詩です」

どの結城蒼詩ですか？　そんなにいっぱいいんの？　俺って……

「彼がすぐ傍に……えっ？　よろしいのですか？　はい……はい……わかりました」

一体俺の名前を使ってなんの話をしているのかと思っていると、シグナムさんは携帯を切り振り返った。

「蒼詩、良ければ晩飯でもどうだ？」

「なにこの超展開」

いきなり夕食のお誘いで、おもわず某海藻類一家のお兄さん的悲鳴を出しそうになったが、そこはなんとか踏みとどまる。

シグナムさんの言葉にも驚いたが、なにより驚いたのが？――？――？――

「まさか八神の家族とはね……」

そう、先ほどシグナムが話していた電話の相手は何を隠そう八神本人だったのだ。

どうやらスーパーで夕飯の買い出しが終わったところで、シグナムさんの様子を確認したそうだ。

そこでシグナムさんは俺の名前を出すと、一緒に食べようということになった。

なんでも八神はよく俺のことについて話しているらしい。

ハラオウンや月村もそうだが、八神まで俺の話をネタにするとは、やるじゃないか。

「着いたぞ、ここだ」

俺とシグナムさんは子供たちを見送った後、八神の家と思える一軒家に着いた。
見たところ、どこにでもある家だ。俺のと大して変わらない。

「気兼ねせずに入るといい」

「んじゃ、お邪魔しまーす」

玄関に入り、靴を脱いでシグナムさんに続く。
廊下をまっすぐ進むとリビングになっていた。

「ん？　シグナムか、おかえり……」

テレビ前に設置してある白いソファに座ってくつろいでいる人物がこちらに振り返る。
するとこちらの存在に気付くと、ピシィと音を立てて硬直した。

「お、おお、お、おまえ……！」

ふるふると震える指を俺に突き付ける赤毛の少女。
赤毛？　もしやこいつは……！

「ヴィタえもん！」

「ヴィータだ！！」

やっぱり。

今日、ゲートボールで出会った少女だ。まさかここの住民だったと

は。

「ていうかお前、なんでここに来てんだよ！？」

「八神に夕食食べないかと誘われた」

「なにぃ！？　じゃあ、はやてがいつも話していた結城蒼詩って……」

「実は俺だったのだ。今の今まで隠していてすまなかった」

「いや、お前とは今日会ったばかりだし！？　隠すもなにも名前言ってなかったし！？」

そういえばそうだったな。じいさんばあさん達には『若いの』とか『兄ちゃん』とかでしか呼ばれなかったし。

「まぁ、そんなわけでゆっくりしていけ」

「ここはあたしの家だ！！」

おっしゃるとおりで。

「ただいま～……って、あっ、蒼詩君いらっしゃい～♪」

しばらくヴィータとシグナムさんと話してしていると、八神が後ろ

にいる短い金髪のおっとり美人と、蒼い毛色をした変わった子犬を連れて帰ってきた。

「おかえり～」

「だからここはお前のうちじゃねぇって！」

いや、ここはそう返すのが普通だろ。
そんな様子を様子を見ていた八神はクスクスと微笑んでいた。

「なんや、もうヴィータとは仲良くなってしもうたん？」

「はい、今日の老人会で会ったようです」

八神の言葉に返すシグナムさん。
どう見てもシグナムさんが年上にしか見えないのに八神に敬語とか変わってんなぁ。

「八神、今日は夕飯は何ぞや？」

「今日はハンバーグや！　正に定番のメニューやな」

ハンバーグとな、こいつはワクテカ、期待せざるを得ない。

「ほな、私はすぐに待っててなぁ」

そう言ってすぐさま台所に向かう八神。うーん、俺も手伝うべきだと思うがまずはさっきからずっとニコニコしながらこちらを見ている美人さんにご挨拶するとしよう。

「ども、初めまして。八神と同じ学校に通っている結城蒼詩と言います」

「あっ、これはどうもご丁寧に。私はシャマルっていいます♪　はやてちゃんがいつもお世話になっています」

「いえ、お世話しています」

おっとりしているが包容力溢れるお姉さんですな。
それでこの蒼い子犬が……

「あっ、この子はザフィーラって言うんですよ」

ほう、ザフィーラとな。額にひし形の宝石が埋め込まれているが、仕様なのか？
ザフィーラは何の声も出さずにずっとこっちを見ている、尻尾も振らずに。

「よろしく、ザッフィー」

「わふっ！？」

そんな名前で呼ばれるのが意外だったのか、素っ頓狂な声を上げるザフィーラ、もといザッフィー。
といか、俺の言ってることがわかるのか？

「ふふ、はやてちゃんの言ってたとおり、面白い子ですね」

相変わらずニコニコと柔和な笑みを浮かべているシャマルさん。うん、癒される。

「それじゃあ、私ははやてちゃんの手伝いに行ってきますね」
そう言って台所へ向かおうとするシャマルさんであったが、突如横から二つの影が割り込んでくる。ヴィータとシグナムさんだ。
「シャマル、今日は客人が来ている。我々なら我慢はできるが、だからといってお前を台所に立たせるわけにはいかない」
「はやてには悪ぃけど、今回ばかりは駄目だ」
「えぇっ！　そんな～……」
二人の辛辣な言葉に落ち込むシャマルさん。
「なぁ、ザッフィー。シャマルさんって料理ひどいのか？」
「……（コクン）」
はっきりと首を振るザッフィー。そこまで反応を示すのなら相当なものなんだろうな。
なんてったって、彼女を二人がかりで止めようとしてるんだし。
「ちょ！？　ち、違うのよ蒼詩君！　たまにウニとたわしを間違えるだけで……」
「……八神の手伝いに行ってきます」
「蒼詩くぅん！？」

ごめん、さすがの俺もフォローする自信がない。

「お前は料理は出来るのか？」

「人並みに、自炊ぐらいはできます」

「んじゃ、はやての手伝い頼むわ。こっちはシャマルが台所に入らないよう見張っておくから」

「ううっ、みんなして酷い……」

なんだか、この一件で八神家の皆さんと親しくなった気がするな。

「八神、暇だから俺も手伝うわ」

「えっ、でも蒼詩君はお客さんだからそんなのことせんでも……」

「一人であの人数分を作るとなると時間がかかるだろ？　それに俺も腹が減ってんだ、お客さんを待たせるわけにもいかないだろ？」

「あはは、それ蒼詩君が言う台詞やないで。それじゃ、あんな綺麗な弁当をつくるほどの腕前、見せてもらうで？」

「合点承知！」

『そういえばシャマル、あいつはどうした？』

『はやてちゃんと一緒にいるわ。もっとも、蒼詩君が帰るまでは出られないでしょうけど』

『そうか、あいつには悪いが少し我慢してもらうしかないな……』

『そうね……でも、あの子ならきっと楽しみながら見ているんじゃないかしら？　だって、会ってみたいって真っ先に言ってたんですもの」

『そうだな……』

しばらくして晩飯が出来上がると、八神家の食卓に俺も混ざっていただいた。

賑やかな食卓はいつも一人で食べるどんな料理でもよりおいしくしてくれる。

そんなことを今回を通して強く思った。

食事中に色々と話をしたが、ヴィタえもんのネタは八神にとっては本日一番のツボらしく、腹を抱えて爆笑していた。ヴィータは怒っていたけどな。

第十三話　繋いだ縁は固結び（後書き）

ようやく出てきましたヴォルゲンリッター。
中々出せるタイミングがなかったのでこの機会にということで、いささか強引だったかもしれません。

ニコニコ動画のゆっくり実況はネタが多いのでネタ探しにも役に立ちます。

ちなみにバイオハザード2のゆっくり実況が気に入っており、#フカヒレさんのは特に面白いです。
あと、シュタインズゲートのフゥーハハハ逆再生によるまどかの動画は腹筋崩壊ですｗｗ

次回は少しネタバレしますが、推理モノに挑戦したいと思います。

現在執筆中ですが結構な量になると思います。

感想等、お待ちしております。

第十四話　結城蒼詩の事件簿～起～（前書き）

前回、宣言したとおり推理モノに挑戦したいと思います。

一通りに書いてはみてたけど、本場ものと比べると鼻で笑われてしまうほどですが、ご了承下さい。

第十四話　結城蒼詩の事件簿～起～

「・・・ふぁ」

不意に出てしまった欠伸をかみ殺しながらもシャーペンを持ち、紙へはしらせる。

今現在、英語の授業の真っ最中。昼休憩が終わった五時間目の授業はどうにもこうにも眠くなってしまう。

現に紅次はぐっすりと爆睡。翠に至っては・・・・・なんか悶えている。

睡魔と闘うあの感覚が快感なのだろう。

前の席にいるハラオウンは、黒板に書かれた英文と和訳を板書するために視線を黒板からノートへと急いで動かしている。

授業の内容はまだ入学して間もないから『Ｉ　ａｍ　Ｔｏｍ』だの『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｐｅｎ』だのシンプルなものだ。

ハラオウンは名前のとおり外人だからそういうのは得意かと思ったんだが、どうやら祖国が異なるようだ。

だが、構文とかはどこも似たようなもんだから少しは簡単じゃないかと思うけど、多分、あいつなら難易度関係なく真面目に板書するんだろうな。

ヤバッ、ちょっと視界が虚ろになってきた。

しょうがない、寝るとするか。

聞かなくてもわかる内容だし。

キーンコーンカーンコーン♪

五時間目も終わり、あとは六時間だけだ。

「次は理科室だったか？」

ずっと寝ていた紅次が席を立つと同時に背伸びをして、俺の元にやってくる。

「それじゃあ、行くとしようよ」

今日最後の授業だからだろうか、やたら翠のテンションがいつもより高めだ。

いや、こいつのテンションは基本高めだからなぁ、大して変わらんか。

そう思いながら授業道具を持って席を立とうとした時・・・。

「え？　あの三人を？　別にいいけど大丈夫なの？」

このクラスにあの二人は見たことがない。となると別のクラスだな。

するとバニングスが振り返ると、俺達と目が合う。

そして、その視線を逸らさず、こちらへとズンズンと歩み寄る、というよりは迫ってきた。

「ちょっと、アンタ達に用があるってさ」

バニングスの言葉に俺達は顔を合わせる。というかバニングスさん、どうしてそんな警戒をしておられるのですか？

「我々三人、ということか？」

「オレ達を呼ぶ異性がすることはただ一つ、屋上で告白に決まってるじゃないかぁぁぁ！！」

「待て翠。相手は二人だぞ、万一、それがそうだとしても必ず一人は振られるということだ」

「それはただの罰ゲームにしかならないな」

「ならオレを振ってください！　むしろぶってくださぁい！！」

「いいからとっとと行ってこんかい！！」

「メぎょっ！！？」

いつものノリで会話を始めてしまったから、痺れを切らしたバニングスが翠を容赦無くぶった。

よかったな、翠。早くも願いが叶って。

仕方なく、俺達四人は俺達を所望している女子二人の元に向かう。

・・・・・・ん、四人？

「なぁ・・・・・・何で、バニングスまでついてくるんだ？」

何故かバニングスまで彼女達の元までついてきた。

「決まってるじゃない。アンタ達が何かしでかすかわかんないから。監視よ！」

完全に信用ゼロな目でにらみつけてくるバニングス。
んー、今までそんなに警戒心を持たれた事はないのになぁ。
小学と中学はこうも見方が変わるもんなのか。
「まぁ、いいや。それで俺達に用とは？」
俺達を呼び出した女子二人の前に立ち、目を向ける。
「いや、あたしは違うんだけど、実はこの子があんた達に用があるらしいって」
先に口を開いた女子はバニングスによく似た快活でスレンダーな体格をしている。
促されたもう一人の女子はこれまたハラオウンみたいにスタイルがよく、内気というか奥ゆかしい印象がある。
バニングスの話によると三組の子らしい。
「えっと実は、あなた達に頼みたいことがあるんです」
うん、知ってる。
学校にカオスを巻き起こす俺達三バカカラスに、普通に話し掛けるなんてそんな人くらいだ。
でも、そうなるとハラオウンやバニングスはどうなるんだろうか？
まぁ、あいつらはちょっと特殊かもな。

「私、部活で弓道をやっていて、昨日いつものように部活を終えて更衣室に戻ったんです。そしたら……」

「「「そしたら？」」」

語りだす彼女は真剣な表情だったので、その雰囲気に俺達も自然と真剣になる。

「……無かったんです」

「「「「……何が？」」」」

四人揃って聞くと、彼女は手をモジモジと弄り、頬を赤らめると小さく呟いた。

「……し、下着が……」

……

……

……何、だと？

「「「「何いいいいいい！！？」」」」

「わっ！　わっ、こ、声が大きいよっ！」

「悪い、それって本当なのか？」

思わず、聞き返す。だって今どき下着泥棒なんてやる奴っているのか？

「実は彼女だけじゃねぇんだ。聞いたところによると他のクラスの子も盗まれたらしい……あたしもその一人でな……」

どうやらこの人も被害者らしい。そのスレンダーな女子はその事について説明してくれた。

他の子も放課後の部活が終わった後、更衣室に戻ってみたら下着が無くなっていたらしい。

しかも、部活の後という生徒もいれば体育の授業後に無くなっていたという子もいる。

そして妙なのが、下着が無くなったのはクラスで数人、被害者が限られているということだ。

「全員盗まれたわけじゃないの？」

「ああ、各クラスで数人という感じでな。それ以外の子は全くの被害なし」

「先生とか顧問に伝えなかったのかい？」

「最初はそうしようと思ったさ。けど、被害が余りにも少ないし、下着泥棒だとか言って公にされたら被害者としてはたまったもんじゃないからな」

そう言って、被害者である女子に視線を向けると顔を真っ赤にして

俯いた。
確かに、その噂が広まったら被害者側はいたたまれないからなぁ。
「でも、どうしてそれをこいつらに教えるわけ？」
バニングスは綺麗な眉を寄せて、俺達を睨む。
やめろよ、翠が喜んで悶えてるだろ？
「えっと、何か困ったことがあったら三バカカラスに聞けばいいって……」
「確か、小学の頃はよそのクラスのいじめを解決したそうじゃねぇか」
そういえばそんな事があったな。
紅次と翠も、ああー、という懐かしむような声を上げる。どうやらその事について思い出したらしい。
あれは小四のころだったか。
学校が終わって帰ろうとした時、とある教室で泣いている生徒を見つけた。
どうした、と聞いても、その子は何でもないと答えるだけ。
気になっていると、不意にその子の足を見た。
上履きを履いていないのだ。
しかも靴下も無い、完全な素足だった。
これはいじめだと確信した俺はその子に問い詰めた。

しかし、その子も中々認めようとはしなかった。
仕方なく、諦めたフリをしてこの場を去ると、その事を紅次と翠に教えた。

そして、その子の様子を観察するため、小学校にも仕掛けておいた監視カメラ（卒業後全て撤去した）を見ると、案の定、その子は他の生徒、しかも上級生にいじめられていた。

すぐさま現場に向かい、止めに入ると、上級生達はエラそうな態度で退散しろと言ってきた。

その時俺達が言った台詞、

『控えおろう！　この方をどなたと心得る！　恐れ多くもかの副将軍、与那原翠様であせらるぞ！』

『この桜吹雪が目に入らぬかぁ！』

『パーパーパパーパパーパーパーパーパパー♪（↑暴れん坊将軍のテーマ）』

は、いい具合で空気をぶち壊したのが傑作だったな。

その後、上級生が殴りかかってきたけど、完膚なきまでボッコボコにしてやった。

まぁ、上級生とはいえ、相手は小学生だからボディだけ狙ってあげたぞ。

いじめられた子は結局最後には、いじめであることは認めたので、何かあったら呼びに来い、とどこぞのヒーローの台詞を吐いて事件は解決した。

それがかつてやった三バカカラスの活動記録の一部である。

「へぇ～、あんた達がねぇ……」

バニングスは心底驚いている様子で俺達を見据えていた。

よっぽど意外だったんだな。

「ともかく、話はよくわかった。で、報酬は？」

「なっ！！？　あ、あんた！！」

驚きから怒りへと表情を変えるバニングス。

「悪いけど、頼まれ事とはいえ、タダで受けるほど俺達は君子聖人じゃないからな」

「ましてや我々は三バカカラス。何事にも縛られず、自由気ままに混沌を起こす」

「頼むならそれ相応の見返りを求めるのが交渉ってやつじゃないのかな？」

そう、別に俺達は好きで何でも屋をやってるわけじゃない（というか、そんな事やった覚えないし）向こうから勝手に話を持ち込んでくるだけだ。

「えっと……それなら、これ」

そう言うと、被害者の女子は三枚の紙切れを渡してきた。

「これは？」

よく見ると何か書かれている……引換券？」

「私の家、和菓子屋を経営してるの。だから、もし、下着泥棒の犯人を捕まえたら、うちのオススメの和菓子を一人一箱分をその紙で交換してあげる」

彼女が説明すると、紅次と翠のほうを見てみる。二人とも首を縦に振って答えてくれた。

「よし、交渉成立だ」

そう言って、紙切れを彼女に渡す。うちは成功報酬だから問題を解決した際にもらうとしている。

「うん、ありがとう！」

頼みを聞いてくれるのがよっぽど嬉しかったのか、精一杯の笑顔を見せてくれた。

「っと、そろそろ移動しないとな」

「「了解」」

要件を終えると、次の授業を行う教室へ向かった。

『本当に解決するつもりなのかしら？』

『あの三人は一度頼まれたら必ずやり遂げるって、一部では有名だから』

『ふ～ん、でもちょっと意外だったわ、あいつらっていつもふざけているからいい迷惑なんじゃないかと思っていたけど』

『うん。でも、彼の言ったとおり、君子聖人ってわけじゃないんだ』

『でも報酬って、お菓子の無料券じゃない？』

『ううん、確かに頼まれたら何でもやってくれるけど、それは相手がよっぽど真剣でないとやってくれないんだよ』

『へー、でもやっぱり意外よね……』

時は過ぎて放課後。

ＨＲをすませた俺達は例の下着泥棒を探すべく行動を開始した。

わけなのだが……

「なして、あんたらが付いてくるの？」
廊下を歩いている俺、紅次、翠の後ろにいる人物達。
「あたし達が被害に会っていないとはいえ、そんな奴放っておくわけにはいかないわよ！！」
「ごめんね、蒼詩。勝手についてきてちゃって」
二人の金髪美少女のこと、バニングスとハラオウンがいた。
何でも、休憩でのことをハラオウンに話したらしい。
「にゃはは、なんか探偵みたいだね」
「ホンマや、なんか推理小説みたいでワクワクするなぁ」
「探偵というよりは捜索する刑事のような感じかな？」
「そして、なしてお前らもいる？」
まだ、バニングスやハラオウンなら同じクラスだから問題無い。
しかし、なんで他のクラスまで巻き込んでんのさ？
「バニングス、説明ヨロ」
「さ、最初はほんの会話のネタとして喋っただけなんだけど、それを聞いた途端、はやてがおもしろそうだから参加しよって……！！」

「せやかて、こんな楽しそうやのにアリサちゃんとフェイトちゃんだけやるのはずるいやん」

いや、ハラオウンはともかくとしてバニングスもこの事件を手伝うなんてこれっぽちも聞いてませんけど？

「ふむ、随分と豪華な組み合わせだな」

隣にいる紅次が顎に手を当てて、感慨深く呟く。

今廊下を歩いている自分は俺達三バカ、そして五大女神の全員。

もはやこの組み合わせだけで十分カオスだ。

「まぁ、別に駄目じゃないからいいけど。とりあえず今回の依頼内容を説明するぞ」

七人をこちらに注目させ、説明と共に現状を報告する。

「まずこの下着泥棒の件では数人の女子が被害に会っている。と言ってもそんな大規模に被害が出ていない。つまりまだまだ被害が拡大する可能性が高い」

「被害が広がる前に犯人を捕まえるってこと？」

「そうだな、ハラオウンの言う通りだ。犯行現場は女子更衣室、これはどこの被害者も同じ証言をしている」

「でも、今手にしている情報はこれだけ。これじゃあ判断材料が少

ないね」

翠の言葉に俺と紅次は頷く。

盗まれた時期は体育の時間と放課後の部活。恐らくその時間帯を狙っての犯行。

そして今もなお、見つからずじまいなのだから手慣れている様子だ。

「そういうわけで、より詳細な情報を得るために実際の現場に向かうとする。すなわち……女子更衣室に！！」

そう力強く言い放つ。

「その通りだ。これも犯人を捕まえるための立派な口実。決して下心などありはしない」

「そうさ！　オレ達は正義！　事件解決のために女子更衣室に入る義務がある！！」

俺の言葉に続く紅次と翠の賛同の声。今まさに俺達三バカカラスの心は一つとなる！

「「「さあ！　女子更衣室（パラダイス）へ！！！」」」

「行かせるかぁぁーー！！」

刹那、靭かな蹴りがバニングスの右足から放たれる。

一瞬、音速でも越えたかと思うほどの空気を切り裂く廻し蹴りだ。

「「「ゲホゥゥゥゥ！！？」」」

それが鳩尾へと綺麗に入る。一人一人無駄なく丁寧に。

肺から空気が全て吐き出され、しかも肺が痙攣を起こしまともに息が出来ない。

「まったく、少しは見直したと思ったのに最っ低ね！」

「三人共、いくらなんでもそれは犯罪や」

うずくまる俺達をバニングスと八神は冷ややかな目で見てくる。他の三人に至っては苦笑いだ。

「けど、犯行現場が女子更衣室なのはどう言おうとも覆りはしないぞ？　実際行ってみていくつかの情報を得ないといけないし」

「でも、蒼詩君達が行く必要は無いじゃない？」

「他に誰が行けって言うんだ？」

「私達なら問題無いんじゃないかな？」

高町、月村の言葉に俺はふと思う。

確かにこいつらなら女子更衣室に入ったところで何の違和感を感じないだろう。

「そうと決まれば早速現場に行こう♪」

高町の明るい声によって俺達は女子更衣室へ向かった。

「やっぱり頼まれた俺達が行くべき……」

「しつこいっ！！」

サーセン。

第十四話　結城蒼詩の事件簿～起～（後書き）

大体四話くらいの量になりますが、大半はネタが入っています（汗）

下着泥棒は学園コメディの基本ですが何か？　異論は認めません！

大学の夏休みもそろそろ終わるので、早めに投稿したいと前向きに検討したいと思います！

感想等、お待ちしてます。

第十五話　結城蒼詩の事件簿～承～（前書き）

続きです。

第十五話　結城蒼詩の事件簿～承～

ついにやってきた秘境の地。俺達は目の前にある神秘の扉にくぎづけになっていた。

「ここか、女子更衣室……」

思わず生唾を飲み込み、緊張感漂わせながら恐る恐る扉に手をかける。

「……させるとでも思った？」

「いいえ、滅相もない、かしこ」

どうやらシリアスな感じすら出しても駄目らしいです。

仕方ないの無いので、耳を澄ませて中の様子を確かめてみるが声は聞こえてこない。

「この時間帯だから、もうみんな部活に行ってるみたいだね」

「つまり、今ここは宝の山！？」

「下着泥棒を捕まえたで！　誰か警察呼んできて！」

「お代官様、お慈悲を！！　あぁ、でもこんなチクチクした視線も気持ちいいかもしんない……」

翠の心の声が口から漏れてしまい、八神の迅速な対応で危うくお縄

につくところだった。

「じゃあ、私たちが中の用事を見に行くね」

高町がそう言うと、それに続くように四人も女子更衣室の中へ入っていった。

しばらくすると、高町達が出てきて現場の様子を説明してもらった。

一言で言えば特に痕跡は無かったらしい

「女子更衣室にこれといった情報はなかったことか」

「じゃあ、犯人は正面から入ったってこと？」

「そのことなんだが、我々が仕掛けてあるここ周辺のカメラの記録を調べてみるのはどうだ？」

紅次に校内に仕掛けてあるカメラ（何故かハラオウン達が知っている）に犯人が映っているかもしれないと思い、今度は俺達の本部へと向かった。

俺達は例の作戦室で先程紅次が言った更衣室前の監視カメラの映像を見てみた。

「まさかと思うけど更衣室の中にもカメラがあるんじゃないでしょうね？」

するといきなりバニングスがそんなことを口にしてくる。まぁ、更衣室前にカメラがあるのだから疑うのは普通だろうな。

「大丈夫だ、バニングス。これは作戦をスムーズに進行ために状況把握として使うから、利用価値のない場所は極力設置しないことにしているから」

「そこまで言うならいいけど、なんか着替えよりもアンタ達の騒動に負けるなんて納得いかないわね……」

規則は守らないが、相手の名誉を守るのが俺達三バカカラスの信条だからな。

カメラには廊下が映るだけで更衣室に入る不審な奴は見当たらない

「ねぇ、これっていつの記録なの？」

「午後1時頃。ちょうど体育の授業を行っているな」

高町の質問に紅次が答える。

俺達は5時間目の始まりから終わりまで早送りで見ていたが怪しい人は現れなかった。

「窓から入ったとか？」

「どこの蜘蛛男やねん、なのはちゃん」

にゃはは、と独特の笑い声を出す高町。

まぁ、カメラに映ってない以上それしか考えられないのだが。

「なに、答えは簡単さ」

翠が自信満々に告げる。

「犯人は空いているロッカーの中に朝からずうっと潜んでいたのさ！」

「「「「「な、なんだってーー！！」」」」」

室内に響く俺達の叫び。翠の突拍子のない発想とその残念さに愕然とした。

「それ、どんな苦行よ……」

「オレ、すっごい楽しいけど？　指一本動かせない所に閉じ込められるの。少しずつ天に向かって意識か羽ばたいていくようなあの感覚。気持ちいいよ」

相変わらずダイナミックなバカだな翠は。俺達も大概だがこいつはその予想をはるか斜め上をいく。

途端に俺と紅次は顔を見合わせる。

「「つまり、犯人はお前か！！」」

「えっ？」

「狭いロッカーの中に丸一日入って待てる変態。そんな奴はこの学

園に一人しかいない！」

「翠、語るに落ちたな。残念だ、真に残念だ。まさか親友をこの手で追い詰めなくてはならないとは」

「ま、待ったー！　それは無い！　絶対断固完璧に無い！　オレは無罪だよ、やってない！」

「紅次、連行しろ」

「ノ、ノー！　弁護士を、弁護士を呼んでくれー！」

「わかったわかった、とりあえず牢屋である体育館倉庫に閉じ込めておく。そこでしっかり反省していろ」

「あ、ありえないー！　でもそんな状況にちょっぴりきゅんきゅん来てるオレがいるよ？　ど、どうすれバインダー！？」

紅次に引きずられながらも何かを訴え続ける翠、そんな光景には某子羊の歌が似合う気がした。

「「「「「……」」」」」

「それで犯人がどうやって侵入したかについてなんだが……」

「って、今のはツッコミ無しなの！？」

「なんとなく、翠君の立ち位置が分かった気がする……」

驚くバニングスと苦笑いを浮かべる月村。月村の考えはきっと正し

いと思う。

「まぁ、確かに中に隠れるってのは悪くない考えだと思うけど。更衣室の中って、ロッカー以外にそういう場所は無かったって言ってたよな？」

「うん、ロッカーがズラーって並んでるだけの殺風景な場所だったよ。カーテンだって床に届くほど長くないから足は見えちゃうし」

「となるとロッカーか……。いや、そもそも空いてるロッカーなんてあるのか？」

「無いことはないよ。でも……はやてちゃん、壊れているロッカーとかってあった？」

「いいんや。全部調べてみたけど、壊れてるものは一つも無かったで」

「ならやっぱり無理だね。更衣室のロッカー、別に誰専用とかそういうの決まってるわけじゃないから」

なるほど、高町と八神の言ってることが確かなら、誰も開けないって保証のあるロッカーはないということだ。

そんないつ誰に見つかるかわからないロッカーに隠れるなんて、ギャンブルにしては分が悪いな。

となると、隠れることは不可能ということだ。

「振り出しだな……」

俺のそんな呟きに複数のため息が廊下に響き渡る。

これほど情報が集まっても、判明したのは怪しい人物はいなかったということだけだ。

「ほんま、どこぞの推理小説みたいやね、誰も出入りしていない部屋から、いつのまにか消滅する宝物」

「三流ミステリーだと、実は抜け穴があった、というオチがついてるしね」

「なるほど！　よしっ、今度こそあのエルドラードへ……」

一瞬、意識が暗転した。な、何が起こったんだ！？

「手加減はしたわ、次は確実に意識を刈り取る」

なんとそこには臨戦態勢をとっているバニングスがいました。彼女から放たれたと思われる蹴りの一撃は、重くてスピーディで、こんな一撃をもらう俺は、きっと特別な存在なのだと理解しました。

「でも、困ったね。もう手がかりが無くなったみたいだし」

「でもここで諦めるわけにもいかないわよ。下着を盗む犯人なんて放っておくわけば被害がもっと広がるかもしれないわ」

ハラオウンの言葉にバニングスがなにやら燃えているみたいだ。

確かに、あんなうらやまけしからん奴1人だけ楽しむのは許せない。

「犯人を捕まえたら、どんな色なのか聞き出してやる！！」

「……もういっそコイツが犯人でいい気がしてきたわ」

「アリサちゃん落ち着いて！　言いたいことはわかるけど、それじゃあ解決しないよ！？」

高町が必死にバニングスをなだめようとする。

結局、まともな結果も出せないまま時間が過ぎていくのであった。

「ここまで何か有力な情報はこれといって無かったな」

「明日、その被害に会った子達に色々聞いてみるのはどうかな？そうすれば何かわかるかもしれないし」

ハラオウンの言い分に俺達は納得した。これ以上、ここに居ても何の意味も無いからな。

仕方なく調査はここまでにして、俺達は帰路につくことにした。

その後、体育館倉庫から何かに悶える謎の声が聞こえたという噂が立ったらしいが、真相は誰も知らない。

下着窃盗事件発覚から次の日、俺達は屋上に集まって昼飯を食いながらハラオウン達から報告を受けた。

こいつらに午前中、被害者の女子達に事情聴取をさせるようしておいた。男の俺達から聞くよりも同じ女子の方が気楽に話せるしな。

「被害にあった子達に話を聞いてみたんだけど、どの子も体育の授業や部活が終わって更衣室で着替えようとした時には無くなってたみたいね」

「あと、被害にあった当日の体育の授業で欠席だったり早退した男子生徒はいなかったみたい」

バニングスと月村の報告を聞き、一旦情報を整理してみる。

まず、被害者の証言の共通点は必ず、体育の授業と部活の後、つまり犯行はその時間の間に行われたことになる。

部活なら入っていない生徒が疑われるが、体育の授業となると授業中の間に行わねばならないので、少なくとも授業を休む必要がある。

ここで重要になってくるのが月村からの報告だ。

犯行当日、体育の授業に欠席、早退した生徒はいなかった。それは犯人はその被害者のクラスではないことを意味する。

つまり、犯人は自分の授業を休んで女子更衣室に忍び込んだことなる。

「でも、それって矛盾してるね」

ハラオウンが考えるような仕草をしながら呟く。

「犯人が授業を休むってことは欠席か早退するってことでしょ？
その後はどうするのかな？」

「そやな、授業中に学校内を歩き回っとったら先生に疑われるし」

「学校のどこかに隠れるんじゃないかな？」

八神と月村の言い分はもっともだ。下着を盗まれた生徒は少ないとはいえ、クラスはバラバラだ。

違うクラスの下着を盗むとなるには、合同授業となるか、体育の授業中に更衣室に侵入するということになる。

前者なら特に怪しまれずに済むが、後者は問題がいくつか存在する。

別のクラスの体育中に更衣室に侵入するということは、自分の授業をサボる、もしくは早退することが絶対条件だ。

そんなことを実行するのは簡単だが、今まで普通に授業を受けていた生徒が突然、サボりだの早退だのをやるとかえって怪しまれる。

となれば、更衣室に侵入するには授業を出ずにどこかに隠れる必がある。

しかし、授業中誰もいない校内を歩き回ればさすがに俺達の仕掛けた監視カメラが捉えるはずだ。

となれば授業を休み、どこかに隠れるという線はなくなる。

「それと、被害に合った子に聞いてみたんだけど、ちょっと変な事

言ってたんだ」

「変な事？」

高町の言う変な事とはいったい？

「何て言うのかな……その子達、他のクラスも被害に合ってるなんて知らなかったみたい」

知らなかった？　何で？

「そもそも被害に合ったその子達は下着が盗まれたとは思ってなかったみたい」

「でも、現に下着が盗まれたって……」

先日、俺達の元にやってきた女子の言葉を思い出してみる。

『無かったんです……し、下着が……』

彼女は下着を『無くした』と言った、けど『盗まれた』なんて一言も言っていない。

「てことは、下着を盗んだ犯人を探してほしいじゃなくて、無くした下着を探してほしかった？」

「そうとも限らないわ。下着を無くしたと証言している子がクラスずつ数人いるのよ？　これはあまりにも偶然すぎるわ」

「下着泥棒がいるという可能性も否定できひんな」

バニングスと八神の言葉に俺達はもう一度思考を回して、いくつかの疑問を洗ってみる。

「被害に合ったクラスは全部でいくつだ？」

「えっと……一年のクラスは全部で６クラスだけど、被害にあったのは５クラス、蒼詩君達のクラスだけが唯一被害にあってないんだ」

「そうなのか？」

月村の言う事に半ば信じれず、同じクラスであるハラオウンとバニングスに聞くと、二人共首を縦に振った。

「うん、私のクラスも体育会系の部活にも入っている子もいるし、体育だって当然受けている」

「でも不思議なことに下着を無くしている子はいないのよね」

「高町達のクラスで下着を無くしたとかそういう話は聞いたことはあるか？」

「ううん、女子の間でそんな話題は出なかったかな？」

うーん、聞けば聞くほど謎は深まるばかりだな。

下着泥棒の件なんで上がってはいない。ましてや、下着が盗まれたなんて思ってもいなかった。

そして、唯一はぶられたうちのクラス。

誰も見つからない侵入経路。

「……」

ダメだな、犯人の目的がわからん。

「あっ、いたいた。おーい、みんなー！」

屋上から校内へ通じる出入口から明るい声が聞こえてくる。
その方へ俺達は向けてみると、そこにはこっちに手を振る翠と、その後ろに控えている紅次の姿があった

二人がまっすぐこちらにやってくる。

「いやー、探したよ。みんなどこに行ってるのか全然わかんなかったしさ」

「あれ？　蒼詩に教えてもらわなかったの？」

「蒼ちゃんに聞こうにもすでに教室から出た後だったから聞けずじまいだったのさ」

「でも、紅次君と一緒におるよね？」

「紅ちゃんとはここに繋がる階段で会ったんだ。偶然に出会わなかったら、永遠に探し続けてギュンギュンしちゃうところだったよ」

五人娘は訝しい目で俺と紅次を見てくる。
なんで教えなかったのか、と。

「「その方がおもしろいから」」

相手が翠だからね、こんなのは日常茶飯事さ。

「それよりも、これを見てほしい」

紅次は手にしている何枚かの書類らしきものを俺に渡してくる。

それを受け取り、その紙に書かれている内容を読み取る。

盗み見るように五人娘が囲むように集まってきて、若干気になるがしかたない。

その紙に書かれているのは……

「盗難報告書？」

そこには盗難されたものやその日の内容が詳しく記されていた。

「さよう、ここの学校に起こった盗難やその事件などが書かれた報告書のデータの写しだ」

「これどうやって入手したのよ！？」

「ここのデータスペースにハッキングしただけだが？」

ホントだ、一番下にここの学校名と記録者の名前が書いてある。

五人娘は紅次のそんな台詞に呆気に取られている。

まぁ、このくらいで驚くようじゃ、まだまだだがな。

「それよりも、そこに書かれている所をよく見てみるのだ」

そう言われ、もう一度その書類に目を落とす。

「……数年前から今年にかけての盗難報告が出ていない？」

そう、下着泥棒どころか盗難の類が出ていないのだ。

その理由の大半は盗難が無いというよりは『報告するまでのほどではない』と言いたいのだろう。

貴重品の類なら報告する必要がある。しかし、衣類となると報告すべきかは迷うはずだ。

しかも、下着泥棒側の立場になって考えてみるとする。

下着に欲情する変態なら、一人二人の下着を盗むよりも可能な限りの下着を盗むはずだ。

そうなれば、被害者は流石に下着泥棒と判明するだろう。

だが、この報告書にはそのような記録が残っていない。

下着泥棒事件と呼ぶにはあまりに被害が少ない、しかも被害者が盗まれたと気付かれないレベルでだ。

「まるで的を絞っているかのようだな……」

「的を絞る？　何のために？」

それはこっちが聞きたい。こんなことをやらかした変態に聞くしかわからんが。

キーンコーン、カーンコーン♪

校内に響き渡る予鈴の合図。どうやら時間切れのようだな。

「放課後はどうするの？」

高町が俺に聞いてくる。今は情報が足りないからな、具体的な事は決まっていない。

「とりあえず、作戦室で監視カメラの映像を見ながら犯人らしき人を探すしかないだろうな」

適当かもしれないが、疑問があるところを片っ端から探すしかない。

確か次の授業は体育だったな。

「そういえば、今日は三組と合同授業だったね」

ハラオウンがそんな事を呟くが俺はそれを聞き流しながら校舎へ戻る。

この体育の授業が今回の事件解決へと急接近するとも知らず……。

第十六話　結城蒼詩の事件簿～転～（前書き）

次は超展開の転の章ですね。

最近、なのはとすずかの会話の違いがわからなくなってきたな……

第十六話　結城蒼詩の事件簿～転～

授業も終わり、放課後になると俺達は予定通りに作戦室に集まった。
ここで犯人探しを行おうとした時、ハラオウンの口からありえない言葉が出た。

「下着を盗まれた！？」

「う、うん……」

顔を赤くして俯くハラオウンに俺はオウム返しで答える。
いや、まさか、ねぇ？

「どおりで体育の後、ハラオウン嬢の様子がおかしいと思ったな」

「なんだか周囲を気にしているようだったし」

「う、うぅ……」

紅次と翠の言葉にハラオウンはさらに萎縮してしまう。なるほど、あの挙動不審さはそのためだったのか。

ということは……

「「「スカートの下は七色パラダイス！？」」」

「アリサちゃん、気持ちはようわかる。せやけど鉄パイプはアカン、三人が死んでまう！」

「離しなさい、はやて。この灰色脳細胞の連中を叩きのめさないと気が済まない！」

「せやから鉄パイプはアカンって！」

「はやてどいて、そいつら殺せない！」

なんだかバニングスが本気で殺しにかかってきそうなので、ここまでにしとこう。

「鉄パイプ、バッチコーイ！！」

訂正、歓迎者が一人いた。

「にしてもハラオウンまで被害に会うとは。いや、被害にあったのはハラオウンだけか？」

犯行が他のと同じなら、被害に会うのは一握りのはず……

「うん、そうなんだけどね……」

ハラオウンが豊満な胸を両手で隠しながら何やら歯ぎしりが悪いように話す。

ん？　隠す？

「私が盗まれた下着って、上、だけなんだ……」

上ってことは下着が上下あるということで……ここでハラオウンが

示している上ていうのは……。

「ブラ……？」

「ブラやない、大胸筋矯正サポーターや！」

えっ？　ここ、笑うとこ？

「なにぃー！　ブラだって？　女の子のベールがないってことは……（´Д`）ハァハァ」

「まずい、翠が暴走しやがった！　発狂して虎になるぞ！」

「やめるんだ蒼詩！　そのネタは高校生にしか伝わらん！」

「えっ、えっ？　翠君どうしたの！？」

「ちょ、息遣いが荒いわよ！　気持ち悪いこの変態！」

「ありがとうございます！！」

「なんでや！？　この人ホントに翠君！？」

高町達が突然の出来事に混乱しているようだが、そんなことはどうでもいい。
まずは翠を戦闘不能にしなければ！

「紅次、『エメラルドクラッシュコンビネーション』行くぞ！」

「合点しょーちのすけ！」

「言ってることはカッコイイけど、その名前でだけで不吉な予感しかしないんだけど！？」

高町のツッコみを残したまま、俺と紅次は翠に向けて突撃した。

「沈め無能！　ついでに不能！」

俺は渾身のハイキックを翠の顎に向けて放つ！

「あばば！？」

会心の一撃！　きゅうしょにあたった！

「スタンガン、両手にバイルダーオン！！」

「今だ！　電流をスタンガンに！」

「いいですとも！」

紅次は隠し持っていた護身用スタンガン二丁を両手に持ち、翠の頭上へ跳躍し、一気に落下して詰め寄った。

「汚物は消毒だーー！！」

「びぃあ〝あ〝あ〝あ〝う〝ま〝ひぃぃぃぃ！！」

スタンガンは見事翠を捉え、バチバチと弾ける音と電光が室内を包み込む。

翠は奇妙な声を上げながら二、三度痙攣すると、恍惚な表情をしな

がら倒れていった。
俺と紅次は倒れている翠を確認すると互いに向き合い、ガシッと手を組んだ。
「「最高にハイってやつだ！」」
『なにやってるの！？』
そんな一部始終を見ていた高町達は耐え兼ねたのか、盛大なツッコみが部屋中に響く。
「す、翠君がた、倒れちゃたんだよ！？　どうして友達にそんなことをするの！？」
「そりゃあ、スタンガンをあれだけ浴びせれば誰だって倒れるぞ？」
「そもそもなんでアンタ、スタンガンなんて持ってるのよ！？」
「それが俺、三バカカラスのこと白神紅次だからだ！」
「意味わからへん！　こんなひどいことをするなんて、翠君をどう思っとるんや！」
「「親友ですけど何か？」」
『なんて歪んだ友情！？』
まぁ、これがいつものやり取りだからな。ここまでやるのは久しぶりだけど。

「とりあえず、このままじゃ話が脱線しまうから翠を起こすとするか」

「とことん脱線させたのは蒼詩君なんだけど……」

「翠、大丈夫かな？」

月村のツッコみはさせおき、ハラオウンを心配させている変態を起こさないとな。

とりあえず……

「翠、起きろ」

翠を足で踏んでみるとする。それだけでなく、かかとを使って捻りも加えてみる。

「え、えくすたしぃ……」

ダメだ、このやり方は翠が喜んでしまう。他に手は……

「そ、蒼詩君が翠君を踏んでるんだけど……」

「もういちいちツッコむのも無駄な気がしてきたわ……」

「な、なんか翠の顔が怖い……」

「翠君、何か呟いてるね……」

「夢の中でも踏まれてるって、どないやねん……」

やっぱりここはあれしかないか。

「起きろこのポンコツ野郎、動けってんだよ！！」

「おぶっ！？」

片足を大きく上げて、翠の水月へとかかと落としを決めた。
その衝撃で翠の体はくの字に曲がるが、それと同時にカッと翠の目が見開く。

「はっ！　何だか夢心地な気がしたけど、なんだろう？　わかってもわからなくてもオレのダイナモがギュンギュン回ることは間違いないんだけど……？」

起きたみたいだな。やはりこの手に限る。

『……』

「さて、翠が起きたことだし、本題に入るか」

なんだか高町達が疲れたような顔をしているけど、気にすることでもないな。

「まず初めはハラオウンが下着……正確にはブラを無くなった時の状況を教えてくれ」

「う、うん。５時間目の体育の授業にアリサと一緒に更衣室で体操着に着替えたんだ」

「ちょうどその時は三組との合同授業だったし、例の下着泥棒の話をした後だったから普段より人の多い更衣室で周囲を警戒してたのよ」

「着替えの時は特に異常はなかったからいつものように体育をして更衣室に戻ったけど、その時には……」

「すでにブラが無くなっていたと」

「うっ、で、できればブラって言わないでほしいけど……」

うーん、犯人がハラオウンのブラを盗むことができるのはどう考えても授業中に盗むことしかない。

となると、やはり犯人は自分の授業を欠席または早退したのか？

「紅次、5時間目の時間帯の映像を出してくれ」

「承知した」

更衣室前に設置されている監視カメラの映像を倍速で見てみる。

しかし、その映像に映る犯人らしき人物は出てくることはなかった。

正面から更衣室に入ってはいない。だが、ハラオウンのブラは消えている。

相変わらず謎が謎を呼ぶな。

今日の体育は一組と三組を含め遅刻欠席早退した男子はいなかった。

つまり、犯人は授業に遅れることなく犯行を手早く行ったことになる。

となると、犯人はいつ更衣室に入って出たんだ？

「ブラを付けたまま体育に出たとか？」

『それだ！！』

「それだ、じゃないわよ！　そんなバカなことをやるわけないでしょ！」

「いや、わからんぞバニングス嬢。なんせ相手は変態だ、パンツを平気で被るなら、ブラも平気で付けるはずだ」

「アタシ達が探している犯人って、相当な変質者なの！？」

否定はできないだろうな。しかし、問題は更衣室に入る手段がわからない。それでも、ハラオウンのブラが盗まれたのもまた事実。そうとなるとそれを判明する情報が必要だな。

「ハラオウン、今日付けてきたブラって何色だ？」

「え？　えっと、確か黒……」

「えいっ！」

「ぐほっ！？」

なんだ！？　一瞬、月村の姿が見えたと思った途端、腹に鈍い痛みが！

「蒼詩君、女の子にそんなこと聞いちゃだめなの！」

高町が、私怒っています、って感じで腰に手をあてて柳眉を上げている。
何気なく質問してみたが、いささかツメが甘かったか。
にしても黒ですか、あんた中学生ですよね？
「しかし、盗まれたのがハラオウンだけっていうのもよくわからんな」
「そんなもん決まっとるやろ！　フェイトちゃんが“ないすばでぃの”持ち主やからやー！」
「ちょ、は、はやて！？　む、胸揉まないで……！？」
「ちょっとはやて！？　目の前に男子がいるんだからそういうのは控えて！」
「……今はただのおっさんや」
「何言ってるの！？」
なんと！？　八神が公衆面前でハラオウンの胸を揉んでいやがります！　セクハラ全開ですね！
えっ？　女の子同士はセクハラじゃない？　何言ってんだ。どう見たって目の前にいるのはおっさんと女子学生じゃないか。いいぞ、もっとやれ！
「……ん？　胸？」

ハラオウンと八神の過激なスキンシップを見て、俺は何かがビビビときた。

盗まれたブラ……少ない被害……ナイスバディ……

思考する頭脳にあらゆるキーワードが次々と現れ、パズルピースのように鮮明な形になっていく。

「なるほど、そういうことか……」

「どうしたの、蒼詩君？」

「解けたぜ、この事件のトリックが……」

『本当！？』

高町達が驚愕して一斉に俺を見る。

「ああ、だがそれを証明するにはあることを確認しなければならない」

「確認すること？　なんだい蒼ちゃん？」

「それを明日、被害者に聞いてみる」

「えっ？　でも、すでに事情聴取は済ませているよ？」

「ハラオウンの言うことは確かだ。しかし、今回はある質問を二つしてきてほしい」

「ある質問？」

「そうだ、そしてここで重要になってくるのが……」

俺は腕を大きく振り上げると、とある人物に向けて振り下ろし、人差し指を突き出した。

「八神、お前だ！！」

「えっ！？　わたし？」

「ああ、お前にはある重要な役目がある！」

「なんやて！　これは責任重大やな……」

「あのー、何だか先が見えないんだけど……」

穴だらけの展開についていけないのか、月村は冷や汗をかいている。

「八神にやってもらうこと、それはな……」

第十六話　結城蒼詩の事件簿～転～（後書き）

作者「大地に咲く一輪の花、キュアブロッサム！」

蒼詩「……何してんだ、作者？」

紅次「何でも、数年ぶりにプリキュアを見たらしくてな、今になってそのワンシーンの再現だ」

翠「それがちょうど、ファンである水城奈々様が声優しているハートキャッチプリキュアだったんだね」

蒼詩「でもその番組、すでに終わったんじゃ……」

作者「・・・・・・・・・・・・ゑ゛！？！？」

第十七話　結城蒼詩の事件簿～結～（前書き）

ようやく推理モノの完結です。

ずいぶん文章が長くなりましたが、若干手抜きが感じられるのは私だけでしょうか？

今日、ＶｉｖｉｄとＦｏｒｃｅの最新巻が売られてましたので、速攻で買いました！

この小説もＶｉｖｉｄまで繋げていきたいなぁと思います。

第十七話　結城蒼詩の事件簿～結～

ハラオウンの下着が盗まれた翌日、俺達はまた昼休みに屋上に集まり、改めて話し合った。

内容はもちろん、昨日高町達に指示したことだ。

「蒼詩君、昨日頼まれたことを被害者の子に聞いてみたよ」

最初に口を開いた高町はいつになく真剣な表情になる。やはり推測が当たってたと踏んだ方がいいな。

「蒼詩君の言ったとおり、被害者の子達が全員盗まれた下着は上だけだったよ」

やっぱりな。

ハラオウンに起きた被害がいままでの被害者と同じなら、盗まれた下着はブラだけということだ。

それだけを狙うのはおそらく目的があるはずだ。

「それで八神、俺の言ったとおりのことを実行したか？」

「もちろんや、それで確認してみたんやけど……」

八神が雷をうたれたかのような表情で告げた。

「なんと、全員がDカップ以上！　フェイトちゃん並の巨乳であることが判明したで！」

そう、八神に頼んだことは被害者のバストサイズを測ってもらうことだった。

ハラオウンが下着を盗まれて八神にナイスバディと言われたのを聞いてもしやと思い、過激なスキンシップをやからかすおっさんのこと八神に聞いてみてみようと思ったのだ。

サイズまで分かるのはゴッドハンドの域だが……

「オッケー、これで確信は持てたな」

「一人だけ納得してないで早くそのトリックってのを教えなさいよ」

痺れを切らしたのかハラオウンが急かすように言ってきた。

「わかったわかった。まず最初に犯人がどうやって更衣室に入ったかだ」

「監視カメラには犯人らしき人物は映らず、その痕跡すら見つからなかったようだな」

紅次の言うとおり、今まで見てきた監視カメラの映像には怪しい人物が更衣室に入った姿は映らなかった。

だが、それには大きな勘違いを俺達は起こしていたのだ。

それは当然のことだが、常識的に考えてみればわかるはずがない。

「そうだ。けどごく普通にカメラに映らないのは当たり前なんだ」

「どういうことだ？」

「怪しい人物がカメラに映らなかった。なら、怪しくない人物が犯人だ」

つまり、女子更衣室に入っても決して怪しまれず、犯行を行える犯人、それは……

「……もしかして、女子？」

『……あっ！』

バニングスの言葉に皆が納得と驚愕を含んだ声を上げる。

そう、犯人が女子なら女子更衣室に入ったって何の問題も無い。

「なら、犯人は女子だとわかったとして、何でこないなことをするんや？」

「これは勝手な推測なんだが……」

俺は足を組み、左手を膝の上に置き右手を顎に添えて某古畑さんポーズをとる。

「被害者はハラオウンを含め全員Dカップ以上の見事な持ち主、そして盗まれた下着は上のブラのみ、これらを察するに犯人は巨乳に恨みがあるってことだ！！」

『ええぇーー！！？』

女子一同驚いているな。そりゃあ、同性にバストのせいで恨まれるなんて考えもしないだろうし。

「ほ、本当にそんなことで……？」

「あくまで推測だが、こうまで的を絞った犯行ならそう考えるしかないだろ」

「偶然とか、じゃないよね？」

「ブラだけ盗むのには偶然だけで片付くとは思えないぜ？　犯人が女子という時点で既に常識を逸脱してんだ、何をしでかすかわからん」

「ホントに女の子はいざとなると何をするかわからないね……犯人が巨乳に向ける鋭い視線を是非オレにも向けてほしいものだ」

大丈夫。翠ほど予測不能な奴はいないから。

「でも、犯人の動機は見つけてからにして、結局犯人は女子の誰なのかしら？」

「女子といっても同級生から上級生までいるから、漠然とし過ぎてるね」

バニングスと月村の言いたいことはわからなくもないが、その点に関しては問題無い。

「いや、下着が盗まれた時間帯は必ず体育と部活の頃だ。部活は同級生も上級生も参加するからある意味盗み放題だが、体育の授業と

なると盗める人数は限られてくる」

「あっ、そうか。体育の授業で下着を盗めるのはその授業に参加できる生徒だけだから、犯人は同級生ってことだね！」

高町がそう結論すると、皆確かに、と頷く。

監視カメラに授業中、女子更衣室に入る姿は映らなかったのだから盗めるのは体育の際、一緒に更衣室に入った女子だけということになる。

「けど、犯人はどうやって監視カメラに映らずに別のクラスの下着を盗んだんだろう？」

「確かにね。そうなると、他クラスの下着を盗むために自分の授業を休むってことになるからね」

そう、ハラオウンと翠の言いたいことは、被害にあった生徒は俺達一年生の全クラスが入っている。

別のクラスの体育にこっそり参加するにしても、必ず先生にバレるし、ずっと更衣室に篭っていても帰ってきた生徒に怪しまれるし、これにはあまりにリスクが高い。

だが、それを回避する方法が実はある。

「自分の授業を休まずに犯行を行えるとしたら？」

「えっ、どうやって？」

「紅次、昨日頼んだやつ持ってきたか？」

「もちのロンだ」

ハラオウンが首を傾げていると、俺は紅次にとあるものを要求する。紅次はポケットから折り畳んである一枚の紙を取り出して、それを皆の前に広げる。そこに書いてあるのは……

「予定表？」

高町が呟く。

そこには四月から今にかけて行う行事などが書かれていた。

「ここのデータベースを再度ハッキングして、先公達が計画した予定表だ」

「またハッキング……」

紅次の言葉にバニングスは呆れた顔をしている。他の奴らもきっと同じ反応だろう。

「それよりも、ここと、ここ……あとここを見てみろ」

俺はある部分をいくつか指を指してみる。そこに書かれているのは……

「合同授業？」

ハラオウンが目にしている部分は二クラスで体育の合同授業することが書かれていた。

しかも細かく、どこのクラスと合同するかも書かれている。

「おそらくコミュニケーション向上を目的として組み込まれているのだろうが、これなら怪しまれずに他のクラスの下着を盗むことができる」

「そっか、更衣室を一緒に使うから違うクラスと一緒にいても違和感ないね！」

ハラオウンは理解したのか、少し興奮気味に答える。

しかも、この合同授業をしたクラスを調べてみると、見事に一クラスで全クラスと合同授業を行っていた。

これなら、どのクラスからも下着を盗むことは可能だ。

「せやから、犯人は一年すべての女子生徒に当て嵌まる……！」

周囲から息を呑むがわかる。少しずつ明らかになってきたが、ここからが正念場だ。

「問題は犯人がどのクラスかだね」

月村がさらに言葉を紡ぐ。

「まだ犯人を絞るには判断材料が必要な気がするの。だから学年からクラスに絞る必要がある」

流石だな月村、後は少しずつ答えを導いていけばわかるはずだ。

「蒼詩よ、一人だけわかった風なのはいささかズルいぞ？」

「バレたか」
相変わらずこういうのには紅次は鋭いな。
「えっ、もしかして蒼詩君、犯人がわかったの？」
「もしかしてもなにも、昨日からわかっていたぞ？」
「ちょっと！　なんでそんなこと昨日のうちに言わなかったのよ！」
高町の言葉に俺は素っ気なく答えるが、そこにバニングスが突っ掛かってきた。
「言わなくても犯人は逃げないんだし、貴重な推理体験なんだ、答えをすぐに出しちゃおもしろくないだろ？」
「じゃあ、蒼詩は犯人がどのクラスかは絞る方法があるの？」
中々ピンポイントなところを狙ってくるな、ハラオウン。
まるでこういうのに慣れているみたいだ。
「いいか、別のクラスの下着を盗めるのは犯人のクラスと合同になった時だ。なら、最近下着を盗まれたのは誰で、どのクラスだ？」
「それは私……あっ！」
「そうよ！　昨日、合同授業でフェイトの下着が盗まれたから、もう一つのクラスに犯人がいるわ！」
「確か昨日は……三組と合同、だったね……」

翠の呟きに、互いの顔を見合わせる。これで犯人の居所は掴めた。あとは犯人を探すだけだが……

「ここでサスペンスドラマなら証拠を押さえてるんやけど、肝心の証拠があらへんなぁ……」

八神のいうとおり、下着泥棒犯人だと確証の持てる証拠が無ければ犯人を特定できない。はっきりしているのは女子ということだけだ。

「まぁ、確かに八神では証拠は見つけることはできないな」

「それって、私やと無理って言いたいんか？」

「そうじゃない。証拠と取れる場所に八神がいなかったということだ」

「どういうことや？」

よくわからないのか、八神がかわいらしく首を傾げる。

「さっきも言ったが、俺は犯人の目星がついている」

「そういえば蒼詩君、そんなこと言ってたね」

「でも、その証拠はあるの？」

高町とハラオウンが口にすると、俺はこの話を切り上げることにした。

「その話は追い追いにする」
「ちょっと、何で今話さないのよ！」
「何故かって？　決まってるだろ……」
不満げなバニングスに俺ははっきりと答えた。
「推理小説では、証拠の話は犯人の前で行うもんだぜ……」

日は傾き、朱き空の下で俺達は放課後にまた屋上で集まった。
校庭を覗いて見れば、部活を行いながら声を出している生徒達が見える。

「本当に犯人は来るの？」
「ああ、そのためにちゃんと手筈をうったからな」
高町は屋上へ繋がるドアを見つめながら、俺に問い掛ける。
俺達がここにいる理由は犯人をここに呼び寄せ、待っているからだ。
俺は犯人がわかったから、その人物をある方法でここに来るよう仕向けた。
「……っ！」
誰かが息を呑むのがわかった。

屋上のドアがゆっくりと開かれる音。誰もがその様子を見守る中、姿を現したのは……

「……あれ？　何であんた達がここにいるんだ？」

その人物は夕日を背に立っている俺達八人を見てを眉をひそめている。

「ちょっと蒼詩、あの子って……」

「一昨日我らの元にやってきた……」

「付き添いで来た女の子だよね？」

バニングスと紅次と翠はそれぞれの反応を見せているが、他の四人に至ってはこの状況が理解出来てないのか、頭にクエスチョンマークを浮かべている。

「あのさ、下駄箱にこんな手紙が入っていたんだけど、もしかしてあんたらが？」

彼女はポケットから一枚の紙を取り出して俺達に見せた。

『大切なお話があります、屋上まで来て頂けますか？』

「こ、これって……」

「どう見たって、告白の手紙やな……」

「その方が来る可能性があるだろ？」

あいまいな形にしておけば、行くまで知ることはできるから、ちょっとした好奇心をくすぐることができる。

「なにより、犯人だと感ずかれずにすむからな」

「どういうことだ？」

彼女は訝むように俺を見つめてくる。

「下着を盗んだ犯人。それは……お前だ！」

俺は伊達眼鏡をかけ、蝶ネクタイをつけると彼女に向けて指差した。

「そ、蒼詩君……その眼鏡と蝶ネクタイは何の意味があるんや……？」

「バーロー、決まってんだろ。仕様だ！」

「さ、さいですか……」

はやてはもう何も言うまいといった表情で下がった。

「あたしが犯人！？　ちょっと何言ってんだ！？」

「そうよ蒼詩、彼女も被害者の一人なのよ？　犯人なわけないじゃない」

犯人扱いされた女子生徒は異論を唱え、バニングスは庇おうとするが、残念ながら真実はいつも一つなんだぜ！

「もし被害者のふりをしているとしたら？」

「どういうこと？」

高町から疑心を含んだ声を上げる。

「自分が被害者だと公言することで、犯人であると疑われるのを防いでいたんだ」

「さっきから訳のわかんないことを言いまくるりやがって！　どういうことだよ！」

俺達は今まで調べてきたこと、その過程で推測できることを彼女に話した。

動機のことははっきりしなかったから除いといた。

「それであたしが犯人って言いたいのか？」

「犯人がいるクラスは三組で間違いない。被害者の中で唯一お前だけが的を絞った特徴に一致しなかったからな」

「見た目で勝手に決めつけやがって……なら、証拠はあるってんのかよ！」

いきり立つように女子生徒は声を上げた。肝心なのはここからだ。

証拠といえるものは持ってはいない。というかありはしないだろう。

だが、彼女が犯人である確信はある。

「お前が被害にあった生徒と一緒にいた時、自分が言っていたことを覚えているか？」

「な、なんだよ突然……」

話の展開に彼女は少したじろく。

下着泥棒だと聞かされたあの日、彼女はその場にいた俺達四人にこう言った。

『実は彼女だけじゃねぇんだ。聞いたところによると他のクラスの子も盗まれたらしい……』

「待って蒼詩君、それって少しおかしくない？」

俺がそのことについて話すと、高町が異議を唱えた。

「私達が被害者の子に聞いたら、その子達は盗まれたんじゃなくて、無くしたんだって言ってたんだよ？　でも今の言葉……」

そう、俺達は最初気付かなかったが、他のクラスの子達は無くしたと言ってたのに、目の前にいる女子生徒はあの時、盗まれたと言った。

「あ、あの時は、たまたまそう思っただけで、誰だってそんなことが起きれば下着泥棒だって思うだろう？」

まぁ、それは俺もそう思ったのは否定はしないが、実は問題なのはそこじゃない。

「だが、あの台詞はたまたまなのか……？」

「あの台詞？」

「お前はこう言っていた。『他のクラスに聞いてみたんだけど』と……」

その意味がわからないのか、女子生徒は首を傾げるが、気にせず言葉を紡ぐ。

「俺達は気になってそのことを被害者の子に聞いてみたんだ」

「あっ、それが昨日、蒼詩が私達に頼んできたもう一つの質問だったんだね」

後ろでハラオウンが納得したように呟く。

昨日、もう一度被害者に聞いてみてみることは二つ。

一つは無くした下着は上か下のどちらかなのか、もう一つは……

「お前が本当に被害者の子達に下着が盗まれたのか聞いたことだ」

「……っ！」

彼女の表情が一瞬歪んだ。感情的になりやすいのか、おかげでわかりやすい反応をしてくれる。

「おかしいと思ったんだ、被害者達は他のクラスが自分と同じ目にあっているのに気付かなかった。だが、その中で唯一お前だけが知っていた」

その理由は簡単、そのことを知っているのは下着を盗んでいる犯人

だけだからだ。

「そして被害者からの答えは満場一致でＮＯだ」

どんどん彼女から血の気が引いていくのがわかる。

「つまり、お前だけが一年生の間で女子の下着が無くなっているのを知っていた。それは犯人であることに他ならない！」

俺はそう言いくるめると、反論できないのか、彼女は顔を俯かせて黙った。

「これが、俺の推理だ……」

俺の呟くと、彼女は噛み締めていた唇から大きな大きなため息をついた。まるで憑き物がとれたかのように。

「流石三バカカラスだな、こうも真相をつきとめられちまうなんとな……」

「どうして、下着なんか盗んだの？　それも……胸の大きな子ばっかり……？」

ハラオウンが動機を聞いてみると、女子生徒は自嘲気味に笑って、語りだした。

自分には好きな男子がいた。入学して間もない頃にその想いを打ち明けることにしたらしい。

しかし、返事はＮＯだった。理由を聞いてみたところ……

『俺……巨乳派なんだ』

とだけ言って去っていった。

その瞬間、彼女の心は怒り心頭に発した。

胸が大きな子が好き。そんなことで振られてしまったのだ。

自分は胸がないから、どうしようもできない。

だから、胸がある子の下着だけを盗み、その子達特有の羞恥を味わせてやる、と。

『……』

彼女の語る内容に俺達は声も出ない。

まさか、本当に巨乳に対して怨みがあるとは思わなかったからな。

「こんなのが、くだらないことだってのはわかってる。けど、振られた理由が胸だと言われたのが一番悔しかった！　コンプレックスだったのに！」

いや……コンプレックスも何もまだ中一だぜ？　成長するにはまだ早過ぎる気がするんだが。

「……くだらなくない」

どういった言葉をかけようか考えていると、意外な人物が彼女に声をかけた。

「女の価値は胸で決まるもんやない！　あんたの気持ちはようわかるわ！」

まさかの八神が彼女を慰めている、というか賛同してる？

「見てみ、あの子達を！」

八神は俺達……というよりは高町達女性陣に向けて指差してきた。

「フェイトちゃんを筆頭に、揃って胸もそれなりにあるというのに、なんで私だけペッタンコなんやーー！！！」

「「「「はやて！？」」ちゃん！？」」

そして親友に対して、いきないの不平を述べる八神。うーん、これじゃあただの愚痴の言い合いになってないか？

「男はいつも胸ばっか気にする！　そんなことで女を選ぶ阿呆なんぞ付き合わんでええわ！」

「え、あ、お、おぅ……」

まさか共感されるとは思わなかったのだろう。さすがの犯人も八神の力説に頷くしかない。

「なぁ、あいつ大丈夫なのか？」

「う、うん……多分」

「はやては何故が異様に胸に執着してるから、一度語りだしすと中々止まらないわよ？」

ハラオウンの胸を揉む時点で、立派なおっさんだとはわかったけど、

触るだけでバストサイズがわかるとか、やけに胸について執拗に語りだすとか、どこぞのマニアですか？

「巨乳なんかに負けへん！　貧乳はステータスや、希少価値や！」

おい、今度は変なこと言い出したぞ。

「貧乳はステータス、希少価値……なんかいいな、そのフレーズ♪」

向こうもなんか気に入ったみたいだぞ。

もうあの二人はなんかあっちの世界に入り込んじまってるし。

「とりあえず、事件解決兼依頼完了っていいのか？」

「それでいいと思うよ？」

「これ以上、犯行をやる様子はないみたいだしね」

高町と月村の言葉に、下着泥棒事件は幕を閉じた。奇妙な形で解決したけど。

それから盗まれた下着はちゃんと持ち主に謝って返してもらうことにした。

下手に公するよりも、そっちの方が余計な騒ぎを起こす必要はないからな。

もちろん、報酬の和菓子交換券はもらっといた。和菓子と交換してもらったら、家でお茶でも飲みながら頂こっと。

第十七話　結城蒼詩の事件簿～結～（後書き）

この次から少しずつ蒼詩の正体が明らかになっていきます。

ストーリー構成はすでに温まっていますが、いかせんそれを文章にするというのは容易ではありません……

この他にも真・恋姫無双も書いていますが、まだ投稿はしません。

投稿するのは、書き終わるか、この小説に一区切りつくかです。

どちらにしろ、投稿するのは相当先です。

こんな作者ですが、エールという名の感想をぜひ送ってください。

それでは、これにて！

第十八話　ＮＯと言える日本人に私はなりたい（前書き）

すみません、投稿が遅れてしまいました。

今回はバトル展開が含まれております。

バトル描写になると、どうしても文章が長くなってしまうので御了承下さい。

それでは、本編をお楽しみください。

第十八話　ＮＯと言える日本人に私はなりたい

今、俺は独特な匂いが広がっているとある道場でとある人物と向かい合っている。
相手は鈍く輝く日本の小太刀を手にし、構えながら俺を見据える。
片や俺は、一本の居合刀を鞘ごと左手で握り、ただ直立。
道場の端っこには、一人のお姉さんと五人の美少女がその様子を息を呑んで見守っていた。

「お兄ちゃんも蒼詩君も頑張って！」

「はやて、どっちが強いのかな？」

「ん～、やっぱ大人の恭也さんとちゃうか？」

「ふん、どうせ返り討ちに合うのがオチよ！」

「アリサちゃん、蒼詩君がかわいそうだよ……」

傍観者からの何とも勝手な野次。
俺だって今すぐこの仕合を放棄したいんだけど……

「蒼詩、準備はいいか？」

凛々しく、されど声は低くして、明らかに手加減無用のオーラを当ててくる
二刀の剣士――――高町恭也。

「逃げる準備なら、いつでもいいけど」

「駄目に決まってるだろ」
いや、相手の了承もなく、剣を振るうのはもはや暴力じゃね？
そんなことはおかまいもなしに、仕合は無常に進められる。
「二人共、準備はいい？」
「いやっ！」
「ああっ！」
「始めっ！」
あれ？　何、この不条理？
何故こんな理不尽な目に会っているのかは、山より高く、海より深い事情があるのです。

それはいつもの休日のことだった。
翔太たちの午後練の様子を見たりすることはもはや日課のようなものであった。
飲み物を用意したりすることはもちろん、たまに練習相手になってあげたりもしている。
今回は朝から暇だったのか、紅次と翠も来ていた。
まぁ、１００パー遊びに来たわけだが、士郎さんは子供たちの体力

向上とフォーメーションの確認ということで、俺達を含む練習試合をすることになった。
五対五のフットサルとなったが、これがあまりにもカオスな展開だった。

「オレ式スライディングタックコォォォゥル！！」

相手チームの翠が今現在、ボールを所持している俺の元へ“体ごと”すべり込んでくる。
普通、足から滑り込むはずなんだけど、翠の場合はなんかリアルにキモい。
変に子供達が真似でもされては困るので、

「友達はボールだよ！」

「ぐえぇぇっ！！？」

ボールを蹴るのを空振りしたと見せかけて、思いっきり翠の腹を蹴りました。

『ピィー！』

するとホイッスルの音が鳴り響き、審判を務めていた紅次が近づいてくる。
紅次は両腕を巻くように回して何かを示しているが、それってバスケのリバウンドだと思うぞ。
そして胸から取り出した一枚のカードを見せる。

「マスターカード」

『何でっ！？』

「翠への暴力行為、プライスレス」

「お金で買えない痛みがあるか……逆にお金で痛みを買うのは翠だけだろうな」

「ああ……横隔膜の痙攣による無呼吸が……深い泥沼へ沈み込んでいくみたいだよ……」

詩的表現を引っ張りだしたか、無茶しやがって。

「みんなも、ああなってはダメだよ？」

『はーーーいっ！』

俺の教えによる子供達は元気に返事してくれる。うん、翠に対して何も反応しない限り、みんな逞しくなったもんだ。

太陽が真上に来るころに練習を切り上げて、子供達はそれぞれ帰路へとつく。

翔太達を見送れば、いつものように自宅に帰ると、畑をいじり始める。

食材はスーパーで調達するのが普通だが、出来る限りこうして自給自足をして倹約に勤しむ。

これが結構ハマるんだな、これが。

一緒に練習していたバカ二人は、午前にやりたいだけやって帰ってそうだ。

さて、やることもやって時刻は午後三時。

「シュークリームでも買ってくるか……」

一仕事終えると無性に甘い物が欲しくなる。
甘い物で即刻翠屋を思い浮かぶのは、やはり、あのシュークリームの虜になっているということか。
そんなわけで、すぐさま支度して翠屋に直行。

カラーン♪

「いらっしゃいませ……って、あら、蒼詩君じゃないの♪」

扉の小さな鐘とともに入ると、満面の笑みで迎えてくる桃子さんの声に、一斉に視線の気配を感じる。

「あっ、蒼詩」

「よっ、ハラオウン」

真っ先に俺の名を呼ぶハラオウンに手を挙げて、返事してみせる。

「ちょっと、何フェイトだけ挨拶してんのよ」

「グーテンタグ、優雅にアフタヌーンティーですか、バニングスさん？」

「普通に挨拶しなさいよ！」
「五人ともお茶でもしてるのか？」
「無視すんなっ！」
「まぁまぁ、アリサちゃん」
今日もバニングスは年中キレのあるツッコみで、今にも掴みかかろうとしている。
まぁ、それも月村によって止められるが。
「そうや、なんや蒼詩君、私ら美少女に囲まれてお茶したいんか？」
「自分で美少女とかマジありえん。片腹大激痛や」
「なんやもったいないなぁ。私らはいつでも大歓迎やのに」
八神との軽いジョークも中々和むもんだ。
「今日は何？　シュークリーム？」
「あぁ、四つほどもらいたいん……だ、が……」
それは一瞬、ほんの一瞬だった。
高町を一度見て、何気なくカウンターの方へと視線を移した途端、
ある人物と目が合ってしまった。
このシチュエーションで起きることは一つ。
「……やっぱいいわ。たまには家でゴロゴロと……」

「えっ？　あっ、蒼詩君？」
即座に身体を出入口へと向けてそそくさと帰ろうと思ったのだが……
「何だ、冷やかしに来たのか、蒼詩？」
いつのまにか、後ろからものすごい力で肩を掴まれて、俺は壊れかけた機械人形のようにギギギッと首を後ろに向ける。
「や、やだなぁ、そんなわけないじゃないですか、恭也さん……」
俺の目を凝視、いや、睨むと言えるほど鋭い目つきを向ける人物こそ、高町の兄である高町恭也。
妬ましいほどのイケメンの瞳に宿るものは、俺としてはあまり向けたくないもの。
まるで俺を狩る獲物のような視線を感じます。
「ならちょうどいい。ちょっと付き合え」
「どこをどう見たら、ちょうどいいという言葉が出てくるんですか」
あんた今、仕事中でしょ。
「あれ？　蒼詩君だ」
騒ぎを嗅ぎ付けたのか、厨房から眼鏡をかけた女性が出てきた。
彼女は高町美由希さん、ご存知高町のお姉さんだ。
恭也さんの妹で、一言で表すならお茶目さんと言っておこう。

「助けてください美由希さん。凶暴なお兄さんに襲われました」
「まだ何もしていないだろう……」
「“まだ”だそうです。今すぐ殺される、助けてください」
「あはは、相変わらず元気だね」
俺達のやりとりを苦笑しながら見つめる美由希さん。
俺のＳＯＳ、伝わってる？
「恭ちゃん、蒼詩君と勝負するの楽しみにしてたんだよ？」
「野郎のお楽しみなんて、知ったこっちゃありません。とっとと彼女さんと桃色空間でも作り上げて、塩でも投げつけられてください」
彼女がいるなんて、リア充爆発しろってか。
そういえば、恭也さんの彼女さんって誰かに似てるって思ったんだが……あれ？　そもそも名前なんだっけ？
「何故最後に塩を投げつけられるんだ。いいから行くぞ」
まるで俺の意見なんぞお構いなしに高町の家の奥へと引きずり込まれてゆく。
アレ！？　誰も助けてくれない！？
「桃子さん、後生です、息子さんを止めてください！！」
この一家の大黒柱なら、この頑固野郎を止められるはず……。

「相手してくれたら、シュークリームはタダにしてあげる♪」
「喜んでお相手しましょう」
まさに悪魔のような取引にＮＯとは言えなかった。
「「「「「……」」」」」
高町ら五人が呆然としている中、ほんの僅かな時間でのやりとりだった。
というか俺の周り味方なし？

三人称ｓｉｄｅ

「じゃあ、蒼詩君ってたまにここでお兄ちゃんと仕合しているの？」
二人の仕合を見ながら、なのはは姉に視線を移す。
「いつもやっている時は、なのははいなかったからね、知らなかったのは無理はないよ」
「いつからですか？」
「三年前かな？　ちょうど五人共が仲良くなってた頃だよ思う」
「そんなになん？　それで一度も会わへんのはある意味すごいなぁ」
「月に数回だからね。まぁ、蒼詩君が極力参加しないのが主な原因

だけど」

「どうしてですか？」

「あいつが恭也さんに勝てないからビビってんのよ！」

「う～ん、確かに蒼詩君は恭ちゃんに勝ったことはないけど――――」

――――――負けたこともないんだよ。

蒼詩ｓｉｄｅ

「はぁぁぁっ！」

開始と同時に恭也さんは一気に踏み込んで攻めてきた。
明らかに殺る気マンマンなのが嫌でもわかる。

「……っ！」

右手から襲い掛かる一閃を鞘入れのまま受け止める。
さらに、反対の手に光る剣が俺の首に牙に向ける。
だが、身体を後退させて、二の太刀を躱しきった。

「まだだっ！！」

連続攻撃を幾度も繰り返し、それを払う。
時に体術を駆使し、相手が足払いすると、鞘で受け止め防ぐ。
小さく隙の無い相手の剣戟が少しずつプレッシャーを与えていく。

「まだ抜かないか……。ならこれはどうだ！！」

恭也さんが構え、詰め寄ってくると、二つの太刀が煌めく。

『小太刀二刀御神流　虎乱』

それは彼の持つ流派の技の一つ。
俺は迫りくる剣閃を見切り、身体を前かがみにしながら捻って躱す。
そして躱し際に、抜きの一閃を放った。

「くっ！」

さすがと言うべきか、尋常でない反応速度で技の途中からその一撃を防ぐ恭也さん。
抜いた刃を流麗な動きで鞘へと滑り込ませる。
さっきまで勢いのあった恭也さんの猛攻はあっさりと止まってしまった。

「相変わらず、速いな」

「これが取り柄ですから」

それだけ言うと、互いに構えをとったまま、動かない。

――――抜刀術。

それが恭也さんに放った技だ。
世間では『居合』と呼ぶらしいが、それは精神修養を目的として用いる時にそう呼ぶ。
抜刀術は、抜きの一閃で勝負を決める、一撃必殺といえるものだ。
例えるなら、剣道と剣術の違いみたいなもの。
恭也さんは小太刀を逆手に持った手を前に、順手で持つ右手を腰あたりに添えたまま半身の構え。
俺は無身から腰を落とし、いつでも抜けるように鯉口を切り、柄に手を添える。

抜刀術の最大の武器はその間合いだ。
間合いに入れば、高速の一閃のもとに斬り伏せる。カウンターを主体とした防御向きの剣術だ。

「「……」」

無言が道場を満たし、緊張の糸を張りつめる。
俺も恭也さんも相手の挙動を一つ一つ見逃すまいと、一向に視線を外さない。
ほどなくして、まるで呼吸を合わせたかのように互いに飛び出した。

「……はぁ！！」

鋭い声と共に恭也の懐まで詰め寄り、胴に向けて、一閃を放つ。
空気を裂けかねないほど金属音を鳴らす。その一撃は模造刀とはいえ、綺麗に決まれば肋骨を折ることになる。

だが、相手は恭也さん。片手の小太刀を巧みに使い、刀の軌道を逸らした。
そして、残ったもう片方の小太刀で反撃を試みる。
しかし、抜刀を行ったことにより、刀を抜かれた鞘で襲い掛かる小太刀を防ぐ。

ここまでは想定どおり。けど、これだけでは終わらない。

足の運びと腰の動きで相手の攻撃を振り切り、身体を回転させている間にすぐさま刃を鞘に戻し、再び抜刀の構えをとる。
そして、その回転の勢いにのって身を翻しながら抜刀した。

「……くっ？！」

その剣戟がよっぽど強かったのか、恭也さんは両手の小太刀で防ぎながら後退する。
着地した後に納刀を行う。それが余裕でできるほど、俺と恭也さんとの距離は十分に空いていた。

「さすがだな蒼詩、俺もまだまだということか」

「俺とあんたは比べる対象が違う。比べるだけ無意味ってことだ」

異なるのは得物の数でも流派でもない。恭也さんの剣は守るべき人を必ず守るためにある。
だが、俺は……。

「次で終わらせるぞ、蒼詩」

恭也さんが新たに構えをとってくる。これ以上、勘ぐられたくはな

いな。特に外野に。

最後に仕掛けてくる技は、おそらく御神流の奥義『神速』。
確か、リミッターを解除して周囲が遅くなるように見える、だったっけ？
けど俺は知っている、恭也さんは神速に使用限度があるってことを。
だからこその奥の手ってことか。

俺は全神経を研ぎ澄まし、いつでも抜けるように鯉口を切る。
恭也さんとの間合いはおよそ１０メートル。多少距離を詰めないと刀の間合いには入らない。
だが、俺達はそこから動くことなく不動の態勢をとる。
ここの決め手はいかに速く相手の懐まで接近できるかだ。

恭也さんの使う神速なら、この距離を詰めることは容易いだろう。
しかし、だからといって俺がそう簡単に勝ちを譲るつもりはない。
勝ったことはないけどな。

動く気配を感じ取り、ほぼ同時に駆け出す。床を、持てる脚力で一気に踏み込んだ。
風を切り、迫り来る恭也さんに向けて刃を抜く。
恭也さんも二刀の小太刀で俺に目掛けて振りかざす。

「そこまで！！」

それがほんの刹那の間だった。
仕合者同士では長く時の感覚を感じたが、外野では瞬きすらできないような光景だったのかもしれない。
美由希さんが止めの合図を入れたときには、俺の刀は恭也さんの頸動脈に、恭也さんの小太刀は一つは喉に、もう一つは心臓部分で寸

止めされていた。

「今回も引き分けで終わってしまったな」

「今までに比べればまともな終わり方ですよ」

前回なんて、模造刀が折れるまで斬り続けたらなー。どこのアクション映画だっての。

まぁ、それが仕合の限界なのかもしれないけど。

もし本気で勝ち負けを決めようなら、骨折どころじゃすまないからな。

「お疲れ様、凄かったよ蒼詩君！」

高町を筆頭に他の五人がこちらへとやってきた。

「蒼詩って、剣とか使えたんだ？」

「それなりにな。俺はこの抜刀術が主流だ」

「まさか恭也さんと互角にやりあうなんて思わへんかったわ。蒼詩君って結構強いやね」

「こんな戦闘民族と本気でやりあうなんぞ、御免こうむるけどな」
「えっ、今の仕合は本気じゃないの？」
「ガチでやると俺の明日が無くなるわ」
恭也さんといい、美由希さんといい、そして士郎さんといい、この高町一家の戦闘能力はおかしい。
そこらの実力者の戦闘能力が５に見えてくる。
「でも恭也さんに立ち向かう蒼詩君、カッコ良かったよ？」
「今回は桃子さんのシュークリームが掛かってんだ。いつもよりやる気が二割増だった」
「アンタって、最後の最後で期待を裏切らないわね……」
別に人に見せれるような剣じゃないからな。
変に興味を持たれずにさっさと終わらせたかったのさ。
「そんなことよりもシュークリームだ。タダで食えるぜ、ヒーハー！！」
えっ、テンションが高いって？　そりゃそうさ、なんせ翠屋のシュークリームだからな。仕合を終えた後のシュークリームはきっと格別だぜ！

「ごめんなさい、蒼詩君。仕合中に売り切れちゃった♪」

「ちくしょおおおめぇぇぇぇーーーーーーー！！！！！！！！！！」

第十八話　ＮＯと言える日本人に私はなりたい（後書き）

１２月３日と４日に行われる、水樹奈々さんの東京ドームライブのチケットをようやく入手しました。

まさか携帯の抽選で当選するとは思いませんでした（汗）

でもまぁ、これで友人と一緒に見に行くことができます。席は見事に真反対なんですけどね（笑）

でも自分、田舎者ですから東京に行くのが不安なんですよね。

新幹線か夜行バスするか資金と相談しながら決めないといけませんし、行くのは３日だけでから日帰りできるか心配ですし、地下鉄とか公共機関を使うの慣れてませんからルートを考えないといけません。

まぁ、それは追々考えるとしましょう。

さて、今回は蒼詩と恭也の仕合でした。

蒼詩が抜刀術を使うのは完全に作者の趣味です。

ＤｅｖｉｌＭａｙＣｒｙ３のバージルしかり、戦国ＢＡＳＡＲＡの石田三成しかり、とにかく抜刀術を使うキャラが大好きです。

特に斬った後の納刀がたまりません。

まぁ、作者は刀フェチですから（笑）

それとですね、もし読者の皆様から「こんな話を見てみたい」「こんなネタを入れたエピソードを作ってほしい」という方がいれば是非、感想と一緒にお付け加え下さい。

ネタづくりとして、可能な限り期待に応えたいと思います。

自分でハードルを上げてといて何ですが、応援よろしくお願いします。

長くなりましたが、それではこれにて！

第十九話　バイト戦士（前書き）

どうも、大学祭の準備で中々作業ができない蒼い勾玉です。

タイトルは……お察しください。

Ｖｉｖｉｄ五巻を見つけて速攻で読みました。作者の趣味に合っているミカヤちゃんは、個人的に好きなキャラだったんだけどな～

本屋で本を買うとき、どうしても単行本一冊買うのは心もとない気がするんですよね。

そんなわけで、ＩＳの単行本も買いました。うん、ラウラかわいい。

だが私は千冬好き！！くくわっ！

第十九話　バイト戦士

「蒼詩君、唐突だけどウチでバイトしてみないかい？」

「唐突過ぎますね」

休日の昼下がり。今日は高町が家の手伝いをしており、時折会話を挟みながらのんびりしていたら、士郎さんからの不意打ちをくらった。

だって何の前触れも無くだぜ？　せめて『ところで』とかで入れるように会話ぐらい作りましょうや。

「なのはから聞いたけど、知り合いの店でバイトしているんだとか」

「正確には世話になった恩返しみたいなものですけどね」

お金とかは特に問題は無いんだけど、マスターだけは返しきれない恩があるからやってるだけだし。

というか高町、なしてお前がそれを知ってる？　またハラオウンかバニングスか？

「その接客経験がある上でお願いがあるんだ」

またか。信頼してくれんのは嬉しいだが、人が寛ぐためにこの店にやってきてんのに頼み事を挟むのは勘弁してほしいんだけどね。

士郎さんの説明によると内容は至極単純。来るの予定だったバイトが休みだから代理としてやってほしいということだ。

とは言っても、やることは接待だけだから難しくもない。

「働いた分だけ収入ははずむよ、どうだい？」

「私としては、蒼詩君が手伝ってくれるとすごーく助かるんだけどね♪」

桃子さんも女神のような微笑みを見せてるんだけど、なんでだろう、子悪魔のようにも見えてしまう。

「マスターに相談してみますんで、返事はその後でいいですか？」

「構わないよ、無理には言わないから」

まぁ、ＢＡＲでの仕事は夜だから無理とは思えないけど。

「なんだかこうして蒼詩ちゃんと会話するのって、久しぶりな気がするのよねぇー」

「そんな気もするが、神は言っている。『メタな発言はやめろ』、と」

「ぐぬぬ、そう言われるとしかたないわねぇ……」

いいのか、それで？

その日の夜、バイトでマスターに今日のことを話しておいた。

それに対しての返事は、

「無問題(もーまんたい)よ、むしろ、蒼詩ちゃんのウェイター姿見た〜い♪」
と、喜んでＯＫをくれた。後半の理由が不純だけどもな。

そんなわけでやってきました、翠屋。
昨日の旨を士郎さんに伝えると、早速、翠屋の制服に着替える。
白いシャツに黒の前掛け。シンプルで悪くない。
「ということで、今日一日よろしく頼むよ」
「はい、よろしくお願いします」
「頑張ってね、蒼詩君♪」
「はい、桃子さん」
「にゃはは、蒼詩君似合ってるね」
「仕事に戻れ、高町」
「私だけ冷たくない！？」
「こんなかでツッコみ役となるのはお前しかいないんだ。期待して

るぞ」

「なんかイヤな期待だなぁ……」

だって、士郎さんとか桃子さんとかは大人の対応で華麗に流されそうな気がするからな。

そんなわけで、早速お客さんが来たので、高町が花が咲いたような笑顔を向ける。

「いらっしゃいませー♪」

「Ｐｉａキャロットへようこそ！！」

「翠屋だよ！？」

すまん、どうしても言わなくちゃならない気がしたんだ。

「おや、新人さんかと思いきや、いつぞやの兄ちゃんじゃないか？」

迫りくる客を対応し、しばらくすると一人の白髪老人がやってきた。

あの老人とは思えない真っ直ぐな立ち方はもしかして……

「柏木の爺さん？」

そう、以前士郎さんの頼みでコーヒー豆を届けたゲートボールの老人だった。
そういやこの人、ここの常連って士郎さんが言ってたな。
「なんじゃ、兄ちゃんもここのバイトでも始めたんかのぅ？」
「残念、今日一日だけの手伝いだ。ここで働くよりも、ここでのんびりした方がマシだけどな」
「ガッハッハ、全くじゃわい！」
店員と客の会話とは思えない軽さで注文を済ませ、コーヒーを用意する。
「機会あればまた参加してきてもよいぞ？　きっとヴィータちゃんも喜ぶぞい」
「この前みたいなことをしたら、またヴィータに怒られるのは目に見えている件について」
「あれ？　蒼詩君、ヴィータちゃんのこと知ってるの？」
俺達の会話を聞いていたのか、高町が割り込んでくる。
「おや、なのはちゃん、今日も来てるよ」
「はい、いらっしゃい柏木さん。それで、さっきの話なんですが……」
高町が気になって聞いてきたので、俺と柏木の爺さんはこれまでの

経緯を簡単に話した。

「とまぁ、そんな形でヴィータと知り合ったってことだ」

「へぇ、そんなことがあったんだ」

「というか、なんでお前がヴィータのこと知ってるんだ……って、そういやぁヴィータって八神の家族だったな」

八神と仲いいなら、ヴィータとかも知ってそうだな。

「にゃはは、でもすごいね」

「何が？」

「ヴィータちゃんって、ちょっと素直じゃないところがあるから、すくに仲良くなるのって出来なかったんだ」

まぁ、爺ちゃん婆ちゃんからすればかわいい孫のように見えてしまうかもしれないが、あの目つきは他からすればいらぬ誤解を受けるかもな。

「だから、ヴィータちゃんとすぐに仲良くなった蒼詩君がちょっと羨ましいなぁ、って」

「仲良く、なったのか？」

なんかそう聞かれると、すぐに肯定できない気がするけど。

「なんにしても、ヴィータちゃんと仲良くなってくれるとわしも嬉

しいがのぅ」

「すっかり孫気取りだな、爺さん？」

「ヴィータちゃんはみんなの孫じゃからのぅ♪」

そう言ってケラケラと笑う柏木の爺さん。

大人気だねぇ、ヴィータ。

「それにしても、お主、中々仕事が様になっとるのぅ。なのはちゃんと並ぶと夫婦に見えるぞい」

「ふ、夫婦って……やだっ、柏木さん！」

柏木さんの言葉に高町は頬を染めて、あたふたしている。

こういう手に高町は弱いよな。

「そんなこと……ねぇ、蒼詩君？」

「桃子さーん、休憩入っていいですかー？」

「いいわよー」

「えっ？　ちょ、ちょっと無視しないでよ～！」

こういうのはスルーに限るね。さりげない話題の展開はおてのものだぜ。

「ほぅ、夫婦漫才とな。中々見物じゃわい」

爺さん、店員で遊ぶなよ。高町以外で。

「いらっしゃいませ～」

柏木の爺さんが帰って、しばらくホールで動いていると新たにお客さんが二名、来たようなので営業スマイルで迎える。

「暇だから、やってきたぞ」

「やっほー、蒼ちゃん、遊びに来たよ～」

「すみませんが、他のお客様のご迷惑になりますので消えｒ……ゲフンゲフン、退出願います」

「ものすごい丁寧に追い出された！？」

「いや、さりげなく言葉遣いが荒くなったぞ？」

やってきたのは、一体どこで俺がここでバイトするという情報を手に入れてきたのか、紅次と翠だった。

「お邪魔致す。高町夫妻」

「おや、めずらしいね。君達がここにやってくるなんて」

「いらっしゃい、紅次君に翠君。ゆっくりしていってね」
「こんにちは桃子さん、相変わらずお美しいですね！！」
「あらあらお世辞が上手ね、翠君♪　でもダメよ、旦那の前だから」
「むしろ、ボコボコされることに期待しています！！」
こいつ、夫の嫉妬すらも耐えるのか。相変わらず翠のドＭスペックは高いな。
そんな翠の言葉にも桃子さんはニコニコと対応している。接客の鏡というべきか、流石桃子さんというべきか。
「あれ、紅次君と翠君もお父さん達と知り合いだったの？」
そして颯爽と現れる高町。そういえば、紅次達のことは話していなかったな。
「たまに翠屋ＪＦＣの練習に来てくれるんだよ。そこで戦略を練ってくれたり、練習に付き合ってくれたりと色々お世話になってね」
「練習では会うのだが、ここで話すのはかなり珍しいな」
「いつもお前らは、練習が終わったらすぐに帰るもんな」
「翠屋なんてめったに行かなかったしね」
俺達はそう説明すると、高町はへぇ～、と口にしたりうんうんと頷いてしたりしている。
意外と高町家を中心に交流しているんだな。

「まぁ、せっかく来たんだし、二人はなにを注文するんだ？」

「チーズバーガー」

「女性店員のローアングルショットを一枚」

「……士郎さん、ちょっと仕事抜けてもいいですか？　なに、お宅の道場から木刀を拝借してくるだけです」

「殴っちゃだめだよ蒼詩君！？」

「そうだよ蒼詩君。店内での暴力はご法度だ。ただし道場内なら可」

「なるほど、つまり道場が法律、こいつらを道場まで引きずり込めばいいってことですね、わかります」

「違うよ！？　何一つ解決してないよ！？」

だって、こいつら何のためにここに来たんだよ。ここは桃子さんのシュークリームを頼むだろ、常識的に考えて。

「ならば、俺はコーヒーとチーズケーキだ」

「オレはオレンジジュースとチーズタルト！」

「いきなり普通になったな」

とりあえず、注文通しておくか。

「いらしゃいませ〜……って、お前達は……」

紅次達が頼んだメニューが来て、のんびり会話などしていると新たに客が来たわけだが、今日は妙に縁がある。

「あれ？　なんで蒼詩がここのお店の恰好をしてるの？」

「今日一日、急用でこれなくなったバイトの代わりとして手伝ってもらってるんだ」

「中々似合っとるで蒼詩君」

「蒼詩君がここで働くのって、なんだか新鮮だね」

「逆に落ち着かないわね……」

やってきたのは、高町の親友達。私服を身に包み、俺の接待に大いに驚いていた。しかし、高町の説明により四人は納得し、団体用の椅子に座ってゆく。

「げっ！　あ、アンタ達まで……！」

「見事に嫌そうな反応ですな、バニングス嬢」

「紅次君達が来るなんて珍しいなぁ」
「蒼ちゃんがバイトしてると聞いて、面白そうと思ったから」
「相変わらず面白いことが理由なんだね……」
それが三バカカラスですから、としか答えようがないな。
「ふふ、なんだが賑やかだね」
「まるで、ようやく集まったって気がするのは気のせいか？」
そんな様子をカウンターから見ていた俺と高町。
最近、学校ではこの八人でいることが多くなった。
三バカカラスと五大聖祥女神。
周囲からの評判は全くの正反対だが、まるでそれが当然であるかのようにこうして駄弁っている。
秩序（コスモス）と混沌（カオス）。
それは相反する存在と言われても、実際は両方あって初めてこの二つが成り立つんだと思う。
反り合わないことはない。いや、むしろその二つが一番合うんだ、って。
「今日はいつになく楽しいなぁ♪」
「いつも楽しいのか、ずいぶんと頭の中はお花畑なんだな。おっと、すまん、いつものことか」
「さりげなく酷いよ、それ！？」

「ちょっと二人共ーー！！　そこで突っ立ってないでこっちに来なさい。お客さんの相手をするのがアンタ達の仕事でしょ。というか、このバカ二人をなんとかしなさいよ！！」

なんか向こうでは、居酒屋の酔っ払いみたいにバカ二人が悪乗りし始めている。

「やれやれ仕方ないな……」

「にゃはは、じゃあ行こうか、蒼詩君」

「あの二人に加勢するか」

「止めようよ！！？」

今日は一日限定のバイトだったけど、こうしてこの八人と学校以外で集まってバカやってできたことに、少し感謝することにした。

だが、“いつものような”日常を過ごすことに関しては、この日が最後だったのかもしれない……

おまけ～中の人ネタ～

「失敗した失敗した失敗した

第十九話　バイト戦士（後書き）

前書きの続きですけど、作者は黒髪クールビューティーなキャラが好みです。

あの性格で突然あたふたしたり、照れたりする姿がたまらんのです（笑）ジャンルでいうクーデレってやつですか。

まぁ、要するにギャップ萌サイコーってやつです。

てなわけで、今回はやってみたかった翠屋の手伝いです。

なのはの出番がほとんどだったけど、仕方ないね、主役だし。

最後のおまけなんですが、本編では使うことができなかったネタなどをちょくちょく挟んでいきます。

反応は人それぞれかもしれませんが、感想なども遠慮なくどうぞ。

それでは、これにて！

番外編　ラジオときどき奇襲（前書き）

勢いでやっちまった……だが、後悔はしていない。

番外編　ラジオときどき奇襲

「おはよー、蒼ちゃん、紅ちゃん」

「おう、おはよう、翠」

「うむ、おハローだ」

桜の花は散り、緑葉に移り変わり始めたこの日、俺は紅次と翠の三人で登校していた。

こういったのはいつもの事だが、今回は違う。

「二人共、作戦内容は覚えているか？」

いつもの口調、変わらない声の調子で紅次と翠に話し掛ける。

「ああ、もちろんだ」

「いつでもＯＫだよ」

二人も問題ないといった様子で返す。そのノリはただの会話のように静穏を含んでるかのように思えた。

「じゃあ、時刻は昼。ターゲットが動き出したら、手筈通りに行うぞ」

それだけ言うて、俺達は口元を歪めた。

他の生徒が見たら、こう思っていただろう。
『ああ、こいつらまた何かやらかすぞ』と。

なのは「フェイトちゃん、今日は蒼詩君誘ってないの？」
フェイト「うん、何でも、どうしても外せない用事があるんだって」
はやて「珍しいなぁ、蒼詩君が用事なんて、もしかして職員室に呼ばれているとか？」
アリサ「否定はできないわね。入学式から放送で呼び出された回数なんて軽く二桁は超えてるわよ」
すずか「もしかしたら、その用事ってまた悪戯かもしれないよ？」
四人「ありえる……」
～スピーカーからＢＧＭが流れる～
フェイト「あれ？　この音……」
アリサ「そういえば、今日は放送部によるラジオ番組があるって話聞いたわね」
なのは「あっ、それ私も聞いたよ、ラジオに近い形でおたよりとか

曲紹介とかのコーナーもあるんだって」

すずか「それで教室とかにそのためのハガキと箱が置いてあったんだね」

『全校のみなさん、こんにちは。今日放送部によるラジオ放送、名付けて聖祥ラジオ局をお送りしたいと思います』

フェイト「へぇ〜、学校ってこんなこともするんだ」

はやて「さすがに小学生ではこんなことせぇへんからなぁ。三年生あたりの企画やと思うけど」

『記念すべき第一回は皆さんから寄せられたおたよりを……って、な、何ですか、あなた達は！！？』

アリサ「……！？　ど、どうしたのよ！？」

なのは「なにかあったのかな？」

『えっ？　【動くな、さもないと撃つぞ】って、それバナナじゃないですか！？　しかも、完熟王？　そんなことどうでもいいですよ！？』

はやて「何やろなぁ、この先の展開が容易に想像できるんやけど……」

アリサ「奇遇ね、はやて。私もよ……」

フェイト「え？　え？　どういうこと？」

『ちょ、ちょっと待って、今オンエア中で……あ～れ～……』

すずか「放送室で何かあったのかな？」

なのは「だと思うけど……ラジオ、どうするんだろう？」

蒼詩『今からここの放送室ならびにこのラジオは我ら三バカカラスが占拠した』

五人「蒼詩（君）！？」

紅次『放送部の者は済まないが退場していただいた。反省はしていない』

五人「紅次（君）まで！？」

翠『ちなみに、脅迫に使っていたバナナは、このあと我々スタッフがおいしくいただきました』

五人「何やってるの！？」

蒼詩『ということで、今から【ウホッ、男だらけのカオストーク】を始めるぞ！』

二人『いえぇぇぇ

蒼詩『早速おたよりが来ているぞ、ラジオネーム【膝十字靭帯チラリズム】さんから』

なのは「ゲリラなのに既におたよりが来てるの！？　しかもラジオネームがチラリズムの部分じゃない！？」

蒼詩『【三バカカラスの皆さん、こにゃにゃちわ】』

三バカカラス『こにゃにゃちわ～』

アリサ「なんか腹立つそのあいさつ！？」

蒼詩『【いつもラジオ聞いてます。これを聞いていると駄菓子屋で１０円ガムを盗んでいった日を思い出します】』

はやて「嘘つけ！　これ第一回目やろ！？　ていうかやること小っさ！？　どの部分でそんな事思い出したんか、小一時間問い詰めたいわ！」

蒼詩『【その日は息子の誕生日だったので、気合入れて奮発しちゃいました。息子は驚きのあまり声が出なかったようです】」

なのは「息子の誕生日に何やってるのとか、気合入れる部分が違うとか、奮発すらしていないとか、ツッコみどころが多すぎるよ！」

紅次『誕生日と言えば、もらうプレゼントとかは家庭によって大きく変わってくるな』

翠『男の子だとゲームとか、年齢にもよるね』

蒼詩『祝う人の喜ぶ姿が見たいがために、何にするかは微笑ましいよな』

なのは「誕生日をみんなで祝ってもらうのも嬉しかったよりするよね」

はやて「ケーキを用意したりと祝う側もノリノリになったりするなぁ」

紅次『ケーキの代わりにお寿司屋でお寿司を食べたり……』

すずか「確かにそういう家庭も多いよね」

紅次『……するのを妄想しながらもやしを食うとかな』

アリサ「悲しすぎるわ！　お寿司を食べていると思いながらもやしを食うとか、貧しすぎるわ！」

翠『そして、貧しい生活に耐えきれなくなった家族達は、密売へと手を染めるのであった……』

なのは「そこまで追い詰められてるの！？」

蒼詩『トークも温まってきたところで、記念すべき第一回目のコーナー始めるぞ』

すずか「そういった企画はもう考えてあるんだ？」

フェイト「一体何をするんだろう？」

蒼詩『題して【お悩み相談コーナー】！！』

紅次『説明しよう！　お悩み相談コーナーとは、学生たちが日頃から抱えている悩みを我々がアドバイスをして、解決していくコーナーのことだ！』

なのは「あっ、意外とありきたりなコーナーだね」

アリサ「こいつらに相談するってのも癪だけど」

はやて「せやけど、この前の下着泥棒みたいに意外とみんなから慕われてんやから、相談にのる人がおるかもなぁ」

蒼詩『じゃあさっそく一枚目を読むぞ。ラジオネーム【ときメッキメモリアル】さんから』

すずか「なんだかギリギリなラジオネームだね」

蒼詩『【私には好きな人がいます。けど未だに自分に自信が持てないでいます。自分に自信をつけたいんですが、どうすればいいですか？】』

フェイト「このラジオってこんな相談も受け付けるの？」

はやて「ラジオの定番と言えば定番やけど、さすがに相談する相手間違ってへんか？」

蒼詩『これは数々の恋愛事を解決してきた恋愛専門カウンセラー、白神紅次に答えてもらいましょう』

なのは「紅次君って、そんなすごい人だったの！？」

アリサ「ものすごく胡散臭そうな感じだわ」

紅次「ふむ、恋愛というのは言わば情報戦。【相手を知り己を知らば百戦危うからず】だ『

五人「おおーー！」

紅次『そこで、相手に振り向かせる方法をいくつか教えよう！』

五人「ド、ドキドキ……！」

紅次『１：まず、相手の好みのタイプなどを調べておくこと』

五人「ふむふむ」

紅次『２：少しでも自信が持てるように、自分を切磋琢磨すること』

五人「ほうほう……」

紅次『３：獲　物　は　逃　す　な　！』

五人「……は？」

紅次『４：左手は添えるだけ』

五人「なにを！？」

紅次『5：目標をセンターに入れてスイッチ』

五人「どういうこと！？」

紅次『6：てめぇは俺を怒らせた……』

五人「何で！？」

紅次『7：こ、づ、く、り、しまっしょ☆』

五人「アウトーーーッ！！！」

紅次『8：アナタガトゥキデース！　アナタノコトガー、トゥキダカラァ。以上！』

五人「何か違う！？」

翠『さすが紅ちゃん、これであなたのハートにドッキューン！　だね』

なのは「いやいや！　絶対無理だと思うよソレ！？」

フェイト「途中から関係ないものも混じっていたしね……」

蒼詩『それじゃあ次の相談にいくぞ。ラジオネーム【学園一のバカ】さんから』

はやて「それ、自分で書いといて悲しくならへん？」

蒼詩『【僕のクラスメイトに二人の女子がいます。その子たちは、

とても魅力的で、胃が物理的な意味で溶ける料理を作ったり、関節技を仕掛けてきます。僕の平穏な日常を取り戻すにはどうすればいいのでしょうか？】』

すすか「なんだか苦労してそうだね」

アリサ「そんな子達を魅力的って言えるのはどうかと思うわよ」

蒼詩『ではこれは、翠に答えてもらおう』

翠『なに、難しい事じゃないさ。そこから生まれる痛みを気持ちいいと思えば、人生楽しくなれるよ！」

なのは「そんな人は翠君しかいないよ！？」

蒼詩『どんどんいくぞ。ラジオネーム【生徒会のハーレム王】さんから』

すずか「これを投稿した三年後にもう一度聞くと、いい具合に赤面しそうだね」

蒼詩『【俺の生徒会には、愛すべき美少女が四人います。しかし、いくら経っても皆を攻略した様子はありません。一体何がおかしいのか、是非ご教授お願いします】』

はやて「攻略とか、どこのギャルゲーやねん」

蒼詩『この投稿者に言うべきことは一つ』

三バカカラス『もげろ☆　以上！』

なのは「投稿者に対しての対応酷くない！？」

蒼詩『いやぁー、最近の学生は、異性関係の相談が多くて青春してるねー』

翠『そして、それを手助けするオレ達、人間の鑑だね』

紅次『正に、三バカカラスマジキューピットだな』

フェイト「何一つ、成就していなかったと思うけど……」

アリサ「もうすでに、あいつらの独壇場だわ……」

蒼詩『続いてのコーナーは【与那原翠の変態特集】！』

五人「なにそれ！？」

蒼詩『このコーナーはリスナーから送られた数々の変態ぶりを紹介し、俺達三人で評価するというものだ』

すずか「とてもラジオで放送していいとは思えない」

蒼詩『では早速いってみよう、ラジオネーム【＜ピー＞】さんから』

五人「いきなり放送禁止用語！？」

蒼詩『【自分は女の子の穿いたパンツを被るのが好きです】』

五人「へ、変態だァーー！！」

蒼詩『【あるときこんなことを言われました。『そんなに被りたければ下着売り場に行けばいいじゃないか』と】』

なのは「それで解決するとは思えないんだけど……」

蒼詩『【それで自分はこう答えたのです。『未使用に興味はない！』ってね】』

五人「うわぁ……！」

蒼詩『うーん、これはまごうことなき変態。それでは翠、感想は？』

翠『被るポイントが絶妙だね。正にパンツはデザインや形じゃない、誰が掃いているかだ、ということをよく表しているよ』

五人「こっちも立派な変態だ！」

蒼詩『では【＜ピー＞】さんは警察に補導してもらいましょう、住所も書いているみたいだし』

五人「どうしてそうなった！？」

蒼詩『続いての変態さんはラジオネーム【＜バキューン＞】さんからです』

アリサ「このコーナーに投稿する人、もう少しまともなラジオネーム考えなさいよ！」

蒼詩『【ある日知り合いに『馬鹿には見えない服』を貰いました】』

五人「裸の王様！？」

蒼詩『【着てみると少し肌寒いですし、むず痒いですが快適です】』

なのは「肌寒いのは裸だし、むず痒いのは他人の視線だよ！？」

蒼詩『【その時、ふと思いました。もし、相手が馬鹿だったらどうすればいいのかと】』

フェイト「あ、意外とまともかも……」

蒼詩『【そんな時は『パンツじゃないから恥ずかしくないもん！』と思えば問題ありません】』

五人「ああ、やっぱり……！」

蒼詩『中々の変態ぶりを見せ付けているな。それじゃあ紅次、この変態についての感想は？』

紅次『正に逆の発想だな。羞恥心にきっちりと線引きをしている。そんな斬新な変態にはあっぱれとしか言いようがない』

なのは「他にも言うことがあるでしょ！？」

蒼詩『ということで、【＜バキューン＞】さんには手錠を差し上げます。これを着けて自首して行ってね』

五人「結局このオチ！？」

蒼詩『それではここで一旦ＣＭ！』

はやて「もうすっかりラジオ番組になってもうとるなぁ……」

すずか「すごい手が込んでるね……」

桃子『お客様に安らぎと笑顔を提供します。海鳴市、翠屋、是非来てくださいね♪』

なのは「ぶっ！　お、お母さん！？」

フェイト「えっ、どうしてなのはのお母さんが？」

翠『このラジオ番組は毎日のスイーツを生み出す、翠屋の提供でお送りします』

はやて「まさかの提供者かいな！？」

アリサ「手が込み過ぎよ！」

紅次『ここで番組の途中ですがニュースをお伝えします』

すずか「そこまで忠実に再現しなくても……」

紅次『今日未明、海鳴市に住む近くのマンションから手に手錠をかけた素っ裸な人がいると近所から通報があり、犯人であるクマ吉君（仮名）を逮捕しました』

五人「さっきのコーナーの投稿者逮捕されちゃった！？」

紅次『警察の取り調べに対しクマ吉容疑者は【パンツじゃないから恥ずかしくないもん！】と意味不明なことを供述しているもようです』

フェイト「ほ、本当に言っちゃった……」

はやて「まさか警察沙汰になるとは思わへんやろ……」

紅次『なお、共犯者とも思われるこの部屋の住民はパンツを被って逃走中です』

なのは「その人絶対もう一人の投稿者だよ！」

すずか「逃げても見た目ですぐに捕まりそうだね……」

アリサ「投稿したら捕まるなんて、一種の呪いに近いわねあのコーナー」

蒼詩『では続いて、ラジオ番組でおなじみ、【曲紹介のコーナー】にいってみよう！』

なのは「あっ！　私こういうコーナーが好きだなぁ」

はやて「ラジオ番組では、人気やもんね」

すずか「曲紹介の前後の会話とか楽しいしね」

紅次『最初の曲は、【コスタリカの少女】さんが紹介してくれる【恋の抑止力】だ」

翠『【この曲を聴いたとき、男女の健気な恋物語に心打たれ、何故か平和を願う気持ちになりました】だそうです』

アリサ「前半の感想はともかく、後半の理由がよくわからないわ」

紅次『さぁ～皆の衆。君も、お前も、あ～そこのお前も！　平和を願うコスタリカの少女のことを想いながら、一緒に歌おう！（強制）』

なのは「なんだか無理やりな感があるね……」

アリサ「不思議と思い浮かぶ光景が、どっかの海洋プラントなのは何故？」

紅次『いつでも、待ってる！！』

はやて「合いの手まで考えとるとは、やるなぁ、紅次君」

紅次『エビバディセーイッ！　かーなーうーよー！！』

フェイト「紅次、すごいノリノリだね」

すずか「でも、この歌を歌う人の声……」

フェイト以外の四人「フェイト（ちゃん）に似ている」

フェイト「え？　あ、ホント、私だ。え、何で？」

蒼詩『では続いて曲の紹介に……ん？　何やら外が騒がしいな』

紅次『どうやら教員が、こちらに駆け付けているようだぞ？』

蒼詩『よし、このラジオを聞いている同胞達よ、任務だ。今から放送室の前にいる教師どもを掃除してこい』

なのは「先生を社会的に抹殺！？」

蒼詩『なに？　別に倒しても構わんのだろう？　かまわん、ぶちのめせ！』

フェイト「何でリスナーの声がわかるの！？　あと、先生倒しちゃダメだって！」

蒼詩『安心しろ、胴上げしながら運べば問題ない』

すずか「あ、そこは穏便に済ませるんだ」

蒼詩『だが教頭、てめぇはダメだ。奴のケツに角材をぶち込んでやれ』

五人「教頭先生逃げてーー！！！」

『ちょ、なんだお前達、邪魔をするな……って何だこれ胴上げ！？
しかも無駄の無いチームワーク！？』

『ケツがぁぁぁぁーーー！？！！』

『あぁ！？　教頭先生の老け顔がさらに酷く阿鼻叫喚に！？』

蒼詩『ではここで曲を紹介しましょう。タイトルは【角材をケツに

刺し込まれた教頭の名を私はまだ知らない】』

五人「なんてひどいタイトル！？」

～曲流し中～

なのは「万遍なく歌詞がひど過ぎる……」

蒼詩『なお、校長作詞作曲、【昇給サキュレーション】も好評発売中です』

五人「何やってんの校長！？」

蒼詩『さて、名残惜しいがもうお別れの時間です。あー、名残惜しい』

すずか「何も二度も言わなくても……」

蒼詩『最後の締めは、みんなで【ジャカジャカジャンケン】して終わりましょう』

はやて「なにその懐かしすぎる終わり方」

三バカカラス「ジャカジャカジャンケン、スタート！　ジャカジャカジャン、ジャカジャカジャン、ジャカジャカジャカジャカジャカジャン！」

全校生徒「イエィ！！」

五人「ノリノリ！！？」

三バカカラス「ジャカジャカジャン、ジャカジャカジャン、ジャカジャカジャカジャカジャンケンポン！！」

蒼詩『俺の勝ちです』

翠『オレの負けです』

はやて「アンタらがやるんかい！？」

紅次『それではまたお会いしましょう、さよなら～』

番外編　ラジオときどき奇襲（後書き）

作者「せめて……これだけは、更新、しとく、ぜ……」

蒼詩「つべこべ言ってないで、とっとと筆を動かせ」

作者「ヒイィィィィーーーー！！」

１１月はテストとかで、更新が遅れる予定です。

少しの合間でも、小説を書いていきたいと思います。

それでは、これにて！

第二十話　嘆きのヴィーナス（前書き）

約一か月ぶりの投稿です、お待たせしました。

この１１月はなにかと忙しかったので、書く時間が設けられませんでしたが、ようやく落ち着きました。

第二十話　嘆きのヴィーナス

今日の学校も終わって放課後。
紅次達と別れると、そろそろ食材が無くなりそうだことを思い出したので、下校のついでに近くのスーパーに寄って行った。

この時刻だとタイムセールがあるはずだ。
『特売掠い』の異名を持つこの俺がいる限り、誰一人商品を取らせるつもりはねぇ。
そんなわけで、スーパーに行こうとしたのだが、

「あっ、蒼詩」

「ん？」

後ろから声をかけられた気がして振り返ってみると見慣れた金髪が目に入った。

「バニングス」

金色のショートボブの髪型をした少女は俺を見るなりこちらに寄ってくる。

「あんた、帰りこっちだっけ？」

「いいや、今日はスーパーの特売日だからな。帰るついでに夕飯の材料でも掻っ攫おうと」

「掻っ攫うって……アンタなら万引きですら出来そうね」

「万引きするくらいなら有名な美術絵画を盗んだ方が……」
「どこぞの怪盗よ！　というかアンタ達に比べればまだ怪盗の方がまともだわ！！」
「おいおい冗談は解答だけにしろよ、怪盗だけに」
「無駄にうまいこと言ってんじゃないわよ！！」
もう俺とバニングスだけで漫才やっていけそうだな。
八神のような本場のツッコミもいいけど、こう必死のツッコミも中々どうして。
「そういうわけで、ちょっと買い物に付き合え」
「どこをどう捉えたらそんな経緯にたどり着くわけ！？」
「急げ！　チンタラしてると特売セールは獰猛な主婦達に奪われるぞ！」
「え？　あっ、ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　なんで私まで！」
スーパーは戦場だ、戦争なんだ。一瞬の油断がしばらくの献立の中身を変える。
バニングスの言葉をスルーしながらズンズンと足を進めていった。

アリサＳｉｄｅ

ほんっと、あいつと関わるとロクなことがないわねっ！
偶然見つけて声をかけただけで何でバーゲンセールに付き合うハメになるのかしら？

しかもスーパーに着いてタイムセールの放送が流れた瞬間、恭也さんとの試合で見せた素早い動きで主婦達の群れへ突貫していく。
そして次々と商品が消えていったかと思うとアイツの手元にセール対象の商品が集まっていく。

確かに掻っ攫っているようにしか見えないわね。

学校ではいつもバカやってるけど、外でもあまりやってることは変わってない気がする。

でも、どうしてアイツは恭也さんと互角に渡り合う強さを持ってるのかしら？
いつもふざけているように見えるけど、剣を持った時のアイツはずいぶん雰囲気が変わっていた。

そんな様子は一度も見せたことは無いのに。

その時のアイツの表情が頭から離れなかった。

蒼詩ｓｉｄｅ

いや～、大漁、大漁。今日もがっつり安く食材が手に入って、ホク

ホクした表情で帰路につく。

「ずいぶん嬉しそうね？」

バニングスが顔を覗かせてくる。

「そりゃあ、こんだけ食材を確保出来たんだ。嬉しくないわけないだろう？」

「アンタ、どこからどう見ても立派な主婦ね」

「ご近所では主婦のカリスマって呼ばれてる、これマジな話」

「主婦のカリスマって……その歳でそう呼ばれていいのかしら？」

主婦をなめるな。縁の下の力持ちと言うだけあって全国の主婦の皆様は今日も頑張ってるんだぞ。

「まぁ、大半はバニングスの功績だがな」

「へっ？　私何かしたっけ？」

「色々とやってくれただろ？　捕った商品を見張ってくれたり、どこに何の商品がタイムセールなのか的確に指示くれたし」

あれは見事なもんだったな。なんでそんなの知ってんだと思ったくらいだからな。

「べ、別にたいしたことじゃないわよ……」

「これが本場のツンデレですね、わかります」
「誰がツンデレよ！！」
「そんなツンデレなあなたに、はい」
俺はスーパーの袋からロイヤルミルクティー味のペットボトルを取り出し、バニングスに渡した。
「バニングスのおかげで財布に余裕ができたしな、ちょっと奮発して買ってやった」
「べ、別にこんなのくれたって全然ないわよ。こんなの、うちのに比べればたいした物じゃないし……」
そう言いながらもロイヤルミルクティーを一気飲みする姿はかわいい、もとい男らしいな。
「そう言えば、なんでお前がここにいるんだ？」
「ぷはぁ……。今さらよ！　私は習い事があるんだけど、まだ時間があるからどこかに寄っていこうと思っていたのよ」
習い事といえばバイオリンのことか。にしても、こいつがここらを回るとか庶民的なお嬢様だな。
違和感ないのも、また驚きだが。
「月村とは一緒じゃないのか？」
「今日は家の用事があって来れないらしいわ」

「ハラオウン達みたいな？」
「フェイト達とは違って、ごく稀よ」
なるほどね、だからここらで時間を潰していたということか。
「そんなわけだから、そろそろ行くわ。ちょうどよく時間も潰せたし」
「そいつは良かった」
そう言って俺は、手の平をバニングスに差し出す。
「……？　その手は何？」
「飲み干したミルクティーを捨てるため」
「……アンタって、時々気を配るのがうまいのよね……」
伊達にＢＡＲで働いてるわけじゃないからな。
バニングスから空のペットボトルを受け取る。
「んじゃ、稽古頑張ってくれ」
「言われなくたって、そのつもりよ」
クルリと花弁のように美しく踵を返し、歩き出す。
う～ん、黙っていればお嬢様に見えなくもないな。
まぁ、無口なバニングスなんてらしくないだけだし。

さて、食材はバニングスのおかげで普段よりたんまり手に入ったし、何を作ろうか。

「お肉は蒸した鶏のササミを使って、あとは玉ねぎとトマトの和え物、味噌汁とご飯は必須だな」

一人暮らしもすっかり慣れて、献立を考え、洗濯物を干し、掃除をしたりと家事スキルは大方手にしている。
この歳でそんなことをして、寂しくないかと言えば嘘になる。
しかし、そんな我が儘なことを言ってはいられない。

「決めたことだからな」

誰もいない台所でそう呟く。
だが、その後に訪れる閑寂は一つの音によって破られた。

アリサｓｉｄｅ

「いや、離して！！」

薄暗い視界の中、目の前には黒い服を着た男たちが群がり、私の四肢を押さえつけている。

無理やり振りほどこうにも、さすがに男の力には敵わない。

稽古が終わって、一人で帰っていると、いきなり後ろからハンカチのようなもので口を押さえつけられ、抵抗したみたものの、次第に意識を失っていき、気が付けば古びた建物に運ばれていた。

そして今、私を運んだと思われる男達にこうして襲われている。

「うるせぇ！　大人しくしろ！」

「きゃあぁぁぁぁ！！」

すると男はいきなり私の服を強引に引きちぎった。

まだ、初夏のはずなのに、襲われているという感覚に寒気が肌に伝う。

「やめて！　離しなさいよ！」

これから起きる行為を想像してしまい、声の調子も必死になってしまう。

これじゃあ、またあの時のように……

（あの時……？）

おかしい、こんな経験初めてなのに、何故かこの光景を私は“覚え

ている”？

どこのわからない男に凌辱され、殺された自分が。

（いやっ！……そんなの、いやっ！）

そんなこと、されてなるものですか！

私は必死に声を上げて、助けを呼ぼうとする。

「へっへっへ……こんな森の奥にあるさびれた廃墟に近寄る奴なんているかよ」

男たちは下品な笑いを作りながら、露わになった私の肌を嘗め回すように見てくる。

絶対にあきらめるもんですか、こいつらなんて蒼詩にかかれば大したことなんて……あれ？

（なんで私、蒼詩が助けてくれるなんて思ったんだろう？）

あいつが助けにくるなんて、天地ひっくり返っても考えられない。

たがが恭也さんに仕合で互角にやりあったからって。

（でも……本気で困っているなら、きっと……）

「おめぇら、しっかり押さえとけと」

「おいおい壊すなよ、こっちも楽しみにしてんだから」

「いいじゃねぇか、ガキ一人襲うだけで相当な金が手に入るんだから」

「組織復興のためだ、恨むなら自分の親を恨みな、嬢ちゃん」
一人の男が私の上にのりかかる。
絶望的な状況の中、私はすがるように声を張り上げた。
「……なさいよ」
「あぁん？」
「助けに来なさいよ！　蒼詩ぃーーー！！」
そして、その叫び声に答えたのは、背中から血を吹きだしている私を襲うとした男の悲鳴。
それと同時に現れた、全身をボディスーツを覆い、顔全体をバイザーで隠した謎の人物だった。

蒼詩ｓｉｄｅ

人には墓場まで持ってきたい隠し事がある。
昼ドラな展開なら、夫に内緒で昔の彼と今だに交際しているとか。
特撮なら、悪と戦うヒーローのことを周囲に隠しているとか。
アクション映画なら、公にできない危険な仕事を友達に内緒でやっているとか。
とある刑事は言った「ドラマや映画のような、都合のいい結末なんてない」と。

「な、なんだこいつ！？」

いきなり俺が姿を現したことで、男達から動揺が走るのがわかる。
なんとかギリギリで間に合ったが、あいつの索敵能力は流石としか言いようがないな。

「こ、こいつ……あの時の！？」

一人の男は俺の全身をまじまじと見つめた後、手にある刀を見ると驚愕の表情を浮かべる。
何か知ってるみたいだが、そんなことは後回しだ。

「彼女を返してもらおう……」

鉛のように重たい声で、一人状況を把握できず困惑している少女、バニングスに視線を向けながら呟く。

「はっ！　こんな所に一人で来るとは死にたいらしいな。おい、殺っちまえ！！」

その声に男達はこっちに突撃してきた。
人数は四人。多勢に無勢だが、こいつらにおいては特に危険性はなさそうだ。

「ここなら確かに人目は付かない。なら、多少悲鳴が響いても誰も気付きはしない」

そう呟くやいなや、一人の男に詰め寄り、袈裟掛けに斬る。

血飛沫を上げている男を横目に、続けざま二人を斬り伏せた。
これを一呼吸。相手からすれば、気が付いたころには既にやられていたと思うだろう。
「残るはお前だけだ……」
「ひ、ヒィッ！」
仲間がやられた恐怖からなのか、男は腰が引いている。
だが俺はそんなのお構いなしに、男の水月に向けて膝蹴りを見舞った。
男は肺の空気を全て吐き出しながら身体を曲げる。
俺は男の後ろ襟を掴むと、勢いよく地面にたたき付けた。
くぐもった声を上げ、追い打ちをかけるように男の掌に刃を突き刺した。
「ぎゃあぁ！！」
「その手の甲にある入れ墨、龍（ロン）の残党だな。仲間はあと何人いる？」
刃が刺さってない、もう片方の手の甲に刻まれた龍の紋章を目にしながら質問する。
手にしている刀を時折、回して傷口を広げていく。
「だ、誰が貴様に教えるか！」
中々のタフガイなのか、口を割る気はさらさらないようだ。

「まあいい、その手については他を当たるさ。だから……」
俺は、足で男の肩を押さえ付けるように踏み、刀を大きく振り上げる。
「淀みなく、消えろ」
そして、勢いよく男の首目掛けて、振り下ろした。
止まることなく、刃は流れるように振り抜くと、首は天高く舞い上がり、男の首元から鮮血が噴水のように噴き上がった。
それと同時に流れる静寂。俺は刀についた血糊を払うと、通信機を耳に宛がった。
「こちらブルーカラー。敵殲滅を確認。ターゲットも色々と無事だ、回収を頼む」
『こちらホワイトカラー、了解。すぐそちらに車を向かわせる。その場で待機するように。通信終わり』
通信が切られると、すぐさまバニングスの元に駆け寄る。
服は引き裂かれ、白い肌を剥き出す姿は痛々しいものだ。
「とりあえず、これで我慢してくれ」
俺は、廃墟に捨てられているボロボロの布をバニングスに着せる。
汚れて気味悪いかもしれないが、柔肌を曝すよりはマシだ。
「あ、ありがと、う……」

そういうやいなや、バニングスは俺の腰回りに抱き着いてきた。
普通ここは奇声を上げて飛び上がりたいが、襲われる恐怖に安堵したのだろう、なすがままにさせておく。

「怖かっただろ、よく頑張ったな」

子供をあやすように背中をさする。
嗚咽を漏らしているせいか、か細い声で答えるだけで、放す様子はない。

明らかに俺も十分怪しいはずなのに、彼女は身を任せるかのようにずっと、しがみついたままだった。

第二十話　嘆きのヴィーナス（後書き）

劇場版なのはの二期が公式に発表されて、気分はハイですよ。

でも先に新作ゲームの方を楽しんでおくとしましょう。

年越しまでに何話か更新したいです。

それでは、これにて！

第二十一話　蒼の意思（前書き）

この前、アクセス数を見てみたらそろそろ１５万ＰＶに達そうとしていた。

そこまで見て頂いて、ただただ喜ぶしかありません、ありがとうございます！

第二十一話　蒼の意思

通信で寄越した車で、バニングスの家に行き、バニングスを一先ず自室で寝かせておくと、この家の持ち主と話をすることにした。

「私の娘を救ってくれて、本当にありがとう。君には感謝仕切れない」

バニングスの父親、デビットさんは深く頭を下げる。
バニングスグループの社長でありながら、こうして俺に頭を下げるなんて、いい父親だなぁ。

「いまさらですよ、デビットさん。あなたが頼んで、俺が遂行する、それだけです」

そう、俺は言わば傭兵。闇の中で、影のように動き、陰を残さず事を終える。

「いや、いつも君に頼ってばかりだ。娘と同い年だというのに、こうも無茶な事を私は依頼している」

「自分の意思でやりだしたことです。あなたが深目を負う必要はありませんよ」

それよりも、と俺は付け加える。

「バニングスを襲った犯人は、龍（ロン）の残党であると確認できました」

「まさか、まだ奴らがいたとはな。君が壊滅させたと思っていたが……」

「存在は裏社会から抹消しましたが、さすがに組織は、完全に断ち切ることはできませんでした」

「それだけ強大な組織だったということだ。一度で壊滅は不可能だ、組織化出来なくなるまで追い詰めただけでもたいしたものだよ」

「ですが、またバニングスのように狙われるかもしれません。香港に、龍について執着している人を知ってますので、残党狩りはそっちに任せときましょう」

「頼むよ……ふぅ」

デビットさんは深くため息をつく。

それに合わさるかのように、後ろから扉の開く音が聞こえ、振り向く。

「バニングス……」

そこには、ぶすっとした表情で立っているバニングスがいた。

いや、なんでそんな顔してんだ？

「おお！　アリサ！　心配したぞ！」

「パパ……」

「怖かっただろうに……怪我とか無いか？　気分は？」

「大丈夫よパパ。たいしたことないから。それよりも……」

バニングスは視線をデビットさんから俺へと移すと、こちらにやってくる。

なんか、すごい威圧感なんだけど。

「どういうことか説明もらうわよ、蒼詩。どうして、アンタがここにいて、あんなことをしてるの？」

「アリサ、これにはわけがあってだな、決して黙っていたわけでは……」

「いいですよ、デビットさん」

娘を前にして俺を庇うなんて、娘に似て義理堅い人だな。あっ、普通は逆か。

知られた以上、このまま秘密にするのは難しいな。

「バニングス、俺は傭兵として働いていました。以上！」

「もう少し詳しく話しなさいよ！」

いきなり激昂して叩いてきた。やめてください、死んでしまいます。

「いやー、今年は危うく三位になりかけたが、なんとか一位だったよ」

「一体なんの話よ！　ああもうっ、真面目な話になるかと思ったら台なしじゃない！」

いやいや、一位になるのも大変なんだぜ。よしんば過去二位だが、世界一位だからな。

「まぁ、詳しいことは伏せておくが、頼まれた依頼をこなしている、といったところか」

「それって……さっきみたいに、その……人を殺したりするの？」

「頼まれたならな」

今回の依頼はバニングスの救出だったから、犯人がどうなろうと知ったこっちゃない。

「このことを知ってる人って他にいるの？」

「身近な人なら、デビットさんはもちろん、高町家の人達も知ってる」

「なのはも！？」

「いや、知らないのはあいつだけだ」

血生臭いことを末っ子には知られたくはないだろうしな。

すると、腰に下げていた通信機が鳴りだした。

「こちらブルーカラー」

『こちらホワイトカラー、今バニングス嬢の屋敷前にいる。グリーンカラーも一緒だ』

「了解、ちょうどお前達のことをバニングスに話そうと思ってな、こっちに来てくれ」

『了解した、通信終わり』

通信を切ると、バニングスが訝しそうに見てくる。

「誰と話してたの？」

「仕事仲間、とこの場は言うべきかな」

「……？」

「すぐここに来ると思うが……おっと、来たみたいだな」

扉を開ける音が聞こえ、そちらに視線を向ける。

バニングスが釣られるように視線を移すと大きく目を見開いた。

「あ、あんた達……！」

「失礼するぞ、バニングス嬢」

「おっ邪魔しまーす！」

入ってきたのは、学園で混沌を呼び起こすことで知られる三バカカラスの二人、紅次と翠だった。

不敵な笑みとだらしない笑みはバニングスをより混乱に陥れる。

「ま、待ちなさいよ！　ひょっとして蒼詩の言っていた仕事仲間って……」

「十中八九、オレ達のことだね」

バニングスはもう呆然とするしかないといった感じで口を開いている。

「今回は紅次が監視カメラをハッキングしてバニングスを捜し出せたことが一番の功績だな」

「そこまでする！？」

「運良く見つかってよかったものの、最終的には衛星ハッキング使うところだったぞ？」

「いいわよ！　そこまでしてくれなくても！」

紅次はハッカーとしては一流だしな。さすがクラス表にちょいちょい細工しているだけのことはある。

「ていうか、蒼詩の言っていたブルーカラーって、何？」

「当然、コードネームだ。俺がブルーカラー（肉体労働者）、紅次がホワイトカラー（頭脳労働者）、翠がグリーンカラー（戦争生活者）だ」

「なんというか……安直ね」

言うな、自分もそう思ってんだから。

「それにしても、まさかアンタ達三人がこんなことをしてたなんて」

「色々と訳ありでな。そこんとこは深く追求せんでくれ」
「何でよ？」
「最近、右腕が疼くんだ」
「さっきの会話全く共通点ないわよね！？」
「俺の右手が真っ赤に燃えるぅーー！！」
「今度は何よ！？」
「翠を殴れと轟き叫ぶ！！」
「理不尽過ぎる！？　いきなり虐待宣言なんて可哀相……」
「右の頬を叩かれなくても、喜んで左の頬を差し出すよ！」
「オールオッケー！？」
「爆殺・ゴッドフィンガー！」
「うおおおっ！　揺るぎないほどたぎってきたぁ！　愛が、愛がぁ！」
「むしろ哀なんじゃないかしら！？」
「バニングス嬢に座布団一枚」

「いらないわよ！」

突然の中二発言に、普通のパンチを繰り出す俺。いきなり殴られても、恍惚な笑みを浮かべる翠。ツッコむバニングス。どこからか、座布団を取り出す紅次。

他と決定的に歪んでいる俺達。けど、こうしてふざけている俺達は、間違いなくこの海鳴市にいる。

「……はぁ、教えてくれないなら無理に聞かないわ。ただし、私にも協力させなさいよ！」

この言葉に俺達は互いに顔を見合わせる。
依頼が解決したら、まさかの協力したいだと。
どうしてこうなった？

「いやいや、バニングス。気持ちはありがたいが、何もそこまですることはないんじゃないか？」

「これは私が決めたことよ。アンタ達には迷惑はかけない、絶対に役に立つから」

なんだか、泥棒が姫様を囚われていた城から助けたのはいいが、一緒に泥棒をやりたいという展開だな。
その城ってスカトロの城だっけ。少なくとも、そんな卑猥な名前じゃなかった気が……

「もう……一人何も出来ないのは嫌なのよ……」

搾り出されたその声はまるで、自分を悔やんだ声に聞こえた。

なんか訳ありみたいだけど、まぁ、実際頑張るのは俺だしな。

「悪いがバニングス。いくら意志を固めようとお前の頼みは聞けない」

「……そう、よね。私なんてやっぱり役に立たないんだし……」

「違う」

俺はバニングスの言葉を遮ると、彼女の元へ歩み寄る。

「俺達のやっていることは危険なことばかりだ。公にできないこともしてきている。時に国境を越えてまで依頼がくることもある。下手すれば外交関係に影響を与え、最悪、帰る場所を失う。それは同時に未来を失うことになる」

バニングスはバニングスの望む未来がある。
俺達よりも遥かに輝かしい未来があるはずだ。

「俺はお前にそんな道を歩んでほしくない」

だから、俺は、俺達は突き放す。仲間として、友達として。

「……うん、わかった。そのことは諦める。けど、これだけは頼んでほしいの」

一度俯くがすぐに顔を上げて、俺を見据える。
その表情はさっきまでのが嘘のように引き締まっており、真っ直ぐな瞳を宿していた。

「私のことはアリサと呼びなさい。バニングスなんで堅っ苦しいわよ、私達は友達でしょ？」

腕組みをしながら胸を張っている姿に一つの安心を覚える。
これがいつもの魅力溢れる彼女なんだと。

「まぁ、それくらいなら別にいいが、高町達の前ではバニングスでいいか？　何の前触れもなく名前で呼んだら、絶対に勘ぐられるしな」

追及しだしたら、いちいち誤魔化すのも面倒だ。
普段の生活では、彼女とは何も変わっていないこと示さないといけない。

「それなら、仕方ないわね……なのは達に隠すのは正直心苦しいけど、状況が状況だから」

「そういうこと。それじゃ、改めてよろしくな、アリサ」

無意識に俺は笑った。いつものような口元を吊り上げた笑みではなく、小さい微笑みを浮かべながら。

「……っっっ！！？！」

すると、今度はバニングス……じゃなかった、アリサの顔が爆発した。
紅潮ってもんじゃない、文字通りの真っ赤っかになっていた。

「どした、アリサ？」

首を傾げ、赤い顔を見る。

「な、なんでもないわよ！　それよりも、明日も学校があるんだから、アンタ達も早く寝なさい！」

いきなりそれだけ吐き捨てると、ズンズンと大股で扉まで歩いていって、部屋を出ていった。

バコンッと乱暴に扉が閉まる。お前はキレたおっさんか。

「なるほどなるほど、アリサにも春がきたか……」

「春ですよー、はーるでーすよー！」

その様子を眺めていたデビットさんと翠は、俺と扉の向こうを交互に見ながらニヤニヤしている。

今はもう夏でっせ、もう一発轟き叫んでやろうか。

「我が代の春が来たーーー！！」

紅次のはなんか違う気がする。やっぱりシャイニングフィンガーに変えようか。

「……ん？」

ふと一つの窓に視線が止まる。

ほんの一瞬、窓の向こうに人影が映った気がしたんだが……

その姿が何故かアリサにそっくりだった。

「どうしたんだい、蒼詩君？」

「いえ、なんかあの窓の向こうにアリサが映った気がして……」
「ははっ、何言ってるんだい。ここは三階だよ？　それにあの窓の向こうは外だから、アリサが映るわけないさ」
「なにそれこわい」
なら、さっきのは気のせいだったのか？
でも、アリサらしき人影を見た時、彼女の口が動いたのをはっきりと見た。

『ありがとう』と。

「そうか、まだ龍（ロン）の残党がいたのか……」
「情報を吐かせることはできませんでしたが、まだ暗躍していると考えたほうがいいでしょう」
「こちらの部隊も捜索にあたってみるよ。戦力は昔よりは激減した代わりに、居所は掴みにくくなったが、よほどのことがない限り、

龍(ロン)が組織的に壊滅するのも時間の問題だろう」

「その件については、全権あなたに委ねます。蜥蜴(とかげ)は追い込みましたから、終止符くらいは譲りますよ」

「できれば自分の手で終わらせたかったが、そうしたらいつまで経っても終わらなかったかもしれない。君には感謝している」

「いまさらですよ。事が済んだら実の娘に会いに行ったらどうですか？」

「それも、いいかもしれないな。少しは強くなったか見てみるとしようか」

「ついでに料理の腕も見てやって下さい。俺としましては、そっちを優先に」

「ふふっ、そうしよう。本当に感謝するよ、蒼詩くん……いや、兇王」

「その言葉はあまり好きじゃないんだけど……まぁ、貴方の好きに呼んでください、美沙斗さん」

初めてアイツを見た時の第一印象は「変な奴」だった。

自己紹介の時は親友の二人と似たように、おかしな事を言ってたし、昼食時間に屋上で大声は出すわ、女子更衣室に入ろうとするスケベだったり、何かと騒動を起こすやつだった。

でも、そんな彼には意外な一面もあったりする。

私とフェイトがテニスの顧問に強引に勧誘されそうになったのを止めてくれたし、真剣に悩みを抱えている子には、ちゃんと応えようとするさりげない優しさ。

たくさんの異国語を話せる語学力。

恭也さんと対等に立ち向かえる強さ。

一緒にいればいるほど、彼を「変な奴」だと一言で片づけるのは難しくなってきた。

それでも、変な奴なのは変わらないけど。

いつしか、彼と一緒にいると今までより楽しくなる気がした。

不思議とこういうのが嫌いじゃない気がした。

窮地から私が助けてくれた時、顔はわからなくても、彼が助けに来てくれたのだと錯覚した。

いつからかはわからない。

いつもより顔が熱い、鼓動が速い。

この気持ちが何なのかは、わからない。

でも、とても大切な気がする。

だから、これが何なのかわかるまで。

この気持ちを大切にしていこう。

明日は、違う意味でドキドキが止まらない。

第二十一話　蒼の意思（後書き）

フラグが立ったな……

基本、五大女神とくっついてもらう形ですからね。五人とも好きなんで。

え？　なんでログに「ハーレム」なんて付け加えないんだって？
すぐにハーレムになるわけじゃないからね！

ハーレムは私も大好きですが、そう簡単にホイホイとフラグを立てちゃあ、面白みがないとおもうんですよ。
オリ主は、どこぞの世界でただ一人ＩＳを動かせるフラグ一級建築士ほどイケメンじゃないですからね。
ランクでいうと、中の上？

そもそもハーレムというのは、ただ美少女に囲まれて愛と嫉妬に挟まれながらキャッキャッウフフするものではなく、互いが互いを認め合いながら微笑ましい愛を営むものでしｔ……おっと誰か来たようだ。

ここで、話を切り上げるのは非常に名残惜しいですが、私の存在感がピンチな気がしてきましたので、逃げ……ゲフンゲフン、切り上げてさせてもらいます。

それでは、これにて！

第二十二話　ドラキュラ言うな、吸血鬼と呼べ（前書き）

ながぁーーーい！！

ようやく完成して全体を見てみると、二万文字もあった。長すぎる……

ところどころにネタを入れたけど、わかる人いるかな……

第二十二話　ドラキュラ言うな、吸血鬼と呼べ

アリサ強襲事件が起きた翌日、教室に入ってみれば当人のアリサはいつものように、ハラオウンと仲良く会話しているのが見えた。
さすがというか、慣れているのか気丈な態度は変わらない。

「おはよー。バニングス、ハラオウン」

「あ、おはよう、蒼詩」

「お、おはよう……」

ハラオウンは相変わらず見惚れるような微笑みで挨拶を返してくれる。
アリサに関しては……何か顔が赤いぞ？

「どうしたバニングス、真っ赤みたいにトマトが顔だぞ？」

「それを言うなら、トマトみたいに顔が真っ赤でしょ！　べ、別になんでもないわよ……」

「でも、本当に顔が赤いよ。アリサ、大丈夫？」

ハラオウンも気づいたのか、心配そうな顔をしている。
いつも快活で勝気な少女、そんな印象を与える彼女は何だか今日はしおらしい気がする。

「バニングス、もしかして……」

「あ、ううん！　き、昨日は全然気にしていないから！　それだけは絶対！　……むしろ、それどころじゃない気が……」

俺の言葉を察したのか、アリサは首を大きく横に振ってくる。
言ってることは本当みたいだけど、なしてこちらをチラチラ見てるのですか？
というかそこまで大げさに否定すると変に勘ぐられるぞ。

「昨日って、なんのこと？」

そこにいるハラオウンとか。
アリサの露骨な反応を見て、ハラオウンは首を傾げる。

「えっ！？　あっ、えっと、その……」

アリサはしまった、という表情を一瞬浮かべると、視界を彷徨わせながら言葉を紡ごうとする。
まぁ、昨日、テロリストに一生涯の傷を付けられそうになった、なんて親友に言えないわな。
心配してくるだろうけど、こういった類をどうしようもないからな。
親友といえどもハラオウンは一般人だ、アリサが襲われたのはバニングスグループの令嬢だから狙われる機会はあったんだろうな。
そんなアリサを守る対処法を生み出すことは、ハラオウンではまず無理だな。
ともかく、これ以上放っておくと勘ぐられるから手助けしてやるか。

「実は昨日、帰りにスーパーのバーゲンセールに行こうと思ったら、バニングスと鉢合わせしてな。ちょうどいい戦力として協力してもらったんだ。無理やり引き入れたみたいだったけどな」

これは立派な事実。その時は一人だったし、ハラオウン達もアリサと一緒でなったのだから、うまく誤魔化せる。ここで、俺が強引に巻き込んだことにしておけば、アリサがあの表情になることは納得できるしな。

「へぇ～、楽しかった？」

「えっと、楽しかったってもんじゃないわよ。バーゲンの熱に当てられるわ、見張りをされるわ、散々よ。はやてを連れて行くととんでもないことになるわよ。それに……」

バーゲンセールの話が出たのか、バニングスはさっきの行動を誤魔化すように次々と語りだす。
内容は嫌々という感じだが、話している様子は何だか楽しそうだった。

昼飯はいつものように屋上で食べるのだが、今日も高町、ハラオウン、八神はいない。理由はもちろん家庭の事情だ。
三人も減るとかなり侘しくなるはずだが、今回はその代わりがやってきた。

「しかし何故、この教室は給食という大地の恵みが無いのだ、私立とはいえ、ここの義務教育の中学であろうに」

「小学校も同じだよね。購買のパンを巡って騎馬も組んだしね？」

「さも当然のようにアタシに聞かないでよ！　やってないわよ、そ

んなの！」

なんと今回はスペシャルゲストとして、紅次と翠がやってきたのだ。この二人のおかげで一段と賑やか……というよりは騒がしくなる。おそらくこいつらも昨日のアリサを心配して、少しでも気分を盛り上げようとしているのだろう。

聡いアリサのことだ、きっとこのことに気付いている。

「何だか楽しそうだね」

ふと月村がそんなことを口にする。彼女が向ける視線には、まだ騒いでいるアリサ達がいる。

「いつものことだ、それが三バカカラスだからな」

「ううん、そうじゃなくて。今日のアリサちゃん、いつもより楽しそうだな、って……」

「顔をそういう風な感じじゃなさそうだけど？」

「私にはわかるよ。アリサちゃんはそんな風に表現するの得意じゃないから……」

さすが、というべきか、伊達に小学校から一緒にいただけのことはある。

「何だか、アリサちゃんが遠くに感じるほど楽しそう……」

一瞬、いつも柔らかい笑みを浮かべる月村の顔に翳り（かげ）が入った気がした。

「……というわけだが、蒼詩はどう思われる？」
いきなりどうした紅次。
「何の話だ？」
「翠が夢中になっているＤＶＤについてだ」
「ごめん、ものすごい話の切り替わりようについていけない」
いつの間にそんな話題になったんだ？　少しでも聞き逃すと話が超展開になってしまう。それが俺達。
「タイトルは何だ？」
「ヒューマンＶＳヴァンパイヤ。人間と吸血鬼が相容れずに、争いを起こすファンタジー映画だよ」
「！！？」
その映画は数年前にすでに上映され、今はＤＶＤが販売されている。内容は平穏に生活していた人間たちの下に、吸血鬼が現れ、領地を奪おうと人々を襲う。
その物語の中に、人間の少年と吸血鬼の少女が恋をする場面があり、結局は仲を引き裂かれてしまうという泣けるシーンもあるらしい。
最終的には人間の勝利に終わるが、姿形は同じなのに異質な能力があるだけで、こうも差別と線引きを生み、争いを起こす。中々考えさせられる映画だとか。

「それでオレは思ったんだ、吸血鬼ってトマトジュースとケチャップ、どっちを主食にしてるのか！」

「映画の内容と、全く合致しない件について」

普通、血が主食じゃね？

まぁ、確かに漫画とか自分が吸血鬼であることを隠して、血の代用に赤い飲み物を取っているけど。

「トマトジュースが無難だと思うけどな。ケチャップは丸ごと飲むのは味が濃いだろうし」

「おそらく、ケチャップはこってりが好むのだろうな」

「そういえば、マヨラーっていう人はいるけど、ケチャラーは聞いたことないね」

くだらない内容だが、どうでもいいからこそ、話は盛り上がる。

問題は討論することじゃない、こうしてバカやって、友と楽しくやることが大事なのだから。

「バニングスはどう思う？」

「……もうどの辺りを聞いているのかわからなくなってきたわ」

額を手にあてて、ため息をつくアリサ。

「そもそも！　一番問題なのは、紅次と翠の手にあるものよ！」

そう言われ、俺は二人の手元を、二人は自分の手元を見る。

「特に問題はないように見えるぞ？」

いつも二人が食べている昼飯だな。つくづく飽きないもんだ。

「セロリーメイトにカップぬー$ってどんな食べ物よ！　何かギリギリアウトな名前だわ！」

アリサが食って掛かる理由は紅次が手にしているセロリーメイト、翠が手にしているカップぬー$という食べ物が気になったようだ。というかカップぬー$のお湯って、どこから調達したんだろうか？

「はるか昔、修行の身としてセロリーメイト一つで一か月持つと言われているぞ？」

「足りなくなっても、問題ない！　むしろ空腹は大歓迎ぃ！」

この二人のことだ、心配するだけ無駄なようだ。微塵もしてないけど。

そういえば小学校から同じもので、俺の弁当との組み合わせが見事シュールだったな。

その時の周囲の視線があまりに異様だったけど。

「吸血鬼の主食よりも、あいつらの主食の方が十分おかしいと思うけどな。なぁ、月村……？」

月村の方へ顔を向けると、何やら月村の様子がおかしい。

胸に手を当てており、しかも少し震えているがわかる。顔を青く、まるで何かに怯えているようだ。

「……月村？」

「ふぇ！？　ど、どうしたの、蒼詩君？」

「どうしたのって……お前がどうした？　ずいぶんと顔色が悪いぞ？」

いつも柔和な笑みが止まなかった月村の表情は、これでもかっていうほど表情が冴えない。
その変わりようは尋常ではない。

「だ、大丈夫だよ……うん、大丈夫……」

何でもないように取り繕うが、その言葉ははたして、誰に向けられているのかわからなかった。

バイトが終わり、晩飯を食った後、皿洗いをしながら今日のことを思い出す。

「あの月村の態度、まるで龍（ロン）に襲われた時のアリサに似てたな……」

あの怯えようは恐怖からくるものだ、とても演技とは思えない。
唯一違うのは、その恐怖はどの部分から来たかだ。
そんな風になったのは何故だ？　今の今まではそんな様子は一遍たりともなかった。

「あんな風になったのは……吸血鬼の話の時か？」
それが月村の様子と、どういう関係があるかはさっぱりだが。
ちょうど最後の食器を洗い終えた時、テーブルに置いていた携帯が鳴りだした。
「誰だ？　こんな時間に？」
タオルで濡れた手を拭き取ると、すぐさま携帯を開く。
相手は……アリサ？
「何でアリサが？」
しかも、メールじゃなく着信だ。
まだ昨日のことが不安なのか、と思いながら電話に出る。
「もすもｓ……」
「蒼詩！　すずかを見なかった！？」
人が気分を紛らわそうとしてたのに、その反応は無いんじゃないかな？
俺の言葉を遮ってまで、アリサはまくし立てるように声を上げた。
ずいぶん切羽詰まっているようだが……。
「俺が学校を出てから一度も会ってないぞ。第一、今日はバイオリンの稽古じゃなかったのか？」
それなら、俺の方よりもアリサが一緒にいるはずなんだけど……

「稽古の時は一緒にいたわ。でも、別れて帰った後、しばらくしてすずかの家から電話がきて、すすかはうちにいないか、って聞いてきたのよ」

事情を語り出すアリサ。大体のオチは読めてきたぞ。

「私はいないと答えて、理由を聞いてみたら、いつになってもすずかが帰ってこなくて、もしかしたら……」

「誘拐、かもしれないと？」

「……うん」

アリサは弱弱しく答える。電話越しでも、いつもみたいな勝気な様子じゃなくなっているのがわかる。

自分が狙われている時は強気だったのに、いざ友達が危険な目に合うと、こうも小さくなってしまう。

まぁ、それが友達思いであるアリサのいいところなんだけどな。

すると突如、俺の部屋から電子音が鳴りだした。これはおそらく……

「アリサ、今呼び出しをくらってるから、あとで掛けなおす」

「いいけど、それって何なの？」

アリサの質問に俺は部屋に向かいながら答えた。

「依頼だ」

忍ｓｉｄｅ

すずかの誘拐。

その事実が発覚したのは、アリサちゃんに連絡入れた後のことだった。
習い事が終わってからほんの数時間しか経っていないが、未だに犯人側のアクションが一切無い。
おそらくこれは十中八九、私の一族の問題。
私とすずかは夜の一族と呼ばれる吸血鬼の末裔、その純血種。生きる為には血を糧とし、人よりも強い肉体と長い寿命を持つ。
普通の人から見れば、そんな私達は化け物だろう。
私もすずかも、吸血鬼であることを隠して人間社会に溶け込んできた。
そんな私達を敵視する存在というのは当然居て、私は今までの人生で何度も襲われた記憶がある。
普通じゃない、人間じゃない。
ただそれだけでの理由で私は殺されかけた。
襲ってくるのは人間じゃない。
私の同族ですら、時に私に牙を剥く時がある。
月村の跡取りである私に群がってくる、下らない覇権争いや派閥問題。
ノエルを制作した、失われた技術を欲する者たち。
恭也に出会うまで、私は何度も呪われた血族として、生を受けたことを悔やんだ。
こんな身体じゃなければ、私はもっと普通に生きていけた、と。

けど、どんなに悔やんでも憎んでも、この身体が変わることはない。
だからせめて、すずかだけはできるだけ、普通の女の子として生きて欲しいのに。

「忍、大丈夫だ。すずかちゃんはきっと無事だし、蒼詩ならお前達の存在を受け入れてくれる」

恭也は、先ほどから私を元気づけようと肩を抱き寄せる。
彼が呼んだのは結城蒼詩という、すずかと同い年の男の子だ。
その子については、すずかから色んなことを聞いた。

『明るくておもしろくて、非常識だけど優しい人』

すずかの言葉は一言で表すとそんな感じだった。
恭也とも知り合いなのは、昔からよく道場で相手をしていたからだとか。
一度も試合で決着がついたことはないけど、実践ではそれ以上の実力を持つという。
恭也と同じ実力を持つ人がもう1人増えたと思えばいいのだけれど。
それでも、いざすずかの正体を知って拒絶させられると思うと不安でしかたがない。
すずかにとって蒼詩君とは初めての男友達だから。
拒絶されて、心が壊れるんじゃないかって思ってしまう。

「お嬢様、恭也様、蒼詩様がたった今参られました」

「ノエル、入れてくれ」

「しかし……」

「頼む」
恭也の言葉にノエルは少し戸惑うも、了承して玄関へと向かった。
「恭也……」
「大丈夫だ」
見つめると、恭也は優しく笑みを零す。
「彼なら、その心配を杞憂にしてくれるさ」

蒼詩side

屋敷の玄関前に立ち、インターホンを押す。ノエルさんの声がかかり、しばらく待っていると、扉の向こうからノエルさんの姿が現れた。
「ようこそ蒼詩様。こちらへ……」
それだけ告げると、踵を返し屋敷の奥へと歩いていく。どうやら辞など述べている余裕がなさそうだな。
ノエルさんの後を追い、一つの個室へとたどり着く。
個室と言えど、部屋へくぐる扉はやけに立派で、待合室とは少し違うようだ。
以前、勉強会でここに来たときはそこまで見ていなかったが、誰か

の部屋であることは間違いない。
ノエルさんが扉をノックして一声かけると、向こうから高い声が聞こえてきた。
どうやら、この部屋の持ち主は女性らしい。
扉を開けてもらい、中に入ってみると、そこには恭也さんと1人の女性の姿があった。
一瞬、その姿が月村と見間違えてしまうほどよく似ており、きっと将来は月村もこんな風になるんだなぁ、と思った。

「こうして会うのは初めてだよね。初めまして、私は月村忍。ここの主でありすずかの姉よ」

鈴を転がすような声で挨拶をしてくる。ああ、なるほど月村のお姉さんだったか。そして隣に恭也さんが立っているということは、この人は恋人さんってことか。
……うん、冗談抜きで美人だな。恭也さんマジもげろ☆

「なんか酷いことを言われた気がする……」

きっと、疲れてるんですよ。

「それで、月村がさらわれたらしいですが、心当たりはないんですか？」

自宅の無線機から恭也さんのコールがかかり、月村が誘拐されたから手をかしてほしいという依頼だった。
アリサによると、自分のような立場で今回みたいな事は一度や二度ではないのだから、多少は心当たりがあってもいいもんだけど。

「恐らく、私の一族よ」

「私の、一族……？」

月村一家って、どっかの民族なんですか？

「私達は夜の一族と呼ばれる吸血鬼よ。人間よりも身体能力が高く、血を吸う能力を持っているわ」

それを証拠に、と付け加えると突如、忍さんの目が真紅色に染まり出した。

なんでも、相手の感覚をマヒさせるとか。

にしても吸血鬼か。まさかここでファンタジーな話が持ち上がるとは。

ちなみに月村をさらった理由は、同族での覇権争いが原因なんだとか。

理由はまぁ、ありきたりな話だな。

「こんなことを信じろなんて無理な話でしょうけど、信じるか信じないかは蒼詩君、あなたの自由よ」

弱弱しく呟く忍さん。おそらく、自分が普通の人間ではないことを理由に拒絶されるのを恐れているのだろう。

吸血鬼の否定は彼女への否定。それはこの依頼を断ることであり、同族であろう月村への拒絶につながる。

今までそのような体験をしてきたのだろう。

忍さんの言う夜の一族という吸血鬼。普通の人間より身体能力が優れ、血を吸うことができるか……

「他には？」

「……はい？」

「人間よりも身体能力が高い、血を吸う。他には何がある？」

「えっと、基本的にはそのくらいだけど……」

なん……だと……？

俺の心にふつふつと怒りが込み上げてくる。

そう、これはデパートの屋上で行われるヒーローショーで、色違いの五人のヒーローのうち、黄色をしたヒーローのお腹が他のヒーローよりも贅肉あることを見てしまったような耐えがたい怒りだ。

「蒼詩君……？」

俺の様子がおかしいと思ったのか、忍さんが声をかけてくる。

「貴様……吸血鬼舐めてんのかぁぁぁーーーー！！！！」

「えええぇぇぇーーーっ！！？　な、なんで！？」

「吸血鬼と言ったら、襟を立てたマントをなびかせて、コウモリとか従えて、夜を駆けるのが常識だろＪＫ！　なんで、体力高いのと血を吸うことしかできんのじゃ！　そんなもんノミでもできるわ！」

「そんなもの映画の中でしょ！　リアルな吸血鬼にそんな高望みしないでよ！　あと、ノミってなによノミって！」

「ノミなめんなよ！　ノミを脚はその気になればビルだって飛び越えられるぞ！そして血も吸う、正に夜の一族と同じじゃないか！」

「先祖達に言ってよ、そんな文句は！」

「だったらあれだ、十字架（ロザリオ）を取ったら二重人格になって超強くなるとかできないの？　百年以上も生きて、おわるせかいとか使う金髪幼女とかは？」

「もう私が知る吸血鬼以上のファンタジーだとそれ！？」

「それがロマンってもんだろ！　そんなショボっちい能力でよく吸血鬼とか名乗れたな！　全世界の全吸血鬼に謝れ！」

「ショボくないもん！　うわーん恭也ー！　蒼詩君がいじめるー！」

忍さんは涙を流しながら、恭也さんに抱きつく。その恭也さんはどんな反応をしていいのか、困惑の表情を浮かべるだけだった。

はっ！　ざまぁみろってんだ！

「……それで、何の話をしてたんだっけ？」

「「「……あ」」」

とりあえずふんぞり返って満足したが、そんな言葉を呟くと、恭也さんと忍さんとノエルさんはマヌケな声を上げる。

というかノエルさんまで気づかなかったのか。

「まぁ、吸血鬼なんて話は後回しだ。俺は吸血鬼じゃなくて、月村すずかを救出してほしいと頼まれただけだからな」

「私としては回されたくないところだけど……」

「無駄だ忍。こいつにまともな意見を聞くだけ、おかしな答えが出るだけだ」

おかしな答えとはなんですか恭也さん。ただ他のと比べると歪んでるだけです。少しだけ、ええ少しだけですとも！

「そんじゃ話を戻しますか。月村は、忍さんと同じ夜の一族とやらに誘拐された。そして、今のところ居場所も敵の勢力も不明。今わかるところはこんなもんですか？」

「ええ、相手がどれほどの勢力をもっているかはわからないと、夜の一族は私達を護衛するために制作された自動人形を使ってくるはずよ」

「自動人形？」

「平たく言えばロボットね」

それまた大層なものを使ってくるな。
夜の一族ってのは、そういった技術を古くから使っているんだとか。
吸血鬼なんて中世のおとぎ話だが、技術は近未来的だな。

「ちなみに、ノエルもその自動人形の一人よ」

「……は？」

この人、なんて言った？
ノエルさんが自動人形？　ロボット？　ははは、そんなバカな。
こんな美人で、どう見たって人間にしか見えないノエルさんが自動

人形？
いったいどこのＱ１０だっての。
「……マジですか、ノエルさん？」
「はい、マジでございます蒼詩様」
信じられない顔でノエルさんに確認するが、顔色一つ変えることなくノエルさんは答えた。
ということは、ノエルさんはロボット？
「認めん、俺は認めんぞ！」
「何でそこはすぐに否定するんだ！？」
「ノエルさんがロボットだってんなら、ロケットパンチとか出るはずだ！　腕とか飛び出すやつ！」
「できますよ？　ファンネルという名前ですが」
「そうなんですかー、ロボットなんですかー、すごいですね！」
「「アッサリ信じた！？」」
だってロケットパンチは男のロマンですよ？　黒鉄（くろがね）の城ならぬ、純白のメイドのスーパーロボットですよ？　そこにいるヘッポコ吸血鬼とは違うんです。
「何か酷いことを言われた気がする……とにかく、その自動人形はかなりの戦闘能力を持っているわ。一番に気を付けるべきなのはそ

こね」

忍さんはそう告げる。確かに、吸血鬼（笑）とはいえ、身体能力が優れている者を護衛するんだから、スペックは夜の一族以上でないと意味ないな。

「せめてすずかの居場所がわかれば……」

忍さんからそんな呟きが聞こえた途端、俺の通信機から電子音が鳴りだした。

二人に断りを入れて、通信機をとる。

『こちらホワイトカラー。ブルーカラー、ターゲットの居場所が特定できたぞ』

「思ったより早いな、それで？」

『座標は１２６．５１．ここから数キロ離れた所にある廃ビルの最上階だ』

「敵の数は？」

『一階に１５、ターゲットの周囲に３人、あと熱感知に反応しない人影が三体だ』

「おそらく、それは人間じゃない。聞いた情報によるとロボットらしいぞ」

『ロボットとはな、Ｉ，ｌｌ　ｂｅ　ｂａｃｋしてきたというのか？』

「残念、筋肉ムキムキマッチョマンの変態は出てこないと思う。というか、そんな奴はマスターだけで十分だ」

『同意』

「とりあえず、グリーンカラーに伝えといてくれ、多分あいつの力を借りると思うから」

『了解した。通信終わり』

最後にそう言って、通信を切ると、恭也さん達の方へと振り返る。

「月村の居場所がわかった」

「嘘ぉ！？」

「もしかして、さっきの通信はお前の仲間か？」

「そういうことです」

「えっ、え？　どういうこと恭也？」

「こいつの仲間も非常識ということだ」

「……なんか、ものすごく納得したわ」

失礼なカップルだな、塩投げるぞ。

第二十二話　ドラキュラ言うな、吸血鬼と呼べ（後書き）

すずかについて一話で終わらすのは無理（汗）
というか、なのはＧＯＤ発売だ！？
急いで買わないと！

第二十三話　トマトジュースとケチャップと吸血鬼（前書き）

天皇陛下お誕生日おめでとうございます。

なのはＧＯＤを買ってやってみましたが、前回よりも爽快で楽しいですね。

相変わらずレヴィはかわいいし。

第二十三話　トマトジュースとケチャップと吸血鬼

三人称ｓｉｄｅ

「なぁ、俺達はいつまでここの見張りをしてりゃいいんだ？」

「俺が知るかよ、俺達は金で雇われてここにいるんだからよ」

ここはとある海鳴市の一面。

建設工事が打ち止めとなった廃ビルの一階に響く、二人の男の声。

手には銃が握られており、端から見ても怪しいというか物騒に見える。

そんな連中がこの場で１５人ほどいるのだ。

「それにしても、雇い主はとんでもねぇやつだったぜ」

「人間じゃねぇって話か？」

こうして一階で立って見張りをしているのに飽きてきたのか、話の内容は雇い主の方へと話の矛先を向ける。

「ああ、いまどき吸血鬼なんて信じられねぇって思ってな」

「しかも、この依頼の目的はその吸血鬼同市による覇権争いってやつだろ？」

「吸血鬼って名乗ってるわりには人間臭いことするんだなって」

「やめとけ、そんなことを化け物に聞かれたら、血を吸われるぞ？」

「おー、怖い怖い」

そんなことを口にしながら談笑する。今までこういった状況に立ち会ってきたのか、緊張といった様子は見られない。

「にしても、こうして突っ立っているのも退屈だな、何か派手なことでも起きねえかな？」

「バーカ、起きるわけねぇだろ？　こんな所に用のある奴なんて……」

だが、その慣れが時に命取りとなる。

突如、窓から何かが投げられたかと思ったら、辺り一面に視界を覆い尽くすほどの強い光と、聴覚を狂わすほどの音が男達を襲う。

「うおっ、何だ！？」

「敵襲か！　どこだ！？」

「何も見えねぇ……どこにいる！？」

一瞬の油断だった。

ずっと夜目に慣れていたせいで、強い発光によって視覚が利かなくなる。おまけに耳から高鳴りの音が響いてくる。

閃光手榴弾。通称スタングレネード。

投げられた物はそれだと、男達は瞬時に理解した。

しかし、今さら理解したところで、招かれた混乱はすぐに収まるこ

とはない。
そして、さらなる混乱が彼らを襲う。

「ぐあっ！」

どこからか悲鳴が聞こえた。それに続くように倒れる音がこの部屋に響き渡る。

「がぁっ！？」

「ぐへっ！？」

そして続けざまに、男達の悲鳴と倒れる音が聞こえてくる。
言わずもがな、それが仲間達がやられているのだとわかるのに時間はかからなかった。

「う、うわあああ！！」

未だ視界を奪われているせいか、以前として敵の位置はおろか、姿がわからない状況に男達は錯乱して、銃を闇雲に撃ちまくる。
だが、それが一層混乱を招くだけであり、次々と仲間達はやられてゆく。
気付けば、この場で立っているのは1人だけとなった。

「な、何だよ……これ……」

ようやく目が慣れてきて周囲を見渡すと、自分以外の男達は全て地に伏していた。
短時間でほぼ全滅。そんな非現実な光景に男は呆然とするしかない。

故に気付くことはなかった。
彼の後ろから忍び寄る影に。

すずかｓｉｄｅ

誰か来た。

一階から聞こえてきた爆発音と銃声によって私はそう感じた。
私の一族は、普段聞き取れない音も聞き取ることができるから、今
いる最上階でも一階で起きたことを大まかに理解できた。

「下で何か起こったようだな」

「おそらく侵入者であろう」

縛られている私の周りには三人の男達と、その後ろに控えている無
表情の女性達。
男達から私と同じ匂いがするし、きっと後ろの三人は自動人形なん
だと思う。

「こちらの予想より早い気がするが、おそらく御神の剣士だろう」

「ご党首の恋人という人間ですか？」

「人間としてはできるようだが、所詮は人間。自動人形三体相手に

どれくらいもつかな？」

「生け捕りとすれば、良い交渉材料になりますね」

「恋人と妹の命と党首の座、中々悲劇的なお話だ」

この人達はお姉ちゃんの党首の座を奪うのが目的みたい。

「お前達は下の階に行って確認してこい」

1人の男が三体の自動人形へ指示、三体共、扉の奥へと消えてゆく。

どうしてこんなことになったんだろう。

私が吸血鬼だから？

私が化け物だから？

私の身体が普通じゃないだけで、平凡な生活が送れないのかな？

（私は……皆と、一緒じゃダメなのかな？）

涙が零れる。視界が歪んで見える。

―――シャキン！　ドゴッ、シャキン！　キンッ、シャキン！

その時、扉の奥から何か争う音が聞こえ、すぐに収まった。

「殺ったか？」

「わからん、確認してこい」

1人の男が扉の方へと近づく。もしかして恭也さん？
でも自動人形三体を相手にして、そう簡単に勝てるはずがない。
まさか、やられたんじゃ……
そんな思いが脳裏によぎった途端――――

「がはっ！！？」

男の悲鳴が上がる。
よく見ると、男の背中から鈍色に輝く刃が突き出ている。
きっと、扉越しから剣を突き刺しているのだろ。
一瞬、恭也さんかと思ったけど、ふと疑問に思う。

恭也さんが手にしている刃渡りの短い小太刀で、扉ごと男の身体を貫けるはずがない。
それができるのは一般的な長さを持つ刀だけ。
じゃあ、あれは恭也さんじゃない？

私の頭は驚くほど冷静になっていた。
すると、男の背中から突き出た刃が引き抜かれたと同時に、扉が勢いよく開けられる。
おそらく蹴飛ばして開けたのだろう、男もそれにいつられて吹き飛んで動かなくなる。

「な、何だ！？」

男達が狼狽している。

私はいつしか涙を流すのをやめて、その扉の奥を見つめた。
本来、吸血鬼は夜に生きる生き物。それと同様に夜の一族は夜目が利く。
私はその目をこらしてよく見てみると、一つの人影が映っているのが見えた。
それが足音と共に近づくにつれ、姿の詳細が明確になる。
身体を覆うだけの、まるでアクション映画に出てきそうなボディスーツを着ており、肉体の構造とか、筋肉の発達具合もはっきりとわかる。
顔はバイザーのようなもので覆われており、はっきりとした所を窺うことはできない。
右手には刀が握られ、左手には先ほど見た自動人形の首だけを掴んでいる。
明らかにこの場の誰よりも異様な姿だった。

「き、貴様、何者だ！！？」

男の一人が大声を張り上げて、謎の侵入者に問う。
侵入者は刀の切っ先を男に向けながら、口を開いた。

「名前などない、お前と同じだ」

（……えっ？）

思わず口から声が出そうになる。
そう、私はこの声を知っている。先ほどの鉛のような声とは思えない、明るさで皆を困らせ、賑やかにしてくれるちょっと変わった子。

（そんな子がどうして、ここにいるの……？）

――――――――――――――――蒼詩君

蒼詩ｓｉｄｅ

月村の姿を確認すると、改めて周囲を見渡す。
敵は男二人のみ、おそらく扉越しに感じた気配を察して刺した奴を含めて、こいつらが忍さんの言っていた夜の一族だろう。

「き、貴様、自動人形はどうした！？」

「全員、斬り伏せた」

それだけ答えると、先ほどの戦闘で斬り裂いた自動人形の首を男達の方へと投げ飛ばす。
それが意外だったのか、さらに男達の動揺は強くなる。

「バカな！　人間ごときにやられるなど……！？」

「しかもここまで到着するのが早い、もしや一階は囮か！？」

「ぴったんこカンカン」

『月村が捕えられている廃ビルの一階に見張りが１５人いる』

『おそらく私の一族に雇われた傭兵達ね』

『そしてターゲットの月村と犯人の夜の一族、自動人形たちはそのビルの最上階にいるとのことだ』

『それで、居場所が判明したところで、俺達はどうすればいい？』

『厄介なのは自動人形の三体だけだ。これを一族達から離れさせる必要がある。そこで一階にいる１５人の傭兵達を恭也さんの手で派手にやっちゃって下さい』

『俺一人でか？　無茶な事を言うな』

『多対一では恭也さんの剣術は向いています。室内では銃の乱射はできませんからね。暗闇の中ですから、閃光手榴弾を使えばより有利になります』

『なるほどな。だが閃光手榴弾はどうするんだ？　俺はそんなもの持っていないぞ？』

『それはこっちで用意します。そして一族達がその騒ぎに気付いて、確認もしくは殲滅のために自動人形を放つ。そこで俺が奇襲して倒します』

『大丈夫なの？　自動人形の戦闘能力は凄まじいわよ？』

『正面から立ち向かえば難しいかもしれませんが、さすがの自動人

形も闇討ちには対処できませんから』

機械ってのは一つのことに忠実だが、そのことに意識しすぎて、もしものことに滅法弱い。一階を確認することしか頭になかったから、即座に一人の首を刎ね、こちらに気付いた時には二人目、攻撃しようにも、応急処置なのか行動が単純だったから、すぐさま弾いて三人目の首を刎ねた。

これでのこるは一族三人だけとなったってことだ。

「人質を返してもらう前に、一つだけ聞きたいことがある」

視線を月村と男二人から視線を外すことなく見つめながら、問いかける。

「お前達を吸血鬼として問う」

一瞬、月村の体が強張った気がしたが、ここで気にしたら今に聞けなくなってしまう。

「お前達は……トマトジュース派？　それともケチャップ派？」

「「「……は？」」」

「いやだから、お前達は血を吸うんだろ？　もし血の代用とするならトマトジュースかケチャップなのかって聞いてるんだ」

「きき貴様ふざけているのか！　そんなもの輸血パックで十分だ！」

「私は……トマトジュースかな？」

「すずかお嬢様は律儀に答えないでください！？」
男は激怒していたが、月村だけは普通に答えたために、何か一気にシリアスな空気が崩れていく。
いや、その原因を作ったのは何を隠そう俺なんだけど。
「まぁ、疑問も晴れたことだし、後はお前達を始末するだけだ……
……っ！」
「「！！？」」
言い終ると同時に接近すると、男二人は月村から二手に分かれるように離れる。
だが、俺にとっては好都合。難なく月村に近づくことができた。
「すずか、確保」
「えっ？」
すぐさま月村の背中に白い小型のリュックサックらしきものを取り付けた。
「鳥になってこい！」
「なに、これ？　わっ、きゃあああぁぁぁ……！！」
バサッとリュックサックから気球のようなものが現れると、月村の身体が浮かび上がり、上空へと飛んでいった。
「……さて」

その様子を見届けると、視線を男二人に移す。

「残りもんの掃除といくか」

「おのれッ、人間風情がぁ！！」

1人の男がこちらに向けて、真っ直ぐに突進してくる。
確かに、夜の一族というだけあって速い。
けど、やはり恭也さんには劣る。
俺も男に向かって突撃し、すれ違いざまに薙ぎ払いの一閃を放った。
反撃の余地もなく、崩れ落ちる。残りは1人か。
俺は無言のまま、並足で最後の一人に近付いていく。

「ま、待て！　待ってくれ！　人間という言葉は取り消す。互いに人智を超えた者同士、手を組まないか？　私達が結託すれば人間などたやす、く……！」

それ以上、男の口から言葉は出なくなる。俺が瞬時に詰め寄って、腹部に刀を突き刺したからだ。
男が必死に何かを口にしようとしたが、それは叶わず、地面に沈む音が響いた。

「俺の任務は月村すずかの救出と、誘拐犯の斬滅、それだけだ」

誰一人返事しない部屋で呟きながら、血糊を払うのであった。

「同族三人は専属の病院に搬送、すずかは安心したのか、今は眠っているわ」

あの後、忍さんに通信を入れ、処理などを任せると屋敷に戻ってきた。

俺と恭也さんは仕事服から着替えて普段着になっている。

「今日は蒼詩くん、あなたのおかげで私の妹は助かったわ。ここの主としてお礼を言うわ」

忍さんは頭を下げてお礼を述べる。それにつられるように恭也さんも頭を下げた。

「でも、一つだけ聞かせて……」

すると、頭を上げた忍さんはいつになく真剣な表情で見つめてきた。元が美人なせいか、迫力は相当なものだ。

「恭也と互角に戦えるどころか、自動人形を三体、同族を三人倒すなんて。ましてや、あのボディスーツといい、あなたの仲間といい、あなたは一体何者なの？」

忍さんの言葉に、俺は顔を逸らす。

訳ありなのだから、そうホイホイと教えるわけにはいかない。

「結城蒼詩。私立聖祥中学校、一年一組。あんたの妹の友達だ」

「いや、私が言いたいのは……」

「そこまでにしたらどうだ？　月村当主よ」

ここにはいないはずの第四の声に、俺達は扉の方へと向く。すると、そこには……

「紅次に、翠……？」

部屋に入ってきたのは、通信機の向こう側で会話していたはずの紅次と翠だった。

「ノエルさんに紅茶とお菓子をもらったから、蒼ちゃんが帰ってくるまで寛いでいたんだ」

おい、何二人そろってアフタヌーンティーやってんだ。俺にも混ぜろ！　俺はダージリンのセカンドフラッシュで！

「翠くん、だったかしら？　すずかをここまで運んでくれてありがとね」

「いやいや、一番の功績は蒼ちゃんですよ！　オレなんかここまで運んだだけですから」

「でも、ヘリを操縦して、ここまで運ぶのは色々な意味でおかしいと思うのよね」

そう、すずかを救出したのは俺だが、彼女をここまで運んでったのは実は翠だったのだ。

ただ、その搬送手段が異様で、その手段がヘリなのだ。

「ＭＩ－２４Ａ。兵員搬送から対地攻撃が可能な戦闘ヘリコプター。そんな兵器を所持、かつ操縦できるなんてまずありえないわ。そして、紅次くんのハッキングによる衛生操作。そして蒼詩くんの実践能力。とても普通に学園で騒ぎを起こす生徒としてまとめるにはおかしすぎるわ」

俺に向けられた視線が紅次と翠にも向けられる。
だが、どこ吹く風といった様子で紅次が口を開いた。

「己の存在を棚に上げておきながら、その質問は筋が違うのではないか？」

「！！」

忍さんは大きく目を見開く。
確かに俺達が他人と比べて、異様なのは理解している。
だが、忍さんや月村が自分の素性を世間から隠しているのと同じように、俺達だって、知られたくないものは一つや二つはある。

「そうね、そうだったわ……私ったら、自分が嫌だったことを私自身がやってしまうなんてね……」

忍さんは深くため息をつくと、俺の方に顔を向けた。

「蒼詩くん、ごめんなさいね」

「いや、誰だってそう考えるのは不思議じゃないですよ。人間だって、吸血鬼だって、同じ疑う生き物ですから」

「そっか。同じか……」

微笑みを浮かべる忍さん。心なしか嬉しそうだ。

「さて、辛気臭い話はここまでにして、依頼報酬の話に移りましょうか」

「十分辛気臭いと思うぞ、蒼詩」

こんな時に限って横槍を入れないでくださいよ、恭也さん。
せっかく空気を変えようとしたのに。

「お金のことなら、うちのことだし、好きなだけ要求してもいいわよ」

さすがお嬢様。平民の俺達では言えないことを平然と言ってのける。
そこに痺れる、憧れるぅ！
けど、欲しいのはお金じゃない。

「今まで見てきたことを、例え親族であっても他言無用でお願いします」

「それって、蒼詩くんの実力のこと？」

「そうです」

俺達は基本的に平穏な暮らしを送りたい。そして、俺達のせいで他人の日常を壊したくない。
何事もなく暮らせるようになるならば、やってやりたい。
普通に過ごすって、かなり難しいらしいぞ？

「何か欲がないわねぇ。『すずかを俺にください！』とか言いなさいよ♪」

「お、お姉ちゃん！！？」

心の中でツッコもうとした時、後ろの扉が勢いよく開けられる音がした。

それと同時に二人の少女が姿を現す。

一人はお姉ちゃんと呼んだということは月村だろう。もう1人は……

「なして、アリサがいる？」

というか、いつのまに？

「俺の元に電話が来てな、脅迫されて蒼詩の居場所を教えた」

「まるで私が悪役みたいじゃない！！」

なるほど、納得。要は月村が心配で、居てもたってもいられず、ここにやってきたってことか。

「お姉ちゃん、何言ってるの！？　蒼詩君が困ってるでしょ！？」

「え～、私は別に問題ないわよ？　蒼詩くんなら大丈夫そうだし」

「そ、そうじゃなくて！！」

なにやら向こうでは、姉妹そろって騒いでいるな。傍にいる恭也さんに至っては諦めモードだし。

……ふと、思ったんだが、アリサ達が部屋に入ってくるタイミング

がやけに良すぎたんだが。

「なぁ、アリサ。もしかして扉の奥からこっそり聞いてた？」

「ぐっ！　べ、べつに、な、何も聞いてないわ！　聞こえなかったわよ！！」

うわ～、ものすごくわかりやすい反応。というか、聞こえなかったってことは、扉の向こうには居たんだな。
まぁ、ここは黙ってあげるとしよう。自分から身を引くのも優しさだ、って言うしな。

「ところで、月村のことなんだが……」

「すずかの正体なら、忍さんに全部聞いたわ」

「そうか、ならお前は……」

「別に私は、すずかが吸血鬼であっても縁を切る気はないわよ。そりゃあ、すずかがそのことを隠していたことに少しは怒っていたけど。でもそれは、すずかが私達と友達でいたいからこそ、とった行動だと思う。だから私は、どんな存在であれ、友達として接してくれたすずかを突き飛ばしたりはしない」

かっけぇ～～～！！！　アリサさんマジ男前過ぎる！！
月村も良い友達を持ったなぁ。

「それで、アンタはどうだな？」

「俺達が吸血鬼ごときで、臆すると思ってんのか？」

「聞くまでもなかったわね」
じゃあ、何で聞いたんだ？
一人で疑問に思っていると、月村がこっちにやってきた。
「まだ、お礼を言ってなかったね。助けてくれて本当にありがとう」
「俺は依頼をこなしただけだ。鳥になった気分はどうだ？」
「あはは、あれはもうやりたくないかな？」
苦笑いを浮かべる月村。
月村を救出する際に取り付けたあれは、フルトン回収というやつだ。
救出する際に月村の背中に取り付けたリュックサックには、ヘリウムの詰まったバルーンがついている。
バルーンで上空に浮かび上がらせると、翠が操縦していたヘリがバルーンに接近して、回収用のフックをバルーンに取り付け、つり上げてカーゴに収容する。
これは、敵地で相手を素早くかつ安全に回収することが可能だ。
「それで、その……私とお姉ちゃんも正体は知られたんだよね？」
「夜の一族だろ？　なんで朝の一族とか昼の一族はいないんだ？」
「……怖くないの？」
俺のボケを見事スルーされ、月村が不安そうな目で俺を見つめてくる。
怖くない、と聞かれても、こんな小動物みたいな目をしてくるこい

つを怖いと思えるか、普通。

「一般人と違うのは血が吸えることぐらいだろ？　他の部分は俺達と大して変わらないんだ。何かが一つ多いからとか、一つ欠けているからといって、人でなくなるわけじゃない」

「むしろ、アンタ達の方が十分異常だと思うわよ」

「やかましい」

「否定はできんな」

「ぐぅの音も出ないね」

はい、アリサの一人勝ちだとさ。

「でも、普通の人よりは力はあるんだよ。もしかしたら傷つけてしまうかもしれない……」

「本当のそれだけで、危険だって思えるか？」

「え？」

「片や、人を傷つけるのを嫌う吸血鬼。片や、数多の人を殺めてきた普通の人間。本当に怖いのは力とか、存在なのか？」

力があるだけでは恐怖の対象にはならない。力が無くても、人は殺せる。

殺人を犯すか犯さないかで、人の見方は大きく変わる。

「でも、あの時は私を助けるためだったし……」

「人殺しが正当化されることはない。される時代もない」

それが人助けのためであっても、人殺しが許されることはない。

「傷つけるのが怖くないの？　みんなに嫌われるのが怖くないの？」

やけに質問が似たり寄ったりな内容だな。それだけ吸血鬼の存在に悩んでいたということか。

「月村は俺が怖いか？　人を殺して血で穢れた俺が？」

「そんなことない！　私を助けてくれた人にそんな風に思ったりはしない！」

「それが答えだ」

「……っ！！」

月村は目を丸くする。

「こんな俺を友達だと言ってくれる奴がいる。だから、今の自分を恐れたりはしない」

自分のことを嫌う多くの人の事を考えても埒が明かない。それよりも、自分を受け入れてくれる仲間の事を気にした方がマシだ。

そう言いながら、バカ二人の方へ振り向く。

相変わらず腹立つ笑顔を浮かべてきやがるが、逆にそれが心地いい。

「それに……それを覚悟でやってきたんだ。嫌われようとも、俺の意思が揺らぐことはない」

周囲の視線？　評価？　そんなの関係ない。

あの日から決めたんだ。いくら俺のやり方が歪んでいようとも、それを貫き続ける。

それが俺だと、あり続けると。

「……ヒック、ふっ、ふえ～ん……」

するとすずかは目尻に涙をため、嗚咽を漏らす。

「すずか……」

そんな様子を見かねてか、アリサはすずかを強く抱きしめる。

嫌ったりなどしない。絶対に見捨てないと誓うかのように。

「ありがとう……みんな、ありがとう」

涙声になりながらも、言葉を紡ぐ月村に周囲は優しい目で見つめていた。

こうして月村すずか誘拐事件は解決。色々ととんでもない事実に巡り合えたが、その分、得るものは大きかった。

友の絆、人種を越えた友情、そして……

吸血鬼はトマトジュース派だということ。

私には不思議な友達がいる。

なのはちゃんがあわてふためき、フェイトちゃんを困らせ、はやてちゃんと盛り上がって、アリサちゃんを呆れさせる。

いつもその子の回りには、賑わいことが絶えなくて、学校で色々と問題を起こしてよく先生に追い掛けられてた。

最初は問題児という印象だったけど、その考えは日に日に変化していく。

周囲に若干浮かれ気味な私達と、気兼ねなく接してくれた。

バイオリンの習い事を続けていることを純粋に褒めてくれた。

私が化け物であることを、何の恐れを抱かずに受け入れてくれた。

私にとっては生まれて初めての男友達。

私を助けてくれた時、私の名前を呼んでくれて嬉しかった。

彼には私と同じ、言えない秘密があったとしても、彼の言葉には嘘偽りなんてなかった。

真っ直ぐな意思を持っていて、羨ましかった時もあった。

私にも出来るかな？

自分を偽らずに、みんなと一緒に暮らせることを。

きっと、できる。

もう、私は誰しもが嫌う吸血鬼なんかじゃない。

私にはもう、受け入れてくれる人がいるから。

だから始めよう。

本当の私を。

第二十三話　トマトジュースとケチャップと吸血鬼（後書き）

これですずか編は終わります。

そういえば、ガイドで歌詞について色々と書かれていて、曲名だけ書くのは大丈夫みたいだけど、ヴォーカルの記載はどうなんだろう？

各章のＯＰ、ＥＤとか、その話でのＢＧＭを考えようと思ってるんだけど。

第二十四話　コー・バイ（前書き）

みなさん、あけましておめでとうございます。
毎回毎回、更新が不定期ですがこんな作者を見捨てず、どうか温かく見守ってくれるよう今年もよろしくお願いします。

さて、今年最初の投稿ですが早速ハジケたいと思います！

※注意
この話の内容はネタリズムなシーンや混沌（カオス）的な描写が含まれております。
この異様なテンションについていけないと感じましたら、すぐにプラウザの『戻る』をクリックしてください。
読んでみて気分が悪くなりましたら、医師に相談することをおすすめします。

それでもＯＫという方、

ここから先は地獄の一丁目だぜ！！

第二十四話　コー・バイ

それは蝉のオンパレードが響き出す夏。
真上にいる太陽が己の持つ力を最大限に使って、光を放つ。
その巨大なる惑星の力に、俺達学生はいともたやすく崩れされてしまうだろう。

「であるからして、ここは……」

俺達に背を向けながら黒板に口にしたことを書いている教師の声をＢＧＭにしながら授業は進む。
しかし、昼飯前の４時限目で教室は普段とは違う異様な空気に包まれていた。
俺の座っている席から左隣の席から、指で机をつつく音が聞こえてくる。
不規則なリズムで叩かれる音に俺は授業を受けるフリをしながら理解する。

（こちらアルファ１、準備は完了……）

その音はこの言葉を示していた。いわばモールス信号のようなやり方で意思伝達を行っている。
教室内のあちこちで、似たような音が聞こえてくる。
机を叩く音、足の爪先で床を蹴る音、シャーペンで突く音。
鳴らす手段は異なれど、その音を示す内容は全く同じ。

（準備は完了。いつでも実行に移せる）

準備は整った。あとは終了のチャイムが鳴るのを待つだけだ。
それが始まりの時を告げる。

キーンコーン、カーンコーン♪

『ＧＯ！！』

終了のチャイムが鳴りだすと同時に、廊下側の窓際に座っている男子生徒が勢いよく窓を開けた。
俺は座っていた自分の椅子を踏み台にして、開けられた窓に飛び込み廊下を出る。
そしてそのまま目的地へ向けて全力疾走した。

校則？　校則ってのは昔からバレなきゃＯＫなんだよね。

「俺達も続くぞ！」

『うおおおぉぉぉ！！！』

俺の後ろからクラスメート達が走ってついてくる。そこには紅次と翠もいる。

「今のは何だったんだろう……？」

「またアイツらが馬鹿なことをしでかすんじゃない？」

教室では残っていたバニングスとアリサの声が空しく響いていた。

「みんな、廊下を走ってはいけません！」

それ今更です、先生。

俺達が向かうは食堂という、昼食では独壇場になるところだ。
そこでは弁当持っていない生徒達が、おばちゃん達に書かれたメニューを作ってもらっている。
定食から丼、ラーメン、カレーライスなど種類は豊富だ。
だが食堂にはそのほかに、『購買』というシステムがある。
これは片手で食べられるおにぎりやパンといったものを取り扱っているものだ。
メニューよりも値段が安いので、節約したい時などに使う生徒も多い。
おにぎりの具やパンの種類も多く、メニューに負けない人気がある。
今回、俺達の用は購買にある。
俺は直ぐさま食堂にたどり着いたのだが……
「のわぁー！？」
いきなり目の前に男子生徒が吹っ飛んで来たので、咄嗟にバックステップで避ける。
床を盛大に滑る生徒を一瞥すると、食堂の購買部へ目を向ける。

「くそっ、すでに始まっていたか……！」

俺は思わず下唇を噛み締める。

昼飯時だから食堂に生徒達が集まり、喧騒に包まれている。

その中でも購買部の辺りはより喧騒に満ち溢れている……というよりは騒音に近い。

強いて言うなら、ヤンキー達が乱闘を繰り広げているような荒々しさを感じる。

いや、実際その例えが今、目の前に起こっていた。

購買部にはずらりと商品が並べてあり、その目の前で生徒が商品を手にするがために熱い戦いを繰り広げている。

それは比喩なんて無く、文字通り生徒達が乱闘をしている。

戦っている生徒の瞳には今日の昼飯を奪わんと、獣のような獰猛さが溢れている。

「蒼詩、待たせたな！」

「うわぉ、こりゃすごい数だね！　よっぽどオカンの目玉商品が欲しいと見える」

後ろから紅次や翠、数人のクラスメートがやってきた。

翠の言っていたオカンの目玉商品というのは、今回俺達が求めている目的の品だ。

ここの食堂に売られるものは、学食も購買も同じおばちゃん達が作っている。

しかし、そんなおばちゃんには伝説の作り手という人物がいる。

その人物は生み出すものは、材料も調味料も旨味を最大限に引き出すという。
みんなからはそんな人物を、敬愛をこめて『オカン』と呼んでいる。
そのオカンが作ったものの中で一際注目を浴びている商品は『天ぷら海老フライチキンカツサラブレッドバーガー』というものだ。
天ぷら、海老フライ、チキンカツと揚げ物を三つもふんだんに使い、その間にキャベツを挟みながら積み上げてゆき、仕上げにマフィンで包むというものだ。
濃厚なソースをかけることで生まれる香りは俺達若者の空腹を誘う。
しかもどういった原理か、これ一つで２０００カロリーを摂ることになるという。
さらに、たったあれだけの量を胃袋に納めながらも、腹持ちもよく、１２０円という破格の値段。
一体需要と供給はどういう風に成り立っているのか、一度開発部に問い詰めたくなる。
だがそういった方式を人は『オカンの法則』と呼ぶ。
理由は簡単、その方式はオカンだけが成せる技だとか。
ちなみにサラブレッドなんて一切関係ない。
「位置的にうちの教室はここから遠いからな。作戦を実行するぞ！
内容は至極単純。お前達は周囲の敵を商品に近付けないよう牽制、その隙に俺が目的の商品を入手する！」
『了解！！』

俺の言葉に、クラスメートは己に気合いを叩き込むように返事をすると、乱闘地域に突撃していった。

念のため頼もしいクラスメートを紹介しておこう。

今ここにいる俺達のクラス生徒は俺を除いて四人。
そのうち二人は紅次と翠であるとして、二人もこの戦いに参加する戦士である。

「（゜∀　゜）ハッハッハ、（？゜д゜）フーーン！」

妙な笑い声を上げなら、乱闘を繰り広げている彼は岡辺狂真。
昔、何らかの事故に遭い、声帯に異常をきたして言葉を発せなくなってしまった。
しかし、声は出せるようでハ行なら口にすることができ、その上、笑い声を上げているだけなのに、発音、音程だけで不思議と感情を聞き取ることができる。

「せっかくだから、俺はこの赤の生徒を選ぶぜぇ！」

もう一人の名は越前孝介。コードネームは「コンバット越前」という。
コードネームに本名を入れるという変な奴だが、その身体能力は目を見張るもので、今回の作戦でもその実力を発揮させている。

ちなみに甲高い声で言葉を発しながら一人の生徒と対峙しているが、別にその生徒は外見的に赤い要素は微塵も無い。
せっかくだからという理由も意味不明である。

四人が己を役割を果たしに行ったので、俺も自分の役割を演じにゆく。

「おっと、ここはサッカー部二年エース、中村新之助が相手だ！」

最初に俺の前に現れたのは、頭をボウズにしてこちらに立ち塞がっている爽やかな生徒だった。

周囲はまるで海が割れたかのように二つの集団に分かれ、その割れ目に俺とサッカー生徒が一直線に向かい合っている。

「いくぜ！　黄金の左足！」

二年生は自慢の左足を廻し蹴りの要領で放ってくる。

んなもん、サッカーに使え！

「無属性の右！」

「ウボァー！？」

俺は相手の右足に踏み込んで、右ストレートを顔面に放った。

蹴る最中で片足立ちだったせいか、踏ん張ることもできず、周囲の生徒を巻き込みながら吹き飛ぶ。

「どすこい！　どすこい！」

どこからか野太い声と共に生徒が一人ずつ放り出されるよう吹き飛んでゆく。

振り向いてみると、８０キログラムなんて余裕でオーバーしている丸々太った生徒がいた。

しかし、だだのデブではなくその巨体から繰り出されるはりては、

一般体重の生徒を綿のように軽々と吹き飛ばす。
おそらく相撲部の一員なんだろう。
「ＤＯ☆ＳＵ☆ＫＯ－Ｉ☆」
相撲生徒はなんかムカつく声を張り上げながら俺の元に突進してきた。
体重差のあるこいつにタイマンを張ろうなんて自殺行為に等しいだろう。
だが、狙うの商品が同じである以上避けては通れない。
「でぇやぁぁぁぁーー！！」
俺も相撲生徒へ突進し、互いに腰辺りを掴んでのつばいあいになる。
「そいやっ、そいやっ！」
「どっせい、どっせい！」
腰を落とし、投げられまいと踏ん張る。
が、さすがに相撲の勝負で勝てるわけがないので、ちょっと趣向を変えてみる。
「んっ、そぉい！！」
両手を相手の腰から襟元の部分と袖へと掴み直すと、自分の手前方向に脱力する。
さっきまで力比べだったせいか、勢いを抜いたせいで相手はわずか

に態勢が前のめりになる。
その隙を逃さず、俺は背中を相手の胸に密着させ、足を股の間に差し込むと一気に振り上げた。
その勢いで相手の背中を地面に叩きつける。

「決め手～、内股～、内股～」

いつの間にか近くいた紅次が審判を下す。
やっぱり、デカイやつには柔道だ。
え？　相撲に柔道技は汚いって？
汚いは褒め言葉だ。

「くっ、流石、変人奇人変態の三すくみの三バカカラスだ。まさにみつどもえ」

「ここはこの俺が通さないぜ！」

と、なんとも熱血ボイスを口にしながら現れたのは長いオレンジ色の髪をなびかせている男子生徒だった。

「俺の名は幽射・皇だ。こう見えてまだ二年生なんだぜ？」

すごい名前だな。色々にネタにはされそうな気がする。

「光になれぇー！　ゴルディオンハンマァァァァァ！！」

すると熱血君は拳を固く握りしめ、ハンマーのように勢いよく振りかぶってくる。
咄嗟に俺は顔面を守るように腕をクロスさせて攻撃を防御する。
しかし、その威力は凄まじく、気を抜けは膝が崩れてしまうほど相

当な破壊力を持っていた

「ぐぅ！　やるな……」

バックステップを踏んで一旦距離を保つ。
まるで巨大なハンマーで殴られたみたいで、腕が痺れる。
これほど濃いキャラだったとはな、流石に厳しいか？

「うぉぉぉぉーー！　貰ったぁ！」

視界の隅に今まで様子を見ていたらしい一人の男子生徒が、隙を見て乱闘区域を抜け出し、オカンの目玉商品を手にしていた。

「ねんがんのてんぷらえびフライチキンカツサラブレッドバーガーをてにいれたぞ！」

『ころしてでも、うばいとる！』

「な、なにをするきさまらーー！？」

しかし、一瞬のうちに周囲の標的の視線が彼に集中し、集団の波が彼を襲う。
それに抗えず、彼は狂気の波にのまれていった。
ちなみに手にしていた目玉商品はのまれた際に手放してしまい、放物線を描きながら元の場所に戻っていった。

「そろそろ遅れてきた生徒が集まり出したぞ。このままでは例の品の入手が困難になってしまうぞ？」

「さすがに全員牽制するのは厳しいかもね」

「（？。д。）フーーン！」

「狂気の世界の始まりだぜぇ！！」

四人がお互いの背後を守るように円になりながら背を合わせる。
確かに、昼休憩からしばらく時間が経っている。このままだと、一点突破を試みる羽目になる。

問題なのは目の前にいる熱血先輩だ。それ以外は彼ほどの脅威は感じない。
つまり、彼を突破できれば目玉商品のゲットは比較的楽になる。

「あの熱血を止めるにはどうするべきか……」

あのゴルディオンハンマーは危険だ。真っ向から突っ込むのは無謀、どうにかして注意を逸らせれば……

「越前を盾にするのはどうだ？」

「紅次、お前天才！」

「なにぃ！？」

「しかし、この作戦の成功率は限りなくゼロに近いんだが……」

「成功率なんてのは単なる目安だ！！後は勇気で補えばいい！！」

「まだまだ行くぜ！　ゴルディオンハンマァァァァァ！！！」

閃きと同時に熱血先輩はまたこちらに向かってくる。
「ハンマー、コネクト！！ハンマー、ヘル！！ハンマー、ヘヴン！！光になれぇぇぇぇ！！」
両手を組むように重ねて、振り上げてきた。
「これが勝利の鍵だ！！」
俺は直ぐさま越前を前にして、盾にしながら突貫してゆく。
「お、お前は！？」
「俺の名は、察しのとおり、かつてコンバット越前と呼ばれた男！」
つじつまの合わない会話を繰り広げていると、熱血先輩のゴルディオンハンマーが一寸の狂いなく、越前の頬へと直撃した。
「オーノー！　災難続きだ！」
おもしろいくらいに吹き飛び、何かを呟きながら周囲の生徒を巻き込んでゆく。
だが、そのおかげで相手に隙ができた。
俺は大きく跳躍し、熱血先輩に向けて飛び蹴りを見舞った。
「あの世への片道切符キィィィク！！」
「バ、バカなぁぁぁぁ！！」

まともに受けた熱血先輩は雄叫びを上げながら、集団の波に呑まれていった。

これで大方、面倒な相手は片付いた。後は目的の目玉商品だけ……

「上から来るぞぉ、気をつけろぉ！」

越前の叫び声が聞こえ、咄嗟に前転してその場から離れる。
すると、先程俺のいた場所にドゴーンッと何かが降ってきた。

それはスーツに身を固めた巨人だった。

全身を正装で整えていながらも、肩から爪先まで筋骨隆々さが服越しからでも伝わってくる。
顔は年を感じないほど精悍であり、濁りのない白髪のうち、唯一長いモミアゲ部分を折り返して束ねている。
髭は髪と同じ色で、重力に逆らって英語のWみたいな形をしており、紳士的なイメージがある。

だが、その人物の瞳に宿るものは今の俺達と同じ飢えた野獣の意思。

「やれやれ、相変わらず賑やかだのう」

巨人はにこやかに笑って周囲を見回す。
俺は……いや、俺達はその人物の存在にくぎづけだった。
まるで今まさに接戦で精一杯だというのに、よりによって面倒な相手に出くわしたかのよう。
例えるなら、狼が獲物を狩ろうしている最中に、熊に遭遇した感じ。
今の状況を現すなら『絶望』

「ならば、この校長直々に相手してやるぞ！」
この聖祥中学校一の権力者であり、一の変態、校長が俺の目の前に立ちはだかった。
「よりによってこいつか……これは厳しいっな！」
俺は校長の懐に接近して、肝臓、水月、顎へと蹴りを決める。
クリーンヒット、綺麗に入ったが校長は平然としていた。
「ガッハッハッ！　流石だな蒼詩よ！　あ奴が認めたオノコだけのことはある！　今の蹴り、些か胸がキュンにしたぞ！」
一瞬、背筋に悪寒が走った。
なんかこの校長、妙に俺のことを気に入っている。
理由は簡単、この人はマスターと知り合いだそうだ。
「次は儂の番だぞ、でぇぇぇい！」
校長は腰を落として構えると、水月目掛けての回し蹴りを放ってきた。
それを俺は咄嗟に両腕でガードするが……
「ぐぅぉぉ！！？」
その場で受け止めることは出来ず、ガードした構えのまま後方に下がっていく。
擦り減る靴のせいで、焦げた臭いが漂う。

それほど校長の蹴りは靭かだった。

「耐えたか……ほとんどの生徒は一撃でやられるほど軟弱だが、お主はやはり違うな」

俺の様子を見て校長は満足そうに頷く。

そもそも、こんな購買の品を巡って乱闘しようという考えを提案したのは、この校長だ。

校長いわく、『学舎で学びたる者、時に闘争が必要である』ということで、購買部で目玉商品として出たものは乱闘にて奪取せよのこと。

ていうか、この生徒に何物騒なこと教えてんだよ。

しかもこのシステム、教師も乱入ＯＫだという。

つまりこの争い、校長という化け物が現れても、相手にしなければならない。

というより、当然校長なんぞに敵う人はおらず、目玉商品の一つは必ず校長の物となってしまう。

「うむ、久々に滾ってきたぞ！」

校長は奇声を上げながら裏拳や足払いをしながら、周囲の生徒を薙ぎ払う。

「男の道をそれるとも、女の道をそれるほど、踏み外せぬは外の道。散らば諸共　真の空に咲かせてみせよう　漢女道（オカマウェイ）」

校長は次々と何かを口にしながら、生徒達を蹴散らしてゆく。

時折にバレリーナで優雅に舞う姿が、信じられないくらい絵になっている。

「このままでは、個性で負けてしまう！」

どうすればいい？　俺一人で倒すのは無理がある。ここは校長が目玉商品を取るまでじっとしているか？

それで大人しく負けを認めるのか？　上のものがいれば静かに引き下がる犬になれと？

「冗談じゃねぇ……」

否、そんなことをして目玉商品を手にしたところで何一つ嬉しくはない。

俺はこのむせ返る闘いの熱、そこから生まれる緊張感の中で手にした達成感というものが欲しいのだ。

生徒、上級生と下級生、教師という上下関係なんてない。ここにいる全員、一つの飯に食いつこうと全力を注ぐ戦士だ。

「やってやる！　この身の全てをかけて！」

腰を深く落とし、構えの姿勢を崩すことなく神経を研ぎ澄ませる。全身のあらゆる神経、細胞、血流、筋肉に意識を傾け、集中する。まるで大地に力強く根付く大樹のように。

「なんと！　あれは地のエネルギーを全身に巡らせることによって、力が何十倍にも跳ね上がるという、漢女道の奥義が一つ。あ奴め、そのような高度な技術をあの若造に伝授させるとは！！」

校長が驚愕の表情を浮かべる。

この技術は昔、マスターがもしものためにと俺に教えてくれたものだ。

何でもマスターは漢女道伝承者らしいが、その流派聞いたことないし、そもそもそれは何なのかすらわからない。

すごい力なのだが、欠点もある。

これを伝授した時、何か大切を失いかけた気がして、これ以上マスターから何かを教わるをやめた。

「よかろう！　その拳、儂にぶつけてみるがよい！」

校長は全身の力を振り絞るように、筋肉の至る部分が盛り上がる。

おそらく、校長も似たようなことをしているのだろう。

「うおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！」

「でえええぇぇぇぇぇい！！！！」

えぐれるほど床を蹴り、こちらに向かってくる校長に迫る。

「「衝撃のファーストブリット！！」」

俺の右ストレートと校長のきりもみキックがぶつかる。

衝突の作用で、周囲に突風が吹き荒れ、生徒達が割り込むことすら出来なかった。

お互いの一撃は相殺され、大きく後退する。だが、戦意が失くなら

ない限り俺達の闘いは激化する。

「まだまだ行くぜ！　撃滅のぉぉぉ……！！」

「この程度では終わらんぞ！　壊滅のぉぉぉ……！！」

「「セカンドブリット！！！」

直ぐさま攻勢に転じ、今度は身体を回転させ、遠心力を加えた一撃を放った。

ぶつかり合う一撃と一撃。

その凄まじい衝撃波は食堂の窓が震え、生徒の髪を乱し、女子のスカートを盛大にめくらせる。

「ぐっ！？」

「ぬぅ！？」

僅かな拮抗が続いた後、互いの拳は弾かれる。

たが、俺は本能で確信していた。あと一撃で決まる、決めるしかない、と。

おそらく校長も同じように感じたのだろう。

後ろへ引っ張られるベクトルの力を後ろ足で踏ん張り、消滅させる。

校長も全身の力でブレーキをかける。

お互いの距離は二撃目を入れた時から動いていない。

つまり、この場でもう一撃を繰り出せるということだ！

最後の一撃を右腕に籠める！

「抹殺の……ラストおおおお！！」
「瞬殺の……ファイナルうううう！！」
校長は渾身の一撃を籠めた踵落とし。
今ある全ての一撃を惜しみ無く放つ！

「「ブリットおおおおおお！！！」」

「……あれ？」

「どないしたん、なのはちゃん？」
「今、地震があったような？」
「地震？　そんなの全然感じなかったよ？」
「地震、というよりなんか振動を感じたんだけど……？」
「私は感じてないわよ？」
「気のせいじゃないかな、なのはちゃん？」
「う～ん、小さかったけど確かに感じたんだけどなぁ……」

～食堂にいたとある生徒の証言～

『あ…ありのまま今起こったことを話すぜ！
俺が学食を食べようと食堂に行ったら、校長と生徒が殴り合いを始めて、周りの生徒達が吹っ飛んでいった。
な…何言ってるのかわからねーかもしれないが、俺も何が起きてるのかよくわからなかった……
頭がどうにかなりそうだった……
ストリートファイターとかバーチャファイターとかそんなチャチな

もんじゃ断じてねぇ。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……』

「……はぁ」

「こりゃだめだ、完全に鬱状態だね」

「無理もない。いくら蒼詩といえども、アレを使用すれは１０日間鬱になってしまうものだ」

時刻は授業が全て終わった放課後。
窓から差し掛かる夕日に照らされながら俺は机に突っ伏していた。

正直、何もする気がしない。何も考えたくない……

マスターから教わったあの技、使った際の反動にやる気、気合い、気力が一切失くなる。
そりゃあ、鬱にもなるさ。アレ、自分からじゃわかんないけど、第三者から見ると、突然普通の体型からマッチョに変化したかのように見えるんだ。
例えるなら、スーパーサイヤ人になったかのよう。

マッチョになるってことは、マスターみたいになるってことだぜ？
　つまりそれはマスターと同等同類同一同系、俺がお前でお前が俺で二人は一体共同体になるんだぜ？
ああ……考えるだけで生きる気力が無くなってくる。鬱だ、死のう。

「ふむ、この様子は家に帰る気力すら無いだろうな。我々が担いで家まで連れてかえるとしよう」

「オレだったら見捨てくれる方が余計興奮するけどなぁ。でも、蒼ちゃんの鬱っぷりはクラスメートをドン引きさせてたね」

「ハラオウン嬢やバニングス嬢はおろか、女教師までも声をかけるのを躊躇ったからな」

「ところで女教師で思ったんだけどさ、女教師(じょきょうし)よりも女教師(おんなきょうし)の言い方のほうがエロくない？」

耳から聞こえる会話に気になっていると、身体が何かに引っ張られる。

どうやら、紅次と翠が肩を貸してくれてるみたいだ。

死体のように動かない俺は、引きずりながら下校する。

昼に手にした濃厚な味を時折、思い出しながら。

とある部屋。

明かりを付けず、暗い部屋の中でデスクの上に表示されたモニターが仄かな光を放つ。
そのモニターを一人の青年と三人の少女が囲んでいた。
光が弱いせいか、顔ははっきりとうかがうことはできない。

「これで、五件目か……」

青年が重々しく口にする。
モニターに映し出されているのは、数々の顔写真。そのそばに名前、性別、出身地など書かれている。
恐らく個人ファイルなのだろう。

「次元犯罪者が殺害された。ランク関係なく五人全員……」

一人の少女が淡々と結論を下す。モニターのトップにはこう書かれていた。
『次元犯罪者リスト』と。

「どの次元犯罪者も死因は同じだ。後ろから刃物らしきもので胸を貫かれ、最後に……首を切り落とされている」

「ひどい……」

もう一人の少女が口元を手で覆いながら呟く。
現場がどれほど悲惨なのか、想像するだけでもひどいものだ。

「そして、五人共はある管理外世界へ逃亡し、殺害されている」

「つまり、次元犯罪者を殺害した犯人はそこにおるということやね」

最後まで黙っていたもう一人の少女が、青年の口にしたことを推論してみせる。

「そうだ。いくら次元犯罪者とはいえ、殺人は犯罪だ。そして、その犯人がいる次元世界は……君達の故郷にいる……」

唾を飲み込む音が部屋中に響き渡る。なんせ犯行現場は少女達が住んでいる所の近くで起こったのだ。

犯人がすぐ近くにいるかもしれない。そう考えるだけでも気が滅入るというものだ。

そんな緊迫した空気を保ちながら、ある文字が表示されたモニターを見つめていた。

『第９７管理外世界　地球』と……

第二十四話　コー・バイ（後書き）

いやぁー、思いっきりありったけのネタを消化しました。
読んでみて、ネタだと思う部分わかりますかね？

有名なネタからマニアックなものまでありますから、全部わかったら逆に怖いです……
話全体の内容はベン・トーを元にしています。
本作とはルールはかなり変わっていますが、一部一部はそれなりに似た感じに仕上げてます。

あの作品の主人公は個人的に好きですね。特に幼馴染の石岡君との昔話が大好きで、いつもツボにはまります（笑）

会話文だけでなく、地の文でも笑いが引き出せるようになりたいですね。その分書く量が増えるのですが……

新たな変態、校長の正体は……私の好きな作品が同じ人ならわかりますね？

そろそろ日常編を終わらせて、次の章へ移りたいと思います。

感想もお待ちしてます。

それでは、これにて！

第二十五話　這い寄る闇、明けぬ夜（前書き）

ようやく話の本筋に入ります

第二十五話　這い寄る闇、明けぬ夜

緋色の空、黒い煙、肌を焼く火の熱、そして血の匂い。

何もない、何も残っていない、全て壊され……奪われた。

焦土と化した大地の上に佇み、虚ろな瞳で一点を見定める。

人の形をした、ただの肉。人それを、死体という。

広がる鮮血、散らばる肉片。その目に映る無残な光景は、正に地獄。

そんな地獄の中に残るものは……

たった一人の慟哭だった……

「せやからビーフシチューはご飯にかけて食うもんやないっちゅーとんねん！　何でわかれへんのや！」

「美味けりゃなんでもいいんだよ！　大体お前の作るうどんの汁薄くて味しねぇんだよ！」

「なんやて東京（蒼詩）もん！」

「黙れ大阪（はやて）！」

「まあまあここは味噌が最強ということで」

「名古屋（翠）は黙っとき！」

「うまかっちゃんうめぇ」

「黙れ福岡（紅次）！」

「ぜーんぶおいしいよ」

「「パねぇ……北海道（フェイト・ハラオウン）の王者っぷり、マジパねぇ……」」

時は、太陽が真上から人類を憮然と見下している真昼頃。
いきなりの県民論争に戸惑いを隠せないだろう。
しかし、わかることはただ一つ。

北海道、でっかいどう！

「アリサちゃん、私達なんの話してたんだっけ？」

「蒼詩とはやての弁当について語り合っていたところよ、なのは」

「蒼詩君のカニクリームコロッケについて話していたら、シチューの話になって、そこから発展してビーフシチューの話になって現在に至るというわけだね」

今日も今日とて、いつものメンバーでいつものようにｇｄｇｄしている。
キャイキャイ、ガヤガヤというよりも、ぐだぽよーって感じがするな。
これぞスクールデイズ。……おい誰だ、今Ｎｉｃｅｂｏａｔって言ったやつ。

「そういえば、そろそろ夏休みに入るんだよね？」

そんな高町の一言に俺達は会話をやめて、そちらに振り向く。

「そろそろ暑くなってきたしなぁ、本格的に夏突入って感じだな」

学校の制服はすでに衣替えをしており、心地よい春風に変わって、むさくるしい熱風が時折俺達の肌に珠を浮かび上がらせる。

「中学最初の夏やなぁ。やっぱり夏といえばなんや、みんな？」

「やっぱり、海だね」

「かき氷かな？」

「浴衣もいいよね」

「花火だって、楽しいわよ」

「肝試しだろＪＫ」

「夏コミ」

「夏祭りだよ！」

「ちょい待ち、今、変なの混じらへんかったか？」

気のせいだろ。

「せっかくだし、いつか海に行ってみようよ！」

高町がそんな事を言い出した瞬間、俺達男子は目を光らせる。

「紅次、カメラの用意を忘れるな」

「承知した、最高画質のやつを持ってきてやる」

「翠、モリと籠を持ってこい」

「おっけー！　もし難破されてサバイバル生活を余儀なくされた時に使うんだね」

「無人島生活については俺に任せておけ、鍛え上げたサバイバル術を見せてやる」

火のおこし方や、水の確保、食糧安全の選別なんてお手のもんだ。その手の者から「スネークイーター」なんて皮肉を込められたもんだ。

「美少女の水着姿を拝め、カメラに収めるばかりか、無人島で節約生活をもできるというのか……！」

「やばいよ蒼ちゃん、やばいよ。まだ予定すら決まってないのに、

想像しただけでオレのダイナモが天元突破しそうだよ！！」

「おっしゃダチ公、今回はいつもよりやってやろうじゃねぇか！！」

いきなり始めようぜ、黄金伝説！！

「やらないわよ！！」

「ブホッ！！？」

「あべしっ！！」

「ひぎぃ！！」

そこにアリサが目を見張るような足取りで俺達の前に移動し、順番に右ストレート、左フック、右アッパーのコンボを俺の右頬、紅次の左頬、翠の顎へとリズミカルに叩き込んできた。

俺達はその威力のあまりうめき声を上げたが、一つだけ使い方が違う気がする。

「アンタ達、またくだらないこと考えるじゃないわよ！」

「少女を撮影して何が悪い！！」

「いや、蒼詩君、その言い方だとなんか法律に引っかかりそうやで」

「水着姿によって太陽の下に露出した肌を、嘗め回し、食い入るように息を荒げながらカメラに映すことの何が悪いというんだい！！」

「違うで翠君！？　誰も具体的な行為を聞きたいんやない！　とい

うかそれはもはや変態や！！」

「なら、オレは問題ないということだね！」

「自ら変態認めよったわ！　わかってたやけど！」

ええ、翠は変態を頭に被せて公道を歩いてるようなもんだから。

「というか、サバイバル生活なんて、私達遭難が確定なんだね」

「浮き輪の上でうとうとしている高町が波にのまれ、それに気付いた俺達が必死に追いつこうとするが、見つけたころには見知らぬ島に流れ着いてたということだ」

「全ての元凶は私なの！？」

「大丈夫！　なのはは悪くないよ！」

「フェイトちゃん、その気持ちはすごく嬉しいけど、遭難すらしていないのにそのフォローは逆に傷つくよ！？」

さすがハラオウン、今の言い方は俺より酷い。

もしや天然か？

「なのはならやりかねないわね」

「なのはちゃんなら、ありえそうだね」

「ええっ！？　私そんな子供みたいなことしないってば！」

「高町は何て言えばいいんだろう……よくわかんなけど、ソフトに言うならドジだからな」

「どストレートだよ！　直球真夏のストレートだよ！？　というかはっきり言ったよね！？」

「どっかにオススメの海水浴とか知らないか？」

「結構あるから、どこがいいか迷っちゃうね」

「いきなり普通の会話に戻らないでよ！？　この納得し難い気持ちはどうすればいいの！？」

侵略してくるイカみたいな娘にぶつければいいんじゃないか？
手をブンブンと振っている高町を横目に今日も賑やかな昼飯は過ぎていくのだった。

「まったく、アンタ達はよくそんなことを思いつくわね」

放課後になり、夕日が傾き、子供から大人まで自分の帰路についていく様子が見える。
夏に入ったばかりだから、そうすぐに夕日が沈む様子はない。

「でも、せっかく海に行きたいって気持ちはわかるよ」

「すずかもこう言ってるんだし、いいだろ？」
「サバイバルなんてやりたくはないけどね」
「あはは……」
顔を顰めるアリサにすずかは苦笑いするしかない。
ちなみに、何故俺がすずかを名前に呼ぶようになったのは、吸血鬼の存在を受け入れられ、涙を流したすずかが泣き止んだあとのことだ。

『もう一度言ってくれるか？』
『うん、私のこと、すずかって呼んでくれないかな？』
『なして急に？』
『えっと、その……私達友達だから、なんだか月村って呼ばれるのが他人行儀みたいで。それに、お姉ちゃんだけ名前で呼ぶなんてズルいよ』
『あれは単に、月村と呼ぶとややこしいし、あの人はなんかノリがいいからなんとなくだ』
『ダメ……かな？』

『まぁ、お前が文句ないならそうするけど。アリサにも言ったが、高町たちの前ではいつもどうりに呼ぶぞ、このことは伏せておきたいからな』

『うん！　アリサちゃん、負けないよ？』

『まさかすずかも？　いいわ、私だって譲る気はないわよ！』

そんなわけで、俺はすずかと呼ぶようになった。もちろん、紅次や翠にも似たようなもんだが、最後のあの二人の会話はよく意味が理解できなかった。

ちなみに、すずかの正体についてだが、時期が来たら高町達に話そうと思っているらしい。
それがいつをきっかけにするかはわからないが、高町達のことだ、受け入れられるのも時間の問題だろう。

紅次と翠、アリサとすずかの五人で帰宅する。
高町達は、昼食の後すぐに早退していった。
また、家の事情らしい。

「高町達も大変だな。授業ノートは取らないといけないし、夏休みだってその家の事情があるかもしれないんだろ？」

「そうね。それでも、なのは達はそれを放棄するつもりなんてないみたいよ」

「中学卒業したら本格的にそっちに回るみたいだって」

中卒ですかい。ということは家の事情って、将来の就職関係なのか？
いまどき進路希望したって、あまり意味ない気がするよな。
小学校の頃は、進路希望に迷いなく「追跡者」と書いた記憶がある。
この仕事が偉大さが伝わらなかったのか、提出した授業後、数分後に呼び出しをくらった。
まぁ、俺もあの頃はまだ乳臭いガキだったから、「スターズをおいかけるだけのかんたんなおしごとです！」という稚拙な内容を先生が理解するのには難しかったのだろう。

精一杯の言葉で伝えようとも、あの頃の俺の語彙力ではうまく表すことはできなかった。
どうにかして大人の人間に理解してもらおうと、必死に高度な言葉を頭の中から引きだそうとした時、ちょうどその日の昨日、テレビ番組で「夜逃げ」という言葉を聞いたのを思い出した。
これはきっと、相手は大抵夜に逃げるから、追跡する際には時間帯にも気を付けないといけない、ということを先生に伝えようしたら、いきなり先生が頭を抱えて喚きだした。
どうやら、なんらかのトラウマを刺激したらしい。
突然の荒れ様に、俺はとりあえず職員室を出たが、何故か後ろから先生が絶叫を上げてこちらに走ってくる。
俺は生存本能でひたすら校内を走り続け、先生が落ち着くまで延々と追いかけられ、先生が追跡者となってしまい俺の夢が一瞬にして散ってしまったことなんでどうでもいい。
後から、先生は最近嫁さんと娘さんに夜逃げされたことを知ったが、本当にどうでもいい。

「そういえば、お前達二人は将来とか考えてるのか？」

ふと疑問に思っていたことを聞いてみる。

あの三人がそうなら、アリサ達もすでに考えているかもしれない。
「私はパパの会社で手伝えたらと思っているわ」
「私は工学系が得意だから、そっちの分野をやってみたいなぁ、って」
なるほど。アリサはデビットさんの後を継ぐようような形で、すずかは機械弄りが好きだという忍さんの影響ということか。
「そういうアンタ達はどうなのよ？」
「そこまで考えてはないな。何せまだ中学生だからな」
「右に同じ。高校生になったら本気出すよ」
「翠のはなんか、不安を感じるわ……」
「あはは。でもやっぱりみんなそうだよね」
紅次と翠は意外と素っ気ない反応を見せる。
この時期に将来のことを考えるなんて、スポーツ選手くらいなもんだ。
聖祥学校はエスカレーター式だし、進路について真剣に考えるのはもうしばらく先になるだろう。
（夢、か……）
以前に海鳴臨界公園でのことを思い出す。
夢を抱くことはできても、それは結局夢物語で終わってしまう。

俺が抱くものには中身などない。夢を抱いても、それを叶えるほどの価値も魅力もない。
“あの日”から手にしたこの“力”と“感情”が俺の全てだったから。
だから俺は夢という眩しいものに触れることはできない。
影は光に触れることなど出来ないのだから。
「蒼詩は？アンタはどうなの？」
「俺は――――――」
どう口にするべきか考えながら、口を開こうとした時――――――
世界が歪んだ――――――
『――――――――！！！』
今の今までに感じていた空気の波長が、まるで新しく入れ替わるように肌に伝わる。

周囲の景色は変わらない、だが空間は変わった。
さっきまで帰路についていた俺達以外もの人々は、まるで最初からそこにはいなかったかのように誰一人悲鳴どころか声も聞こえてこない。
まるで俺達がここの空間に移動、いや……隔離されたような感覚。

「アリサちゃん、これって……」

「まさか……」

この異変に気付いたのか、アリサとすずかは周囲を見渡す。
だが、その反応は思ったよりも薄い。
気になりはしたが、正直それは後回しだ。

「蒼詩、もしやこれは……」

「蒼ちゃんが言っていた……」

「ああ、間違いない……」

ゆっくりと俺達は辺りを観察する。

（この感覚を、俺は知ってる……）

それは忘れるはずがない感覚。隠されたもう一つの戦場。
俺の“力”と“感情”という内外にきっかけを与えたもの。

「何か来る……！」

全方位に張り巡らせた気配が、ある方向にやってくるナニかを全身

に伝えてくる。
まるで水面を揺らす波のように。
俺の声に全員がその方向に目を向ける。
おぼろげだが、宙に浮く黒い球体がこちらに急接近してくるのが見えた。
そして、俺達の目の前でそれは停止する。
いきなり現れた謎の物体。それが突如、例えようのないうめき声を上げると、変形しだした。
球の周りのツタのような触手のような腕？　が現れ、球体の真ん中に一つの大きな眼球が見開く。

「「……・ひっ！」」

アリサとすずかの女性陣はその異様な姿に怯えるしかない。
はたから見ればそれば紛いのない化け物。
けど俺達男性陣はその異形になんとも言えない表情を浮かべる。

「これはどう見てもあれだよな……？」

「あんな姿をしているのはあれしかないだろう……」

「ここはやっぱりあの台詞を言うしかないのかな……？」

「じゃあ、あれに代わって言ってみるか。せーの……」

「「「このロリコンどもめ！！！」」」

「なにバカなこと言ってんのよ！」
怒られた。だってアレを見たら言いたくなるだろ。
「そんなことより逃げないと！」
すずかが狼狽しながらも俺達に声をかける。
しかし、俺達は慌てることなく様子を見る。
「なにしてんのよ！　ここにいたら危険なのよ！　早くここから離れないと！」
「そう慌てるなアリサ、　まだ慌てるような時間じゃない」
「といかアンタはなんでそんなに冷静なのよ！」
切羽詰まった顔をしているアリサを横目に、俺は紅次と翠に視線を向ける。
「紅次、翠、二人を可能な限り安全地帯まで移動しろ。ここから抜け出せればそれでよし」
「「了解」」
それだけ告げると、黒い球体に近付いていく。
「ちょ、ちょっと蒼詩！？」

「危ないよ蒼詩くん！」

アリサとすずかの言葉など耳に傾けずに俺は歩み続ける。
黒い球体は俺を危険だと見なしたのか、こちらに急接近してきた。
後ろから聞こえる悲鳴に近い声。

俺は気にすることなく、手を服の内側にあるポケットに入れる。
取り出したのは片方の黒い翼がデザインされたペンダント。

「ルシフェル、セットアップ」

『Ｇｅｔ　ｒｅａｄｙ』

ペンダントの名を呟くと、それは視界を覆うほどの光を放ち、俺を包み込む。
俺を包み込んだ光はそのまま、迫り来る黒い球体に向かって突進した。

すれ違うと同時に鳴る甲高い金属音。
それは光の中から放たれた一太刀の一閃であることに、はたして黒い球体は気付いただろうか？
光は徐々に輝きを失っていき、俺は“抜刀した”刀を左手にある鞘に戻していく。
刃がすべて鞘に納まると同時に、まるで止まっていた時が再び動き出したかのように黒い球体は人でない声を上げながら塵となって消えていった。

俺は先ほどまで刀を手にしていた右手を、握ったり開いたりしながら自分の恰好を確認する。

ブーツ、長ズボン、半袖のロングコート、インナーまでもが黒一色で統一されており、たしか背中にはペンダントと同じデザインが白色で刺繍されていたはずだ。

「それじゃ、この結界を原因を探りますか」

その呟きと共に、足元に意識を集中させ、幾何学的な紋章が浮かび上がると踏み台にするかのように跳躍する。
それを何度も繰り返し、日がすっかり沈みきった夜空へと向かうのだった。

突き刺さる四つの視線を背に受けながら。

第二十五話　這い寄る闇、明けぬ夜（後書き）

ここでようやく魔法関連が出てきました。

蒼詩のデバイスとバリアジャケットを説明しておきます。
デバイスの性能は後々説明しますから、今回は形状だけです。

デバイス：ルシフェル
待機状態は黒い片翼がデザインされているペンダント。

セットアップすると、一本の刀に変形する。デザインは戦国ＢＡＳＡＲＡ石田三成が使用する『無銘刀　白』

バリアジャケットはブーツ、長ズボン、いんなー、半袖ロングコート、フィンガーレス全て黒一色である。
また、背中にルシフェルの待機状態のデザインが白色で縫われている。

技の説明などは各話で初登場するたびに書いてゆきます。

それでは、これにて！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3687s/

英雄と呼ばれた復讐鬼

2012年1月9日02時46分発行